
IS 《コードギアス》

池田 啓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 《コードギアス》

【Nコード】

N2014Q

【作者名】

池田 啓

【あらすじ】

仮面の英雄は人知れず死んだ。だが、それを見ている者がいた。その人物は、彼なら世界を救えると信じた。

そして英雄は、世界を救う為の力を得て、再び戦いへと身を投じた。

「僕と『ランスロット』が必要とされる限り、戦い抜いてみせる」

白き騎士は

世界を救うことが出来るのか。それとも・・・？

※文章の長い話が
多々ありますが、付き合ってもらえるとありがたいです。少し内容を
変更中です。しばらくしたら改めて見た方がいいかもしれません。

終わりに始まり

ルルーシュ……。

僕が君を殺して、もう何年たったかな。

今でも考えるときがある。親友を殺して平和を得て、本当に良かったのかと。

この世界は、君の計画通り完全平和へ進んだ。もう戦争は起きない。

君が世界への復讐の為に被った仮面^{ゼロ}は、今では世界の英雄扱いだ。笑えるだろ？

カレンやナナリー、会長達もみんなそれぞれの道を歩いている。

C. Cはどこかを旅してる。彼女は这个世界を見守ってくれると思う。面倒だとか言いそうだけど。

かく言う俺は、世界では死んで仮面^{ゼロ}として、这个世界を見守っている。

けれど・・・できれば君も一緒にいて欲しかったな・・・本来の英^ゼ雄は君なんだから。

ルルーシュ。僕と君は、いつもすれ違いだ。

出会いも、身分も、再会も、考え方も、戦争も、全部すれ違いだった。

けど君は、敵である僕を何度も助けてくれた。

そして君は、最後まで僕の親友でいてくれた。だから僕も、最後まで君の親友でありたいと思った。

僕にこんなこと言う資格はないかな？ 妹の目の前で君を殺した僕は。

君は、僕が愛した人を殺した。正直その時は君を恨んだ。

けれど、僕は君を憎みきれなかった。だから俺は、ゼロレクイエムに手を貸した。

君が破壊者なら、僕は大量殺人鬼だ。戦争と言う事情がなければ、人々から忌み嫌われる存在。

僕の両手は血まみれ。君にとにかく言う立場ではなくなってしまったんだ。

けれど、それでもいいと思った。それがわかっていながら、僕は闘ったんだから。

だから枢木スザクとしての僕は死に、一生、英雄^{ゼロ}として生きると決めた。

だが……僕はもう歳を取りすぎた。

僕たちの志は、もう次の世代へと渡された。次は子供達が道を切り開くときだ。

僕たちが守った明日。そして未来は輝かしいものとなった。

・・・・・・・・そろそろ、僕の役目は終わろうとしている。

一度死んだ僕がもう一度死ぬだけ。死者が少し長く生き過ぎただけだ。

墓を作ったんだ。あの世で予約入ってるだろう？できれば残っていたらいいと思う。

・・・・・・・・そろそろ君たちの方へ行くよ。ユフィ・・・・ルルーシユ。

僕はこの人生に悔いはないよ。あつたとしても、取り返しのつかないことばかりだ。

あの世でも、できれば僕と一緒に・・・・・・・・遊んでくれないか。

あの時のように、ナナリー、ルルーシュ、そして僕で。

そこに死んでいったみんなも加えて。

なあ・・・いいと思わないか?・・・ルルーシュ。

終わりに始まり（後書き）

読んでくれた方。感謝です。

世界を救う？ 僕が？

「・・・・・・・・ここはどこ？」

俺の名は枢木スザク。

仮面^{ゼロ}として俺は、人知れず何処かの病院で死んだはずの人間。

だけど、俺は真っ白な空間に、まるで白い紙に黒い点をつけたように、一人ポツンとしている。

「もしかして・・・・・・・・ここがあの世なのかな」

真っ白な空間。あの世には天国も地獄もないってことなのかな。

「・・・・・・・・ん？ 若返ってる？」

俺の体を見ると、アッシュフォード学園の制服を纏った、15歳ぐらいの俺になっている。

「あの時はもう80歳を超えてた・・・・・・・・どうなってるんだ」

「それは私の仕業です」

いきなりこの空間？に声が響く。

「誰だ！」

俺は怒鳴りながら辺りを見渡す。
だが、どこにも声の主らしき人は居ない。真っ白な景色が続いてるだけだ。

「ここです」

しかし声は響く。一体どうなってるんだ。

「どこだ！」

「ですから、この空間が私です」

「……は？」

この空間が声の主？ あの時っていうのは何でもアリなんだ。

「私の勝手な都合で、貴方をこちらにお呼びしました。申し訳ございません」

「いや、謝られても……」

今、自分がどういう状況かわかってないし。

「質問があるんですが。ここどこです？」

「ここは私で、あなた方と言う天国です。冥界の成れの果て……
と言ってもいいですが」

「………はあ」

「わからなくていいです。他に質問はありますか？ なければ私が事情を話しますが」

「……………なんで僕はここにいますか？」

「……………。それは私の事情と関係しますね」

「事情？」

「はい。私は色々な世界を見守る存在。神と呼ばれたり、イヴと呼ばれたりしています」

「か、かかかか神！？」

Cの世界の虚像ではなく、本当の神！？

「あなた方の世界では、人々の思念の集合体を神と呼ぶらしいですね」

「……………あんなの、神様なんて呼ばただけの、ただの機械ですよ」

人々を過去に捕らえる、アーカーシャの剣とラグナロクの接続。

自分に優しい世界を作り出すシステム。聞く人によっては夢のようなシステムだ。

だが文字通りそれは夢だ。ナナリーやユフィも、そんな世界なんか望んでいない。

だから俺とルルーシュは、そんなのを認めるわけにはいかなかった。

「アレが神だと言うなら、僕は一生神に反攻する」

「……………。私としては複雑な心境ですが、貴方のその志が、私の欲しかったものです」

「？」

「先ほど言った通り、私は他の世界を見守るものです。しかし、全てを見守ることが出来るわけではないのです」

「……………。続けてください」

「私が見守る世界の中に、あるバグが入り込んでしまったんです」

「……………。平行世界ってことですか」

「はい。私は世界に入る前ならバグを消去できますが、一度入り込んでしまったら、もう取り除けないのです」

「……………。話が見えてきませんが」

「……………。そのバグの発生世界を探したところ、貴方の世界だったのです」

「ぼ、僕達の世界!？」

「はい。つまりバグを取り除けるのは、あなた方の世界の人だけ。その世界のものですからね」

「……つまり、僕にそのバグを消して欲しい……ということですか？」

「はい。バグ発生の世界と言うことで、あなたの世界を少し見ました。

その時、二人の少年が目に付きました。

一人は戦争を終わらせようと父を殺し、母国を侵略した国の兵士となった少年。

もう一人は、妹を守るため、母の死の真相を知るため、世界に反逆した少年」

「……………僕とルルーシュのことですね」

他に当てはまる人物なんて、いるわけがない。

「そうです。あなた方は世界に反逆し、そしてそれを成し得た。たった二人で世界を平和へ導いた」

「それは違います。平和になったのは人々の願いです。僕らは少し後押しをしただけ」

人々が明日を望む限り、世界は平和へ進んで必ず平和になる。

僕らは少しその時を早めただけ。

「それを成し遂げる貴方だから、お願いしたいのです。口で言うのは簡単ですが、実際にやり遂げた人間など、私の知る限り両手で数える程度です」

「……………僕らの他にもいるんですね」

「ええ。宇宙と地球の平和を導いた少年や、世界の敵となることで、人々を一つにした少年も」

「・・・・・・・・・・本当に僕でいいんですか？」

「はい。貴方が一番相応しい人です。神に齒向かえるその意思。貴方以上の人は居ないでしょう」

「・・・・・・・・・・世界を救う・・・・・・・・・・か」

・・・・・・・・ルルーシュ。君ならどう言う？
仮にも世界を平和へ後押しした俺は、他の世界も救えると言うのかな？

なんて・・・・・・・・俺の答えは決まっている。君もきっと俺と同じ
だと思う。

「いいですよ。僕らの世界が原因なら、僕らが解決しなきゃいけない」

「・・・・・・・・・・ありがとうございます。それではそのための力を・・
」

その声が聞こえたとき、俺の目の前が銀色に光り、そこから一つの銀色の球体が出る。

「これは？」

「その世界での貴方の力です。名前を付けてあげてください」

「名前……」

俺とこれから共に戦う力。つまり俺の相棒となる存在の名前。

……そんなの、一つしかないじゃないか。

「君の名は———《ランスロット》だ」

俺と共に戦い続けた白き騎士。世界が平和になったのも君の力があつたから。

たとえ世界は違っても、君はずっと俺の相棒だ。

「君には、僕の相棒の名と意思を継いで貰いたい」

「貴方ならば、そう言うと思ってました。ランスロット。答えてあげなさい」

声の主がそう言うのと、ランスロットと名付けられた球体が光る。そして光が収まると———。

「こ、これは！ランスロットの起動キー！」

忘れるはしない。相棒を動かすため、常に肌に離さず持っていたもの。

「それが貴方の力です」

「……これが……僕の力……」

「それでは今から、貴方をあの世界に送ります」

その言葉と共に、俺の地面に白い光が円となって俺を囲む。

「アチラでの世界の事は、その時頭に入れておきます。心配は要りません」

「はい。必ずバグを破壊してきます」

「それでは、旅立つ騎士に祝福があらん事を・・・」

その声を最後に、俺の視界が真っ白に染まった。

世界を救う？ 僕が？ (後書き)

感想があったら、お願いします。

ISって何？

「……………うゝん……」

僕はどこか知らない場所で起き上がった。石ころや枯葉を押しつぶす感触が気持ち悪い。

見渡す辺りは暗く、夜だと思う。周りが木々で埋め尽くされてるところから、おそらく山の中。

「ここが違う世界……か」

なんとも普通の山だ。ここが異世界と言われても急には納得できないかな。

山の中という事はわかっているが、どうやら人は全然いない。木々の掠れる音や、虫が僕の周りをウロチョロするぐらいの音しか聞こえない。

（神様ももう少しマシな場所に飛ばしてくれても……）

「悪態をついても仕方ない。とりあえず情報収集————ってアレ？ 何故か記憶がある」

見覚えのない情報が、僕の頭の中にある。

そういえば、あの神様って呼ばれてる人が、情報を頭の中に入れてくれると言ってた。

(なるほど、これは便利だ)

そして記憶を・・・いや、この感じだと記録かな。この世界のことを書いた文字無き記録。それがあの神様から与えられた記憶。

「・・・・・・・・女尊男卑の世界・・・・・・・・か」

一つ一つ確かめて行く。

ますここは元の世界と同じ地球。しかし僕の世界とは全く異なる歴史を歩んだ世界。

僕は簡単に服のゴミを払い、簡易に整備された石の山道を下りながら、この与えられた記憶の情報を整理する。

この世界には、ISという機動兵器があると言う。

正式名称は『インフィニット・ストラトス』。

本来宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。

総機体数は467機。現在第1～4世代機が存在している。元々宇宙での活動のために開発されたので、基本的に全てのISは浮くよ

うに設計されている。

開発者は篠ノ之束という方。

開発当初は注目されなかったが、『白騎士事件』という事件で従来の兵器を凌駕する、圧倒的な性能を見せつけたことから、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移っていった。

ISは核となるコアと腕や脚などの、部分的な装甲であるISAーマーから形成されている。

その攻撃力・防御力・機動力は非常に高く、まさに『究極の機動兵器』を冠するに相応しい。

特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーによるバリアーや『絶対防御』などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることは『ほとんど』ない。

また、ISには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出せる。一機で国の戦力が傾くとも言われている。

さらに、ハイパーセンサーの採用によって、コンピューターよりも早く思考と判断ができ、実行へと移せる。

力だけではない。全てが従来の兵器を軽く凌駕する兵器・・・それが『インフィニット・ストラトス』。

さらにISは自己進化するように設定されていて、戦闘経験を含む全ての経験を蓄積することで、IS自らが自身の形状や性能を大きく変化させる『形態移行』を行い、より進化した状態になる。

また、コアの深層には独自の意識があるとされていて、操縦時間に比例してIS自身が操縦者の特性を理解し、操縦者がよりISの性能を引き出せるようになる。

このISには謎が多く、その全容は明らかにされていない。

特に心臓部であるコアの情報は、自己進化の設定以外は一切開示されておらず、完全なブラックボックスとなっている。

おそらくその全ては、開発者である篠ノ之束とやらが握っている。現在は国際指名手配犯として、世界から追われている身らしい。

なお、ISには大きな欠陥がある。それは原因は不明ではあるが、女性にしか動かせないというものだ。

「……………整理すると、ISというのはこの世界最強の機動兵器で、何故か女性しか動かせず、そのため女性の価値が上がり、女尊男卑の構図が成り立ってしまった……………」

ISが国同士の抑止力ということは、互いに睨み合っていて、冷戦の状況となっている言うことか。

「いつ戦争が起きても……………おかしくない世界……………」

こんな世界で、僕は一体何をすればいいんだろう。

「とりあえず技術力は、僕らの世界と対して変わってないらしい」

少し研究している分野が違うだけだ。

……………もしかしたら、この世界でKMFを作ったら、この状況を打破できるかもしれない。

「・・・・・・・・争いを生むだけか」

その考えは却下。戦争を持ち込むために、僕はこの世界に来たわけじゃない。

「もしかして・・・このランスロットもIS・・・なのかな」

ポケットからあの始動キーを取り出す。

この世界で戦う力。・・・その可能性が高い。

「・・・・・・・・僕は这个世界で、どういう存在となっているんだろう・・・・・・・・」

ちなみに今の僕の格好は、アッシュフォード学園の制服。歳は多分15ぐらい。

本当に、僕は一体、何をすればいいんだろう。

「記憶では、この町のアパートに部屋があるらしいけど・・・」

見覚えのない記憶だからすごい不安だ。まあ何とかしてみせるよう。度胸はあるからね。

それから数十分、ようやく舗装された山道を下りきった。

降りてきたら、コンクリートで舗装された道があるのでそこも下る。するとようやく、人通りのある街中へと出た。

「えっと・・・記憶が正しければ、ここからあまり遠くない場所のはず・・・」

覚えのない記憶を頼りに、人通りのある道を歩いて行く。

どうやら今は深夜らしく、人通りがあるといっても数人だけで、建物の明かりも少ない。

そしてさらに数分。この田舎町に似合う古風溢れるアパートを発見した。

「・・・・・・・・ここかな」

日本の文化って感じがして、すこし懐かしい。

これは、イレブンやエリア11といった格差がないから、と言うことだろう。

その代わり、女尊男卑という構図が成り立ってしまったが。

階段を上がり、202号室という部屋の前に来る。

「鍵鍵・・・・・・・・あつた」

制服のポケットの中に、ちゃんと鍵が入っていた。それを使って、部屋の鍵を開けて入る。

「・・・・・・・・本当に日本だ」

部屋を見て、思わず眩いてしまった。ドアについてるスイッチを入れて照明をつける。

「・・・もし僕の世界にブリタニアがなければ、こんな未来を歩んだのかな・・・」

たった6畳2部屋の部屋を見ただけで、僕は感極まってしまった。しかしここは別世界。感動はこれくらいにしよう。

「2LDK・・・暮らすには問題ない」

とりあえず僕は、必要最低限の家具が揃う居間に腰を下ろす。

「はぁ・・・。今回は色んなことがありすぎた・・・」

一度世界征服を経験した僕だが、さすがに平行世界の存在、違う世界へ転生、その世界を救うなんて・・・一度にいろんなことが起き過ぎた。

なんというか・・・疲れた。主に精神的に。

「ダンボールがいっぱいあるなあ・・・」

居間の隅には、荷物が纏めてあるらしいダンボールが置いてある。まるで引越した後か、引越する前みたいなの。

「ちょっと見てみよう」

僕は置いてあるダンボールを上から開けて行く。中は詰まっているが結構軽そうだ。

「私服と・・・制服かな？」

僕があの世界で着ていたのとそっくりな服と、全く見覚えのない、赤と白の制服らしきものが入っていた。これはくれた記憶の中にもない。

「・・・・・・・・いづれわかるって事か」

僕は取り出した制服をしまう。その時、そこから一枚の紙が落ちる。

「ん？」

それを僕は手にとって文字を読んでみる。

「『IS学園編入のお知らせ。枢木スザク様。貴方は男性の身でありながら、ISを動かすことが出来ます。よって、政府よりIS学園への編入を伝達します』・・・・・・・・IS学園・・・・って確か――――」

これは記憶の中にあった単語だ。

『IS学園』

アラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校。

ISに関連する人材は、ほぼこの学園で育成される。また、学園の土地はあらゆる国家機関に属さず干渉されない。

そのため他国のISとの比較や、新技術の試験にも適しており、そういう面では重宝されている。

「で・・・女子高ではないが、事実上女性しかないはずだったよ
うな・・・」

「・・・えっと、とりあえずこの国で僕は枢木スザクとなっ
ている。それなら良かった。」

そしてIS学園へ、無理矢理行かされると言うことか。記憶に全
くないけど、大丈夫なんだろうか。

詳しい日時もこの紙に書いてある。カレンダーと見比べると日時は
明日だ。しかしすでに四月は始まっている。そう考えると入学では
なく編入だろう。

「これが・・・僕のすべき事なのだろうか・・・」

神がこの状況を知らなかったとは考えにくい。何か訳があって僕を
導いたんだろう。

「よし。明日に備えて今日は寝よう」

ちょうど部屋の端に折り畳まれた布団がある。それを広げて僕は布
団に入る。

「やっぱり落ち着くな・・・こういうのは」

派手な生活をすぎたせいかな、子供の頃のように、布団で寝るとい
うのは妙に落ち着く。

「明日から忙しくなるな・・・」

ルルーシュ、ユフィ、ナナリー。

僕はこの世界を必ず救うから、そっちの世界に戻るのは、少し待っててくれないか？

バグだろうがなんだろうが、僕とランスロットが必要とされる限り

「————闘う。それが僕を選んだ道だから」

そのまま僕は布団を被りなおして、寝た。

・・・生憎、月明かりが眩しくて寝付け難かったが。

ISって何？（後書き）

機体設定を載せてから原作介入です。

機体設定

『ランスロット』…形式番号 Z-01 Lance lot これ
はKMFのランスロットの型番。

スザクと共に、戦場を駆け抜けたKMFの名を受け継いだIS。

神と呼ばれる者から授かった機体で、見た目と武装はKMFのラン
スロットと同じ。

このISはこの世代にも当てはまらない。推定だが第三、第四世
代型とも引けは取らない。

後付装備の都合上、全身装甲という設定がされている。なおこれら
は全て初期設定扱いとされる。ある条件が揃うと一次移行する。
ファーストシフト

待機状態は、KMFのランスロットの起動キーと同じ形。型番が刻
まれている。

通常は脚による歩行や、足に装着されているランドスピナーによる
滑走といった、地面上の二次元運動、および跳躍による身軽で俊敏
な三次元運動ができる。これは元の世界同様。

この機体のポテンシャルは高めだが、その分エネルギー消費が激し
いので、そこはスザクの力量が試される。

足につける後付装備イコライザ《サンドボード》を使い、悪路などの地上を高
速移動できる。

このスピードはランドスピナーイコライザの比ではない。
そして背中に装着される後付装備《フロートユニット》を使い、空
を飛ぶことが出来る。

その状態は『ランスロット・エアキャヴァルリー』と呼ばれる。

―――装備一覧―――

《メーザーバイブレーションソード(Maser Vibration Swordの頭文字をとってMVSと言う)》

高周波振動で物体を両断する斬撃兵装。

通常は、背面の両側にある鞘に2基収納されている。

使用時には、2つに割れていた刀身が合わさり、赤く発光する。

エネルギーが切れたら、振動機能は停止して赤い光もなくなり、ただの斬撃兵器となる。

《ヴァリス(Variable Ammunition Repulsion Impact Splitfireの略)》

『ランスロット』の主武装。

可変弾薬反発衝撃砲で弾薬の反発力を制御できるライフル。

インパクトレールの換装により様々な戦況に対応し、ノーマルモードとバーストモードの切り替えが可能。

しかしエネルギー消費が激しく、これは切り札として使用する。

《スラッシュハーケン》

腕部と腰部に二つずつ、計4基装備されたワイヤー式アンカー。

敵に牽引するだけでなく持ち上げ跳躍すら可能とし、搭載されたブースターで直進だけでなく左右に曲がらせる事も可能とする応用力を持っている。

ハーケンを突き出して手刀にする『メッサーモード』により攻撃す

る事ができる。

また4つのハーケンを同事発射し、ブースターで操作する『ハーケンブースター』もある。

エネルギーの消費量が少ないので、有能な射撃兵装としてスザクはこれを多用する。

《ブレイズルミナス》

自らのシールドエネルギーを使い、発生したエネルギー場で攻撃を防ぐシールド。

装備は両腕に搭載されている。シールドの色は緑色。

これは武器としても利用可能で、そのままぶつけることで強力な打撃兵器となる。

だがシールドエネルギーを削るので、要所でしか使うことが出来ない。

これらは初期設定で、地上を高速移動する為の《サンドボード》や、空を飛ぶための《フロートユニット》^{イコライザ}などの後付装備がつく。

二つともエネルギー消費が激しいので、長時間の使用には向いていない。

——システム一覧——

《パワーラシステム (Power-to-weight ratio の略)》

機体の動きを操縦者の身体能力に近いものとするシステム。

このシステムを使いこなすことが出来れば、自らの頭頂高の何倍もの高さを跳躍、バック転、バック宙、月面宙返り、逆立ちして腕の

しかしこれは操縦者の身体能力を反映しているので、操縦者の身体能力によって性能が大きく変わる。

ワンオフ・アビリティ 《?・?・?・?・?・?》

34

機体設定（後書き）

どうでしょう？

なるべくランスロットを、何とか”ISでもいいかな？”レベルにしたつもりです。

ちなみにシステムは、劇中のランスロットの動きは好きなので、何とかISに混ぜたかったです！なので付け足しました。

何か意見があればください。

IS学園につきました（前書き）

スザクに、再会と新たな出会いがあります。
時間軸は、鈴が編入する数日前です。

IS学園につきました

「ついた・・・」

早朝。

僕の家由政府からの黒ずくめの使者が来て、『早く荷物を整理してくれ』と言われて、準備した後数人の監視の下バスに乗せられ、1時間ぐらいの長旅を経て・・・やっとIS学園についた。

一時間も無理矢理つき合わされ、その上10人以上の人から監視されて・・・主に精神的に疲れた。

「では枢木スザク様。貴方は日本の代表候補生・・・という扱いになりますので」

僕を監視していた、黒ずくめの男の人がそういった。
それはもうバスの中で、耳にたこが出来るほど聞いた。

「わかってます。しかし非公式という扱いなんでしょう？」

「はい。それで専用機などは、本当に要らないのですか？」

「ええ。自分には必要ありません」

この人達に喋ってないが、僕にはランスロットがある。

これは一体なんだか知らないが、ランスロットが公になれば僕はマズイ立場になる。

この世界の知識を色々とまとめた結果、正体不明のISとその操縦者という僕は色んな国に追われて、世界を救うどころじゃなくなるだろう。

だから僕は正体を隠すことに決めた。

まあ『異世界から来ました』と言っても、真面目に捉えられる事なんてないだろう。

幸いこの世界での僕の経歴は、普通の中学生と言う設定だった。ただ両親や親戚はなくて、政府からの支給金で何とか生活しているといった感じだった。

一時期でも、ナイトオブゼロと言われた僕とはえらい違いだ。

まあ、その方が僕に似合ってる気もするけど。

「それでは、我々はこれで」

「ありがとうございました」

それだけ言って黒尽くめの人達は去っていった。

「……行くか」

正直どこへ行けばいいか分からないが、とりあえず学園の中に入れてもいいだろう。

「一人で闘うのは……慣れているからね」

[illegible]

・・・・・予想通り、僕は迷ってしまった。

「参ったな……ここまで広いとは思わなかった……」

まるで迷路だ。敵の襲撃に備えてこの構造にしたのかな。それとも単に金があったから？

「せめて地図でもあればなあ……」

と言うか、せめてあの黒い人達も、何か言ってくれればいいのに・・・。

しかし参った。これだけ広いのに誰ともすれ違わない。

「「はぁ・・・ホント参った（わ）　・・・・・え？」」

僕とまったく同じセリフが、女性の声で同時に聞こえてきた。

なので僕は視線を前に向けると――――。

「か、カレン！？」

「え？　・・・す、スザク！？　あ、貴方なんでこんな所にいるのよ！？」

「それを言うなら、君こそなんでこんな所に！？」

僕のいた世界で、互いに同じ志を持っていながら、全てにおいて真逆の方向に進んだ敵にして、僕が最初で最後に敗北した相手でもある。

そんな相手が、この女子の制服に身を包んで目の前に現れた。

「・・・・・とりあえず、どこか落ち着く場所で話そう」

「・・・・・そうね」

た。

「私の場合、『貴方に手を貸して欲しい方がいます。それは貴方が適任でしょう。敵でありながら彼の力を理解した貴方なら』って言われたのを最後に、真っ白な場所から消えたわ」

「……君が僕の手助け？　ハハッ、こういうのを皮肉って言うのかな……」

「そうかもしれないわね。でも、ここにはブリタニアなんて無いわ」

「……わかってる。僕たちが争う理由は無い。ここでは恨みっこ無しといこう」

と言って僕は手を差し出す。それにカレンは少し驚く。

「？　僕が右手を出したのが、そんなに驚くことだった？」

「……変な気分。白兎と呼ばれていた敵、そしてナイトオブゼロ、最後に世界の敵を倒したゼロと、こうやって共闘するなんてね」

「ハハッ、僕もそう思うよ」

「……けど、戦争は全部終わったわ。貴方はナイトオブゼロの枢木スザクでも、世界の英雄とも違うんでしょ？」

「ああ。今はただの枢木スザク。そういう君こそ、黒の騎士団の紅月カレンじゃないだろ？」

「ええ。そしてカレン・シュタットフェルトでも無いわ」

「なら、何か問題でもあるかい？」

「ふふっ、何も無いわね」

そして僕らは互いの手を握り合った。元の世界で夢見たことが今の場で成立するのは、なんとも不思議な気分だ。

元の世界の僕達はいつから、こんな握手一つも出来なくなってしまうのだろう。

（今更悔やんでも仕方ないのはわかってるけど・・・）

「そうだ。前々から聞こうと思ってたことがあるの」

いきなりカレンに話しかけられたから、もうこの考え事は終わらせよう。

「なんだい？」

「貴方はゼロとして、誰にも正体を明かさずに生きてきたでしょ？それは私たちも例外じゃなかった」

「うん。それがルルーシュから僕に託された・・・願ギアスいだから」

「わかってるわ。だから墓場まで持って行く質問だったの」

「状況が状況だからね。それで聞きたいことって？」

カレンは屋上のフェンスに寄りかかり、はるか向こうの景色を見ながら小さく呟く。

「・・・・・・・・ダモクレス決戦のとき、貴方わざと負けたの？」

聞き間違いではない。僕は確かにカレンの口からその言葉を聴いた。

(・・・・・・・・『ダモクレス』・・・・・・・・か)

ダモクレス決戦。

あの戦争最大規模の戦いにして、僕らが勝って戦争終結となったあの戦い。

しかし、勝負に負けて試合に勝った気分でもある。僕はカレンの一撃で死んだ事となったのだから。

「・・・・・・・・どうしてそう思うの？」

「あの時、私が負けたらゼロレクイエムは成り立たなかった。だから・・・・・・・・ね」

「・・・・・・・・」

あの時、僕はギアスの呪縛を使ってカレンと戦い、そして敗北した・・・・・・・・ことになっている。

「・・・・・・・・確かに僕が死ななきゃ、ゼロレクイエムは成り立たなかった。だからと言って、君との決着を疎かにする気は無かった。あのときの僕は本気だったよ」

「・・・・・・・・とか言って、ホントは手を抜いたんでしょ」

ジト目で見るカレンに、思わず僕は苦笑してしまう。

「ハハハ・・・僕はそこまで信用無いかな。・・・・・・・・でも本当に手は抜いてないって。手を抜いて戦える相手じゃないよ、君は」

これは本心から。僕が敗北したのは、いつでもカレンが最初で最後だ。

「君の紅蓮は強い。まあ僕のランスロットも強いけどね」

「あら？ さっき敗北したって言ったのは誰だったかしら？」

「僕は敗北したなんて言った覚えはないけど？」

「じゃあ今度は、この世界で白黒つけましょうよ」

「構わないよ—————って、君も機体を持っているの？」

「ええ。神様から紅蓮を貰ったわ」

そういいながらポケットから、翼の形をした起動キーを取り出す。おそらく紅蓮の起動キーだろう。

「どの状態の紅蓮？」

「私は紅蓮式式ね。可翔式や聖天八極式は『形態移行』でなるんじゃない？」

「あ、やっぱりISの知識は持ってるんだね」

「ええ。神様が入れてくれたらしいわ。それで貴方のランスロットは？」

「僕はランスロットに、エアキャヴァルリーとかの後付装備をしてあるよ。コンクエスターとアルビオンは、やっぱり『形態移行』でなると思う」

「やっぱり？ でも私の機体は空飛べないの・・・」

「そうだったね」

と談笑をしていた時、スピーカーからアナウンスが響く。

『樫木スザクさん、紅月カレンさん。至急一年一組まで来て下さい』

「「あっ」」

すっかり忘れていた。僕は今日編入初日だったんだ。

「場所はわからないけど、早く行こう」

「え、ええ。編入初日にとんでもない事しちゃったけど・・・」

「言いつこ無しで」

と言うわけで、元の世界で鍛えた身体能力を使って走りだした。

[illegible]

「編入初日に遅刻とは・・・その度胸だけは認めてやろう」

「すいません・・・」

校舎を走り回って、会った先生方に教室の場所を聞きいて、全力疾走した。

そして教室のドアを開いた瞬間、黒いスーツを着た美人……なんとなくコーネリア殿下に似た雰囲気の人が出てきて、二人そろって

叱られている。

「……………今回はこれぐらいにしておく。しかし次は無いからな」

「「すいません……………」」

解放された僕らは、クラスの空いている席へ向う。

「ついでだ。二人とも自己紹介をしろ」

と言われたので、僕とカレンは戻る前にその場で自己紹介した。

「紅月カレンです。これからよろしくお願いします」

「枢木スザクです。男ですがISを動かせます。みなさんよろしくお願いします」

シーン……………とても静か……………。

あれ？ 自己紹介の仕方間違えたかな？ 皆何の反応も無い。

「では席に着け」

「「はい」」

素早く席に着く—————時、僕はとんでもないものを見てしまった。

「な……………！！」

僕の後ろの席の女性。その人を見たときに固まってしまった。

「枢木、早く席につけ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「枢木」

「え・・・・・・・・あ、はい。すみません」

担任教師の方に注意され、僕は席に着く。

しかし僕は後ろの女性に注目がいつてしまってる。

黒い長髪に紫の瞳、眉目秀麗で————僕が殺した親友にして世界の真の英雄で、その親友が学園祭でした物にそっくり。

「・・・・・・・・ルルーシュ？」

「スザク？どうし————ええっ!？」

間違いなく、女子の制服を着たルルーシュ・ランペルージが、そこに座っていた。

「……………ん？ 私の名前を知ってるのか？」

机に片膝を付きながら、後ろを向いている僕に流し目を向ける……
ルルーシュ？

「君、本当にルルーシュなのか！？」

「あ、あのルルーシュなの？！」

「……あのかどうかは知らないが、確かに私はルルーシュ・ラン
ペルージだ。しかし……君達とはどこかで会ったのか？」

「え？ 僕だよ。枢木スザク。忘れたのかい？」

「私も。紅月カレンよ？」

「い、いや……私の記憶上、これが初対面だと思うが……」

と言って戸惑うルルーシュ。妙に話が噛み合っていない。どうなっ
てるんだ？

「あゝ枢木と紅月。それは後にしろ。それでは授業を始める」

そういうことで、僕は戸惑う気持ちを抑えて前を向いた。

僕が最初に思った事はこんなこと。

一体どうすれば……と考えていたとき、僕の前に3人の生徒が来る。

52

女子。

もう一人は金髪を縦ロールにしている、上品な貴族のお嬢様っぽい女子。

最後の一人は、黒髪に女子受けしそうなイケメンの・・・男子。

「えと。ちょっといいか？」

黒髪のイケメン男子に話しかけられ、僕は顔を上げながら尋ねる。

「・・・・・・・・君は？」

「俺は織斑一夏。お前と同じでISを動かせる男だ。男同士、仲良くしようぜ」

「あつ、そうなんだ。僕は枢木スザク。これからよろしく」

「俺のセリフ取られたが・・・ま、いいや、よろしく」

僕達はそれで握手をした。本日二度目の握手だ。

「じゃあ紹介したいヤツがいるんだ。箒、セシリア」

「・・・・・・・・篠ノ之箒だ。よろしく」

「セシリア・オルコットです。よろしくお願いしますわ」

先ほどのツリ目でポニーテールの子と、同じく金髪をロールにした子が挨拶してきた。

「樞木スザクです。それじゃあ僕も紹介したい子がいるんだ。カレン」

早々に友達を作ったらしいカレンは、友達との雑談を切り上げて僕の方に来た。

「え？　どうかした？」

「紹介したいんだ。こちらは織斑一夏君と篠ノ之箒さんとセシリア・オルコットさん。さっき友達になった」

というと、きわめて普通にカレンは視線を三人に向ける。

「そうなの。紅月カレンよ。よろしく」

「よろしく。俺の事は一夏でいいぜ。スザクもな」

「改めて篠ノ之箒だ。よろしく。私も名前でいい」

「セシリア・オルコットです。私も名前で構いませんよ」

と言うわけで僕には、一夏と箒さんとセシリアさんと言う友達が出た。

前の世界では、友達と言える友達なんて、一生かけても数人しかできなかったのにな・・・。

「それでさ、お前とカレンって知り合いなのか？」

「え？・・・どうだろ」

「そうねえ・・・知り合いって言われたら知り合いだけど・・・」

僕も、どうやらカレンも、知り合いと言うのはしっくり来ない。

まあ敵同士だったし・・・でも、ただ憎み合う関係でもなかったし・・・あつ。

「いい言葉があった」

「奇遇ねスザク。私もあったわ」

目のあった僕ら二人は、以心伝心という感じで苦笑してしまう。

「へえ。どういふのだ？」

その一夏の言葉で、僕とカレンは三人に視線を合わせ、奇しくも同時に宣言した。

「「^{ライバル}好敵手」」

僕らがと言うと、三人とも面食らったような顔になる。

「やっぱりこの言葉が一番しっくり来る」

「そうね」

「ハハッ。二人ともかっこいいな。俺もそんな事言ってみたいぜ・・・」

・
」

「その二人は違うのかい？」

と言いながら僕はセシリアと箒を指差す。

「箒は俺の幼なじみで、セシリアは………ISコーチかな？」

「……まあそうだろう」

「そうですわね。まだ好敵手とは行きませんよ」

苦笑する一夏の言葉に二人が賛同する。

「そうだよなあ……俺はISについては初心者だし……あ、
そういえば二人はどうなんだ？」

「僕ら？」

「おう。やっぱ男でISを動かせるんだし、専用機持ってるのか？」

「………まあね」

アレを専用機と呼ぶかどうか知らないけど、ISを持つてることに
変わりはない。

「そうなのか。それじゃあお前も相当強いんだな」

「え……。どうなんだろう」

確かに元の世界ではエースパイロットをしてたけど、この世界で実力を発揮できるかどうか……。

「カレンは？」

「私？ そうねえ……スザクと同じ……かしら」

カレンも言葉を濁す。おそらく僕と同じ理由だろう。

「僕もカレンも、ISを動かしたことないからね。なんとも言えないんだ」

「そうよね」

「へえ。あ、そんなじゃあ午後は実技だし、二人で戦ってみたらどうだ？」

「あ、なるほど」

「それじゃあスザク。倒させてもらうわね」

「コッチのセリフさ」

バチバチと、僕とカレンの間で火花が散る。

「は、はりきるのはいいが、そろそろ3時限目だぞ」

という一夏の言葉で一時休戦、とりあえず僕らは席へついた。

[illegible]

もう昼食を過ぎて午後。展開が速いのはご愛嬌だ。

一夏と僕はISスーツと言うのに着替えて、普段ISバトルを行うという第3アリーナにいる。

女子のＩＳスーツの露出度が高いが、仮にも８０歳を過ぎるまで生きてきた僕だ。

裸ならいざ知らず、今更高校生の露出に一々反応することも無い。ISスーツの印象など、せいぜい『変わった水着みたいだな』程度でしかない。

まあ一夏は慣れて無いらしく、顔を赤くしてドギマギしていたようだが。

それはそうと。今は一夏と話しながら授業の準備をしている。

「しかし広いね」

「国立でしかもISを扱うんだ。これぐらいの設備は当然ってことだろ」

一組だけでこの広い第3アリーナを丸々使って、IS起動と実技訓練をやるらしい。

「でもカレンと戦うのか・・・」

「そんなに強いのか？カレンって」

「うん。正直、接近戦で闘うのは分が悪いね」

紅蓮の突破力にはいつも驚かされてきた。それに元の世界では、彼女が出てくるだけで戦況が引っくり返ること何度かある。

「へえ。まあ俺はIS初心者だからよくわからないし、二人の戦いを見て勉強させてもらおうよ」

「僕らも初心者なんだけどね」

君よりも、と苦笑しながら付け加えておく。

そう——それこそ僕はまだ、一度もISを動かしたことも無いよ
うな、正真正銘の初心者なんだよ。

「それでは枢木と紅月。お前達に模擬戦闘をしてもらう」

「「は？」」

授業開始早々、織斑先生が突然そんな事を言ってきた。

「え、えと・・・ちよつといいですか？織斑先生」

「なんだ」

「模擬戦闘・・・とは？」

「名の通りだ。ほかの生徒が訓練している間、お前達には模擬戦をしてもらう」

「な、なぜ・・・」

「どうせお前達もする気だろう。だったら大々的にやれ」

派手にやったところで、意味ないでしょうに・・・。

「まあ・・・どうせやる気だったし・・・いいよねカレン？」

「え・・・まあ、問題はない・・・わね」

「よしっ。ならばお前達はコチラと少し離れた場所でやれ。他の生徒は専用機持ちと共に、ここで起動訓練を行え。いいな！」

「「「は、はい！」「」「」

織斑先生の気迫に怯えてか、全員素早く準備を始めた。

「お前達はあっちだ」

と指差されたのはアリーナの真ん中。

「派手にやるのはいいが、あまり大規模な戦闘はするなよ」

「「了解」」

中々難しい注文をされた。やめる気は無いけど。

そして僕とカレンは言われた場所まで移動する。

「スザク。手加減は無用よ」

「僕がするわけ無いよ」

そして僕らの周りが光って、そして同時に機体を纏う。

僕はその名の通り、白き騎士『ランスロット』を纏い、カレンは『紅蓮式』を纏う。

「・・・あれ？ 全身装甲なんだ」

「そうみたいね」

本当に僕らの外見は、KMFのような外見になっている。KMFを何分割かしたような感じだ。

周りから見れば、スーツと言うよりロボットのように見えるだろう。

しかし本当にランスロットを体に纏ったようだ。そして妙に体に馴染んでいる。

（・・・神様の特典みたいなものかな？）

それとも案外こういう物なのかな。まあ都合がいいから気にせずやろう。

「案外しっくり来る」

「そうね。・・・それじゃ始めましょう？」

その言葉と共に、カレンは『紅蓮式』の異質な右腕を後ろに下げ構える。

「わかってる」

僕は足を開き左手を下に向け、いつも発進ポーズをする。

「ランスロット・・・発進！」

ランドスピナーが豪快な音を立てて回り、僕はMVSを出してカレンに突撃する。

「はあっ!!」

「甘く見ないでよね！」

カレンはあの爪が鋭利に尖った右腕を突き出す。

ガギンッ!!

僕のMVSとカレンの右手が、金属音を響かせて衝突する。
しかし徐々にカレンの右手に押される。

「斬れないのか!？」

「言っただでしょ？ 甘く見ないでよねって！」

そのまま、僕のMVSはカレンの輻射波動によって弾かれ、カレンの左手にあるナイフが迫る。

「そのぐらいっ！」

僕は素早くその場からジャンプする。その高さはIS三機分はあるだろう。

そして一定の距離が開いたので、僕とカレンはにらみ合う。

「動きは鈍ってないようね」

「君こそ。I Sになってもその動きは流石」

「貴方こそ。でも勝たせてもらうわ」

僕はもう一本のMVSも引き抜く。カレンは右手を慣らすように動かす。

「やれるものならね」

「……言ったわね？」

「言っただ。僕が勝つからね」

「なら……私が勝つわね！」

その言葉と共に、カレンが右手を突き出して僕に突撃する。

「僕の剣も、舐めない方がいいよ！」

僕はMVSを正面でクロスさせて、向かい合う紅蓮へ突撃する。

そしてこの世界初めての戦闘——そして僕の人生で初のIS戦闘が始まった。

IS学園につきました(後書き)

感想があったら下さい。

初めての戦闘・・・そして君は？（前書き）

スザクって・・・ハーレムにした方がいいのでしょうか？

誰かとの個別エンドも、少しコードギアスのキャラを増やしてのハーレムも・・・いいかもしれない。

今のところ、自分の考えはハーレムです。

初めての戦闘・・・そして君は？

「はぁ！」

「そこよっ！」

ガキンッ！ ガキンッ！

何度も金属音がアリーナに鳴り響く。

「・・・・・・・・・・」

俺、織斑一夏は思わず見惚れてしまった。

おそらくこの場にいる人は、全員啞然としてしまったと思う。

何に啞然したかと言うと、今日編入してきた二人の戦闘。

「このっ！」

一人は俺と同じISを動かせる男、枢木スザク。

「それぐらいっ！」

もう一人はスザクの知り合いと言う、紅月カレン。

二人のISは珍しい全身装甲で、外見だけ見るとまるでロボットのようだ。

そして・・・その戦いは見るものを唾然させた。

「はあっ！」

スザクが赤く発光している二振りの剣をカレンへ振り下ろす。

「そんなのっ！」

カレンは足についてるタイヤ(?)で滑走してそれをかわし、異様にデカイ右腕でスザクに迫る。

スザクはそれを体を逸らしてかわし、カレンに対し蹴りを放つ。しかしカレンも蹴りを放って、二人の足が衝突する。

鈍い金属音を響かせて、二人とも一度離れる。

そして再び二人は突撃する。

「はっ！」

今度はカレンの胸部からアンカー(?)を出してスザクを襲う。

「このっ！」

スザクは腕についてる、これまたカレンのアンカー(?)と似たヤツを発射する。

それは空中でぶつかって、互いに弾かれる。

それを見て二人は、急接近して互いの武器を構えて打ち合う。

「そこだっ！」

カレンの右腕による攻撃を、スザクは念入りにかわし、攻撃の隙を突いて双剣の連撃を行う。

「まだよっ！」

しかしカレンも黙ってなく、右腕から赤黒いバリア（？）を出してスザクに応戦する。

そしてそれがしばらく続いた時、スザクの双剣とカレンの右腕が衝突して、互いに距離が離れる。

こんな事が10分前ぐらいから、何度も繰り返されている。

「すげえ・・・」

無意識のうちに俺は呟いていた。

「あれ、本当にISの動きなんですか?！」

隣に来ていたセシリアも驚く。本当にそう思う。

二人ともまるで自分の体のように動かしている。

ISを初めて動かす二人が、あんな動きをするなんておかしい。というか、本当にISを使って操作してるのか?

いくらISでも、あそこまで人の動きを再現するのは不可能だと思う。まあ素人見だけどさ。

「しかも二人とも、相当の実力がある・・・でなければあの動きに

説明がつかない」

箒も驚いた様子で呟く。その意見に俺も賛成だ。

初めてのIS戦闘で、アレだけの動きが出来るということは、それだけの実力が経験か、あるいはその両方があるってことだ。

簡単に言うくと、”本当に俺たちと同じ年なのか？”と感じさせるほどの戦闘だった。

「・・・なるほど。そう言う事か」

「？」

いきなり背後から小声が聞こえたと思ったら、ISスーツを纏った長い黒髪の美少女・・・ルルーシュさん・・・だったか？

その人が二人の戦闘を見て何か呟いて、途中で俺に気付いたのかその場を去った。

（一体なんだ？）

まあ気にしても仕方ない。それよりも今後の為に、二人の戦闘を見て勉強しよう。

「中々決まらない」

「ホントジリ貧ね。そろそろ終わらせない？」

「そうだね。僕のシールドエネルギーは尽きそうだし」

「私も。それじゃあ次でラストよ」

「わかった」

そして二人はそれぞれの武器を構える。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

無言でにらみ合う空気と、威圧するような機体の雰囲気、見ている生徒も無言となる。

そしてカレンが先に動いた。それに続いてスザクも動く。

カレンは異形の右腕を突き出して迫る。

スザクは二振りの剣を振りかぶる。しかしまだ剣の有効範囲外。

「まさか!?!」

俺の思ったとおり、スザクは剣を二本とも投げた。

「っ?!」

流石にカレンは驚いたが、右手から出される、赤黒いバリア(?)
みたいなのでガードする。

しかし予想外の攻撃でカレンは体勢を崩す。

「今っ!」

その隙を待ってたと言わんばかりに、スザクが腰からアンカーを出す。

しかしカレンも胸部からアンカーを出して防ぐ。

「お返しよっ！」

そしてカレンは、左腕で持ってるナイフでスザクに切りかかる。

「まだだっ！」

防がれたとわかったスザクは、右腕から緑色の盾を出して、手刀のようにしてカレンを襲う。

——————ガギイイイン！

一瞬の攻防は、辺りに金属音を響かせて決着がついた。

「くっ・・・」

スザクの胸部分の装甲は、カレンのナイフで豪快に斬られて、おそらくシールドエネルギーがゼロになったらしい。

「あ・・・」

しかしカレンも、スザクの緑色の盾による攻撃で、首部分の装甲が

グシャリと凹んで、コチラもシールドエネルギーが尽きたらしい。

「・・・引き分け・・・らしいわね」

「そう・・・みたいだね」

そして二人はISを解除する。

「とりあえず、初めてやった感想でも言い合おうか」

「そうね」

そんなことを呟きながら、二人は俺たちのほうに来る。

「あなた、銃は使わないの？」

「いや使おうと思ったけど、大規模な戦闘はするなって言うから、銃は自粛したよ」

「へえ。意外と冷静だったのね」

「僕が興奮してるように見えたのかい？」

「ちょっとね」

「そうか。それで他に何かあった？」

「そうね・・・そういえば、あのシールドって最後なんで使ったの？」

「え？ ブレイズルミナスの事かい？・・・あの時は予断を許さない場面だし」

「腕のハーケンでも良かったでしょ？」

「・・・・・・・・今気付いた」

「貴方って、ホント肝心な所で抜けてるわね」

「そうだね・・・ブレイズルミナスは、シールドエネルギーを使うらしいし」

「あれってシールドバリアー扱いじゃないの？」

「いや、それとは違うらしい。元は同じだけど、それぞれ性質は異なるみたいだ」

「へえ。ちよつと燃費悪そうね」

「ホントに。その上ヴァリスもエネルギーを相当食うだろうし・・・そっちは？」

「私は輻射波動ぐらいしか、エネルギーを使う武装が無いかしら。貴方より燃費はいいでしょうね」

「輻射波動の万能性は凄すぎるよ。攻撃、防御と何でも出来る」

「その代わり遠距離の戦闘は不利だから、どうにか接近戦に持ち込まなきゃいけないわね」

「その点はコチラと違うね。僕は全ての距離に攻撃手段があるし」

「万能型だけど燃費悪いから、持久戦に弱いでしょうね」

「君の輻射波動だって、相当エネルギーを使うだろ？」

「まあ連続で使うのはよくないわね。今回はまだ慣れてなくて使いすぎちゃったけど、次の闘いではこうはいかないわ」

「僕だって、この戦闘で学んだことはある。その上ヴァリスを使っ
てないんだ。そう簡単に負けるわけにはいかない」

そんな会話をしながら、俺たちの前に来る。

「一夏達はどう思った？」

「引き分けだけどね」

「いや・・・二人とも凄すぎる」

俺がそういうと、二人とも顔を見合わせる。

「そうだったかな？」

「お互い反省点ばかりだったし、凄くはないと思うわよ」

「「「・・・・・・・・」」」

この二人は、どうやら今の俺達より断然強いらしい。
もし今闘ったら、完全にアチラのワンサイドゲームになるな。

「お前ら、どっかの軍で訓練でもしてたのか？」

「え？・・・ま、まあ・・・ね」

「してたと言われれば・・・してた・・・かしら？」

俺の言葉に二人とも言葉を濁す。・・・嘘をつくのは苦手な性格らしいな。

「終わったか」

そこに千冬姉が来る。常時不機嫌そうな顔は、少し驚いた表情となっている。

「お前達、何処かの代表候補生か何かか？」

「え？！　ち、違いますよ！」

「そ、そうです！　私たちが、そんな恐れ多い・・・！」

手を高速で振り、二人とも焦った様子で否定する。

（・・・コレ、完全に黒だろ）

嘘をつくなら、もう少し訓練した方がいいぞ。それじゃあ小学生でもわかる。

「そうか」

X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X

放課後。

僕は織斑先生から、『お前らは少し残れ』と言われたので、カレンと二人で残っている。

「なんだろう？」

「さあね」

他のクラスメイトが消えるのを待って、しばらくしたら織斑先生が来た。

「柩木、紅月。部屋の鍵だ」

と言われて二つの鍵が投げられる。僕らはそれを受け取る。

「急な編入だったので、柩木は女子と相部屋だからな」

「ええっ!？」

いくらなんでもそれはないでしょう!!

面識のある女性ならまだしも、この学園で知り合いになった女子なんて二人程度だ。

「紅月は普通だ」

「よ、よかったぁ・・・」

隣で安堵のため息をするカレン。羨ましいなぁ・・・。

「それじゃあもう行っていいぞ」

そして織斑先生は立ち去る。僕らは一度顔を見合わせる。

「か、カレン。僕、どうしたらいいと思う?」

「・・・大丈夫でしょ（貴方イケメンだから、すぐに受け入れられるでしょ）」

カレンが何か核心した表情をしている。うゝん・・・大丈夫なのかな?

「じゃ、私先に行くわね」

「うん」

カレンは先に教室を出た。僕はどうすればいいか考え中。

そして結論。

「……気にしてもしょうがない」

というわけで、たっぷり十分考えた僕も教室を出た。

[illegible]

しかし、すでに自分の荷物は部屋の中に運ばれている。どう足掻いても入る以外の解決方法は無い。

「・・・行こう」

軽く深呼吸・・・そして意を決し、僕は部屋のドアを開けた。

「こんば————ええっ!？」

僕はあいさつをしながら中に入るが、その言葉は途中で驚きの声へと変わってしまった。

その視線の先には、この部屋のルームメイトがベットの上で厚い本を読んでいた。それはいい。

だがしかし、それを読んでいる人物の方が問題だった。

「・・・ん？ ああ、君が私の部屋の同居人か」

長い黒髪に紫の瞳。眉目秀麗な僕の親友と、ほとんど同じ容姿と同じ名前を持つ女性。

「る、ルルーシュさん？」

ルルーシュ・ランペルージが、そこにはいた。

彼女は読んでいた本を閉じて、にこやかな表情で僕の方まで来た。

「一応、自己紹介だ。私はルルーシュ・ランペルージ。よろしく」

右手を差し出されたので、僕は慌てて反応を返す。

「あ、ああうん。枢木スザクです。よろしく」

そして彼女の差し出された手を握る。その手は少し冷たかった。

「ちょうど、君と話したかった所だ。この部屋構成はちょうどよかった」

「・・・・・・・・・・」

手を離れた彼女はそう言いながら、窓側にある自身のベットに座る。

———どうやら、僕と彼女は少し話をした方がいいみたいだ。僕も聞きたいことが少しある。

「君も座れ」

「・・・・・・・・・・わかった」

僕も空いているベットの方へ座る。というか二つしかこの部屋にはベットは無い。

「話って何？」

そう言うルルーシュさんは、黒く美しい髪を片手で弄りながら、流し目でコチラを見る。

アメジストのような目が僕を捉え、その目に引き込まれるような錯覚に陥る。

僕がその仕草に少し見惚れた時、人差し指についてる金と黒の指輪が煌めく。

「なぜ、私の名前を知っていた？　これは紅月にも言える事だが」

「っ……」

これは質問する手間が省けた。

このルルーシュさんは、僕の知っているルルーシュとは別人だ。

もしこの人があのルルーシュなら、カレンや僕を見て、何のアクションも見せないのはおかしい。

この人は、平行世界のルルーシュ。性別が転換しているのは……
そういう物だと割り切ろう。

「なぜ黙っている？　喋れない理由があるのか？」

しかし性格はルルーシュに似ているらしい。性別ぐらいしか違いがない。でも随分久々で懐かしい。

「……知り合いに似てたので」

「ほう。それで話しかけたと」

嘘は言っていない。ここは嘘をついても仕方ない。

ただ、その人物が違う世界の親友と言う設定を、アチラは知らない

から問題はないはず。

「そこまで似てるかな？」

「うん。正直、生き写しのようだ」

「・・・そして、偶然にも私と同じ名前と」

「うん」

「・・・・・・・・・・」

ルルーシュさんは、僕を疑うような視線で見る。仕方ないか。

自分と同じ容姿で同じ名前の人が、この世に居ると言うのはゼロに等しい。

しかし、ゼロではない。だから嘘とは断定できないはずだ。

「・・・なら、そう言う事しておくか。紅月も同じ理由だろう」

案の定、ルルーシュさんは引き下がってくれた。しかしその言動はまだ疑っている。

「私は先に寝かせて貰うよ」

「え？ まだ8時だけど」

「私は低血圧だから早く寝ないと、朝ボーンツとしてしまうんだ。私は勝手に寝るから、明かりは気にしないでいい」

（枢木スザク・・・か）

夜、おそらくルームメイトも寝た深夜。微かなだが一定速度の呼吸の音が聞こえる。寝ているだろう。

ルルーシュは布団に包みながら、突如来た謎のルームメイトの事を考えていた。

（直観だが、おそらく彼は何かを隠している・・・。何処かの代表候補生か・・・）

もし自分の素性を知って近づいたなら、ルルーシュは用心しなければいけない。

特に彼のIS操縦は、ダントツな腕前を持っている。ISも不明なタイプだ。しかもカレンが加わる事となれば、あまりいい状況とはいえない。

（用心しておくことに、越したことはない）

前もって調べた過去の経歴はいたって普通。しかしIS操縦は並々ならない腕前。

つまり過去を改竄されていると言う事。

（イレギュラーへの対策も・・・考えておかなければ）

自身の機体————『ガウエイン』の待機状態である、金と黒の指輪を見る。

『ガウエイン』は絶大な力を持っている。彼らを振り返りにするの

も不可能ではないだろう。

しかし、ルルーシュは自分からは仕掛けない。それは自分の信念が理由。

「撃っていいのは、撃たれる覚悟がある奴だけ。つまり撃たれる奴は、撃つ覚悟がある奴だけだ」

覚悟は貫いてこそ意味がある。口だけの覚悟など、貫く意味すらない。

「その代わり、敵と言うなら叩き潰す」

要はやられたらやり返す的な覚悟だ。不良的だが、覚悟は人それぞれだから別にいいだろう。

（もし何の関係もなく、友達としてなら・・・別にいいか）

そんな事を考えながらルルーシュは眠った。その顔は妙に嬉しそうだったかも知れない。

初めての戦闘・・・そして君は？（後書き）

感想、もしくは前書きへの意見があったらください。

転校生は一夏の知り合い（前書き）

えゝ・・・『スザクのハーレムついて』意見を統合した結果、半分に分されました。

と言うわけなので、当初の計画通りハーレムで進めたいと思います。

フラグについての予告。

スザクは・・・年上に好かれます（一部例外あり）！ お姉さまあ！

はい！ これで誰にフラグが立つか、みんなわかったかな？

できれば、不明と言う事にしてください。

後今回は一万文字オーバーで、つまり長いです。できれば最後まで読んでください！

※この話でフラグは立ちませんので（？）

転校生は一夏の知り合い

「え!?! 一夏ってクラスの代表なんだ!」

「ああ。ってそんな驚くことか?」

気持ちのいい朝。

この学校で二人だけの男と言う事もあって、俺とスザクはすぐに意気投合した。

そして、今は教室で談笑をしている。

「大丈夫なのかい?」

「心配するなら変わってほしいぜ・・・」

「ハハハ。僕はまだ来たばかりだから、それはちょっと無理だよ」

「だよなあ・・・」

そんな会話をしている時、今来たクラスの子が話しかけてきた。

「織斑君、枢木君、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた?」

「転校生? この時期にまた?」

「僕が言う事じゃないけど、今四月だね。入学すればいいのに・・・」

「なんでも、中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

「へえ・・・代表候補生」

代表候補生といえば。

「あら、わたくしの存在を危ぶんでの転入かしら」

一組のイギリス代表候補生、セシリア・オルコット。
腰に手を当てたポーズは今日も輝いている。なぜか眩しいぜ。

「このクラスに編入する訳ではないだろう。気にすることではない」
あれ、さっき窓側の席にいた筈が、何時の間にかこちらに来ていた。

「中華連邦じゃ・・・ないのよね・・・。はあ、まだ慣れない事が
いっぱいね・・・」

なんて眩きを漏らしたのはカレン。中華連邦ってなんだ？

「カレン。中国だよ、間違えちゃダメだ」

スザクがカレンに小声で言う。それにカレンは”しまった”と言う
顔をした。

「そ、そうよね！ 私、どうしちゃったのかしらね！」

「そ、それはそうと、代表候補生ってどんな人なんだろうね」

そしてスザクが急いで話を変えた。触れられたくないなら、触れる理由も無いか。

「そうだな。やっぱ代表候補生なんだから、強いんだろうな」

しかも代表候補生なら専用機を所持しているはず。どんな奴なんだろうか。

もしセシリアみたいなヤツだと困るな・・・正直疲れる。

「む・・・気になるのか？」

「ん？ ああ、少しは」

「ふん・・・」

聞かれたことに素直に答えたら箒の機嫌が悪くなった。

しばしば十代に見られる感情の奔流、もとい情緒不安定なんだろうか。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があると言うのに」

「ああ、大丈夫だろ別に。セシリアにまたやってもらえば」

他のクラスメイトは訓練機を使わなきゃいけないし・・・それには申請と許可、整備に1日はかかるから、手っ取り早く模擬戦したいならセシリアが一番早い。

クラス対抗戦の説明は、これもとある小説に載ってるだろう。

「やるだけやってみるからな」

「やるだけでは困りますわ！ 一夏さんには勝ってもらいせん
と！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「僕らもなるべくサポートするつもりだから」

「そうそう。三人寄れば文殊の知恵と言うし」

「織斑君が勝つとクラスの皆が幸せだよー」

セシリア、箒、スザク、カレン、クラスメイトと言葉を言ってくる。

でもまだ基本操縦で躓いてるし、とてもじゃないが自信に満ちた返事は出来ない。

（でも、初めて動かしたときはスゴイ馴染んだんだがなあ・・・）

あの時感じた一体感、まるで世界が生まれ変わったような感覚は今のところない。

それでも動かただけで操縦に慣れていくのは、白式が俺の個性に
対して最適化してくれているから・・・らしい。

そんな感じの事を考えていたら、俺達の周りはひとりふたりと集ま
ってきて、あっという間に女子に埋め尽くされた。

これもいつものパターンになりつつあるから、慣れた。
しかし女子と言うのは本当に噂好きだな。俺はついていけないぜ。
当然スザクも。

「織斑君、がんばってね！」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

などと色々な事を言ってくる女子一同。
まあ周りのテンションを削ぐわけにもいけないので、一応『おう』と返事を返す。

「————その情報古いよ」

ん？ 教室の入口から声が聞こえた。気のせいかすげえ聞いた事のある声だったが・・・。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれかかっている女子は・・・。

「鈴・・・・・・・・？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふっと小さく笑みを漏らす。トレードマークのツインテールが軽く揺れた。

「何格好つけてんだ？　　すげえ似合わないぞ」

「んなっ・・・！？　　なんてこと言うのよ、あんたは！」

おおっ、やっと普通に喋った。なんださっきの喋り方は。軽く引いたぞ。

「おい」

「なによ！？」

バシンッ！聞き返した鈴に強烈な出席名簿打撃が入った。・・・
鬼教官降臨である。

「もうSHRの時間だ。教室にもどれ」

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入口をふさぐな。邪魔だ」

「す、すいません・・・」

すごすごとドアからどく鈴。その態度は100%千冬姉にビビってる。

こいつ昔から千冬姉が苦手だよな。なぜかは知らんが。

「また後で来るからね！逃げないでよ、一夏！」

なんで俺が逃げるんだ。

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

二組へ向かって猛ダッシュ。

うん、昔のままの鈴だな。しかしなんでアイツは格好つけてやってきたんだ？

高校デビューか？そんなタマでもないだろ。

「っていうかアイツIS操縦者だったのか。初めて知った」

素直にそう思って、何となく口を開いた。……………それがまづかったらしい。

「…………一夏、今のは誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？ あの子とはどういう関係で…………」

「一夏って人気者なんだね。羨ましいなあ…………」

「あなた、人の事言えるの？」

その他、クラスメイトからの質問集中砲火が（一部例外もあるが）。
ああ、馬鹿…………。

「いや、そうじゃなくてだな——」

「え？　ちがうの？」

「おい、ルルーシュ。こっちはどうやるんだ？」

「ちょっと待て。それでこうやって———こうやればいいんだ」

「あっ！　なるほど」

「お〜い。ルルーシュ〜」

「お前は少し黙ってろ！」

放課後。僕らと一夏たちとは別行動。

僕とカレンは今、自分の部屋でルルーシュの指揮の下、勉強をしている。

ちなみに、勉強している内容はISの事。応用的なことはわからないので。

しかしさすがは平行世界のルルーシュ。すごい頭が良かった。

あ、あとルルーシュとは、まあルームメイトなので仲良くなった。さん付けしなくてもいいと言われたし。

そしてカレンとも仲良くなった。同じ女子だし、カレンはすごい社交的な性格だから。

「ああもうっ！ お前らは運動バカか！？ これぐらい最初から出来ておけ！」

なんかルルーシュが憤慨されている。僕とカレンは顔を見合わせる。

「「そんな事言われても………」」

異世界から来て、まだ一ヶ月も経っていないんだから仕方ない。

「まったく……よくもまあこの程度の知識で、あれほどの戦闘が出来たんだか……」

「「体が勝手に動いた」」

偶然にもハモってしまった。それを聞いたルルーシュは眉間を押さえる。

「はあ……この運動バカ達は……呆れてくる」

「「あ、アハハハ………」」

奇しくも、あっちの世界のルルーシュも同じような事を言ってたな。

「ちょっと私が疲れたから、勉強はこれぐらいにしてくれないか……」

ぐったりとした感じで言うルルーシュ。そこまで疲れることかな。

「そういえば、ルルーシュ」

「ん？　なんだ」

「君ってどこ出身？」

「アメリカ。ラスベガス辺りだが」

アメリカと言うと・・・ブリタニア大陸の前の名前が、アメリカ大陸と言う名前だった気がする。

おそらく、そこにある国の事だろう。

「もしかして、アメリカの代表候補生だったりする？」

「ああ、非公式だが」

・・・・・・。サラツと言っているのかな。そんな事。

「じゃあ、ルルーシュは強いのか？」

「いや、私はお前たちのように戦うタイプじゃないんだ。砲撃で敵を沈める戦法が多いな」

『だから強いかどうかは知らない』と、付け加えるルルーシュ。

まさか闘い方もルルーシュに似てるなんて。偶然と言うのは怖いな。

「それぐらいか？」

「あ、うん」

「じゃあ私は寝かせて貰う」

「違うアリーナへ行こう」

「そうね。邪魔しちゃ悪いし」

と去ろうとしたとき、僕らに気付いたらしい一夏が声を上げる。

「あっ！　おい二人とも！！　助けてくれ！！　う、うわっ！」

そんな声が聞こえたので、僕とカレンは顔を見合わせる。

「どうする？」

「わ、私は遠慮しようかしら・・・とばかり食らうし・・・空飛べないし」

「・・・・・・・・・・はあ。仕方ない、助けに行くよ」

僕は『ランスロット』を纏う。あまり使っていないが妙に馴染む。

（ちょうどいい。ヴァリスの威力を試してみよう）

と言うわけで腰からヴァリスを取り、バーストモードにして構える。

狙いは・・・三人の密集している場所の隙間。そこを撃てばみんな散開してくれるだろう。

不規則に動く三人の隙間を、緻密に計算して先読み、ISの自動演算で弾き出される照準に合わせる。

「そこだっ！」

ターゲットサイトに目標が入ったので、僕はヴァリスの引き金を引いた。

—————ドゥウウウンッ！！

「「「「?！」」」」

とんでもない音を響かせて、緑色の極太レーザーが放たれる。
三人はギリギリ回避して誰にも当たらなかったレーザーは、アリーナのバリアーに衝突して轟音を出した後、そこにヒビを入れた後四散した。

「な・・・なんて威力・・・」

僕はヴァリスの威力に、少し呆然としてしまった。そして『ランスロット』を解除する。

「おいスザク！ お前俺等をノックアウトする気か?！」

そして呆然としてる僕のところに、文句を言いながら一夏が降りてきた。

「一夏さん。あの弾道なら私たちに直撃しませんでしたわ」

「確かに威力は驚いたが、当たらなければ意味は無いぞ。一夏」

しかし分かってくれる二人がいてくれた。

「え？　そうなのか？」

「まあ……。助けようと思ってヴァリスを出したとき、ついどれぐらい威力があるか試したくて……。ついバーストモードにした……。ア、アハハハ……。ごめん……」

「お前なあ……。まあ、助けてくれてありがとよ」

呆れ気味だが、一夏たちは許してくれた。

「今日は終わろう。予想外のイレギュラーが出てきたからな」

箒がそう言いながら僕の方を見る。……。ホントすいません。

「僕らはこれから始める？」

「やめましょう。貴方もそういう気分じゃないでしょ？」

「そうだね。今日はやめておこう」

ピピピ。

その時、僕の携帯にメールが着た。差出人はえっと……。ルルーシュ。珍しいなあ。

内容は『部屋に来てくれ。お前宛の荷物が届いてる』と。

何のことだろうか？　ひとまず部屋に戻ろう。

「これだ」

自分の部屋。

早々に帰ってきた僕は、ルルーシュの言っていた荷物とやらを見た。荷物は大きめのダンボール。おそらく何か入っている。

「身に覚えは？」

「まったくない」

「じゃあ、先生達に届け出た方がいいな。すぐに——」

「ああ、ちょっと待って」

僕は、先生達を呼びに行こうとするルルーシュの肩をつかむ。

「ちょっと待って。もしかしたら僕の知り合いからかも」

「？ 知り合いとは」

「えっと……詳しくはいえないんだけど……」

知り合いと言うのは日本政府の事。

僕は日本の代表候補生なので、何かそういう類いのモノを送ってきたのかもしれない。

もしそうなら、この先生に見られるのは厄介だ。まあ、それはルルーシュにも言えるけど。

「そうなのか。それじゃあ開けてみる」

「うん」

と言うわけでガムテープをはがして、フタを開けて中身を見る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして閉じる。

「おいおい。何閉じているんだ。ちゃんと確認しろ」

「したよ。見たくは無かったけど」

これの中身は・・・『ISを知ろう！ これを読めば貴方も代表候補生！（一卷）』と書かれた本、全部で三桁は入ってる。しかも一つ一つはスゴイ厚い。

おそらく送り主は日本政府。

僕の経歴から、僕はISを全く知らないと判断して、こんな物を送ってきたのだろう。

だがしかし、こんなの読んでたら高校生活終わってしまう。

「これは送り返そう」

僕はそれを持ち上げて、邪魔にならないような場所に下ろす。

「そういえば、ルルーシュ」

「・・・なんだ」

僕が話しかけると、ルルーシュは面倒そうにこちらを向いた。

「相談したいことがあるんだ」

「相談？」

「うん。僕の機体の事で」

と言うと、ルルーシュの顔が少し強張る。警戒してると言った方がいいか。

「・・・私に見せていいのか？」

「うん。別に隠す必要はないし」

警戒してるだろうから、挑発的な言葉はやめて正直言おう。

直感だけど僕も彼女も、あまり人には言えない秘密があるらしいし。

「・・・まあ、いい。それで見て欲しいものとは？」

だがそれぐらい、ルルーシュも感じてるはずだ。この僕でもわかるんだから。

しかし今回は状況から見て、お互いあえて知らないフリをした。

正直、僕はそのほうが都合がいい。僕は彼女を敵とは思ってないし。だが彼女は、僕を正体不明と考えているだろう。逆の立場なら僕もそうした。

だから、今はお互い知らないフリが一番いい。いつか誤解は晴らしたいと思うけどね。

「ISってPICで飛んでるんだよね」

PICとは『パッシブ・イナーシャル・キャンセラー』の略。

ISの基本システムで、これによりISは浮遊や加減速などを行うことができる。

「当たり前だ。元々宇宙での稼動を目的としたスーツに、陸上タイヤを付けでどうする」

「けどさ。僕のはタイヤも付いてるし、どうやらPICも無いみたいなんだ」

「………そんなバカな」

ルルーシュは”まさか”と言った感じだ。

当然僕もそう思って、何度も『ランスロット』のシステム系統を見直したが、やっぱりない。

「見てくれればわかるよ」

と言って『ランスロット』からディスプレイが出てくる。

それをルルーシュは呆れながら見る。

そして数分……。

「欠陥品を通り越して不良品だな。これではISと言えないぞ」

本気で呆れていた。僕も最初見たときは驚いた。

本当にKMFの『ランスロット』を再現したんだろう。だから僕はすぐに馴染めたんだと思う。

けれど、再現しすぎてISとしての機能がついてないのは・・・ダメじゃないか。

「でもさ、その代わりに変なシステムが入ってるんだ」

そう。

通常PICと書かれる筈の項目は、『?????』となっている。名称も内容全部不明とは・・・。神様、一体どういうつもりなんですか。

「そういえば、これはお前専用のISじゃないのか？ これではまるで、そこら辺にあったテキトーな機体を持ったみたいだ」

「ギクッ」

図星と言うわけじゃないけど、核心に近いことを突かれた。ど、どうにか誤魔化しておかなければ。

「え、ええっと・・・まあ実験機らしいから・・・ハハハ・・・」

「・・・・・・・・・・（ジトーツ）」

うつ。ルルーシュのジト目が僕を貫く。しかし触れては来なかった。

「……だがまあ、この《フロートユニット》というのがP
ICを積んでいるな」

ルルーシュが言うにはそうらしい。

元の世界では《フロートシステム》で飛んでいたが、この世界では
高性能なPICとなっていた。

しかし名称が変わった程度で、やっぱりエネルギー消費は多いら
しい。

「基本スペックと技術は高いが、その分エネルギー面が圧倒的に悪
いな」

辛辣なルルーシュの言葉。僕は苦笑するしかなかった。

「まあこれぐらいでいいか？」

「助かったよ。ルルーシュ、ありがとう」

「礼は要らないさ。それでお前シャワーはいいか？」

「え？ ルルーシュが先に使いたいなら、僕は後でいいよ」

「もう使った。気付かなかった？」

と言われると、確かに。

ルルーシュの艶やかな黒髪が濡れて”鳥の濡れ羽色”のように美
しい。

格好こそ制服だが、その多少着崩した格好が妙に色っぽい。

さらに、わずかに火照ったルルーシュの整った顔が妖艶な色気を誘

う。

ハッキリ言って・・・何故気付かなかったのか不思議なくらい、ルルーシュはキレイだった。

「・・・私は魅力のない女だと自負しているが・・・そこまで無関心だとさすがに・・・」

本気でルルーシュが俯いている。こ、これはフォローしなければ！

「だ、大丈夫だよ！ 僕には魅力的に映ってるから」

「ほ、本当か？」

少し潤んだ目をしたルルーシュが、僕に急接近してくる。

「?!」

思わず――――心臓が飛び跳ねた。

香水かどうかは知らないけど、爽やかな香りが鼻を刺激する・・・これがフェロモンって奴か。

そして、ルルーシュの潤んだ瞳は普段の雰囲気とは違い、妙に可愛らしく見えた。

しかも少し着崩した制服の間から、白魚のような肌と・・・し、下着が見えてしまった。

・・・・総合的に言うと、僕はルルーシュを直視できなかった。

「ほ、本当なんだろうな？ 私には、少しは魅力があるんだろうな

「？」

「あ、ええっと・・・・・・・・」

僕は目を逸らして言葉を濁す。理由は描写で察してください。

「なぜ・・・目を逸らして言葉を濁す」

「え?! そ、そそそ、そんなこと、無いよ?! じゃ、じゃあ僕はシャワーを浴びるから!」

「わ、わかった。・・・・・・・・やっぱり魅力が無いのか・・・・・・・・女として致命的だ・・・・・・・・」

そんなルルーシュの呟きから、僕は逃げるようにシャワー室へ行った。

数分後。

パパッとシャワーを浴びて着替えた。男子は早めでいいからね。

「おっ早いな。男子と言うのはそれぐらいでいいのか?」

ルルーシュは布団から上半身だけ出して、読書していた。

「わざわざ待たなくても、寝ててよかったのに」

「あまりに遅ければ寝るつもりだったさ。だが男子と言うのは、シヤワーが異様に早いからな」

「長く浴びても、いいことは特に無いからね」

と言いながら僕は自分のベットに入る。

「そういえば、ルルーシュはお風呂の方に行かないのか？」

「・・・ああ。風呂と人の多い場所は、あまり好きじゃないからな」

「へえ。それじゃあもう寝る？」

「そうだな」

僕は部屋の電気を消す。真っ暗な部屋に外から、少し光が入ってくる。

しかし目が慣れてないので、部屋の中は何も見えない。見えないほうが寝れるけど。

「おやすみ」

「ああ。おやすみ」

そして僕らは明日に備えて眠った。

そして今は放課後。

かすかに空が橙色に染まりはじめるのを眺めながら、今日も特訓のため第三アリーナへ向っている。

ちなみにメンバーは、僕、箒、セシリア、一夏、カレン。

僕とカレンは、ISの方はあまり出来ないけど、戦闘に関してのアドバイスはできるのでついてきた。

アドバイスが役に立ってるらしくて良かった。

そして、クラスの女子も大分テンションのほうも下がってきて、最近では質問攻撃や視線包囲網に出食わすことも少なくなってきた。僕と一夏は大助かり。

とはいえ、未だに学園内では話題の対象であることには変わらないので、アリーナの客席は満員御礼なんだと思う。主に一夏目当てで。

「IS操縦もようやく様になってきたから今度こそ————」

「まあ、わたくしが訓練に付き合っているんですもの。これくらいは出来て当然ですわ」

「ふん、中距離射撃型の戦闘方が役に立つものか。第二、一夏のISには射撃武器がない」

そういえば、そうらしい。

彼のIS『白式』には射撃武器が一切ない。あの刀、雪片式型だけ

だ。

勉強したのだけど、普通ISというのは、機体ごとに専用装備を持っているものらしい。

しかし、その『初期装備』では不十分なので『後付装備』というものがある。

たとえばセシリアのISでは、『初期装備』がブルー・ティアーズ（ビット）。

『後付装備』は、ライフルと近接ナイフと言う感じ。

そしてISというのは、この後付装備のために『拡張領域』がある。装備できる量は各機のスペックによるが、最低でも二つは後付けができるようになっていて・・・らしいと。

らしいというのは、彼のISはそうではないからだ。僕のも少し違う。

拡張領域ゼロ。

しかも『初期装備』は書き換えられないので、結局近接ブレード一本というのが、今のところの彼のISのスペックだ。

僕のは、アチラの世界で最初に『ランスロット』が装備してたのを『初期装備』扱い。
後から付けた《フロートユニット》や《サンドボード》が『後付装備』となっている。

これは、気にしても仕方ないと思うけどね。

「それなら篠ノ之さんの剣術だって同じでしょう。ISを使用しない訓練なんて時間の無駄ですわ」

「な、何を言うか！剣の道とはすなわち見と言う言葉を知らんのか。見とはすなわち————」

「一夏さん、今日は昨日の無反動旋回のおさらいからはじめましょう」

「ええい、このっ！聞け、一夏！」

「俺は聞いてるっつうの!!」

「まあまあ。皆落ち着いて」

いつもこんな調子。

訓練するときは必ずと言っていいほど、セシリアと箒は喧嘩する。ホント仲良くして欲しいと思う。それをいつも宥める者たちとして。

と思いつつ、僕等はアリーナの方へ入って行く。

そこには……。

「待ってたわよ、一夏！」

一夏の知り合いがいた。えっと……凰鈴音さん……だったかな？その人が、腕組をしてふふんと不敵な笑みを浮かべる。

「貴様、どうやってここに――――」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ!!」

「はん、私は一夏関係者よ。だから問題なしね」

「いやいや、それは今は関係ないんじゃないか？」

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだな・・・」

「正々堂々スパイ行為をしてくるなんて、いい度胸ですわね・・・」
うつ、なんか二人が怖いな。まあそれは置いておこう。

「・・・おかしなことを考えているな？ 一夏」

「いえ、なにも。人斬り包丁に対する警報を発しただけです」

「お、お前と言うやつは――――」

一夏に掴みかかってくる箒を、鈴さんが間に入って邪魔する。

「今はあたしの出番。脇役はすっこんでてよ」

「わ、脇やつ!？」

「はいはい、話が進まないから後でね。・・・で、一夏。反省した？」

「へ？ なにが？」

「だ、か、らっ！ 私を怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！」

「そう言われても・・・鈴が避けてたんじゃねえか」

「あんたねえ・・・じゃあなに、女の子が放っておいてって言った
ら放っておくわけ！？」

「おう」

即答。一夏・・・その考え方は改めたほうがいいと思うよ。

「なんか変か？」

「変かって・・・ああ、もう！」

そう言われて、焦れたように頭をかく鈴さん。

「謝りなさいよ！！」

「なんでだよ！約束覚えてただろうが！！」

「あっきた。まだそんな寝言言ってるの？意味が違うのよ、意味
が！！」

「知らねえよ！ どういう意味だよ！」

「あつたまきた。どう言われても謝らないわけね！？」

「説明してくれりゃあ謝るっつーの!!」

「せ、説明したくないからこうして来てんでしょうが!!」

二人の会話に、僕は全くついていけません。ただ怒鳴りあってるだけです。

あ、あれ？ 誰に説明してるんだろう。

「じゃあこうしましょう！ 来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けたほうに何でも1ついう事を聞かせられるってことでいいわね!？」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明して貰うからな！」

「せ、説明は、その・・・」

一夏を指差したまま顔を赤くする鈴さん。やっぱり僕はついていけません。

「なんだ？ やめるならやめてもいいぞ？」

「誰がやめるのよ！ あんたこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ!!」

「なんでだよ、馬鹿」

「ば、馬鹿とは何よ馬鹿とは！ この朴念仁！ 間抜け！ アホ！ 馬鹿はアンタよ！」

カチンッ。あ、誰かが怒ったような音が聞こえた。

「うるさい、貧乳」

———あ、一夏。それは流石にヤバイ———

ドカアアアアンッ！！

イキナリの爆発音、そして衝撃で部屋全体がかすかに揺れた。

発生源見ると、鈴さんの右腕は、その指先から肩までIS装甲化していた。

思いつきり壁を殴ったような———けれど、拳は壁に届いてない……そんな感じだった。

「言ったわね……言ってはならないことを……言ったわね?!」

「ま、まあ確かに今のは俺が悪かった。すまん」

「今の『は』!?!今『も』よ!?!いつだってアンタが悪いのよ!?!」

そんな無茶苦茶な理論が、今この場では成り立っていた。

「ちょっと手加減してやろうかと思ったけど、いいわよ。ご希望どおり、全力で叩き潰してあげる」

最後に鋭い視線を僕らに送ってから、鈴さんはピットを出て行った。

「なるほど。それはおそらく『衝撃砲』と呼ばれる武装だ」

その日の夜。

鈴さんの武装の正体が気になった僕は、その知識が豊富なルルーシュに今回の事を話した。

「『衝撃砲』？」

「空間自体に圧力をかけ砲身を作り、衝撃を砲弾として打ち出すのが『衝撃砲』だ」

「・・・へえ」

「これの特徴は、砲弾だけではなく砲身すら目に見えない事だ。あと武装によってだが、砲身の稼動限界角度はない。そして、おそらく彼女の機体に稼動限界角度は無いな」

「・・・へえ」

「さらに威力はシールドバリアーを貫くほどだ。中国を代表する兵装の一つだな」

「・・・へえ」

「・・・お前、わかってるのか？」

「ゴメン、殆どわからない」

「はぁ・・・」

ルルーシュが呆れる。コレ何回見たかな。二桁は越えてると思うけど。

「簡単に言う」と 360度どこでも撃てる、高威力の見えない砲撃”だ」

「あ、なるほど。だから何されたかわからなかったのか・・・」

「まあお前が闘うワケじゃない。気にしても仕方ないだろう」

「まあそうなんだけどね。気になったというか・・・なんというか」

「まあいいが」

そしてルルーシュは布団にもぐる。

いつも早めに寝るルルーシュだが、さすがにここまで一緒に生活すると、慣れた。

「おやすみ」

「うん。おやすみ」

僕もそれに順ずる形で寝た。早目に寝るのは、駄目なことでもないからね。

クラス対抗戦まで後――――一週間。

転校生は一夏の知り合い（後書き）

すいません。

前書きのテンションに若干引いた作者です。前書きは気にしないで下さい。

感想等があったらください。

フラグについてはメールで受け付けます。興味ないでしょうがw

それではまた次回に。

クラス対抗戦とイレギュラー（前書き）

リクエストがあった女版ルルーシュの声優は、清水香里さん（仮）
と言う事になりました。仮ですので、意見がある方はどうぞ。

しかし・・・今回は原作を殆どそのままだ・・・すいません。文才
がないんです。しかも長いとか・・・最後まで見てくれれば助かり
ます。

クラス対抗戦とイレギュラー

試合当日。

第二アリーナ第一試合。組み合わせは俺と鈴だ。

噂の新入生同士の戦いとあって客席は満員。それどころか通路まで立って見ている生徒までいるらしい。

それでも入れなかった人やIS関係者は、そこらのリアルモニターによるライブ中継だと。

(・・・なんて、気にしている余裕はないか)

俺の視線の先には、対戦相手である鈴とそのIS『シエンロン甲龍』が試合開始のときを静かに待っている。

非固定浮遊部位が特徴的で、肩の横に浮いてる棘付き装甲が、やたら攻撃的な自己主張をしている。

『両者、指定の位置まで移動してください』

アナウンスに促され俺と鈴は空中で向かい合う。距離は五メートル。そこで開放回線で言葉を交わす。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルに下げてもいいわよ」

「雀の涙ぐらいだろ。そんなのいらねえよ。全力でこい」

これは強がりでもなんでもない。

セシリアとの対決のときもそうだったが、俺は真剣勝負に手を抜かれるのが嫌いだ。

勝負とは、たとえどんな力量差があろうと、全力でぶつからなければ意味が無い。

少なくとも俺は、そう思っている。

「幼なじみとして一応言っておくけど、ISの絶対防御だって完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

親切な心遣いありがたいが、『知ってるさ、そんな事』と俺は心の中で思う。

噂ではシールドエネルギーを無条件で貫き、IS操縦者に直接ダメージを与える武装も存在するらしい。

まあそんなものは、公共の場面で出て来る事は無いだろうが。

しかしそれは――――

『殺さない程度にいたぶる事は出来る』

という現実の裏返しでもある。

代表候補生となっているのだから、それぐらいは出来るという自信があるのだろう。

前のセシリアとの対決ではきわどい所まで言ったが、あれは正直奇跡だ。

そして、奇跡は二度も続かない。

『両者、試合を開始してください』

その瞬間鈴は己の武器で切りかかる。

ガキン！

瞬時に出した《雪片式型》でガードしたが、物理的な衝撃で弾かれる。

俺は体勢を整えて再び正面を向く。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど――――」

鈴が俺に斬りつけたのは、異形の形をした青龍刀――――と呼んでいいかどうかは知らないが、それをバトンのように回す。

両端の刃に持ち手が付いているので、鈴は縦横斜めと色々な角度から攻撃することができる。

しかも高速回転してるので、刀で防ぐのも一苦労だ。

（まずい。これじゃあ消耗戦だ。ここは一度距離を取って――――
――）

「――――甘いっ！」

鈴の肩アーマーがスライドして、中心の球体が光った瞬間、俺は見えない衝撃に『殴り』飛ばされた。

一瞬視界が歪むが、俺は何とか意識を保つ。しかし鈴の攻撃は当然、止むことはない。

「今のはジャブだからね」

にやりと不敵な笑みを浮かべる。

ジャブ ストレート
牽制の後には本命と決まっている。

ドンッ！

「ぐあつ！」

また目に見えない拳に殴られ、俺は地面に体を打ち付ける。

ろう。しかも大幅にエネルギーを持っていかれた。

対処法が見つからない・・・このままじゃまずいな。

[illegible]

「あれが『衝撃砲』・・・」

スザクは呆然と呟く。その傍にはルルーシュとカレン、そして何故か織斑千冬がいる。

「見えない砲撃・・・それに速射とまでは行かないけど、連射は可能らしいわね」

「アレはビットと同じ第三世代型兵器だ。それなりの強さはあるが、当然弱点もある」

ルルーシュはあくまで冷静に解説していた。

「弱点？」

「なに簡単だ。直線しか撃てないと言う事だ」

「え・・・それって弱点なのだろうか・・・」

「まあそれは置いておけ。鈴と言う操縦者もそれは重々承知だ。だから全方位への軸回転など、常に動くことを優先しているんだろう」

『基礎を極めなければ無理だが』と付け加えるルルーシュ。それに千冬が続く。

「しかし使いすぎればすぐにガス欠だ――――もったも、それまでアイツは持たないだろうが」

「『零落白夜』……ですか」

「ああ。本来の攻撃力なら『白式』の方が上だが、アイツはそれを
使いこなす技量が足りていない」

「……厳しいですね」

「優しくしても怠けるだけだからな。アイツは」

と言う千冬だが、表情は満更でもない雰囲気が出ていた。

「しかし。紅月と枢木はわかるが、ランペルージまでいるとは思わ
なかったな」

と言う言葉で、ルルーシュに視線が集まる。

「ルームメイトですからね。誰かさんが意図的に送ってきた人と」

「「え?!」」

その言葉にスザクとカレンは反応して、千冬の方を向く。

「一体何の事か、わからないな」

千冬はあえてはぐらかす。スザクたちはそれが『凶星である』と思
った。

「今は試合を見る。アイツも黙ってやられはしないだろう。どうす
るか見物だぞ」

そして千冬はライブ映像を見る。

そこには、なおも激しい攻撃を繰り出す鈴と、それを何とか捌いてチャンスを待つ一夏が、白熱した戦闘をしていた。

[illegible]

「よくかわすじゃない。衝撃砲《龍砲》は砲身も砲弾も目には見えないのが特長なのに」

たしかにかなりきつい。砲弾が見えないのはまだしも、砲身が見えないのがかなりキツイ。

しかも特に発射の制限はないらしく、真上や真後ろからも撃ってくる。

（ハイパーセンサーに大気の歪み値を探らせているが、これは遅すぎる。撃たれてから動いたようなものだ）

—————どうにかして、先手を取らなければ絶対に負ける。

けれど俺だってこの数週間、ただポケーツとしてたわけじゃない。

『白式』の武装が《雪片》————つまり近接武装しかないとかわかってから、俺の訓練は近接戦闘と急加速急停止など、基礎運動技能を極めてきた。

あと箒との剣道で『刀』の間合いと特性を再確認した。

そしてスザクとカレンが、徹底的な近接訓練に付き合ってくれた。

そして俺には、相手のバリアを問答無用で破る最強の刀がある。

（あとは・・・気持ちで負けないって程度かな）

よくよく考えれば実力差は歴然している。

しかも鈴はセシリアとは逆に戦闘になると冷静になるタイプだ。

こういう相手は基本強い。

圧倒的に違う実力差を埋めるためには————つまり、そんな相手に負けない事と言ったら『意思』^{かぐこ}ぐらいしかないからな。そんな『意思』^{かぐこ}が俺を勝利へ導くと信じて、俺は突き進むだけだ。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

真剣に見つめる。俺の気概に押されたのか、鈴は少し動揺した。

「な、なによ・・・そんな事当たり前じゃない・・・とっ、とにかく、格の違いを見せてあげるわよ！」

鈴はそのバトンのような両刃青竜刀を1回転させて構え直す。

俺は衝撃砲が来る前に加速体制に入った。

この一週間で身につけた技能『イグニッション・ブースト瞬時加速』は出し所さえ間違えなければ、代表候補生クラスと渡り合えるほどだ。そのスピードはスザクたちも驚かせた。

「うおおおおおっ！！」

この奇襲は一回しか使えない。だから《雪片式型》のバリアー無効化を同時に放つ。これで半分以上削られなければ俺の負けだ。

ズドオオオオオオオンッ！！

「「?!」」

刃が届きそうだったとき、突然大きな衝撃がアリーナを襲った。鈴の衝撃砲——ではない。威力も範囲も桁が違う。

視線を変えると、砲撃が着弾したステージの中央に、もくもくと爆煙が上がる。

どうやらさっきのは『それ』が、アリーナの遮断シールドを貫通した衝撃波らしい。

「なんなんだ？ 一体何が・・・」

状況に混乱するとき、鈴から通信が入った。

『一夏！ 試合は中止よ！！ すぐにピットに戻って！！』

何をいきなり言い出すのか。そう思った瞬間、ISのハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた。

—————ステージ中央に熱源。所属不明のISと確認。ロックされています。

「なっ！！」

アリーナのシールドは、ISと同じ物で出来ている。

つまりそれを貫通できるだけの攻撃力を持った機体が乱入、こちらをロックしている。

つまり『イツツ・ア・ピンチ』というやつだな。

『一夏、早く!』

「おまえはどうすんだよ!!」

俺は初めての相手の回線聞き方がわからないので、普通にオープンチャンネルで聞いた。

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ!!」

「逃げるって・・・そんなの女を置いてできるか!!」

「馬鹿!! あんたのほうが弱いんだからしょうがないでしょ!!」

思いつきりストレートに言われた。これぞまさしく伝家の宝刀だな・・・ってボケてる場合か。

「別に、あたしだって最後までやるつもりは無いわよ。こんな非常事態なら先生達がすぐに――」

「あぶねえ!!」

間一髪、鈴の体を抱きかかえてさう。その次の瞬間、その場所に赤黒いレーザーが通り過ぎた。

「ビーム兵器かよ・・・。しかも何だこの異常な熱量は・・・」

ハイパーセンサーの計算で出される熱量に、俺は呆然としてしまった。

セシリアのライフルの約25倍、スザクのヴァリスのバーストモードの約12倍はあるぞ。

あんなの食らったら、いくらISでも一撃で落とされるだろう。そして操縦者の生命にも関わってくる。

「ちょ、ちよつと馬鹿！ は、離しなさいよ！」

「ちょ、暴れんな。——っておい！ 殴るな！」

「う、うるさいうるさいうるさいっ！ だ、大体、どこを触って——」

「ッ！！ 来るぞ！」

うるさい鈴に構っていたら、『奴』からまたあの赤黒いレーザーが轟音と共に放たれた。

それをどうにかかわし、その射手たるISがコチラに浮かび上がった。

「な、なんだ・・・あれ・・・」

姿が異常——いや異形だった。

奴はスザクたちと似た感じの『全身装甲』だったが、その大きさが異常にデカイ。

基本的に赤紫の装甲、そして腕や足は通常より短い、その分横幅が広くとても巨体に見える。

そして、俺たちに撃ったと思われる四連砲門は左右に分かれて、肩に納まった

「お前、何者だよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

当然といえば当然か。謎の乱入者は俺の言葉に答えない。

『織斑君たち！！ 今すぐアリーナから脱出してください！！ 今すぐ先生達がI Sで制圧しますから！』

割り込んできたのは山田先生だった。

「—————いや、先生達が来るまで俺たちで食い止めます」

あのI Sの砲撃はアリーナのバリアーを、まるで紙を破るかのよう
に貫く。つまり、誰かが食い止めないと観客に被害が出る。

「いいよな、鈴」

「だ、誰に言ってるのよ。そ、それより離しなさいってば！ 動けないじゃない！」

「ああ、悪い」

俺が手を離すと鈴はすぐに離れる。そこまで引かなくてもいいじゃないか。

『お、織斑くん?! だ、ダメですよ！ 生徒さんにもしもの事が

―――』

そこまでしか聞けなかった。

敵ISが空に浮かび、こちらに突進を仕掛けてくる。しかしかわした。

「向こうはヤル気らしい」

「そうね」

俺と鈴は、それぞれの武器を構える。

「一夏、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。武器、それしかないんでしょ」

「その通りだ。じゃあ、それで行くしかないな」

お互いの武器を当てる。これが合図、俺と鈴は同時に飛び出した。

X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X

「もしもし！？ 織斑君聞いてます？！ 凰さんも！」

スザクたちが試合を見てた場所に、大急ぎで走ってきた真耶は焦っていた。

「本人達がやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！ 何をのんきなことを！」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が無いからイライラするんだ」

「……………あの、先生。それ塩ですけど」

「……………」

ぴたりとコーヒーに運んだスプーンを止めて、白い粒子を容器に戻す。

「なぜ塩があるんだ」

「さ、さあ……？ でもあの大きく『塩』って書いてありますけど……」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あっ！ やっぱり弟さんの事が心配だか――――」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「へ？ あ、あの、それ塩が入ったものじゃ――――」

「どうぞ」

ずいっと勧められたコーヒー（塩入）、真耶はそれを受け取る。

「い、いただきます・・・」

「熱いので一気に飲むといい」

ザ・デビル。それが織斑千冬。

「お前達、これは決して動揺してるとかではないからな」

一応、千冬は三人に言うておく。しかし三人――――正確にはスザクとカレンが驚いていた。

「ま、まさか・・・『モルドレッド』！？」

「う、嘘っ？！ なんでアレがこんな場所に！？」

「わからないけど一夏達が危険だ！ 今すぐ援護に行かないと！」

そして飛び出す二人に、ルルーシュが待ったをかける。

「ちょっと待て！ お前たちはアレが何か知ってるのか？」

「……アレは一夏たちじゃ仕留められない。それぐらいは知ってるよ」

「そうね。それぐらいは知ってるわ」

その言葉にルルーシュは瞳を吊り上げる。

「助けに行きたいのはわかるが、これをみる」

千冬はあえて何も言わず、ブック型の情報端末を出して第二アリーナのステータス情報を見せる。

「遮断シールドレベル4……しかも全ての扉がロックされている。おそらくあのISの仕業だ」

ルルーシュが冷静に解説。千冬はそれに頷く。

「そう言う事だ。つまり救助も援護もいけない」

あえて冷静に言う千冬。それは『焦っても仕方ない』という無言の威圧だった。

すぐに飛び出そうとする二人への。

しかしここにいる二人に、その程度で引き下がるほど頭は良くない。

「そんな事はどうでもいい。要は行くか行かないかだ」

そのスザクの口調は、『ナイトオブセブン』のときの威圧感そのものだった。

その威圧は、あの千冬をも驚かせるほどだった。

「生憎頭が悪いからね。行く理由なんて”親友がピンチ”だけで十分だろう？」

あえて自嘲気味にスザクは言う。それにカレンも頷く。

「アレは多分、私たちに関係があると思うし」

「おい、それはどういう意味だ」

千冬が糾弾するがスザクたちが答えない。その代わり部屋を飛び出した。

「お、おい?!」

「よせ、ランペルージ」

すぐに二人を追おうとしたルーシュを、千冬が引きとめる。

「山田先生。他の先生方の補助にいてください」

「え、どうし—————は、はい！ わ、わかりました！」

千冬の脅すような視線に、真耶は怯えながら返事をして部屋を飛び

出した。

「さてと。ランペルージ、お前ならどうする？」

「……………。私がどうしろと」

「頭のいいお前ならわかるだろう」

あえて千冬は言わない。それはルルーシュも重々承知だ。

「…………私も行けと。そう仰りたいのですか…………織斑先生」

「私はそんな事言っていないぞ」

『行きたいのなら止めはしないが』と付け加える千冬。それにルルーシュは言い返す。

「嘘が下手ですね。私が行こうとすれば、貴方は私を殺すでしょう？」

「よくわかったな。—————変な気を起こすなよ？」

千冬は釘を刺す。その言葉が何を意味するか、今はルルーシュにしか分からない。

「…………わかってるつもりです。そういう約束ですから…………」

ルルーシュは無表情に返したつもりだったが、千冬にはそれが”何も言い返せない悔しさ”に映った。

「どうするって・・・何かと尋問されるんじゃない？」

「だよね・・・どう答えようか。詳しい事情を話すわけにもいいかないし」

「・・・スザク、今はそんな事どうでもいいでしょ」

「————だね。後の事より、今の事のほうが重要だ」

「わかってるならいいわ」

「それでカレンはどう思う？ アレにアーニヤが乗ってると思うかい？」

「多分無いでしょうね。もし彼女だったら、こんな殺戮紛いな事しないわ」

「僕もそう思う。だからアレは違う人か、自立型のどちらか」

「でも、ISって無人機は無理なんでしょう？」

「今はわからない。とにかく、行ってみないとね」

そして二人とも、アリーナの閉鎖された扉の前に着く。
周りにはシールドバリアーが展開されている。

「ISって使っていいよね」

「どうせ緊急事態でしょうし、これぐらいなら大目に見てくれるわ」

「本当？」

「そんな事言ってられないでしょ！」

なんて痴話喧嘩をしながら、二人ともISを纏う。

「はっ！」

素早くスザクがMVSを扉に振り下ろす。

ガギンッ！

「え?! うわっ！」

しかしスザクのMVSは、バリアーに弾かれてスザクごと吹き飛ばした。

「か、硬い！」

「嘘ッ！ それじゃあどうするのよ！」

「そんな事言ったって・・・」

スザクのMVSで斬れないと言う事は、カレンの武装でも破壊することは容易じゃない。

「どうすれば・・・！」

俺は常人ではかわせないような速度と角度で攻撃している。

だが、アチラのISの移動性能がハンパない。大柄な外見の割に小回りがスゴすぎる。

さらに、スザクの盾みたいなのが全身に張られて、凄まじい防御力がある。

しかも、どれだけ鈴が注意を引きつけても、俺の突撃は優先して対処する。

（一体なんだよ・・・コイツは）

だが攻撃はしてこない。

全身を覆うバリアと、その俊敏さで攻撃をかわすだけで、先ほどの四連砲撃はしてこない。

（何かを待っているのか？ それとも出来ない理由・・・エネルギー切れか？）

一瞬希望が見えたが、罠の可能性がある。憶測で下手な動きをすれば、俺が一発KOだ。

「ああもうっ！ コイツ一体なんなのよ！」

鈴が焦れた様に《衝撃砲》を放つ————が、敵の緑色のバリアにぶつかるだけで、本体には届かない。

これも、先ほどから何度も繰り返されてることだ。

俺は鈴の支援もあって、その場から離れる。

闘ってわかったことは、これといってない。ただジリ貧という事だけだ。

「・・・鈴。あとエネルギーはどれくらいある？」

「三六〇って所ね。アンタは？」

「一二〇。『零落白夜』は・・・後二回くらいだろ」

「まだマシね。しかしアイツのバリアは硬すぎるわ。《衝撃砲》でビクともしないなんて・・・」

「じゃあ—————逃げるか？」

「なっ!?! 馬鹿にしないでくれる!?! アタシはこれでも代表候補生なのよ。それが敵前逃亡なんて、笑い話にもならないわ」

代表候補生の審査基準はきっとプライドだろう。俺は勝手に納得していた。

「ッ!! 来るぞ!」

ハイパーセンサーが熱源を感知。敵の巨体が”ズズズ・・・”と効果音を出してこちらを向く。

あの機体がやっと戦闘態勢に入った。

「もっと厄介になるわね」

「ああ。だが、お前の背中ぐらいは守ってみせる」

「え? あ、うん。ありが—————」

何故か顔を赤くした鈴の近くを、奴から放たれた赤黒いレーザーが掠める。

油断してた訳ではないが、やはり攻撃も高性能だ。

「鈴っ！ 援護頼むぞ！」

「誰に言ってるのよ！」

何て軽口を叩きながら、俺は敵に突撃を仕掛ける。

鈴は《衝撃砲》を放って、相手の足止めと俺の道を作る。

俺はその道を突き進み、『零落白夜』を放ちながら斬りかかる。

「うおおおおおおおっ！！！」

しかし相手も黙っているわけではない。

敵ISはバリアを全面に展開して《衝撃砲》を防御し、俺の攻撃に備える。

しかし俺の刀はバリアを切り裂く。俺の攻撃は防御できないはずだ――――。

だが敵もそれは重々承知らしく、先ほどの全身から赤黒いレーザーを放ってくる。

しかし、BT兵器は俺の刀に効かない――――ッ！？

「ぐはっ！」

「一夏っ！？」

見誤った。奴から放たれる赤黒い光はレーザーじゃない。小型ミサイルだった。

実弾兵器なので俺の『零落白夜』で無効化は出来ない。

本来なら無傷で済むはずだったが、無効化できなかったので、大体のミサイルに当たってしまった。

シールドエネルギーを削られて、俺はその場から吹き飛ばされた。さらに敵ISが、バリアを張りながら俺に突進する。

「ぐはっ！」

俺は先ほどより激しい衝撃と共に、さらに数十メートル吹っ飛ばされる。

「一夏っ！」

鈴が援護射撃をしながらこちらに来るが、奴はミサイルで弾幕を張って鈴を近づけない。

そして奴は・・・わざとかどうか知らないが、ゆっくりと俺に近づいてくる。

「一夏！ 何してんのよ！早く動きなさい！」

悪い鈴。

さっきの突進攻撃が予想以上のダメージだ。回復まで時間が掛かる。いくらISに守られてるからと言って、それを操縦する人間が動けなければ、意味は無い。

まあ要するに、今は動けないって事だ。

なんて考え事をしてたら、ついに奴は俺の目の前まで来やがった。
そして俺の目の前で、あの四連砲門を構える。

「ぐっ……くそっ……動かねえ……！」

何とか手足を動かすが、激痛が走ってうまく動かせない。
そうこうしている間に、奴はエネルギーをチャージしている。発射
まで時間の問題だろう。

「一夏あ！」

鈴が必死にコチラを助けようと攻撃してくるが、全方位に展開した
バリアがそれを阻む。

（……こんな場所で、終われるかよ……！）

俺にはまだ戦う意思はある。これだけは潰える訳にはいかない。

（だがどうする？……体は動かないしエネルギーは僅か。そして
目の前には砲撃準備中の敵）

これが本当の絶体絶命だ。まさかこの言葉を、リアルで言える日が
来るとは思わなかった。

「一夏あ！ このっ！邪魔なのよ……！」

鈴の怒号がアリーナによく響く。まあ声出してる奴が、アイツしか
いないから当然か。

——警告！ 敵機エネルギー充填完了。発射体勢に移行。
トリガー確認。

ハイパーセンサーから、頼んでもないお知らせが来る。

（死へのカウントダウン・・・ってか？）

洒落にならないが、どうやらそれが一番いい喻えらしい。

そして奴から、俺をノックアウトする赤黒い四連レーザーを放たれる。――。

ドゥウウウンッ！

「一夏あ！！」

レーザーが放たれた音と、鈴の悲鳴にも似た声がアリーナに響く。
撃たれた時って・・・痛みを感じないんだな。それとも、俺はもう
死にしまったのか？

「一夏！一夏！一夏あ！」

そんなに呼ばなくても聞こえるっての。・・・ん？ 聞こえる？

と言う事は、俺は死んでいない。じゃあ撃たれてもいないって事か？
だがいくらなんでも、奴がこの近距離で外すのはありえない。

じゃあ一体・・・どういう事だ？

「そこを……どけえええええっ!!」

その時、はるか天空から男の怒号が聞こえた。俺はそちらに視線を動かす。

そこには俺に放たれるはずだったレーザーをかわす、赤き剣を持った白い騎士がいた。

「……………」

敵はいち早くその乱入者を察知して、全身からミサイルを出す。

だが白き騎士は、アンカーなどを出してそれを撃ち落とす。

そして騎士は、ミサイルの爆発で舞い散る赤い粒子と共に、華麗な動きで天空を舞う。

その姿はまるで——————純白の閃光のように。

クラス対抗戦とイレギュラー（後書き）

次話はオリジナルバトルです。感想待ってます。

白き騎士の本領（前書き）

また長い・・・書いてるうちに長くなってしまふんです。

飽きずに読んでくれると、ありがたいです。

白き騎士の本領

これは数分前の出来事。

スザクとカレンはまだ、アリーナの扉の前で立ち往生をしていた。

「何かいい案はある？」

「……………破るだけならまだしも、『モルドレッド』と戦う余力を残しておかないと」

「じゃあ片方がバリアを破って、もう片方がバリアを突破するって言うのは？」

スザクの提案にカレンは少し考えて、その意見に同意した。

「……………うん。それが一番手っ取り早いわね」

「だけどこれは……………どちらか一人ってことになる」

「……………そうなるわね。じゃあスザクが行きなさい」

「え？」

「貴方は飛べる。それに『モルドレット』は中遠距離殲滅型。私とは相性が悪いわ」

確かに紅蓮式式の一番の強みである輻射波動は、一度接近しなければ効果を発揮できない。しかし紅蓮式式は飛べないので、中を浮く

モルドレッドに接近するのは至難の技。ならば同じ土俵に立てるラ
ンスロットの方が紅蓮よりは相性はいい。

スザクもそれに気付いたので、何も言わずに納得した。

「・・・・・・・・わかった。方法は？」

「そうねえ・・・・・・・・紅蓮の輻射波動で何とかバリアを破壊、そ
して貴方が突っ込むってどう？」

「まあそうなるよね。・・・・・・・・ちゃんと破壊してくれよ？」

「フンッ。誰に物言ってるのよ。貴方こそ、ちゃんと一夏たちを助
けなさい」

「ハハッ、了解したよ」

互いの手を打ちつけ、金属音を辺りに響かせる。

その後カレンは扉から距離を取り、主装である右腕を突き出す。ス
ザクはその後ろでMVSと《フロートユニット》を呼び出し、ラン
スロット・エアキャバルリーとなる。

「準備は？」

「いつでもいいよ」

「それじゃあ・・・・・・・・いっけえええええっ!!」

カレンは、左腕についてるグレネードを放ちながらバリアーに迫る。

「ハッ！」

そして右手をバリアーに打ち付けて輻射波動を撃つ。手から赤黒い光が発せられ、アリーナのバリアーと衝突する。

「くっ！」

しかしバリアーはビクともしない。一撃でも強力な輻射波動を受けて平然としている。

「ダメなのか・・・！」

後ろでスザクの声が聞こえたのか、カレンは闘志を燃やす。

「紅蓮を・・・舐めるなあああああっ！！」

輻射波動の輝きがさらに増し、それに耐えられなかったのか、徐々にバリアーにヒビが入る。

「これでっ！」

そのヒビに向かって、カレンは左手のナイフを切りつける。

バリイイイイン！！

音を立ててシールドバリアーが割れる。しかしすぐに修復しようと開かれた穴が塞がっていく。

「しつこいっ！」

しかしカレンが輻射波動を放ち、シールドバリアーの修復を抑える。

「今よっ！！！」

「わかった！ ランスロット・エアキャバルリー、発進！」

スザクがカレンの呼びかけに反応して、タイヤが豪快な音を立てて回る。

そして開いた道をスザクは突っ込み、それと同時にカレンがスザクの道をどく。しかしカレンがどけば、バリアーはどんどん修復されていく。

「その程度っ！」

スザクは両腕にブレイズルミナスを発生させて、体を守るような形で突撃する。そしてカレンが開けたバリアーの穴に手を突っ込む。修復されたバリアーとブレイズルミナスが衝突して、光と火花を散らせる。

「はあああああっ！」

スザクは持ち前の馬鹿力で、修復されたバリアーを強引に開いて突破した。

「邪魔だ！」

そして目の前の扉は、片手にあるMVSで引き裂いた後に蹴破る。

「一夏！」

突然の乱入者が奴と戦ってる隙に、鈴が俺のほうに来る。

「・・・おっす、鈴」

”おっす”じゃないわよ！ この馬鹿！アホ！弱いくせに！」

と怒号を言いながら俺に殴ってくる。い、痛いって。俺一応怪我してんだけど。

「馬鹿・・・馬鹿馬鹿・・・ッ！ この大馬鹿朴念仁・・・！」

しかし殴る力は徐々に弱くなり、目に涙を浮かべながら言葉を紡ぐ。

「わ、悪かった。悪かったから殴るな。まだ戦いは終わってない」

俺のその言葉で、鈴はその表情を引き締める。もう少しで泣きそうな表情だが。

「あ、アレって何？」

「スザクの機体、『ランスロット』だ」

「スザクって確か、あんたと一緒にいた男？」

「ああ。俺より何倍も強い男だ。だけど・・・なんでアイツが」

突然の乱入で俺等の頭は付いていけない。

手っ取り早いのはスザクに通信するだが、奴との戦闘では迷惑になる。

『織斑。聞こえるか』

「えっ!？」

いきなり聞き覚えのない声が通信で入ってきた。堂々とした感じの声だ。千冬姉や箒みたいな。

『現状がよくわからんであろうお前に、今から一通りの解説通信を入れる』

「あ・・・えっと・・・誰？」

『・・・クラスメイトに自己紹介は二度目だな。私はルルーシュ・ランペルージ。織斑先生に頼まれたので、私がお前に通信を入れている』

「あっ!」

そういえば。スザクとカレンがよく一緒にいる女生徒だ。何で忘れるかな、俺。

『スザクが敵の気を引いてるが、いつまで持つかわからない。つまり手短に終わらせるため、質問は受け付けず、一回しか言わないか

「らく聞いておけ」

性格は千冬姉に似てるな。と俺はどうでもいい事を思う。

『スザクとカレンがお前達を援護するため、いきなり飛び出した後、力技でアリーナのバリアを貫いて、今正体不明機と闘っている。解説はこれぐらいだ』

「……………は？」

え？ いやいくらなんでもそれは、解説となっているのか？

「え？ それだけ？」

『質問は受け付けないと言ったはずだ』

その時、上空から爆発音が聞こえてくる。

「そうだ！ スザクの援護に行かねえと！ アイツだけじゃ危ない！」

ダメージも回復した俺は、そう思って立ち上がるが、ルルーシュさんから通信が入る。

『お前達はそこで大人しくしてろ。スザクの邪魔になる』

—————。

何とも無情な一言。しかし無情な言葉と言うのは、その通りだからこそ、無情なのだ。

『それでは。私も暇ではないので、通信を切るぞ』

ブツンという機械音と共に、通信は切れた。

「・・・・・・・・くそっ」

やり切れず悪態をつく。仲間がやられてるのに助けられねえ……。

「アンタは休んでなさい。シールドエネルギーだってピンチでしょ」

「そりゃそうだが・・・理屈なんていいだろ。俺が助けたいから助
けたいんだ」

「馬鹿。アンタ、自分の状況わかってる？」

鈴の言うとおり。今の俺にスザクを助けることは出来ないだろう。

しかしだからと言って、黙って見てることは俺には出来ない。

「お前は、黙って見てられんのかよ」

「悪いけど、アタシは負けず嫌いな。チャンスが来たら敵を叩き
のめすわ」

と言って空に視線を向ける。

そこでは、スザクと敵ISが壮絶な空中戦を繰り広げていた。
しかし、敵ISの火力が強すぎるのかスザクが少し劣勢だ。

される。

「やはり、あの防御を突破しないと・・・」

アチラから放たれるミサイルをかわしながら、どうにかこの状況を打破できるか考える。

（攻撃力防御力は共に僕より上。機動力は僅差だがコチラが勝っている）

それは、元の世界でも同じことだった。

（しかしヴァリスは効かず、接近もさせてくれない）

これでは機動力が上でも意味がない。

しかもこうしてる間に、《フロートユニット》の都合でエネルギーが減っていく。

エネルギー切れになって、空を飛べなくなるのも時間の問題だろう。

（ならば、一か八か接近しなければ！）

MVSによる連撃なら『モルドレッド』のブレイズルミナスを突破できるはずだ。

どの道このままじゃ消耗戦。コチラから仕掛けなければ勝機はない。

「いくぞっ！」

ヴァリスを腰にしまい、もう一本のMVSを引き抜く。そして両手

のブレイズルミナスを張り、体を守るようにして突っ込む。

しかし当然ながら『モルドレッド』も黙っていない。大量のミサイルが放たれる。

「うおおおおおおおっ!!」

しかしかわすのは最低限。多少のダメージはこの際仕方ない。

ミサイルの弾幕を強引に突っ込み、至近距離で決死の連撃を叩き込めれば――――ッ!

「これでっ!!」

『モルドレッド』は接近戦の武装がない。故にブレイズルミナスが張られている。

しかしMVSはそれも貫ける。そう思い剣を振り下ろす。

バリイイインッ!!

案の定、『モルドレッド』のブレイズルミナスは破られ、そのまま丸腰になった『モルドレッド』を斬りつける。

「はあああああああっ!!」

相手に反撃させず、左右のMVSで何度も斬りつける。

チャンスはこれしかない。ここで落とせなければおそらく負ける。

『モルドレッド』の装甲は徐々に切り裂かれて、シールドエネルギー

ーを削っていけてると思う。

(このまま押し切れば――――ッ?!)

「なにっ?!」

攻撃の途中で、『モルドレッド』は自分への誘爆を承知でミサイルを発射した。

当然目の前にいる僕はその直撃を食うが、『モルドレッド』も至近距離の爆発に巻き込まれる。

僕は急な攻撃で対処できず、そのまま地上へ落下して行く。

「だけどっ!」

その場で機体を制御し、何とか地面にぶつからずに済んだ。

――――警告! 敵ISから高熱源反応。主砲発射体勢と思われます。

「ッ!」

ハイパーセンサーから報告が来る。

『モルドレッド』は肩に収まっている、四連ハドロン砲――《シユタルクハドロン》を構えていた。

アレの威力は確かに強大。だが発射を察知できれば、かわすのは容易い。

そう思ってたかわそうとしたとき、あることに気付いた。

(僕を狙っていない・・・?)

その場を移動しても敵の砲身はコチラに向かないし、ハイパーセンサーの報告では僕をロックしていない。

そして僕は敵の砲身が向いてる場所を向く。

「ッ!!--!--!--!--しまった!!--」

敵が狙ってるのは、その場で固まっている一夏たちだった。

「お、おい?! あの手機体俺等を狙ってるだろ!!--」

「さ、さっさと動くわよ!!--」

「わ、わか!--!--!--痛っ!!--」

「一夏!!--」

それを察知した二人が回避行動をとる前に、《シユタルクハドロンの放たれる。

一夏はまだダメージがあるのか、うまく回避行動を取れていない。そして鈴さんも、一夏に気がいって動けていない。

「マズイ! あのままでは当たる!--!--!--ッ!!--」

「させるかっ!!--」

僕は一夏たちと《シタルクハドロン》の間に割って入る。

そして両手のブレイズルミナスを張って、《シタルクハドロン》と衝突する。

ドゥウウウウウウンッ！！

「くっ！！」

《シタルクハドロン》は容赦なく衝突した。その威力はやはり絶大。《フロートユニット》の推進力とブレイズルミナスで耐えるが、やはり押される。

そして徐々にビシ・・・ビシ・・・とブレイズルミナスにヒビが入る。

「?!」

「スザク！」

後ろで一夏に呼ばれるが、僕には反応する余裕がない。

そして――――。

バキィィィィン！！

「ッ！！　ぐはっ！！」

ブレイズルミナスが砕けて、そのまま《シユタルクハドロン》が貫く。両腕の装甲が吹き飛ばされ、胸部の装甲に攻撃が直撃した。

幸い威力は削れたがアリーナの壁に勢いよく激突、シールドエネルギーが大幅に削られ、そのまま力なく地面に落下する。

「スザク！」

一夏たちがコチラに来ようとするが、『モルドレッド』の弾幕がそれをさせない。そしてアチラはもう一度、《シユタルクハドロン》発射のチャージを開始する。

（こ、これは・・・マズイ・・・）

両足と《フロートユニット》は無事。しかし二本のMVSと、両腕のブレイズルミナス及びスラッシュハーケンが壊れた。

あと胸部に食らった一撃が予想以上のダメージで、『ランスロット』の各機能がイカれたらしく、ハイパーセンサーが変な指示を出してくる。

「う、動かない・・・・・・ど、どうして?！」

とりあえずこの場を動かこうとしたら、『ランスロット』が動かない。

「い、このっ！」

必死に手足を動かすが、『ランスロット』は動いてくれない。

――――警告！ 敵機エネルギー充填完了。発射体勢に移行。
トリガー確認。

そうこうしている内に、『モルドレッド』のチャージは終わったら
しい。

僕はなんとか両足を動かして、足についている《ブレイズルミナス》
《》を張って防御をとる。

一夏たちに攻撃しながら、僕に狙いを定める『モルドレッド』。

（この状態で《シュタルクハドロン》……これは終わった
な……）

無意識に防御の体勢をとってしまったが、心の中で僕は諦めてしま
った。

（まあ……それでもいいかな……）

どうせ僕は元々死んだ身。そしてここではイレギュラーな存在。
死んだとしても、それが正しいんだ。僕はこの世界に元々いてはな
らないはずだから。
神様の頼み事は、カレンがやってくれるだろう。僕は……ここま
でだ。

『ランスロット』が僕の諦めを感じ取ったのか、最後の頼みである
ブレイズルミナスが解除される。

ドゥウウウウンッ！！

凄まじい轟音。おそらく《シユタルクハドロン》が僕に放たれた。
盾の無い僕になす術はない。

そう思って目を閉じる。僕はもう何回死んでるのかな。

・・・・・・・・・・・・・・・・ろ！

・・・・・・・・・・声が聞こえる。男の声だ。妙に聞き覚えがある。

・・・・・・・・・・き・・・・・・・・！

なんて言ってるんだ・・・・？
所々が聞こえない。

生・・・・・・・・・・！

そして記憶の中にある一つの景色が浮かぶ。

（そうだ。これは確か神根島での戦闘時に――）

生・・・・・・・・・・き・・・・・・！

・・・・・・・・・・ああ・・・・・・・・・・思い出した。これは君の声で・・・・・・・・君から受けた呪い。

生・・・・・・・・・・ろ！

どうして・・・・・・・・忘れていたのだろう。僕にはまだ、この力があるじゃないか。

X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X

場所は変わりモニター室。

そこにはルルーシュと千冬がいて、スザクたちの戦いを見ていた。

「スザク！？ くそっ！！」

そしてスザクが撃たれたのを見て、ルルーシュが急いで部屋を飛び出そうとする。

「待て。変な気は起すなと言ったはずだ」

それを千冬が止める。しかしルルーシュは普段とは全く違う、焦った表情で言葉を紡ぐ。

「しかし今、知り合いが撃たれたんですよ?! 平静を保ってる方が無理です！」

「黙れ鬱陶しい。貴様はそれでも手を出すな」

「なぜですか!! スザクがやられたんですよ!？」

「お前は手を出すな。あの時の約束、忘れたとは言わせん」

「……………なら、あの力を使いますよ。貴方に対して」

その言葉に反応して、千冬からとんでもない殺気が放たれる。放たれた殺気は見事ルルーシュへ向い、ルルーシュの感情や表情は一瞬消える。

「……………成長したな。私の殺気の中で立っていられるとは」

千冬はルルーシュを見ず、しかしルルーシュに対して喋る。まるで、懐かしい想い出を語るように。

「……………立ってるだけです。体が硬直したように動かないですが」

ルルーシュは平静に返したつもりだったが、その声は若干震えている。

さらに額には冷や汗が垂れている。その反応から千冬に怯えているのは明白。

「ならばずっとそうしてろ」

「……………黙って見てろというのですか」

「そうだ」

「・・・貴方は何故そこまでして！ 貴方なら、あの機体を破壊する事ぐらい容易でしょう！？」

ルルーシュは怯えながらも激昂する。しかし千冬の視線はアリーナのモニター。

そこには《シタルクハドロン》のせいで上がった爆炎が、アリーナを埋め尽くしていた。

一夏と鈴は判別できるが、スザクと敵機は視認できない。

しかも敵機が、アリーナの防衛システムを操作したときに、同時にセンサー類も操作したらしく、千冬たちはスザクと敵の安否を確認できない。

「私が出るまでもない。と言えはわかるか？」

「出るまでもない・・・？」

ルルーシュは首を傾げる。何時の間にか殺気を抑えていた千冬は、ため息をつく。

「はぁ・・・。誰がいつ枢木がやられたと言った？」

「ッ！！ ま、まさか！？」

ルルーシュも急いでモニターに視線を向ける。

すると爆炎が収まっていき、中心に敵機がいた。しかしスザクのランスロットは見当たらない。

「いない・・・？」

「どこを見ている。上だ」

アナウンスで響かせたその声で、おそらくここにいる全員が目線を上げる。

そこには――――白き騎士が、神々しき光を放ちながら、天空で輝いていた。

そう。その姿は、暗き夜の道を照らす純白の満月のように――――。
――――。

[illegible]

———声紋パスワード及び”ギアスの呪縛”発動を確認。
リストシフト
次移行が終わりました。確認ボタンを押してください。

フ

（え．．．。な、なに？何が起こってるの？）

無意識のうちに上空へ瞬時加速して、攻撃をかわした僕のところへ、『ランスロット』からこんなデータが来て、それと同時に目の前にウィンドウ、その中心に『確認』というボタン。

とりあえずボタンを押す。すると膨大なデータが流れ込む。

これは――――今までの戦闘のデータ。

それが蓄積されていき臨界点に達した時、この力が発動したことがトリガーとなって・・・。

（『ランスロット』は……変わる！）

今この瞬間——『ランスロット』は姿を変えようとしている。

そして真の姿として————生まれ変わる！

光の粒子が破壊と再生を繰り返し、ランスロットは進化を遂げる。姿自体はあまり変わらないが、今まで受けていたダメージは全てリセットされ、《フロートユニット》などに追加装備がつく。

「まさか……。今までのが『初期設定』だったって事……。？」

しかし考えれば納得はいく。

『初期設定』にしてはハイスpekだったから、何時の間にか『一次形態』と勘違いしていた。

———”一次移行”終了。Z-01/D『Lancelot・Conquista』セット完了。

「ランスロット・コンクエスター……。それが君の名前なんだね」
ハイパーセンサーから名乗られた名は、相棒であるランスロットの新しい姿の名。

そして浮かび上がる不明だったシステム。

———ワンオフアビリティーコードギアス《旋律誓約》発動、及び機能良好。

「《コードギアス》・・・それが《?????》の正体・・・？」

よくわからないけど、今は気にしてられない！

この姿になったのならやることは唯一つ。敵を――――倒す！

「ランスロット・コンクエスター・・・発進！！」

スラスターを噴かせて敵機との距離を作る。そして腰のヴァリスを取る。

『ランスロット・コンクエスター』となって装着された新武装――
――《ハドロンブラスター》

フロートユニットの上から装着される、”コンクエスターユニット”に折りたたまれていた砲身が、右肩上に展開した砲身のソケットに、ヴァリスを合体させることで射撃体勢となる。

「これで！」

そしてヴァリスの引き金を引く。すると輻射波動に似た色の赤黒いレーザーが放たれる。

これは極一点集中型のハドロン砲。

いくら『モルドレッド』のブレイズルミナスでも、これを真正面から防ぐことは出来ない。

「ッ！！」

おそらく驚いた『モルドレッド』はブレイズルミナスを張るが、極一点集中型のハドロン砲を防ぐことは出来ず、胸部から腹にかけて直撃を食らって、後ろへ吹き飛ばされる。

しかし『モルドレッド』は吹き飛ばされながらも体勢を整え、ミサイルを放ちながらコチラを狙う。

僕はもう一度を撃って、向ってくるミサイルを撃ち落す。

そして左手でMVSを引き抜き、第二波が撃たれる前に敵機に向って瞬時加速。

『モルドレッド』は今までのダメージで動きが鈍い。その隙を突くように僕は接近する。『モルドレッド』は攻撃を諦め、ブレイズルミナスによる防御を試み、素手による格闘を繰り返す。

元の世界では、『モルドレッド』にはKMFの頭部を片手だけで粉砕するパワーがある。

つまり、一度でも捕まってしまったら終わり。

だが――――。

「今の僕には！」

ギアスの呪縛を使う僕に、素手による近接戦闘インファイトなど効く筈がない。

僕は通常より高い反射神経で、アチラの攻撃を全て紙一重でかわす。そしてかわした隙を突いて、MVSを敵機に突き刺す。

バチバチと刺した所から火花が散る。それに反応した『モルドレッド』は、大きく蹴りを放つ。

僕は邪魔にならないように、あと攻撃をかわすため上空へ上がる。

（目的は・・・達せた）

「それじゃあよろしく。お二人さん」

「任せろ（なさい）！」

僕の声に呼応するように、一夏と鈴さんの声が聞こえた。

そう。僕の今までの攻撃は、一夏たちに攻撃を準備させる為の陽動。

「今までの恨み・・・晴らさして貰うわ！！」

鈴さんが危険な笑みを浮かべて、《衝撃砲》の連打を浴びせる。

『モルドレッド』はブレイズルミナスを張るが、僕の《ハドロンプラスター》の攻撃で、ブレイズルミナス発生装置が壊れたらしく、ほとんどの攻撃を防げていない。

そして何度も《衝撃砲》の砲撃を食らう所に、一筋の白き光が走る。

「うおおおおおおおっ！！！」

一夏の叫びに呼応するように『零落白夜』の輝きを放つ刀、《雪片式式》を構える。

『モルドレッド』はダメージが多すぎるらしく、動くことが出来ずブレイズルミナスを張る。

だが一夏には、全てのバリアを無効化する最強の刀がある。

「はあっ！！」

一夏の刀はブレイズルミナスを、まるで和紙を破るように切り裂いた。

「今までの借りだっ!!」

そして一夏の刀は、『モルドレッド』の胴体を真っ二つに切り裂いた。無人機と言うのは予想通りだ。

「一夏! 離れて!!」

「え? あ、ああ、わかった!!」

一夏は、僕が《ハドロンブラスター》を構えたのを見て、急いでそこをどく。

「これで終わりだ!!」

そして真っ二つになった『モルドレッド』に、容赦なく《ハドロンブラスター》を放つ。

ポオオオオオオンッ!!

砲撃を放った衝撃と、『モルドレッド』が破壊されたことにより、凄まじい轟音と爆発が起こった。

「これで………終わった」

木っ端微塵になった『モルドレッド』を見下ろして、僕は”ギアス

の呪縛”を解除した。

「守れたんだ………今度は」

呪われたこの力が、仲間のために使えた。引っかかることは幾つかあるけど、とりあえずはよかった。

「おいスザク！」

「うわっ！ 一夏?!」

僕が下りて『ランスロット』を解除した時、同じく機体を解除した一夏が背中を叩く。

「体大丈夫かよ」

「それはお互い様だと思うよ」

「ハハッ、何はともあれ……終わったな」

「そうだね……」

などと会話をしていたら、アリーナにアナウンスが響く。

『織斑と鳳は今すぐメディカルチェックを行え。枢木はそこにいろ』

………織斑先生か。まあいいさ、僕にとってはこれらが大
事だ。

「え?……千冬姉？」

「一夏。それに鈴さんも。早く行った方がいい」

「あ、ああ……。いなか鈴」

「え、ええ……」

釈然としない二人だが、ただならぬ雰囲気を感じたらしく、すぐにアリーナを出た。

それと入れ違いで、IS学園の先生方が次々と入ってくる。

その中に、山田先生と織斑先生の姿もある。

「枢木君！ 大丈夫ですか？！」

山田先生がコチラに来る。それに続いて織斑先生もコチラに来る。

「はい。なんとか」

「ならいいですけど……もうこんな無茶しちゃダメですよ！」

「わかってます」

「枢木。お前には聞きたい事が幾つかある。私について来い」

「……はい」

……やっぱりか。仕方ない事だけど、どうやって言い訳しよう。

なんて事を思いながら、僕は織斑先生について行きながらアリーナ

「体は大丈夫そうだな」

「ええ。それで聞きたい事と言うのはなんですか？」

時間稼ぎは無駄だ。ここは早く終わらせることに専念しよう。

「待て。もう二人ぐらい来る」

「・・・？」

二人？ カレンが来るのはわかるけど、もう一人は誰だ？

「織斑先生。つれて来ました」

「・・・保健室？」

部屋の外から、聞き覚えのある二人の女生徒の声。

バシュと扉が開くと、そこには紅月カレンと――――。

「る、ルルーシュ?! な、何で君が?!」

まるで関係が無いはずのルルーシュが、カレンと一緒に来た。

「知らん。織斑先生に聞いてくれ」

「そ、そっか・・・」

そして今回の事件の、功労者の一人であるカレンに話しかけられる。

「スザク、ちゃんとやったようね」

「カレン。当たり前だよ。そして新たな力を手に入れた」

「へえ・・・」

「話はそれぐらいでいいか」

痺れを切らしたらしい織斑先生がそう言うてくる。それに僕らも気を引き締める。

「「はい」」

「それでは、お前達はアレを知っているのか？」

アレと言うのは間違いない。『モルドレッド』の事だ。どう答えればいいのかろう・・・。

「・・・・・・・・知らないと言えば、どうなりますか？」

「別に構わないが？」

「え・・・・・・・・」

「知らないというのなら、無理に聞く道理もない。ここはIS学園だからな」

そうか。ここは全世界に対して治外法権。まして僕らは日本の代表候補生。

無理な拷問は、日本政府を相手にすることになる。

「だが、覚悟はしておけ」

しかしそれは拷問という強硬手段が無理と言うだけ。脅す事など間接的なアプローチは可能だ。
アチラの言う通り、覚悟はしておいたほうがいい。

「喋る気が無いのなら、ここにいる意味はない。帰っていいぞ」

「・・・・・・・・失礼します」

長居は無用。ボロが出る前にこの部屋を出よう。

「・・・・・・・・心配させおって・・・・・・・・」

そして部屋を出るとき、誰かがそう呟いたのが聞こえた。

しかしその声は、日が傾く夕暮れ時の風によって――
――消えていった。

突然起こった謎の機体によるアリーナ襲撃は、僕たちに多くの疑念を抱かせたまま終結した。

白き騎士の本領（後書き）

ワンオフアビリティ・・・皆さんの予想通りですね。

作品名で伏線張っちゃいましたし。でも詳細はまだ謎と言う事で。

誤字脱字、感想があればください。

機体設定2（前書き）

一応、設定を補足して置きます。 ※補正しました。

機体設定2

『ランスロット・コンクエスター』…形式番号 Z-01/D L
ancelot・Conquista

スザクの今までの戦闘データと”ギアスの呪縛”が発動した事で、一次移行した『ランスロット』の『一次形態』の姿。

見た目は大して変わっていないが、中身と武装は大幅にパワーアップした。

しかしエネルギーを大量に消費する武装が増えたため、そこは難題となっている。

まず出力増加などにより、基本スペックが上昇している。

そして、追加装備してブレイズルミナスが胸部・両脚部に装備された。

そして一番の変化は《フロートユニット》についた、追加武装の《ハドロンブラスター》が装備されており、自機の砲撃力も向上した。

反面、《ハドロンブラスター》の反動を緩和するために《フロートユニット》の姿勢制御系を、今のスザクに合う様に調整したことで、空中でのポテンシャルや機動力が低下している。

しかし低下した分、ユニットのエネルギー消費は抑えられている。

《ブレイズルミナス》

両腕だけではなく、両脚部・胸部にも装備された。

それら全てを稼働させることで、錐体状に機体を覆う形態——《コア
ルミナスコーン》となり防御力が上昇した。

だがこれは、シールドエネルギーの消費量がさらに倍となってしまう
ため、使いどころを選ばなければならない。

スザク十八番の足刀蹴りに《コア^{おはこ}ルミナスコーン》による突撃など、
元の世界のような応用性に富んだ攻撃が可能となっている。

《ハドロンブラスター》

極一点集中型のハドロン砲を放つことができる武装。

これは《フロートユニット》の上から装着される”コンクエスター
ユニット”に、折り畳まれた状態で搭載されている。

発射時には折りたたまれていた砲身が右肩上に展開、砲身のソケット
に《ヴァリス》を合体させることで射撃体勢となる。

しかし《ヴァリス》より大幅にエネルギー消費が激しすぎるので多
用は禁物。

《??????》

ロックが掛かっている名称不明の武装。ロックが掛かってるので使用することは出来ない。
解除方法は不明。

―――判明能力、及びシステム一覧―――

《ギアスの呪縛》

元の世界で命じられた、ルルーシュの『生きろ』と言う《ギアス》スザクは自身の強靱な精神力で押さえ込む事で、自身の身体リミッターを自由に解除し、潜在能力を極限まで引き出す事が出来る。
今回は自らの死が近づいたため自動発動。以後この世界でも自由に使えるようになる。

だが元の世界とは違い、数分以上の使用は出来ず、使用した後は極度の疲労感が襲う。

これは若返ったスザクの体が、《ギアス》の力についていけないから。

ワンオフアビリティー 《コードギアス旋律誓約》

『一次移行』した事で名称が判明、および発動した。しかしその内容は不明。

今回は”ギアスの呪縛”が始動キーとなっていたため発動した。
しかし内容が不明なため、今後は自由に発動することは出来ない。

機体設定2（後書き）

スザクがチート化していく・・・や、やばいぞ・・・!!

誤字脱字、意見があったら下さい。

一度間を入れておこう（前書き）

今まで長かったので、休憩と言う意味も込めて一度短い話。

一度間を入れておこう

とある休みの日。謎のアーリーナ襲撃から少し経った位か。

「・・・・・・・・・・」

私、ルルーシュ・ランペルージは今、怒鳴りたいという気持ちを押しさえ込んでいる。

いきなりの導入がこれですまない。しかし理由があるんだ。

そう、理由は・・・・。

「ここはどうするんだ？ ルルーシュ」

「ルルーシュ！ ここはこうやればいいんだよね？」

「さすがはルルーシュさん。見た目通り知的でいらっしやいますからね」

「確かに。これは・・・・・勉強になるな」

「ホントね。本国でもここまでわかりやすい教えは受けなかったわ」

「ルルーシュ？ これでいいかしら」

「・・・お前ら・・・・・・・・いい加減、少しは静かにしろ！！」

この通り。

狭い自室で、織斑、スザク、オルコット、篠ノ之、鳳、カレンが、強行で勉強会を開いてしまった。

そう・・・ここに住む私に許可なく、そして勝手につき合わされている。

「そもそもだな！ ルームメイトのスザクといつも勝手に部屋に入るカレンは・・・まあわかるが、なぜお前らがここにいるんだ！」

と言いながら、織斑、オルコット、篠ノ之、鳳、を指差す。

「「誘われたから(だ) (ですわ) (だけど)」」

異口同音。そしてこんな事をする奴は、一人しかいないだろう。

突然爽やかな笑顔で『勉強会をしよう』と、部屋で読書してた私に死刑宣告をしたルームメイト。

そしてここ最近、私の大体の悩みの原因である男・・・枢木スザクだ。

「スザク・・・お前・・・！」

私が睨みつけると、スザクは顔を逸らしながら弁明した。

「え・・・あ・・・いや、僕がそこらを歩いていた時に、4人が勉強してたのが見えてさ。それで『ルルーシュは教えるのがうまいよ』

と言ったり・・・したね」

それに織斑も続く。

「それでスザクが『そうだ！一緒に勉強会をしよう』と言ったので、俺にとって願ってもない事だったから、ついて来たって訳だ」

なるほど。そして織斑に好意を寄せる三人も、そろってついて来たという訳か。

そしてカレンは、いつもの通り途中で乱入してきて、そのまま勉強会の輪に入ってきた。

「・・・一応、全員のここにいる理由はわかった」

「え・・・えっと・・・そ、その・・・ゴメン」

スザクが謝ってくる。まったく・・・謝るぐらいなら最初からやるな。

しかし・・・ここは大人の対応をしておこう。何事も平常心で、子供じゃないんだから。

「・・・まあいい。しかし狭い部屋にこれだけ人がいては、部屋の湿度が上がって仕方ないな。何か飲み物でも持って来ようか」

「え？ それなら僕が行って来るよ」

「別にいい。お前はちゃんと勉強を見てもらえ」

「まあまあ。ルルーシュ一人じゃあこの人数は持てないよ」

「一夏。それじゃあ私たちも、ただ世話になる訳には行かないな」

「え？ ああ、それもそうだな。それじゃあ俺が、なんか気の利かせたものを持ってくる」

「一人で大丈夫か？」

「任せろ。男はこういった力仕事が得意なんだ」

と言って一夏も部屋を出る。

その後セシリアと箒と鈴が顔を見合わせる。

「さて・・・うまく一夏も退散させたな」

「でも別に良くない？」

「そうは行きませんわ。女なら、正々堂々としなければ」

「とかいって、一夏を追い払う算段をたてたのは誰よ」

「うっ……。そ、それはそれ、これはこれですわ！」

などと会話をする三人にカレンはついていけない。

「えっと、みんな何の話？」

「あ、つまりはね。男子を抜きで恋バナでもしようかなって事にな
って」

「へえ……。でも三人は一夏にメロメロだから、今更恋バナは・・・」

・
」

と言うと、三人とも顔を真っ赤に染める。

「そ、それを言うならカレンだって！ スザクとはどうなのよ！！」

「え？ そうねえ・・・そんな感じで彼を見たことは・・・無い・・・
・わね」

それを聞いて、三人とも驚いた表情となる。

「嘘！ カレンとスザクってデキてないの！？」

「失礼ね！！ 彼は好敵手ライバルよ！ それ以上でもそれ以下でもないわ」

そう言ったカレンは複雑な表情。

それも当然だろう。何度も殺し合った相手の事なのだから。

「そうなのか・・・。それではスザクはルルーシュと？」

「さあ？ 私的には『仲のいい友達』レベルだと思うけど」

「そうですわね。恋愛対象・・・とまではいいない印象ですわね」

他人の事なのにここまで盛り上がるのは、恋と言う言葉以外には無いだろう。

「友達以上恋人未満って奴？」

「そうじゃない？　まあ、ルルーシュもスザクも多分意識して無いでしょうけど」

「恋愛感情が無いという事か？」

「そうだと思いますわね。お似合いの二人と見えますけど」

「その気が無いんじゃない」

そんな話をしてたら、部屋のドアが静かに開かれる。

「スザク。大変だったな」

「いや本当に。女性は怒らせると怖い。あ、あとこのお菓子ありがと」

「おう。当然だ」

一夏とスザクが帰ってきたらしい。

「あれ？　ルルーシュは？」

カレンのその言葉に、スザクが背筋を伸ばし一夏が苦笑。

「え？！　・・・・・・・・あっと、その・・・・逃げてきた」

「まあそのことは聞かないでやってくれ。大丈夫だからよ」

と言ったので、特にツツコム事もなく勉強会は再開した。

何があったか、時を巻き戻してみよう。

「あつ！ 枢木君だ！ やっほ〜！」

[illegible]

「え!?!? 本当!?!?」

「ラフな部屋着姿ゲット〜〜!」

私たちが部屋を出るなり、数人の生徒が私の隣にいるスザクに話しかける。というか群がる。

「え・・・・・・・・ええっと・・・・。どうも」

スザクは恥ずかしいのか、少し顔を赤くして生徒に会釈する。

その反応がツボにはまったのか、『キャアアアアッ!』と黄色い歓声が聞こえる。

「律儀だな。お前は」

「そうかな? まあ僕を撮って楽しいかは知らないけど、話しかけられるのに悪い気はしないよ」

「そうか。そういえば、あの正体不明ISの件はどうなった?」

「ああ、あれね。一応学園の方から、契約の書類と『他言無用』と念を押された」

「そうなのか。やはり、アレが何かわからないみたいだな」

”お前とカレン以外はな。”という言葉は心の中に留めておく。

「で、アレのせいでクラス対抗戦は中止になったから、今度は学年別個人トーナメントだね」

「ああ、アレか。面倒だな・・・一週間も」

「強制参加だよ？」

「わかっている」

何てことを話しながら歩く。そしてまた生徒と同じようなやり取り。これが何度も続く。よくもまあ飽きないことだ・・・。

それと最近気付いたことだが、どうやら織斑とスザクの人気層は分かれている。

主と言うだけで、基本的にはどこでも人気なのだが。

織斑層は一年生と二年生が主体。スザク層は三年生となんと教員が主体。

大丈夫かこの学園・・・不純異性交遊が起きないことを祈るばかりだ。

という考え事をしていたら、IS学園の食堂に着いた。

「えっと一夏がレモネード、セシリアが紅茶、箒が緑茶、鈴がウーロン茶、カレンはコーラだったかな？」

「そうだな。それでお前は？」

「僕はいいや、ってそれを言うならルルーシュは？」

「私もいい」

「そう？ まあいいけどね」

「さっさと買うか」

スザクはほっというて、自動販売機で私はそれぞれのジュースを買う。そこから五つ、腕で抱えるように持つ。さすがに五つはきついかもしれない。

（くっ・・・む、胸が邪魔で落ちそうだ）

「これぐらい・・・」

「あ、僕が持つよ」

「これぐらいなら別に一人でも——————キャ！」

「ルルーシュ！！」

話しかけたため体勢を崩し、倒れそうになった所をスザクが支える。私とスザクの顔が急接近。互いの吐息が掛かる距離になり、無意識のうちに体が強張る。ちなみにペットボトルは、スザクがちゃんと持ってる。

「大丈夫？ だから言ったじゃないか」

「あ・・・あ、ああ・・・す、すま・・・ない」

吐息が掛かる。顔が近い。気色悪いからやめろ。

「ルルーシュは女の子なんだから、こういった力仕事は僕に任せてよ」

「あ、ああ・・・次から・・・そう・・・する」

いや、わかったから。さっさと顔をどけてくれないか。

「あ、そうそう」

「？」

スザクがちょっとニヤニヤした顔になる。なんというか・・・気色悪い。

「ルルーシュって、あんな可愛らしい声を出す——————ぐへっ！」

物凄く失礼なことを言われた気がしたので、私を支えた手を取って、そのまま背負い投げ。

急な攻撃だと思ったが、スザクは受身を取り、ペットボトルも落とさない。

無駄に反射神経などの身体能力は高いな。

「な、なんで・・・」

「お前が失礼なことを言ったからだ」

「まだ言い終えてないよ！」

「それは、自白と取っていいか？」

「あ・・・え、ええっと・・・じゃ、じゃあ僕はジュース届けてく

「屋上か・・・」

随分と久しぶりに来た感じがする。実際一週間ぐらいだが。

「これはアレだな。その一週間の内容が濃すぎたんだな」

これは納得だ。特に私の平和を重火器並みに打ち砕く存在、枢木スザクのせいだな。

だが屋上でこんな風に黄昏てると、まるで老けたみたいだ。

まあこれまで会った、大体の人に歳を間違えられた。（主に年上で）

「中学生だった時に『二十歳ですか？』と言われたのはショックだったな・・・」

その時にはもう165cmを越えていたとはいえ、そこまで老けているかな・・・私は。

しかしこれを考えていたら、自分の心がどんどん碎けて行く。考えるのは止めよう。

「ふう・・・」

私は屋上の柵に寄りかかる感じで、そこから見下ろすように学園の景色を見る。

そこにはサッカーやテニスなど、高校生らしく部活動を勤しむ生徒や、それを厳しく指導する顧問が大勢いる。

「その景色を見ると、彼女達が将来この国を担う卵と言われても、

ちょっと信じられないな・・・」

本当に楽しそうだ。まるでその先の事を考えていないように。

ISは競技種目とか言われてるがそれは建前。実際はどこも軍事的に利用している。

つまりいつかは・・・血生臭い事に巻き込まれる。ISはただ、人を傷つける兵器でしかない。

例えばどんな理由があろうとそれは揺るがない。闘う限り、傷つく人が必ずいるのだから。

「・・・そんな事言ったら、キリが無いがな」

人が人である限り、他人を傷つけずに生きて行くことは不可能だ。だがそこで開き直りはせず、他人を傷つけることに、少なからず責任を持つべきだ。

無関心や無関係を偽る事こそ罪だ。それこそが身勝手に無責任と言うものだ。

傷つけた人に向き合えるように、少しでも努力してこそ、人と人は分かり合えると信じている。

少なくとも私は、そう考えている。それがいいと思っている。

自分の中に正解・・・というか基準があった方が、色々とやりやすい。

でも間違っていると言うのなら、それが納得できる理由なら喜んで受け入れる。

でも相手の考えに納得できなければ、相手そのものを否定し、その考えを叩き潰す。

異なる意見同士が、ぶつかった時とる行動と言ったら、どちらかを潰すしかない。

「その上で分かり合うのが、ある意味一番正しいのかもしれないな・
・・」

と言うより、なぜ私はこんな事を考えているんだろう。

「やめるか・・・。一度考えると止まらないのが、私の悪いクセだな」

くると回転して、そのまま空の方を向く。

すぐ上に太陽があり、八雲のように幾重も重なる雲が、その光を遮る。

それでも空は輝いている。何一つ不純物の無い、澄みきったコバルトブルーのように。

「空を見ると・・・自分たちがどれだけ矮小か・・・思い知らされるな」

上から片目を隠すようにして手で空を仰ぐ。その手に鳥の様な形の赤い光が写る。

「王の力は人を孤独にする。それを知ったとき、お前は どうする? ・ ・ ・ か」

まだ・ ・ ・あの緑髪の女性からの問いに、答えることは出来ない。

「・・・・・・・・答えは要らないのかも・・・・・・・・しれないな」

その時、屋上の入口のドアが開く。

「あ、ルルーシュ。ここにいたのか。探したよ」

「スザク。どうした」

私は片目を急いで隠し、冷静に受け答えをする。

まあこの力は、人が理解できるものじゃないから、見たとしても大丈夫だろう。

「？　どうかした？」

片目を抑える私を不審に思うスザク。

（・・・・・・・・もう力も収まったな）

そう思ったので手を目から外す。スザクの反応はいつも通り。力は収まっている。

「別に何とも無い。それで何か用か？」

「あ、そうなんだ。やっぱりルルーシュがいないと、勉強が捗らなくてさ」

「まったく・・・・仕方ないな。先ほどの事は反省しろよ」

「あ、うん。も、もちろんだよ！」

そして私は、少し挙動不審のスザクと共に、屋上を後にする。

こうしてまた、不本意ながら賑やかになってしまった、私の日常が始まる。

”・・・答えは必要じゃない・・・か。ククッ、お前らしい答えじゃないか。なあ？ ルルーシユ？”
ひねくれ

一度間を入れておこう（後書き）

感想あつたら下さい。

二人の転校生・・・それは波乱の幕開け（前書き）

2巻突入！ 今回は超長い！？

二人の転校生・・・それは波乱の幕開け

「やっぱりハズキ社製のいいなあ」

「え？　そう？　ハズキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！！」

「私は性能的に見てミューレイのいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。物はいいけど高いじゃん」

日曜日の朝。近く的女子達の談笑がよく聞こえるこの頃。
僕は後ろの席にいるルルーシュに話しかける。

「ISスーツってそんなにこだわるものなの？」

「当たり前だ。緊迫したIS戦闘において、0.1秒の神経伝達速度の遅れが、勝負の命運を分けると言っても過言ではない。それに
ある程度の実弾銃なら防ぐことが出来るからな」

「いやそうじゃなくて。ほらデザインとか」

「ふむ・・・。それは私には分からない。まあお前のは奇抜すぎる
気もするが」

「まあ・・・ね」

僕のISスーツは、元の世界でのパイロットスーツ。

『コンクエスター』になった後、何時の間にかこのISから呼び出されていた。

他の皆から見れば変な模様だから、ちよつと奇抜な眼で見られている。

けどやっぱりアレは体に馴染む。ちょうどいい着心地だ。

「まあオシヤレでもしたいんだろう。闘いには必要ないと思うが」

「ルルーシュ・・・まあそうだろうね」

一緒に暮らして来たからわかったが、ルルーシュには一般的な女性の感覚が、ゴゾツと抜けている。

常に機能重視。オシヤレとか、そう言ったことには全く興味が無いらしい。

しかしルルーシュはどんな服も着こなせるから、不思議だ。

「みなさん、おはようございます」

山田先生がにこやかな笑顔で入ってきた。

「あ、山ピーだ」

「おはようございます。・・・って、や、山ピー？」

「おはよう、山ちゃん！」

「はい、おはようございます。・・・って、や、山ちゃん？」

入学式から約2ヶ月。

なんだかんだで我がクラスの副担任である山田先生には、およそ八つほどの愛称がついていた。

慕われてるのはわかるけど、多くあると逆に不便な気もする。

「あのー、教師をあだ名で呼ぶのはちよつと・・・・・・・・・・」

「えー、いいじゃんいいじゃん」

「まーさんは真面目っ子だなあ」

「ま、まーやんって・・・・・・・・」

「あれ？ マヤマヤのほうが良かった？ マヤマヤ」

「そ、それもちよつと・・・・・・・・」

「もー、それじゃあ前のマヤマに戻す？」

「あ、あれは止めてくださいー！！」

珍しく語尾を強くして否定する山田先生。

人が触れて欲しくないなら、触れる理由もない。・・・・・・・・・・気に
なるけど。

「諸君おはよう」

「お、おはようございます！」

いきなりの来訪者・・・担任教師の登場に、ざわついた教室が静まり返り、ピシッと礼儀正しい空気になる。

他のクラスメイトが、なぜあの人に憧れるか気になり調べたら、とんでもない経歴を持った方だと知ってとても驚いた。

公式の試合なら無敗。しかしそれだけの腕がありながら、現役を引退しここで教師をしている。

何か並々ならない事情があるのだろう。だが僕が介入していい問題ではない。気にしないでおう。

「山田先生。ホームルームを」

あ、あれ？　もしかして僕が考え事をした時、連絡事項でも言ってた？　聞いてなかったな・・・。

まあ何とかなる。前向きにいこう。

[illegible]

X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X X

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルル君はにこやかな笑顔で語る。

なんだろう。金髪で髪を編んでる人を見ると、ジノを思い出す。性格は真逆そうなのに。

（しゃ、シャルル・・・か。皇帝陛下と同じ名前・・・）

皆と違う意味で驚いた。元の世界での人と、共通点が多すぎる男子。

「お、男・・・？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の人達がいるときいて本国から転入を――――」

「きゃ・・・」

「はい？」

「「きゃあああ——————っ!!」」

すごい音量と共にクラスが騒がしくなる。思わず耳を塞いだほど。

「男子！ 3人目の男子！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の!!」

「地球に生まれてよかった~~~~!!」

そこまでのレベルなのだろうか。ちなみに僕は、異世界の地球から来たんだけど。あ、関係ないか。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

シーン……。

たった一声でこの騒ぎを鎮めた。織斑先生は凄すぎる。

「皆さんお静かに。まだ自己紹介は終わってませんから」

そう。長い銀髪と眼帯が印象的な人は一言も喋らない。

あの人が、ルルーシュの言ってた『警戒しておけ』という生徒なのか。

「……挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

（教官？ 軍関係者の人なのかな？）

でもやっぱりこの世界の軍は、僕の知る軍とは違うんだな。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・・・・・・」

・・・・・・・・これで終了？

「あ、あの・・・以上ですか？」

「以上だ」

何も言わせぬ赤き瞳と絶対零度の無情な返しに、山田先生は涙目だ。

（こういうのは・・・あまり好きになれない）

元の世界での、ナンバーズとブリタニアの格差。いやと言うほど経験した、人を見下す瞳だ。

「！ 貴様が――――」

バシッ！

その声が聞こえたのを脳が理解する前に、僕の手はラウラさんの腕をつかんでいた。

「・・・何の真似だ」

ラウラさんは、掴んだ僕にその狂気のような赤き瞳を向ける。

（・・・ハッ。狂気って・・・何万人も殺した僕が言うセリフじゃないな）

心の中で苦笑してしまったが、目の前の人には違う対応を取る。

「ならそちらもだ。君は一体何をしようとしたか、答えてみる。今すぐにだ」

「ッ!？」

いつもと違う喋りと雰囲気。この口調に正面のラウラさん、そしてクラスが少しざわつく。

この喋り方は僕が元の世界で、主に尋問に使うときの喋り方。

まあ簡単なことだ。目の前の人と同じようなことをすればいい話だから。

でも本当に人を見下すのは、自分がどんな位置にいるか知らない人しか出来ない。

仮にも、とんでもない下克上の経験がある僕だから、こうしたことがある。

見下された者の気持ち、見下した者を見下す気持ちを経験したから。

「・・・貴様が・・・私に命令するな！」

多少怯んだラウラさんだが、怒号と共に強引に僕の手を引き剥がす。

「誤解してるようで悪いが、命令した覚えはない。どう受け取るかは勝手だが、付け加えておく」

「ふん・・・」

僕の答えに不満があるのか、空いてる席に堂々（というかズカズカ）と歩いて、そのまま座る。

（・・・用がなくなった。席に座ろう）

と思って席に着こうとして、突然後ろから攻撃。

僕は前方へステップしてそれをかわし、そのまま回し蹴り――――
――ッ?!

バシィン!!

「ッ・・・教師に暴行するとは、いい度胸だな。枢木」

僕の回し蹴りは、織斑先生オリハヤシの出席名簿によって受け止められた。どうやら先ほどの攻撃は、織斑先生オリハヤシの出席名簿アタックらしい。

「あ、いや、その・・・何か”攻撃が来た”と思いその、無意識に・

・・・す、すいません・・・」

急いで僕は足を退ける。先ほどの張り詰めた雰囲気はどこかへ四散した。

織斑先生は、僕の回し蹴りで凹んだ出席名簿を持ち直し、パンパンと服をはらう。

「まあこれは実技でチャラにしよう。それではホームルームを終わる。各人はすぐに着替えて、第二グラウンドへ集合。二組との合同演習を行う。それでは解散!」

さりげなく不吉な言葉を混ぜて、織斑先生は行動を促す。

(や、ヤバイ・・・!)

実は普段から、自主的に身体能力については制限していたが、今回は状況が状況。無意識を規制することはできない。

とはいえ・・・これはマズイ、非常にマズイ。色んな意味で。

「枢木、ついでだ。デュノアの面倒を見ろ」

「い、イエス・ユア————りよ、了解しました!!」

焦りすぎてアチラの掛け声をしてしまった。

そして、とりあえず逆らわない方がいい。僕の本能がそう告げた。

「君が枢木君? 初めまして。僕は————」

「で、でゅでゅでゅでゅ、デュロカ君!」

「え、誰？」

あああああ・・・！ 恐怖のあまり人の名前を囁んでしまった。

「ご、ゴメン間違い。デュノア君、急いで教室を出るよ。女子が着替えるんだ」

と言いながらデュノア君の手を握る。

「ひゃっ・・・！？」

「？ とにかく急ぐよ！」

もはやケだ。今は出来るだけ早く男子更衣室（仮）へ行くことを考えよう。

「ちょ、ちょっと枢木君！ 走るスピード落として！」

「そうも言ってられない！」

「え？！」

そう。そうも言ってられない。なぜなら・・・。

「ああっ！ 転校生発見！」

「しかも枢木君と一緒に！」

HRが終わって、早速各学年から情報先取のために尖兵が来ている。生徒に追いつかれたら確実に授業遅刻。

そしたらタダでさえ不機嫌の担任が、さらに不機嫌になる。
そしてなったら最後、一体どうなるか分かったもんじゃない。

僕だけならいいが、来たばかりのシャルル君まで巻き込むわけには
いかない。

「いたっ！ こっちょよ！」

「者ども出会え出会え！」

ヤバイ。何時の間にかIS学園は武家屋敷になっていたらしい。
そのうち忍者型のISが出てくるかも。いやこの場合、打鉄さむらいか。

「柩木君の天パ茶髪もいいけど、金髪三つ編みっていうのもいいわ
ね！」

「しかも瞳はエメラルド！」

「清楚な王子様！ こっちょもイケる！」

「日本に生まれてよかった！ ありがとうお母さん！ 今年は川原
の花以外のものをあげるね！」

いやいや待とう。毎年ちゃんとしたプレゼントをしようよ。

自分の親は世界に、たった一組しかないんだから。

「な、なに？ 何で皆騒いでいるの？」

超高速で走っている僕に、状況が読めないデュノア君が聞いてくる。

「多分、珍しいからじゃないかな」

「何が？」

「ここにいる男子が」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「え、珍しくないかな？　IS学園に男子がいるのはさ」

「あっ！————ああ、うん。そうだね」

一夏が言うにはこれを”ウーパールーパー状態”と言うらしい。ウーパールーパーってなんだろう。

なんて考えてる暇はない。この人海戦術による包囲網突破。現段階で最重要任務だ。

しかし、すでに退路は女子で埋め尽くされた。しかし前も左右も女子で埋まってる。

（しまった・・・！）

腕のいい指揮官が後ろに潜んでいる。入り組んだこの迷路のような廊下を熟知し、僕とデュノア君を女子の群れで作った袋小路に追いやる。これで強行突破は無理だろう。

「だがっ！」

即興で作った袋小路には必ず穴がある。突破は無理でも脱出はできる。

僕は片手で握っていたデュノア君の手を引き、そのままお姫様抱っこする。

「「「「「キャアアアアアアアアアッ!!!!」」」」」

「ひゃあっ!?　ちょ、ちょっと枢木君!?!」

周りの女子による歓声(?)と、腕の中で顔を赤くして戸惑った声を出すデュノア君。

いや・・・ホントゴメン。でも気持ち悪いのは承知。しかし今はっ!

「ちょっと我慢して!」

「え?　う、うわわわわっ!?　枢木君、そっちは壁だって!」

「大丈夫!」

僕はデュノア君を抱えたまま、壁を走る。この芸当は元の世界で散々やった。

「か、壁を走った?!」

「しっかり捕まって!」

女子の群れは5メートルまで続いていた。これはビックリだが、壁を走ることでは何とか脱出。

「「「「「ああ~~~~!!」」」」」

後ろから女子の大声が聞こえてくるが、気にしない。

「くっ!! 急がないと!!」

そう言って僕は制服のボタンを一気にはずしてTシャツと一緒に脱ぐ。

「わあっ!!」

「へ？」

な、なんなんだ・・・。

「何か忘れ物？ 早くしないと遅れるよ。あ、僕が取りに行こうか？」

色々と迷惑をかけたし。

「そ、そうじゃないよ？ その・・・あっち向いてて・・・ね？」

「僕に着替えをジロジロ見る趣味は無いよ」

で、僕は着替えを再開する。といっても下に着てるから、制服を脱ぐだけ。

でも気のせいかな・・・背後からスゴイ視線を感じる。

「あの・・・デュノア君、ジロジロ見てる？」

「み、見てない! 別に見てないよ!？」

両手を突き出し、慌てて顔を床に向けるデュノア君。その姿は一夏

のようなISスーツだ。

「あれ？ もう終わったの？」

「う、うん」

「ゴメン、もうちょっと待って」

IS学園の制服は、なんで手のこんだ仕様にしたのだろう。ズボンが脱ぎづらい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そしてまた視線を感じる・・・・・・。

「デュノア君？」

「な、何かな!？」

気になって視線を向けると、デュノア君は右斜め上を見る。

「なんで見てるの？」

「え?! あ、いや、枢木君のISスーツって変わってるな〜と思って・・・アハハ・・・」

言われて見れば確かに。他の人と違うから、視線が言ってしまうのかもしれない。

「そ、それと僕の事はシャルルでいいよ。その代わりスザクって呼

「では、本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「「はい！」」「」

一組と二組がいるので返事の声も倍近い。
初めての実践訓練となるので気合の入った返事が来る。

「くうっ・・・！ 何かあるとすぐに人の頭をポンポンと・・・」

「・・・・・・一夏のせい一夏のせい一夏のせい・・・」

ズキズキと叩かれた場所が痛むのか、涙目のセシリアさんと鈴さんは頭を抑えていた。

なぜ叩かれたかはわからない。ただ、一夏が関係していると言う事だけはわかった。

「専用機持ちはすぐに始められるだろう。枢木、オルコット、凰、前に出ろ」

「な、何で僕まだ―――――何でもないです」

ギロリと睨まれた。あの教室での一件をすっかり忘れていた。

「ここはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力差を見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

あれ？ 叩かれて落ち込んでた二人のやる気が急上昇。何か特典でもついたのかな。

「それで相手はどちらに？ わたくしは鈴さんと枢木さんの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こちらの台詞。返り討ちよ」

「僕は・・・遠慮していいかな」

「慌てるなバカども。対戦相手は――――」

キィィィイン・・・。。。

あれ？変な音がした。そして何故か嫌な予感がする・・・。

「ああああーっ！ど、どいてくださいーっ！」

上空から聞こえ覚えのある声。それは一夏のいる場所に飛来する。

ドカーン！

そしてグラウンドに大穴を空ける。僕らは急いで一夏の元へ駆け寄る。

そこには、山田先生の胸を掴んでいる一夏がいた。

「うわぁ・・・」

とりあえず・・・この場を離れよう。

ドンッ！！

え？ いま一夏の傍をレーザーが通り過ぎたような・・・？

「ホホホホ・・・残念です、外してしまいましたわ・・・」

声は笑ってるけど顔は全然笑ってない！！ 傍から見てるだけなのにスゴイ怖い！

スゴイ殺気を放ち、一夏に狙いを定めるセシリア。

「・・・」

ん？ あれ鈴？ なぜ《双天牙月》を連結させたのでしょうか？
しかも顔が無表情だ。人間、いかなる時もスマイルは大事だよ。
あれ？ なぜ振りかぶって・・・普通に一夏の首を狙ってきた！！

一夏は何とかかわしたが、変な体勢からだったのでかわした後倒れてしまった。

あ、そういえば・・・《双天牙月》ってブーメランみたいに帰ってくるような・・・。

「ああああ!!」

ちゃんと一夏の首を取りに戻って来た!! 仕方ない、ここは僕が撃ち落して!

「はっ!」

バンバン! っと発砲音。空葉莢が落ちる音もした。

打たれた二つの銃弾は正確に《双天牙月》の両端を叩き、《双天牙月》は無残に落ちていった。

そして驚いたのは何より山田先生の姿で、倒れたままの体勢から上体だけ僅かに起しての命中精度。

雰囲気も、いつものオロオロした雰囲気と違い、落ち着いた雰囲気が漂う。

(やっぱり山田先生も・・・IS学園の教師なんだな)

と再確認させられた。

「山田先生は元代表候補生だからな。今の射撃は造作もない」

「む、昔の話ですよ。それに候補生止まりでしたし」

照れたように手を振る山田先生。

「さて小娘ども。いつまで惚けてるつもりだ。さっさと始めるぞ」

「え? あ、の、二対一で・・・?」

「いや、さすがにそれは・・・」

「二対二がいいのか？　ならお前達に勝機は無いな。・・・ちよいどいい、まずは枢木が闘え」

「え？　僕がですか？」

「ああ。己の力量を自覚してない小娘どもにはちよいどいい」

「は、はあ・・・」

その言葉に鈴とセシリアが食いつく。

「ちょっと待ってください！　わたくしが負けると言いたいのですか！？」

「どういう意味ですか！」

「事実を述べただけだ。今のお前達なら、たとえ二対一でもすぐ負ける」

負けると言う単語が気に障ったのか、二人の目にはやる気の炎が灯った。

そして言われた僕を差し置いて、三人の試合が始まっていた。

数分後・・・轟音と二人の女子の絶叫が聞こえた。

「あ、アンタねえ……。何面白いように回避行動読まれてんのよ・
・」

「り、鈴さんこそ!! 無駄に衝撃砲をバカスカと!」

「コッチのセリフよ! なんですぐにビット出すのよ! しかもエ
ネルギー切れ早いし!」

「そ、そちらこそ! 接近できず、立ち往生をしてたではありません
んか!」

「ぎぎぎぎっ……。!」

「ぐぐぐぐっ……。!」

などと思苦しい言い訳を言い合ってる。

結果は織斑先生の言った通り。二人とも山田先生に瞬殺された。

「さて、これで諸君にもIS学園教師の実力は理解できただろう。
以後は経緯を持って接するように」

織斑先生が手を叩いてみんなに言う。

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰、
紅月、だな。では7人グループになって実習を行う。各グループリ
ーダーは専用機持ちがやること。いいな? それではわかれろ」

指示が出終わったと思ったら、ここにいるほとんどの女子が僕ら男子に詰め寄る。

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「枢木君、わかんないところおしえて〜」

「デュノア君の操縦技術見てみたいな〜」

「ね、ね、私もいいよね？ 同じグループに入れて！」

いや・・・入れてって言われても・・・。

僕は予想の斜め上に行く反応についていけなかった。

そんな中、こんな時だけ頼りになる鬼教師の声が聞こえた。

「この馬鹿どもが・・・。出席番号順に二人ずつ各グループに入れ！ 順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら、今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

その鬼の号令に女子達は移動してそれぞれの場所に移動した。

「最初からそうしろ。馬鹿どもが・・・」

そんな教師にばれないように小声で話す女子達。そこまでして喋りたいのかな。

ってそれはそうと。

「先生。なぜ僕の名前が無いのでしょうか」

僕も専用機持ち。カレンが専用機持ち扱いなら、僕も専用機持ちに入るはず。

「まだペナルティを払い終えてないだろ」

「あー………納得しました」

悲しいことに。

「で……具体的に何を」

「先ほど言っただろう。山田先生と戦ってもらおう」

「えっ?! あれ冗談じゃないんですか!?!」

”聞いてませんでしたよ!?” とばかりに山田先生が驚く。

「私は冗談を言った覚えは無いが?」

「あ……そ、そうですね……」

山田先生は早くも諦めた。まあ相手が悪すぎる。

「それでは各員、一度手を止める。今から山田先生と枢木による模擬戦闘を行う。全員中央を空ける」

その言葉で生徒達がグラウンドの中央を空ける。

「あ、あの枢木君? む、無理はしないで下さいよ?」

やっぱり何時もの山田先生だ。先ほどの戦闘とは全く違う。

だけど……。

「山田先生。自分が貴方より弱いことはわかってます。ですが、手を抜かないで下さい」

「ッ！」

僕の言葉と雰囲気を感じ、山田先生の顔に再び真剣な表情が浮かぶ。

それは————決して少なくない場数を踏んだ、熟練者の戦士の瞳だ。

「分かりました。では、準備はいいですね？」

「ありがとうございます」

僕にとって初めての格上との戦闘。体術では勝てると思うが、IS戦闘となると話は別だ。

ビギナーズラックなんて、初めから期待してない。

僕は満を持して『ランスロット』を纏い、腰についでる《ヴァリス》を持つ。

山田先生は『リヴァイブ』のライフルを呼び出す。

「両者準備はいいな？ では……初め！！」

織斑先生の合図と共に、僕は《ヴァリス》を放つ。

山田先生はその攻撃を盾で防ぎ、空へと上がる。僕はそれを追いかける。

「行きますよ！」

その言葉と共に山田先生の手には銃火器が出る。アサルトライフルだ。

ダダダダダダッ！！

アサルトライフルが僕に放たれる。連射でありながら僕を正確に捉えた照準だ。

しかしアサルトライフルなら、元の世界で何度も経験した。

「そのぐらいっ！！」

僕は体を回転させながら避ける。しかし避けるだけ。山田先生は接近させてくれない。

（そちらがその気なら・・・）

一度山田先生から離れる。僕には長距離砲撃武装がある。

《フロートユニット》に折り畳まれている《ハドロンブラスター》を展開し、《ヴァリス》と合体させる。

山田先生もそれを察知して、アサルトライフルからライフルに変え

る。

あちらも長距離射撃をするつもりだろう。

だが、もう遅い。

「ハッ!!」

《ハドロンブラスター》の引き金を引く。そして一点集中のハドロン砲が放たれる。

「ッ!!」

山田先生は防除できないと思い、体を傾けてかわし、逆さ状態でライフルを撃つ。

その状態でも正確な射撃ができている。流石としか言いようが無い。

「まだまだっ!!」

僕も同じように体を傾けて、逆さ状態でMVSを引き抜きそのまま瞬時加速。

「え!?! 逆さで?!」

驚きながらもアサルトライフルを展開し、僕に対し弾幕を張る。

（しかし僕には!!）

「効かないっ!!」

胸部分のブレイズルミナスを張り、強引に弾幕を突破。

「はあああああっ!!」

片手に持ったMVSを振りかぶる! しかし・・・。

「甘いですよ!」

山田先生はハンドグレネードを僕に投げつける。

「ぐっ!!」

咄嗟に空いてる腕のブレイズルミナスを張って防ぐ。しかし衝撃でMVSを落としてしまう。

「だがっ!!」

「ッ?!」

僕は足部分のブレイズルミナスを張り、山田先生の腹に足刀蹴りを食らわせる。

山田先生は足刀蹴りをモロに食らい、腹部を押さえながら高度が下がる。おそらくシールドエネルギーを貫通した。

僕は追撃のためもう一本のMVSを引き抜き、瞬時加速の体勢に入る。

その時、山田先生の顔がニヤリと歪むのが見えた。

———ゾクッ!!

「ッ!!」

背筋に悪寒が走った。嫌な予感がする。そして瞬時加速を強制終了させる。

その直後、自分の目の前で爆発が起こった。

「なにっ!?!」

僕はその爆発を間一髪かわす—————事はできず、直撃ではないがダメージを食らい、体勢を崩す。

やられた。山田先生は深刻なダメージを受けたフリをしたのか。そして僕が瞬時加速をしたとき、前もって投げておいたハンドグレネードにぶつかるといふ作戦。

咄嗟に逸らすことは出来たが、山田先生にとっては足止めだけで充分だろう。

「かかりましたね!」

その声と共に僕にライフルの連射を放つ。
その攻撃は僕の装甲を撃ちぬき、シールドエネルギーを削る。

(マズイこのままじゃ————!?!?)

やはりと言うか・・・山田先生は甘くない。

さらに、空いている手にグレネードランチャーを呼び出し、ライフ
ルとの一斉射撃を放つ。

—————ドオオオオオオンッ！！

かわすことはできず、両方の直撃を受けた。

「やりましたか・・・？」

爆煙が上がり、僕に攻撃が直撃したと思った山田先生の泣きが聞こ
えた。

（・・・やはり実戦ではなく、模擬戦なんだな・・・）

敵が視認できない時が、決して気を抜いてはいけない時。

しかし山田先生は、僕が生徒と言う事もあってか、油断した。

僕は両腕・両腰のハーケンを同時に放つ。

「ッ！！」

爆煙からの奇襲だったが、山田先生は素早い機動と盾で防除した。

「しかしっ！！」

僕は『ハーケンブースター』によって再度、山田先生に対し奇襲を
行う。

「えっ!?!」

山田先生はこの攻撃は予想外だったらしいが、ライフルとハンドグレネードで撃ち落とす。

しかし咄嗟だったため、四つのうち一つを対処し損ねた。そのハーケンが山田先生の右肩を直撃。

「くうっ!」

苦痛に顔を歪ませるが、その状態でも僕に対し弾幕を忘れない。

「その程度はっ!!!」

だがこの機体は防御力も高い。

僕は全ブレイズルミナスを同時稼動する《コアルミナスコーン》状態となり、その状態で突撃を仕掛けた。この状態はグレネードやライフルの攻撃を全て防ぐ。

これなら一気に決着をつけれるはずだ。

「はぁぁぁぁぁあっ!!!」

「っ!!!」

山田先生はライフルを捨て、アサルトライフルを呼び出し、グレネードランチャーと共にコチラに攻撃する。

だが《コアルミナスコーン》に、それぐらいの攻撃は効かない。

「終わりだっ!!!」

「くっ!!」

僕は山田先生の攻撃を尽く受けきる。速度から言っても、かわすことはできないだろう。

当然山田先生もそれに気付き、攻撃と回避を諦めて盾による防御を試みる。

だがこの突撃は、その程度で防げない――。

――シールドエネルギー残量0を確認。全機能を強制終了します。

突然、ハイパーセンサーから、そんなお知らせがきた。

その言葉と共に《ブレイズルミナス》や《フロートユニット》が解除され、『ランスロット』の装甲も徐々に光の粒子となって行く。

「あれ!？」

「え？」

目の前の山田先生も力抜けした声を出す。僕も変な声を出しただろう。

とりあえず。僕は装甲が完全に解除される前に、地面に降り立った。

「うわっと」

降り立った瞬間、”シュワー”って擬音が付きそうな感じで『ランスロット』は霧散し、僕の手にある起動キー（ここではUSBメモリ型）に収まった。

「だ、大丈夫ですか？」

同じく降り立った山田先生が、コンテナに銃を預けながら来る。

「は、はい。何とか」

その場で尻餅をついた僕は立ち上がる。

「それならよかったです。でも、一体どうしたんですか？」

「どうやら《ブレイズルミナス》を……えっと、緑色の盾を使いすぎたようで……」

「ああ……。あれはシールドエネルギーを使うんでしたね」

納得と言ったばかりに、山田先生が『リヴァイブ』の手で”ポンツ”と叩く。

「あ、それとコレは個人的な理由なのですが……。私の集中砲火をどうやって防いだんですか？ ああ緑色の盾を張る時間は無かったと思うんですが……？」

「ああ。アレはグレネードに、《ヴァリス》————銃を投げつけて防いだんです」

「なるほど！ だからあの後は銃を出さなかったんですね」

「はい。無傷とは行きませんが。しかし流石は山田先生。僕の完敗です」

戦闘においてエネルギー切れは、ある意味最大のタブー。僕の技量の無さが敗因なので、潔く認めなければ。

「い、いえそんな……。今回は柘木君がエネルギーを使いすぎたからで……。最後の攻撃が当たってたら負けてたでしょうし……」

「いえ。山田先生の技量があったから、僕はエネルギーを使わなければいけなかったハズです。それだけ経験の差があったと言う事でしょう」

そう。エネルギーの使いすぎが起こる場面なんて、相手に使わなければいけない状況に追い込まれる以外は、おそらく無いだろう。

それを山田先生はやったのだから、この人は相当強い。

（けど……。なんだろう。負けたのに妙に清々しい）

なんか、新たな可能性が見えたような……。そんな感覚が僕の中にある。

これが一体何かは……。まだわからないけど、一步進めたような気がする。

「柘木。ご苦勞だった。お前は少し休憩しておけ」

何時の間にか織斑先生が背後に来て、威力の弱い出席名簿アタックを繰り返した。

「わかりました」

そういうわけで、僕はみんなの I S 起動訓練を見させてもらおう。

[illegible]

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！！」

静かに傍観していた僕は、織斑先生の号音と共に叩かれ、頭を擦りながら列についた。

「ルルーシュ。何であのラウラって子に警戒しなくちゃならないの？」

時は放課後、ここは自室。

いつもの通り部屋で読書するルルーシュに、ベットに腰をかけながら聞く。

「何が起きるか分からないからだ」

「でもさ。それならシャルルにも同じことが言えるよね」

「私はただ、特にボーデヴィツヒの方を警戒しろと言っただけだ。デュノアを警戒するなどは言ってない」

「でもなあ・・・」

ラウラの近寄りがたい雰囲気はさておき、シャルルの優しげな雰囲気は警戒しなくてもいいと思う。

「お前は仮にも専用機持ちだろ。警戒心が薄すぎる」

ルルーシュは目線を本に向けたまま、そう言ってくる。
それに僕はちよつと反論。

「信じてみてもいいじゃないか。疑ってばかりじゃ、本当の意味で
分かり合えないよ」

「…………お前がそれなら、別にいいがな」

”自分には関係ない”と言いたげなルルーシュ。

「……………」

「……………」

そして僕とルルーシュ間に、変な沈黙が生まれた。

まあ喋ることもないので、読書しているルルーシュを見習い、僕も
本を読もうかな。

トントントン。

「枢木君、ランペルージさん。どちらか部屋にいますか……?」

本へ手を伸ばしたとき、ノックの音が三回聞こえた。

あ、ノックの音が二回のときって、トイレという意味らしいよ。

「あ、はい。いますよ」

僕はドアまで歩く。そしてドアを開けると・・・。

「山田先生。それにシャルルも」

「こんばんわですね」

「こ、こんばんわ」

異色の二人がドアの前に立っていた。

「どうかしたんですか？」

「えつとですね。簡潔に言うと、デュノア君がここに来るので、ランペルージさんはお引越しです」

「・・・・・・はあ！？　ど、どういことですか！？」

ルルーシュが読書を中断して驚く。当然、僕も驚きだ。

「織斑先生に聞いたところ、『奴にデュノアの世話を一任している』と言われたので」

「あ・・・ああ・・・そういえばそうですね」

確かにそんな事を言われた。でもここまで世話するとは思わなかった。

「と言うわけで、ランペルージさん。違う部屋を用意しましたので」

「はい・・・・・・わかりました・・・」

誰の目にも明らかなくらい、ルルーシュは肩を落としながら返事した。

（ルルーシュのことだ。引越しの作業が面倒なんだろう）

よくよく考えれば、後からきた僕がルルーシュを追い出すというのは、良心に呵責を感じる。

「大丈夫。僕がちゃんと荷造りしておくから」

ドンと胸を叩いておく。するとルルーシュの表情が呆れに変化。

「はぁ・・・別にいいが・・・」

「？」

アチラの反応が妙に引つかかるが、僕は山田先生とルルーシュの荷造りに取り掛かった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その時、ルルーシュがシャルルの方まで歩いて行く。

「デュノア」

「え？ ランペルージさん？」

「ルルーシュでいい。その代わり――――と叫ばせてもらうが」

「ッ! !」

何か言ってるようだが、遠くで荷造りしてる僕は聞こえない。

「ル、ルルーシュさん・・・どうしてそれを・・・」

「安心しろ。別に言いふらしたりはしない。だが――――」

ポンツと、シャルルの肩を叩くルルーシュ。

「――――私に牙を向くなら、覚悟しておけよ。シャルル」

「ッ! !・・・・・・どうだろうね、ルルーシュさん」

・・・話は聞こえないけど、何か言い争ってるような場面だ。
そして、言いたいことを言ったらしいルルーシュがコチラに来た。

「シャルルと何かあったの？」

「気にするな。ただの挨拶だ」

・・・そんな雰囲気には見えなかったけど、喋る気が無いなら仕方ない。

そんなワケでルルーシュの荷造りを再開した。

数十分後。

「改めて。よろしくスザク」

「うん。よろしくシャルル」

引越しも完了したので、休憩の意味と一夏から貰ったお茶を飲みたかったので、シャルルと二人で飲んでいる。

「緑茶・・・・・・・・かぁ。紅茶とは違うんだね。味はもちろん、色や風味も」

「日本が誇る代表的な飲み物だよ。他にも抹茶や麦茶とか」

「へえ・・・・・・・・奥が深いんだね」

「また一夏に頼んでみよう」

元の世界ではブリタニアの占領があってから、日本文化が徐々に減ったから懐かしい。

それと同時にここは、僕のいた世界ではないと再認識させられる。

（元の世界では大量殺人鬼。そんな僕がここにいていいのだろうか？）

ここの学生や一夏、それにみんなを見てると、時々考えてしまう。

元の世界で久しく忘れていた、友達と会話しながら互いに笑い合うこと。

けれど僕がいたら、そんな笑顔を壊してしまう・・・僕はここに存在してはいけない気がする。

いくら世界を救うためとはいえ、そのために他人を不幸にしては・・・
・本末転倒ではないのか？

（なら僕は・・・どうすればいいんだろう・・・）

「スザク？　どうしたの？」

「・・・え、あ、なんでもないよ」

無意識のうちにシャルルに心配をかけてたようだ。

「ちよっと考え事してて。大した事じゃないから」

「・・・本当？ さっきの表情、凄く辛そうだったよ」

どうやら・・・シャルルの観察眼は鋭いらしい。

「え・・・そうかな。一夏の訓練状況を考えてるのは」

咄嗟に誤魔化す。しかしそれが正しい。彼に言ったところで意味は無い。

「え？ そんな事を？」

シャルルは呆気にとられた表情になる。・・・よし、誤魔化せたな。

「まあね。一夏は筋はいいけど、基礎知識が足りないからって、僕もIS実戦に関しては初心者だけど」

「え？！ しよ、初心者って!？」

シャルルが異様に驚く。なぜだろう、何かおかしいことを言ったのだろうか。

「稼動時間はど、どれぐらい？」

「え？ えっと・・・一ヶ月くらい・・・かな？」

おそらくそのぐらい。自信はないですけど。

「そ、それだけ・・・？ それだけであの戦闘をしたの・・・？」

シャルルが呆然と言葉を紡ぐ。一体何がなんだか。

「まあ。でも山田先生は強かったよ。まさかエネルギー切れで負けるなんて・・・」

正直悔しい。当たれば一発逆転も夢ではなかったのに・・・やっばりIS経験の差か。

「思った以上に厚い壁だった」

「・・・・・・・・僕らが先生に勝てないのは仕方ないのに・・・」

「え？ なにか言った？」

「なんでもないよ」

？ シャルルの目が少し呆れてる。なぜだろう？

「それよりも、シャワーとかの順番はどうする？ スザクが先に入りたい？」

「ああ、シャルルが先でいいよ。僕は後で」

ここだけの話、僕はシャワーと言うのにあまり慣れてない。

お風呂が多かったから、いきなりシャワーだけと言われても困る。ここの状況を考えれば仕方ないのだけれど、苦手は苦手なので、ちよっと時間が掛かってしまう。

シャルルはフランス出身らしいから、シャワーはテキパキと終わらせるだろう。

それなら、先にシャルルが入った方がいい。

「いいの？ 先に浴びたい日とか決めておく？」

「遠慮しないでいいよシャルル。何せ数少ない男同士だし」

「うん。ありがとう」

ニコリと極上の笑みを浮かべるシャルル。

「あ・・・えつと・・・当然の事だよ」

とついつい視線を逸らしてしまう。

僕としては当然の事をしてるのだけど、こう笑顔でお礼を言われると照れる。

善意で消しゴムを拾った時、真面目に『ありがとう』と言われると、大体の人は照れるだろう。

今の僕はそんな感じだ。

「そういえば、さっき一夏の特訓に付き合ってるって言ってたけど」

「うん。初心者同士だからね。他の皆と一緒にやってるんだ」

ちなみに、そこにカレンも加わる。

「僕も手伝っていいかな？ ほら、なにかお礼したいし」

とお茶の入った湯のみを持つ。

「使用許可は下りないか？」

『どうだろうね〜。私は別にいいけど、あの二人が何と言うか・・
・ねえ〜？』

ルルーシュは一人、学園の屋上で通信している。

通信相手は声から女性。

二十代のように若い声だが、間延びした独特な喋り方のせいか、三十代のような印象を受ける。

「ラクシャータ。何とか二人の説得を頼む」

『え〜。私があのだ二人に頭下げんの〜？』

「・・・もういい。『ガウエイン』が使えないなら『蜃気楼』はどうだ？」

『ルルーシュ？』『蜃気楼』は、だれが作ったと思ってるの〜？』

「わかってるさ。ラクシャータ」

『ならいいけど。『蜃気楼』ならすぐ使っていいわよ〜。その代わり、壊さないでね〜』

「わかった」

『『ガウエイン』は、まあ頼んでみるけど、あまり期待しないでね
〜』

「頼む」

そして通信が切れる。ルルーシュは一息ついて夜空を見上げた。

空は月も雲も無く、邪魔する物の無い中、微かな星の光がルルーシュを控えめに照らす。

屋上を吹き荒れる風は、ルルーシュの黒い長髪を、弧を描くように振り乱す。

そしてルルーシュ自身の容姿もあり、その様子は幻想的な雰囲気醸し出していた。

「ふう………忙しいな。特に今年は」

独り言か、それとも誰かに対する愚痴か、わかる者はこの場にはいない。

「……まあいいさ。何せ————」

とそこで、少し強い突風に煽られ、ルルーシュが言葉を一度切る。

「……イタズラ好きな風だ」

少し愚痴りながらも、振り乱れる髪を手で押さえて、ルルーシュは改めて言葉を紡いだ。

「――――黒金の王は、牙を向く者に容赦はしない。それが私の力『絶対遵守』だ」
ギアス

その時、ルルーシュのその言葉に反応するように、夜空が不自然に煌めく。

ルルーシュの視線の先には、幻覚ではなく確かに、赤き鳥の形をした光が煌々と輝いていた。

二人の転校生・・・それは波乱の幕開け（後書き）

キャラ・・・ブレたかなあ・・・。やっぱりキャラと言うのは難しい・・・。

誤字脱字・感想があったら下さい。

疾風は恋の嵐となって？（前書き）

遅れましたすません。長いです・・・1万5千文字オーバーだぜ。
あと題名はスルーで。

疾風は恋の嵐となつて？

「ええつとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そ、そうなのか？ 一応わかつてるつもりだったんだが・・・」

「だったらなんで馬鹿みたいに突っ込むかな。僕みたいにフェイントとか使おうよ」

「お前さっきから簡単に言うけどなあ！！ それが出来たら苦労はしねえよ！！」

一夏の叫びがアリーナを木霊する。

シャルルが来て五日が過ぎた。

彼もすっかりクラスに馴染み、今では他のクラスの人との交流の輪を広げている。

ちなみに今いる所はアリーナ。

IS学園の土曜は午前は授業で、午後は完全フリー＋アリーナは全面解放。

特訓やその他の目的がある人で、ここはいつも賑わう。

今日は一夏の特訓にシャルルと共に付き合っている。あ、箒と鈴とセシリアもいるよ。

「アハハ・・・。それはまあ・・・置いというて」

「置いとかれた!!」

「頭の中でわかってるだけで、行動に出てないんだよ。模擬戦も間合いを詰められなかったでしょ？」

「ああ・・・」

「つまり一夏は、わかってる気になってるだけ」

「ぐっ・・・」

「そういえば、十八番の『イグニッション・ブースト瞬時加速』も読まれてたっけ」

「ぐぐっ・・・ああそうだよ!! 面白いぐらいに読まれてたよ! 悪かったな!!」

これが逆ギレと言う奴だろうか。さすがに虐め過ぎたからかな。

「と、とにかく。一夏のISは接近格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと勝てないよ」

「加えて強行突破で猪突猛進。これじゃあ、壁に向かって走ってるよ
うなものだよ」

「・・・悪い二人とも————ってかスザク。少しオブラートに包んでくれ・・・心折れそうだ・・・」

うん。一夏の反応を見てたら、確かにそんな感じだ。

「ああ、でも瞬時加速中はあんまり無理に方向を変えない方が良いでしょう。空気抵抗とか空圧諸々の関係で、最悪の場合は骨折するからね」

「へえ……なるほど……え？」

何故か一夏とハーモニーしてしまった。

「す、スザク？　もしかして……知らなかった？」

「え、うん。初めて知った」

でもよくよく考えればその通りか。よし、これから派手な瞬時加速は自粛しよう。

「お前知らずにあんな無茶な動きしてたのか!？」

「無茶って言われても……あ、そういえば、月面宙返りしながらやったりしたね」

「「ええっ!？」　どういう状況だ(なの)?!」」

二人が異様に驚いてるが、僕とカレンの模擬戦は大体そんな感じだ。そうでもないかと闘った気分にならない。

「あー……この頃体が妙に痛いのはそのせいかな。ありがとうシャルル、おかげで原因がわかった」

「その前に行動を自粛して!！」

お礼を言ったら何故か怒られた。気分を害するようなこと言ったか

な。

しかし大声を出すシャルルとは新鮮なもので、ちょっと物珍しい目で見てしまった。

それに気付いたシャルルは咳きで誤魔化する。

「んんっ！ 一夏の白式って、後付武装イラコイザが無いんだよね？」

「え？ ああ。何回も調べて貰ったけど拡張領域バースロットがないから、量子インス変換も無理だって言われた」

「僕はいいと思うけどね。射撃武器があると、逆に一夏の邪魔になるんじゃない？」

「でも一つも無いと一つでもあるのとは違うだろ」

「ふむ・・・まあ確かに」

一夏にしては考えさせる言葉だ。

射撃武装があれば戦略の幅が大きく広がる。それは大きな強さとなるだろう。

しかしそのためには、一夏はさらに射撃訓練を今の基礎訓練と平行してやらなければいけない。

「できるの？ 射撃武器の訓練との平行進行」

「・・・さあな。でも、やれるさ」

『やってみる』ではなく『やれる』か。断言するところは一夏らしい。

「そうだったね。しかしどこに拡張領域を使ってるんだろ・・・？」

「・・・多分、ワンオフ・アビリティーの方に容量を使ってるんじゃないかな？」

シャルルの指摘に一夏が『？』を浮かべる。

「ワンオフ・アビリティーって・・・えっと・・・なんだっけ？」

「確か・・・ワンオフ唯一仕様の特殊才能だったね。アビリティーまだよくわかってない機能だって聞いたけど」

もちろんルルーシュから。

「うん。ISと操縦者が最高の状態になった時、自然発生する能力だよ」

となると・・・僕の《旋律誓約》もそんな扱いなんだろうか。

全くもって謎のアビリティーコードギアス《旋律誓約》

前のアリーナ襲撃のとき発動してたらしいが、あの後いくら使おうとしても発動しない。

それにあの時と今までの操縦に違いは無い。これは一体どう言う事だろう。

「普通は第二形態から発生するするんだよ。でも発生しないISが圧倒的に多いから、特殊能力を複数の操縦者が使えるようにするの

が、第三世代型ISなんだ」

「なるほど。それじゃあ白式の唯一仕様ワンオフってやつぱり《零落白夜》か？」

「うん。白式は一次形態からアビリティーが使えるって、それは物凄いい事・・・異常事態って言ってもいいぐらいの大事なんだよ。しかもそれが織斑先生——————初代『ブリュンヒルデ』の使ってたISと同じなんだよね」

「そうらしい。まあ姉弟だからとか、そんなものじゃないか？」

「ううん。いくら姉弟といっても、同じ能力が発生することはありえない。これには絶対に理由があるよ。一夏が男って言うのも関係してくるのかな」

「そっか。まあ気にしても仕方ない。” よっしゃラッキー！” ってスタンスで行こうぜ」

「ハハハ・・・まあそうだね。それじゃあ射撃訓練をしようか。はいこれ」

あれは確か、シャルルが使うアサルトライフル《ヴェント》だ。

「？ 他の奴の武器って使えないんじゃないのか？」

「普通はね。だけど、所有者の使用許可アンロックさえあれば、登録された人全員が使用可能だよ。勿論、一夏の雪片やスザクのMVSもね」

へえ。それはちょっと興味がわく。

「そうなんだ。一夏、僕らもやってみる？　面白そうだし」

「お？　確かに面白そうだ。まあ後でな」

そんな事を話しながら、一夏はあまり慣れてない手付きで構える。しかし構えがなんか・・・微妙。

「おいコラスザク。なんだその微妙な表情は」

「表情通り」

「・・・初めてなんだから仕方ねえだろ・・・」

などと愚痴ってる。それに見かねたシャルルが、一夏の後ろに回り手とり足取り誘導する。

「ほら、脇を締めて左手はこう。わかる？」

「あ、ああ」

「じゃあとりあえず。撃ってみようか」

「わかった」

「あ、じゃあ僕が的になるうか？　的があるだけでも違うと思うし。お手本と言う意味も込めて」

「そうだね。一夏はスザクの動きがお手本だと思って、ちゃんと見ておいてよ」

「わかった。じゃあよろしく」

僕は『ランスロット』を纏って、一夏たちと一定間距離を開ける。

「でも大丈夫？ スザク。的なんて・・・」

「大丈夫だよシャルル。一夏なんかに被弾する僕じゃない」

「銃ならな。刀なら当てるぐらいできる・・・はず」

ちよっといじけてしまった。可哀想だったかな？

そこからシャルルの指揮の下、一夏は一通りの銃器の扱いを一応覚ええた。

「じゃあ撃ってみよう。スザク、準備はいい？」

「いつでも」

「じゃ、一夏」

「お、おう」

バババババババババツ！！

アチラから何発もの銃弾が僕に放たれる。ちよっと容赦がない気がするが。

「はっ！」

僕は素早くその場を移動。放たれた銃弾は空を切り、アリーナのバリアーに当たる。

「さすがだね」

シャルルが笑顔で言うてくる。

「ありがとう。でもいきなり容赦ないね」

「それは一夏に言うて」

「あ、いや、こんなに速いとは思わなくてな・・・」

そう言った一夏は、戸惑った表情をしていた。やっぱり銃は初めてなんだ。

「そう、速いんだよ。一夏の瞬時加速も速いけど、銃弾はその面積が小さい分より速い。だから軌道予測さえあっていれば簡単に当てるし、外れても牽制になる。一夏は特攻してるとき集中してるけど、やっぱり心のどこかでブレーキをかけてるよ」

「だから簡単に間合いが開き、続けて攻撃されるのか・・・」

「うん」

へえ。やっぱりシャルルの観察眼は、同年代の人より一步以上先に進んでる。

もしシャルルが僕らの世界にいれば、ギルフォード卿レベルになることも夢ではないと思う。

「じゃあそのまま続けようか。一夏、スザク。準備して」

「わかった」

「了解」

そして再びアサルトライフルが僕に火を噴く。

僕は右から左へ自由に滑走。銃弾は何一つ当たらない。よけてるから当然。

「マジで・・・当たらない」

「弾道予測してるからね。そちらが僕の軌道予測を読むと同時に、僕もそちらの弾道予測をしてるんだ。だからそういった駆け引きが重要になるんだよ」

僕は銃弾をかわしながら解説。

「しかしお前簡単に言うな。弾道予測とか簡単にできるのか？」

「簡単じゃないよ。けど一夏にも似た様な事あるでしょ？ 例えば、剣道やってるとき相手の竹刀が次どこに来るか、無意識のうちにわかってるとき」

「・・・あるな」

「僕がやってるのはその銃バージョン。でも一夏は銃に撃たれるな

んて経験がないから、今はよくわからないだけさ」

「・・・なるほどな」

「そして予測の駆け引きに勝てば、必ず相手に隙が生まれる」

僕はかわしながらMVSを二本とも抜き出す。片方は逆手、もう片方は順手で。

「間合いというのは――――」

そして一夏の間について瞬時加速。

ガンッ！

「――――そうやって詰めていくものなんだ」

逆手に持ったMVSの柄でアサルトライフルの銃身を押さえて、順手にもったMVSを一夏の喉元へ突きつける。

言うまでもなく、僕は一夏に王手をかけた。

「っ・・・一瞬だな。決着がつくのって」

「そう、ホントに一瞬なんだ。だから一夏、一回でも間合いを詰めたら、そこで決着をつけることを第一に。要はヒット&amp;mp、チエックメイトって奴」

僕は喋りながら一夏から離れる。

「・・・難しいな」

「でも一夏には一撃必殺の刀がある。だからこの闘い方は君に合っていると思うよ」

「・・・そうか。そうだな。漠然としてるより、何か目標が合った方がいいよな」

「まあ他にも色々な闘い方はあるけど、とりあえずは状況把握、及び行動予測が基本かな」

「そうだね。でもそれは感覚で掴む物だから、練習第一だよ一夏」

「おう。二人ともありがとうな。助かるぜ」

こういった事をすれば僕もIS操縦に慣れるだろう。

「ねえ、ちょっとアレ・・・」

「ウソッ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど・・・」

急にアリーナがざわめき始めた。僕はその注目の的に視線を移す。

「・・・」

視線の先にいたのはドイツから来た転校生。ラウラ・ボーデヴィツ

ヒ。

シャルルとは真逆で誰とも話したりしない、いわゆる一匹狼という感じの女子だ。

そして何故か、一夏を目の敵にしている女子でもある。

「おい」

ISの開放回線で声が飛ぶ。注目の的ラウラ本人からだ。

「……………なんだよ」

気が進まないが無視も出来ない。そんな表情をしながら一夏が反応する。

「ふん」

するとラウラがふわりとコチラまで飛翔してきた。

「貴様も専用機持ちらしいな。ならば話は早い。私と戦え」

「イヤだね。理由がねえよ」

「貴様には無くても私にはある」

……………どうやら、ラウラと一夏の間には互いを敵視するような因縁があるらしい。

だが、形振り構わずというのはどうかと思う。ここに居るのは、君達だけじゃないんだ。

「私は貴様を認めるわけにはいかない」

「別に認めなくていい。だから闘う義理もねえよ」

「ふん。ならば————闘わざるを得ないようにしてやる！」

その言葉とほぼ同時にアチラのISが戦闘形態に移行、左肩に装備した大型砲が火を噴く。

「っ!！」

ゴガギンッ!

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めるなんて、ドイツの人は随分沸点が低いんだね。ビールだけじゃなくて頭もホツトなのかな？」

「シャルル、それは言いすぎ。けどラウラ、君もやりすぎだ」

「貴様ら……」

シャルルは横合いから割り込みシールドで砲撃を弾き、同時にアサルトカノン《ガラム》を構える。

僕は一触即発しそうなラウラとシャルルの間に入り、ラウラの正面に《ヴァリス》を突きつける。

「君は代表候補生だろう。これではそこの不良と変わらない。これがドイツの礼儀なのか？」

「黙れ正体不明機。^{アンノウン}また私の前に立ち塞がる気か」

正体不明か……。確かに僕を表現する言葉はそれが正しいな。

だがそれは、今とは全く関係無い。

『その生徒！何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

突然スピーカーからのアナウンスが響く。おそらく噂を聞きつけた先生だろう。

「…………ふん。今日は引こう」

ラウラはあっさりと戦闘形態を解除し、アリーナのゲートへと去って行く。

「『今日は』……か」

懲りずにまた来ると言う事か。そこまでのほど一夏に恨みがあるのか？

（考えても仕方ない……後で一夏に聞こう）

「一夏、大丈夫？」

「大丈夫か？」

「あ、ああ。助かった。シャルル、スザク」

「もう今日は上がるっか。あんな事あったし、アリーナの閉鎖時間だし」

「それもそうだな。あ、銃サンキュ。色々と参考になった」

「それなら良かった」

シャルルと一夏が話している。その姿を遠めで睨みつけてる女子三人。

「一夏。そろそろあの三人の視線がキツイ」

「え？・・・・俺に言われても・・・・まあ行って来る」

苦笑いの一夏があちらに向かう。コッチはシャルルと二人きり。

「じゃあ戻ろうか」

そういえば。

「うん・・・・えっと、じゃあ先に着替えて戻ってて」

この通り。

シャルルは教室とかアリーナとか、そういった場所では普通なのだが、着替えや自室では急に態度がたどたどしいと言うか・・・妙に他人行儀で、まだ壁を作ってるんだなと思ってしまう。

まあ別々に着替えたいというのもわかるし、他人の着替えをジロジ

口見る気も無いので、言われた通りにしている。

そして場所は更衣室。僕は全身がISスーツなので着替えるのは面倒、と言うわけでいつも脱がずに上から制服を着ている。

まあ汗は吸収してくれるし、シャワーを浴びた後は脱ぐから問題ない。

「あの〳〵織斑君か枢木君かデユノア君はいますか〳〵？」

「はい？ えっと、枢木だけいます」

「入っても大丈夫ですか〳〵？ まだ着替え中ですか〳〵？」

「いえ、大丈夫です。着替えは終わりました」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

入ってきたのは山田先生。間延びした喋り方だから誰だかわからなかった。

「他の人はいないんですか？ 今日はこちらにいと聞いたんですが・
・」

「一夏もシャルルもアリーナに残ってます」

「そうですか。じゃあ枢木君から二人に伝えておいて下さい。今月下旬から大浴場が使えるようになります。男子は週二回、使用日を設定することになりました」

「そうなんですか！」

これはよかった。この頃シャワーばかりで飽き飽きしてた所だ。それに本来僕はシャワーより風呂の方が好きだ。温泉は人類共通の宝。ついでにこの世界初めての風呂でもある。

これは楽しみだ。

「本当に楽しみですね！」

「そ、そうなんですか？」

僕の態度に山田先生が少し引き気味だ。

「・・・・・・・・スザク？ 何してるの？」

その言葉で・・・・・・・・この気温が2℃ほど下がった気がする・・・・・・。

「しゃ、シャルル」

「まだいたんだ。それより何先生との話で興奮してるの？」

「こ、興奮なんてしてないよ」

必死に弁明。じゃないと僕の信用が地に落ちる気がする。

「スザク。先に戻ってって言ったよね？」

「は、はい。た、確かに言いました」

なんだか怖い・・・有無を言わさぬ気迫がシャルルから発せられる。これはあれだ。織斑先生に命令される時と同じだ。

反論させることを許さない。いや、そもそも反論と言う選択肢がない。

「そ、それよりもシャルル。今月から大浴場が使えるようになったんだって」

「あっそ」

え、えっと・・・何でご機嫌が悪いのかな。さっきのラウラと一夏のやり取りのせい？

「それと枢木君。織斑先生が呼んでましたよ。紅月さんと一緒に、職員室まで行ってください」

「？ わかりました」

何の用なんだろうか。まさかアリーナ襲撃に関する事じゃないのかな。

「じゃあ、そういう訳でシャルル。先に部屋に戻ってて。後もし一夏に会ったら大浴場の件、伝えておいて」

「うん。わかった」

「頼むよ」

そうして僕はカレンを探しにアリーナを出た。

[illegible]

「・・・・・・はあつ・・・・・・」

自室に戻るなりため息をつくシャルル。
しかし出たため息は深いもので出したシャルル自身が驚いた。

（何イライラしてるんだろう・・・）

ちゃんとお風呂の件は一夏に伝えた。テンションが高くて若干引いたけど。

それよりもあの更衣室での態度に、今更だけど何してるんだらうという疑問が出てきた。

あのときの態度がなんだか恥ずかしくなってくる。

スザクも驚いた様子でシャルルを見ていた。

なんか喧嘩っぽくなってしまったことにシャルルはすごい落ち込んだ。

（よりにもよってスザクに当たるなんて・・・）

彼には転入初日から色々と気を使ってもらってる。

一夏や箒、セシリアや鈴やカレン、それに他のクラスメイトとすぐ馴染めたのは、スザクが色々と場を取り繕ってくれたから。ルルーシュとは・・・その・・・事情があるけど。

その他にも学園生活の事教えてくれて、自室では何気ない話し相手にもなってくれている。

会って間もない僕に、何でこんな親切するのか不思議でたまらなかった。

だから前スザクに『何でこんなに良くしてくれるの？』って聞いたら、スザクが『？』とマークを浮かべた後『僕、何か迷惑かけたんだね。ゴメン。次から気をつけるよ』と真剣に謝られてしまった。

予想の斜め上というか、折れ線グラフのような感じな答えが返ってきてコチラも困った。

そんなスザクに感謝はしても、八つ当たりをするなんてどうかして

「「疲れた・・・」」

僕らが織斑先生に呼ばれたのは、アリーナ襲撃の個人的な尋問だった。

織斑先生は強制はしてこなかったけど、あの機体が何か知りたがっていた。

しかし僕らも真実を話すわけにはいかなかったので、白々しいが『何も知りません』の一点張りで乗り切った・・・・・・・・三十分間。

「動きにくくなったね・・・」

「そうね・・・。アレが世界のバグって奴かしら」

「多分。アレは本来この世界に無いはずだから。僕らと同じで」

「・・・私、アレから考えたんだけど、バグが無人機だけって考えるにくいわよね」

ちょっといいにくそうにカレンが言う。それは僕も考えたことだ。

「アレをこの世界で作った僕ら……の世界の誰かがいる。おそらく一人じゃないだろうね」

「・・・誰が来てて、アチラは私たちの事に気づいてるのかしら」

「『モルドレッド』を通して見てたはずだよ。カレンは知らないけど、『ランスロット』として闘った僕はバレてるだろうね」

「・・・・・・・・スザクは・・・・覚悟・・・・できてる？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言になったのは、カレンの言ってる事がわかるから。

もしその誰かが僕らの知り合いだったら、僕らはその人と闘う事になる。

場合によってはその人物を――――――。

「・・・・・・・・わからない。でも覚悟は出来てる」

「・・・・よくわかんないわよ」

「ハハッ、自分で言ってる変だと思うよ。でも、そんな事言ってるれない」

「・・・・・・・・・・そうね」

神妙な顔でカレンは前を向いた。

そう。そんな事は言ってもらえない。覚悟が出来てるか出来てないの問題じゃないんだ。

「じやなきや、僕がここに来た意味が無い」

———やらなければ、いけないんだ。例えどんな理由があったとしても。

そこからは、僕らの間に言葉は無かった。

「……じゃあ、僕はコッチだから。おやすみ」

「ええ。おやすみなさい」

フロアの通路で、部屋の番号が違うカレンと僕は別れた。

それから少し歩いて僕の部屋の前に来る。

「ただいま。———ってシャルル、いる?」

部屋に入ったらシャルルが見当たらない。と思ったらシャワールームから音が聞こえた。

（ああ。シャワーを浴びているのか）

僕は時間を潰そうと、自分のベットで横になって本を読もうとしたら、

「きやあ ああああああ ああつ！？！？！？！？」

「っ! ? シャルル! ?」

甲高い悲鳴がシャワールームから聞こえてきた。

急いでシャワールームまで向うと・・・。

「シャルル！！
どうした！？」

急いでドアを開ける。すると裸のシャルルが涙目で尻餅についていた。

[illegible]

涙目のまま変な言葉を言った後、裸のシャルルが僕に抱きついてきた。

「なっ!？」
ちよ、ちよつとシャルル!？」

手でシャルルを引き剥がそうとするが、アチラが僕の首に腕を回してくっついていて、力を入れても剥がす事が出来ない。

その過程で気付いたが、シャルルの体は男にしては細く、筋肉質と
言う体ではない。

それよりも気になるのが、フニフニと男にしては柔らかな胸板。それを意識したら何故か顔が赤くなる。

ガコンッ！

Gは速すぎて反応できず死亡。容器はそこらのタイルに当たって落ちた。

「もう終わったよ」

僕に抱きついているシャルルの頭を撫でながら言う。

「~~~~~ッ！！」

涙目のシャルルが僕の顔を覗き込む。その距離・・・3cm未満。その男らしからぬ上目使いに、僕は顔をさらに赤くして目を逸らした。

・・・僕に押し付けてるシャルルの胸板が・・・谷間を作っているのは気のせいと信じたい。

「ほ、本当・・・？」

「あ・・・うん、本当だよ・・・で・・・離れて貰えると、た、助かるかな・・・」

「へ・・・？」

シャルルは何を言われてるかわからず、自分が今どういう状況か確認中。

僕の方から言わせて貰いますと、シャルルは裸で僕の首に抱きつい

「本当にスイマセン……。次から気をつけます」

「反省してくださいね」

「はい……。すいませんでした。失礼します」

僕はお隣や前の部屋の住人に謝り行脚をしている。

理由は当然、夜なのに大声を出して迷惑をかけてしまったので。

「あゝ……。入りづらいな……」

謝り行脚が終わったので、部屋に入ろうとドアに手を掛けて――
――躊躇った。

「どうしようか……」

うゝゝん……。とドアの前で唸っていると、ドアが勝手に開いた。

「す、スザク……」

「シャルル……」

どうやらアチラが開けてくれたらしい。

シャルルはいつもと同じスポーツジャージ（アディ〇ス）だけど、
胸はいつもと違って妙に大きい。

つまりシャルルは――――。

「えっと……。とりあえず中に入っているかな？」

「あ．．．うん。そうだね．．．」

とりあえず僕は部屋に入り、共にベットのの上に座る。

「．．．．．」

「．．．．．」

妙な沈黙。部屋についてるアナログ時計の音が時を刻む。

その音がいつもと違って凄く響くのは、気のせいではないだろう。

「す、スザク」

しばらく時間が経ったら、シャルルの方から切り出した。

「な、何？」

「その．．．．．ありがとう」

「．．．へ？」

なんか予想と違った言葉が来た。

「お風呂場の．．．あの黒い．．．」

「あ、ああ。アレね」

この沈黙の原因。黒光りするG。アレをここまで恨むことは珍しいだろう。

「そ、それは当然だよ。それよりシャルルはそ、その・・・」

自分でも回りくどいと思ったが、直球で聞く勇気が僕にはなかった。

「・・・・・・・・スザクの思ってる通り。僕は・・・女子だよ」

しかしシャルルは俯きながら答えてくれた。

「・・・事情があるんだよね。喋らなくていいよ。僕はバラしたりしないから」

「ううん。知られたなら事情を話すよ。ただ『皆には秘密にして』なんて、虫が良すぎるから」

「別にそんな気は・・・」

人には知られたくない秘密の一つや二つ、あって当然だと思うけど。

「いいから。スザクだって知りたいでしょ？　僕が正体を隠してここに来た理由」

「・・・・・・・・わかった。聞くよ」

本音を突かれた。

確かに気になってないと言えば嘘になる。ルルーシュが言ってたこともあったから。

「それじゃあ聞くけど、どうして男子のフリしてここに？」

「・・・・・・・・実家からの命令だよ」

「実家というと、前に言ってたデュノア社の社長？」

「うん。そして僕のお父さん。その人からの命令なんだ」

「でもどうして？」

お父さんの命令。言ってる少し妙な気がする。

親が自分の子供に命令する・・・軍では不思議じゃないが、この世界で今は、大きな戦争なんて起きていない。ましてやデュノア社は軍隊ではない。

ではなぜ？

「・・・・・・・・スザク、僕はね。愛人の子供なんだ」

「ッ！」

その一言で・・・・・・・・全てを察した。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんがなくなったときにね、父の部下がやってきたんだ。それで色々と検査する過程でIS適正が高いことがわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕はなんて言葉を言えればいいか分からず、黙って聞くしか出来なかった。

「父にあったのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活をしているんだけど、一度だけ本邸によばれてね。あの時はひどかったなあ。本妻の人に殴られたよ『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちょっとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

アハハ、と乾いた愛想笑いを続けるシャルル。

その姿を見ていたら、同情とか励ましとかよりも怒りが込み上げた。

「それからしばらくたって、デュノア社が経営危機に陥った」

「・・・そうなの？」

「うん。今はほとんどの国の支援のおかげで何とか成り立っている状況。それにフランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・ドライブ』から除名された。だから第三世代型の開発は急がなきゃいけない。資本金で負けている国は最初のアドバンテージが取れないと悲惨なことになるから。ボーデヴィツヒさんの転入もその辺りが絡んでいると思うよ」

『イグニッション・ドライブ』・・・ルルーシュから聞いたことがある。

欧州連合では第三次イグニッション・プランというのが次期主力機体の選定中で、今のところはイギリスとドイツとイタリアが選ばれている。

「フランスのデュノア社は第二世代型最後発。第三世代型開発にはデータも時間も圧倒的に少ない。それで国営のデュノア社は政府からの資金提供も大幅に削られた。次のトライアルに選ばれなければ資金提供を全面的にカットすると宣告も受けたよ。そしてIS開発許可とかも剥奪するって」

「・・・・・・・・話は分かった。けどそれと男装がどういう関係？」

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔。それに――」

シャルルはそこで一度言葉を切り、今度は女子にしては低い声で告げた。

「同じ男子ならあの特異ケースと接触しやすい。可能なら使用機体と本人のデータを取れるだろう・・・・ってね」

「それはつまり――」

「そう。君や一夏のISの情報を盗んで来いと言われてるの。僕は、あの人にね」

「へえ・・・・・・・・。それでシャルルはどうした？」

自分でもドスの効いた声になったと思った。それにシャルルが怯えるが、それでも言葉を紡いだ。

「わ、渡してないよ。スザクはそんな隙、見せなかった。一夏は違う部屋だから論外・・・」

「・・・・・・・・・・ならいいけど」

そう聞いて僕は雰囲気を和らげる。

「それでシャルルはどうするの？」

「・・・・・・・・・・多分本国から呼び戻されるだろうね。まあ牢屋に入られて、デュノア社は潰れるか他の会社の傘下に入るかな。まあ僕にはどうでもいいけどね」

「・・・・・・・・・・」

「ああ。喋ったたらなんか気が楽になったよ。今までウソついててゴメン」

頭を下げて謝るシャルル。

「・・・・・・・・・・シャルル。君は何を言ってるのか、自分でわかってる？」

「・・・・・・・・・・え？」

シャルルが間拔けた声を出す。僕は構わず続ける。

「僕が君の言った事を纏めると、『僕は愛人の子。だから父親に容赦なく使われた。けど僕はどうでもいいよ、たとえ牢屋に入ってもどうせ父親の会社だって潰れるし』的なことだよね」

「そ、それは・・・・・・・・・・」

シャルルは言葉を詰まらせる。改めて自分の言った事がよくわかったみたいだ。

「僕は君の父親を認めはしない。だけどシャルル、問題から逃げた君も、認めはしない」

「逃げ・・・た・・・？」

「だってそうじゃないか。今の話を聞いてると、君は悲劇のヒロインでも演じてるような境遇だ。まるで流されるように生きてみた感じに」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「一度だって流れに抗おうとしてない。『僕が何しようが無駄』って考えてる。だから自分の境遇に何の関心も持たない。それが一番楽だから。違う？ 違うなら違うといって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言のシャルル。それは肯定と言う意味だろう。

つまり無意識の内に逃げていた。関心が無いのは、それだけ境遇が辛かったの裏返し。

（やっぱり・・・似てるな。今のシャルルは、昔の僕と）

無意識のうちに辛く当たった。それは同属嫌悪という奴かもしれない

い。

子供の頃の自分。

父親を殺し、親友とその妹と別れ、日本という国が地図から消えた・
・・あの時。

あの時の喪失感や虚無感。僕はあの時、生きてる心地がしなかった。
僕はただ逃げていただけ。けれどあの時の僕は幼すぎた。

でも、今は違う。

間違った過程から得られた結果には意味が無い。だからと言って過程が全てでは無い。

それをわかった僕なら、今のシャルルを――――。

「答えられないってことは、僕のいった事が正しいってことでいいのかな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シャルルは答えない。俯いたままだ。

「・・・・・・・・・・ほら、ここまで言われてるのに黙ったままなのか？」

「・・・・・・・・スザクの言う通り・・・・・・・・だよ。反論なんか出来ない・・・・・・・・」

ようやくシャルルの口から出た言葉は、僕の問いに対する肯定だった。

「そうだね。僕は・・・・・・・・辛いから逃げてたんだ。スザクに言われて気付いたよ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「関心が無いっていうのも・・・・・・・・今思えば何もかも、どうでも良かったからだね・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ありがとう。スザクのおかげで気付くことも「そうじゃない!!」っ!?!」

シャルルの言葉を遮り、僕は怒鳴り声を上げた。

「・・・・・・・・・・そうじゃない!!　・・・・・・・・・・そうじゃないだろ!?!」

僕はシャルルの両肩を掴み、無理矢理にでも顔を上げさせる。

「僕は今、君の人生や親を全て否定したんだよ!?!　その相手になんでお礼を言うんだ!?!」

「え・・・・・・・・で、でも・・・・・・・・」

「正しいと思った！？ 君の人生は、僕のたった数分の言葉で無意味になることだったのか！？」

「そ、それは・・・」

「なんで抗おうとしないんだ！！ 『君の人生はそれだけじゃない』はずだろ！？ 違うのか！？」

「す、スザク・・・」

「君を生んでくれた母親は！？ 仲良くしてくれた友達は！？ それも君にとってはこの程度ってことなのか！？」

「・・・・・・・・ち、違う・・・違うよ・・・そうじゃない・・・」

目に涙を溜めて言うシャルル。その言葉は弱々しく、すぐに消えそうな声だ。

「そんなわけないよ・・・ないけど・・・！！」

「『けど』何？ 『僕にこんな事言う資格はない』とでも言うのかい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何も喋らない、何も答えないシャルル。僕はシャルルの目を真剣に睨んだ。

「悲劇のヒロイン気取りもいい加減にしろ！！ この世界には、君

より幸いことを経験した人だって居る！！　でもみんな前を見て歩いている！！」

「っ！」

「少なくとも僕は知っている！　両親に捨てられ、妹のために世界を敵に回し、最後は世界のために死んだ親友を！！彼は最期笑って逝った！！　その人生に悔いは無かった！！」

僕の脳裏に、彼を刺したあの瞬間がフラッシュバックする。

彼は最後、笑って逝った。そして僕は彼に願いを託ギアスされたんだ。

・・・こんなに悲しい笑顔を浮かべる少女を救えなかったら、あの世で彼と顔向けできない。

「彼は、歩いてきた過去みちを・・・そして、これから進む未来みちを見ていた！！」

「・・・・・・・・・・」

「だから彼は笑って逝けた！　自分で人生みちを定めて、それを自分の意思あしで進んだからっ！！」

「っ！！」

そう言ったとき、シャルルの両手が僕の両腕を掴んだ。

「・・・・・・・・・・じゃあ僕は・・・どうすればよかったのさっ！！」

その言葉と共に立ち上がり、僕の腕を強引に引き剥がす。

「母さんが死んで、いきなり父親が出てきて、愛人の娘なんて事実を知って、いきなりテストパイロットにされて、本妻の人に訳もわからず叩かれ、今までの自分^{おんな}を偽れと、他ならない父に命令された僕は！！ どうすればよかったのさ！！」

潤んだ目で泣くのを堪えて、僕を睨みながら自分の思いを怒鳴り散らすシャルル。

その姿は今までの紳士的な姿とは全く違う。

それこそみつとも無く荒々しい・・・しかし偽りの無い姿だった。

それだけ、自分の扉^{しっしゅう}を閉ざしてたんだ。

「そう。それさ」

だったら僕は、その扉^{しっしゅう}をこじ開けるだけだ。

「それが聞きたかった。本当のシャルルの言葉を」

「え・・・？」

先ほどの思いつめた顔とは違い、力の抜けたような表情だ。

僕はなるべく笑顔でシャルルの手を握り返す。

「やっと抗った。今まで見ようとしてなかった自分に」

「っ！・・・・・・・・スザク・・・」

「君はやつと向き合った。これからは君自身の人生だ。父親に決められた人生ではない。辛い未来の中でも、君は前を向いて歩くんだ。絶対に後悔しないように」

他人に決められた人生を歩むなど、絶対にいつか後悔する。当たり前の事だ。

だから目隠しして歩いても、後ろ向きで歩いてもダメなんだ。

ちゃんと前を見て歩かなきゃ必ず転ぶ。それが取り返しのない事になる前に。

「・・・・・・・・・・」

僕の言いたいことが伝わったか、シャルルは改めてベットに座った。

「もしこれからの未来に自信がなければ、友達を頼ればいい。きっと君の人生を照らしてくれる。もちろん、僕もね」

「・・・・・・・・・・」

シャルルは無言。何の言葉も返してくれない。俯いて表情も見えない。

僕はあえて構わず続ける。

「これぐらいが僕の言いたい事。後さっき『僕はどうすればよかった』って言ってたよね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「一発親にガツン！と言ってあげな。自分の思いを。偽りの無い本当の思いを」

「ッ！！」

「そうすれば、君は一步進めるはずだ」

僕はシャルルの隣に座り、シャルルの手を握る。

「ね？　僕は君の味方だから」

「スザク・・・・・・・・・・うう・・・・・・・・・・うわあああああああああああ
あああッ！！！！」

シャルルが泣きながら僕の胸板に顔を埋める。

その慟哭に響くような泣き声は、これまで箱に詰め込んできた悲しみの現われだろう。

その壊れてしまった箱がパンドラの箱と言うなら、最後には希望が
残るはずだ。

「うう・・・・・・・・・・うっ・・・・・・・・・・ああ・・・・・・・・・・あああああああああッ！！」

泣く女性シャルルに余計な言葉はいらない。ただ――――。

「泣いてる女の子には・・・これが一番だろ・・・？」

甲斐性のない僕の頭が総動員して考えた結果、そつとシャルルの頭を撫でる。

――――傍そばにいただけでいい。そして涙なみだを受け止める。それだけが、彼女を癒してくれる。

「僕は・・・いつまで経っても、女性の涙には弱いからね・・・」

疾風は恋の嵐となって？（後書き）

何書いてるのかな・・・自分。支離滅裂。

感想があつたら下さい。

それは様々な戦いゝ対抗戦の前ゝ

「え、えっと、ゴメンね。制服汚しちゃって・・・」

「大丈夫。これぐらい安いものさ。君の本心を聞くためなら」

結局、シャルルの気が済むまで僕はずっと付き添っていた。

「落ち着いた？」

まだ目が赤いシャルルに、少し冷ましたお茶を差し出す。

「うん・・・。ありがと・・・色々と」

「どういたしまして」

遠慮しながらも受け取るシャルル。僕も自分の分のお茶を持ってベツトに座る。

「考えは纏まった？」

「え?・・・。まだ・・・何ともいえない・・・かな?」

「まあそうだろうね。でもまだ三年あるから、じっくり考えるといいよ。僕も・・・まあ微力だけど力になるから」

「うん。ありがとう、そうするよ」

笑顔でお礼を言うシャルルを見たら、自分のした事は間違っていない
と思える。

（シャルルを救うことができたのかな・・・？）

結局は自己満足。

けれど相手が笑ってれば、自己満足でもなんでもいい。辛い顔して
るよりはずっといい。

笑ってるからこそ、救うことが出来たと実感できるから。

（それにしても・・・恥ずかしいなあ・・・）

さっき自分がいった事が、あまりにもクサイことだったので、今更
ながら恥ずかしくなった。

そういえば、場の勢いで元の世界のルルーシュの事を言ってしまった。
た。

でもシャルルは気にしてないようだし、まあいいか。

「そ、そろそろ夕食だね。シャルル」

あの会話が恥ずかしすぎるので・・・苦し紛れの話題逸らし。

「え？ あ、確かに。そろそろ食堂へいかなきゃ」

「あ、シャルル。その格好じゃダメだよ。僕がちゃんと取ってくる。
要望とかある？」

「あゝゝ・・・スザクって案外強引なんだな・・・」

スザクが食堂へ行った後、シャルルはベットに蹲った。

理由は言わずもだが。

先ほどのスザクが言ってくれた言葉は、一つ一つシャルルの心の何処かに響いた。

その一言を思い出すたびに、シャルルは顔を赤くして、その気持ちを噛み締める。

「でも・・・嬉しかったな・・・スザクは僕の事をわかってくれた」
きつと僕よりも僕の事がわかってる。

「しかも・・・抱きしめて・・・ああっ、やっぱり恥ずかしい!!」
抱きしめられたこと思い出ただけで、もう恥ずかしくて死ぬ。

・・・あれはトドメだ。リサールウェポン最終兵器だ。即刻世界条約を作った方がいい。

でなければ――――この世界の女性が危ない。色んな意味で。

「あれは・・・反則だよ」

あれにときめかない女子など、この世界にどれだけいるか。
しかもスザクにとってアレは無意識だから、余計に質たちが悪い。

まあ実際、スザクは『抱きしめた』と言うよりは『付き添った』という意味合いが強い。

でもそこは、今のシャルルにはどうでもよかった。

シャルルはスザクに触れられた頭を擦り、先ほどの言葉を思い出す。

「『目隠しして歩いたら絶対に転ぶ。だから前を向いて歩かなきゃいけない』か・・・確かに僕は目隠しして歩いてた・・・」

母の死、いきなり父との再会、愛人の娘であるという事実、デュノア社のテストパイロット拔擢。

一度に色々な事が起きて自分でも訳が分からなかった。

だから無意識のうちに逃げた。だからすべて無視した。それが一番楽だから。

だけど本当は、立ち向かってこそ価値のある人生がある。

ノーリスクなんてふざけてる。価値は常にリスクの先に存在する。

「今考えれば・・・なんて人生歩んでたんだろう・・・僕は」

自主性のカケラもない。ある意味、命令を忠実にこなすロボットの
ような人生だ。

「考えてみよう……。一度」

父に思いをぶつける。じゃないと僕は、一歩進めない気がする。
それを気付かせてくれた彼には、いくら感謝しても足りない。

「ありがとう……。スザク」

「へ？ 何が？」

「っ！？！？」

自分の独り言に反応が返ってきたことに驚くシャルル。

それを見ている、トレーを片手に戸惑った表情のキザ男一人。

「す、スザク？！ い、いつからそこに！」

シャルルは今までの独り言を聞かれてたのか焦るが、それは聞かれ
てなかったらしく、スザクは純粹な『？』マークを浮かべる。

「え？ ついさっき。それより焼き魚定食を貰ってきたよ」

と言ってトレーを机に置く。

「ほら。ベットの上で食べるわけにもいかないし。コッチおいで」

椅子を準備して、手招きでシャルルを呼ぶ。

「う、うん」

顔を赤くしながら椅子に座って、定食を見た時にシャルルの表情が一瞬で青ざめる。

「あ、あれ？ 何かまずかった？」

「え、えーと。大丈夫、いただくよ」

と言って箸を持つシャルル。

「あ、持ち方違うよシャルル。箸はこうやって・・・」

スザクはシャルルの手を握り、改めて箸の持ち直させる。

「ひゃあ・・・！？」

シャルルから見れば、いきなり指を触られて箸の持ち方所ではない。

だがスザクから見れば単純な善意でしかない。それがシャルルのモヤモヤを加速させる。

「ここをこうで・・・こんな感じ。わかるかい？」

「う、うん・・・大丈夫」

「そう」

そう言ってスザクの手がシャルルから離れる。

「あっ……」

シャルルはそれに少し寂しさを覚えながら、みつともないと理性を保って食事に取り掛かる。

「い、いただきます」

だがしかし。

「あっ……」

ぽろっ

「あっ、あっ……」

ぽろっ、ぽろっ。

魚の身をほぐすまでは大丈夫だが、そのあと上手く摘めない。これでは食事が捗らない。

「……。ゴメンシャルル。すぐスプーンとフォークを貰ってくるよ」

苦い表情のスザクは、自分の失態だと思いすぐに汚名返上を図る。

「え、わ、悪いよ。このままでがんばってみるからさ。ね？」

「シャルル……。僕がさっきいった事覚えてる？」

「え．．．？」

「『道がわからなくなったら、友達を頼ればいい』って」

「あっ．．．」

「さっき偉そうに言ったからね。男に二言は無いよ。僕はシャルルの味方だからさ、なるべく頼ってよ」

「．．．．．じゃ、じゃあ．．．え、えっと、スザクが食べさせて．．．？」

そう言ってシャルルは、今まで使ってた箸をスザクに差し出す。

「．．．．．は？」

スザクはワケもわからずと言った感じで、とりあえず返事はしておいた。

「あ、甘えてもいいって言ったから．．．ダメ？」

「え．．．ええっと．．．わ、わかったよ．．．そ、そういう方向で甘えるんだ．．．」

シャルルの上目遣いにスザク撃沈。顔を赤くしながら箸を受け取る。捨てられた子犬が段ボール箱の中、雨の降りしきる時助けを求めているような上目遣いには、流石のナイトオブゼロも勝てなかった。

「は、はい。あーん」

とりあえず、スザクは先ほどシャルルが取りこぼした魚の身を取る。

「あ、あーん」

ぱくっ。開けられた口にスザクは遠慮しながら投入。

「ど、どう？」

「う、うん。おいしいよ・・・」

「そ、そう。ならよかった・・・」

お互い顔を赤くする。こんな事態はお互い初めてなので仕方ない。

「じゃ、じゃあ、その・・・次はご飯がいいな」

「わ、わかった。ご飯だね」

スザクは箸で一口分ほどのご飯を摘まむ。

「あ、あーん」

「ん・・・」

すごい震えたスザクの手だが、何とかシャルルの口に摘まむ。

「つ、次は和え物がいいな」

月曜日の朝。

僕は教室へ向う途中、教室の前で立ち往生している二人を発見した。

「おはよう二人とも」

「あ、スザク。遅かったね」

「スザク。おっす」

相手はシャルル（男装）と一夏だ。

シャルルは僕が『時間が掛かる』と言う事で、先に行って貰ってる。女子の前で着替えは・・・ね。

「どうかしたの？ 二人とも教室の前で」

「え？ ああ、なんか女子達が騒がしくてな」

「ん？」

一夏に言われたので、僕は教室のドアを開けて中を見る。

「ホントだってば！ この噂で学園中持ちきりよ？ 月末の学年別トーナメントで優勝したら男子の誰かと交際でき――」

「男子がなんだって？」

「「「きゃああああああっ!?!」」」

「え、えー」

男子と言うので何となく話に入ったら、完全に引かれた。

普通に声を掛けたつもりなのに・・・僕にはコミュニケーション能力が無いのかな・・・。

「ゴメンみんな、驚かせて。次からちゃんと気をつけるから」

その場で頭を下げて謝ると、数人の女子が焦ったように『い、いいよいいよ! 気にしなくて!』と言ってくれた。なんて心の広いクラスメイトなんだ・・・。

バシッ!

「痛い!」

「いつまでそこで騒いでいる。さっさと席に着け」

「・・・・・・・・了解」

感傷に浸ってたなら、頭に激痛を感じたので席に着いた。

(そういえば・・・。女子たちは何の話をしてたんだろう)

「なんだ」

ルルーシュは自分の好きなコーヒ―（砂糖小さじ一杯、ノーミルク）を飲みながらこちらを向く。

僕はテキトーに選んだ牛乳（北海道産）を飲みながら聞く。

「君はシャルルの正体に初めから気付いてた？」

「っ！　ほう・・・スザクが感づくとは。まあ一緒に住んでるから、いつかはそうなると思ったが」

核心な質問をしたが、ルルーシュは大して驚いてもいない。

ちなみに僕がそう思ったのは、ルルーシュが引越するときシャルルと会話したあの時。

おそらくルルーシュは最初から気づいていて、それでシャルルに牽制をしたんだと思う。

「アチラから話して貰ったのか？」

「うん。でもどうしてルルーシュは気付けたの？」

「・・・・・・守秘権を行使させてもらおうかな。パスーだ」

どうやら喋る気は無いらしい。そしてなぜか余裕の笑みでコーヒ―を飲む。

「まあ喋る気が無いならいいけどね」

僕も牛乳を一口飲む。ルルーシュに無理強いは無駄だ。結局うやむやにされる。

「そういえばルルーシュ」

「・・・今度は何だ」

「君って専用機を持ってるの？」

「ああ。それがどうした？」

「あ、いや・・・ちょっと興味があって聞いてみたただけ」

「ふうん・・・？　なるほど、見てみたいんだな。私の機体を」

「うっ」

やっぱりあの笑みに勝てる気はしない。全てを見透かされてるようだ。

「まあ・・・ね」

「そうか。ならアリーナにでも行くか？」

そういうながら、コーヒーカップを洗いの方に出すルルーシュ。

「え？　いいの？」

「ああ。私だけお前の機体を知ってるのと言うのは、フェアじゃないからな。勝負はイーブンでこそ面白いと言う物だ」

とスタスタ歩いて行くルルシユ。

「って置いてくこと無いだろ!？」

「さっさとしろ。遅れたらみせてやらんぞ」

「理不尽だ！ さっき言った事と違うじゃないか！」

急いで牛乳を飲み干して、歩いて行くルルーシュを追う。

[illegible]

「ルルーシュの機体ってどんな感じ？」

「どんな感じ・・・？ まあお前と同じ全身装甲だ」

「え？ 僕が言うのもなんだけど、それって珍しいよね」

「仕方ないんだ。システムを効率良く全方位に展開するには、全身装甲にするのが手っ取り早い」

「システム？ それは一体？」

「見ればわかるさ。驚く準備はしておけよ」

そういうルルーシュは、妙にテンションが高いというか嬉しそうだ。引越してから久しぶりに話すけど、何か嬉しいことでもあったのだろうか。

「アリーナについて・・・あれ？ なんだか騒がしいね」

「そうみたいだな」

アリーナの入口に女子がどんどん出入りしていく。何かを見物しに行くかのように。

「行ってみようよ」

「言われなくても」

女子の群れをかき分けて進むと、戦闘している少女三人を発見する。

「あ、あれって!!」

「鈴とセシリア・・・そしてラウラ・ボーデヴィツヒだな」

ルルーシュの双眸が、先ほどの顔とは想像がつかないほど鋭くなる。

その視線の先には、専用機『甲龍』と『ブルー・ティアーズ』で闘う鈴とセシリア、そしてその二人を圧倒している『シュヴァルツェア・レーゲン』を駆るラウラがいた。

「くらえっ!!」

鈴の最大武装である『衝撃砲』《龍砲》を放つ。

見るからに最大出力だ。あれはかわすことも防御も容易ではない。

しかし。

「無駄だ。この『シュヴァルツェア・レーゲン』の停止結界の前ではな」

ラウラが手をかざす。それだけで不可視の砲撃はいつまで経ってもラウラ自身に届かない。

「A I C・・・か」

「A I C？」

ルルーシュの口から聞きなれない単語が飛び出す。

「正式名称”アクティブ・イナーシャル・キャンセラー”慣性停止

結果。P I Cのシステムを応用したドイツの第三世代型武装だ」

「慣性停止結果・・・」

それはつまり相手の動きを止める兵装かな。だがゲフィオンデイスターバーとは違い、相手の実弾なども止める事が出来るらしい。もはや兵装と言うより超能力的なシステムだと思うけど。

「うおおおおっ!!」

いきなり白い機体がアリーナのバリアーを貫いて、ラウラへ突撃する。

「一夏?!」

「無謀な・・・アイツは理屈で動くと言う事を知らないのか」

ルルーシュの言ってる事が正しいように、一夏の刀はラウラに届く直前で止まる。

A I Cというシステムのせいだろう。アレでは体のいい的だ。

「一夏っ! 離れて!!」

アサルトライフルによる弾雨がラウラに降り注ぐ。あの声はシャルルか。

「ちっ・・・雑魚が」

ラウラが視線をシャルルに移したとき、一夏がいきなり鈴とセシリアを抱えて避難する。

しかしラウラは攻撃の手を緩めない。もはや勝負は決まってるのに。

「これは・・・手助けしたほうがいいよねルルーシュ・・・ルルーシュ？」

隣にいるルルーシュに話しかけたつもりだったが、アチラからの返事が無い。

「ちっ・・・あの代表候補生どもめ・・・試験運トリアル転にはちょうどいい」

その言葉と『クックック』と危険な笑みを浮かべるルルーシュ。こ、怖っ！

「初陣だ『蜃気楼しんきろう』。パーソナライズ、装甲展開と同時に瞬時加速＋絶対守護領域展開」

「っ！ 蜃気楼だって!?!」

まさかそれは——————と僕の声搔き消すように、ルルーシュの体は光に包まれ、黒と所どころに金の装飾をした全身装甲の機体になり、その場から消えた。

ガギンッ!!

「何?」

「え？」

ラウラがシャルルに対し大型実弾砲を放ったとき、突然の乱入者であるルルーシュが駆る機体”蜃気楼”の赤いバリアーによって防がれる。

「貴様誰だ」

「・・・クラスメイトに随分な口の利き方だな。ボーデヴィツヒ」

「その声・・・なるほど貴様か。代表候補生ではあると知っていたが、専用機持ちとは意外だ」

「データが無くて残念だったな。『蜃気楼^{コイツ}』は今回が初陣なものでね」

「ふん。まあいい、先ほどのガラクタ二人よりは骨がありそうだ」

「ちよっと!! ガラクタってどういう意味!？」

「そうですわ!! まだ終わってません!!」

「お、おい二人とも!？ そんな状態で無茶な!」

ガラクタ呼ばわりされたセシリアと鈴は、ボロボロの状態でも戦意は失ってない。そして抱えた一夏が狼狽した声を出す。

「少し静かにしろ。今のは明らかにお前たちの負けだ」

ルルーシュの無慈悲な言葉。それに二人が反論しようとした矢先、

ルルーシュからも一言。

「負けを認めることもできないのか。客観的に自分の状況を判断しろ。頭に血が上った今のお前達は、酷く哀れでみつともない」

「「っ!!」」

その言葉で二人が落ち着いて行くのが、ここにいてもわかる。

「・・・だが友達が世話になったな。諸事情で今の私は気分が悪い。ガラクタになる覚悟は出来てるか？ 出来てなくても壊る^ゃが」

ルルーシュが機体の異様に長い腕をラウラに掲げる。

「ハッ、所詮貴様も私の前では有象無象の一つでしかない。消してやる」

ラウラは手刀を二本展開してルルーシュに向ける。

（これはもう、一触即発どころじゃない！）

「————『ランスロット』！」

僕もパーソナライズと同時に《ヴァリス》を呼び出して瞬時加速。
そのまま二人の間へ————！

ガギンッ!!

「二人とも、やめるんだ」

「・・・やれやれ。これだからガキの相手は疲れる。ここでマトモなのは柩木だけか？」

「スザク！ 千冬姉！」

僕は二人の正面に立ち、ルルーシュに《ヴァリス》を突きつけ、ラウラの手刀はMVSで受け止めようとした。

だがラウラの手刀は織斑先生がIS専用の近接ブレードで止めていた・・・生身で。

「模擬戦をやるのは構わんが、アリーナのバリアーまで破壊する事態は教師として容認できん。この戦いは学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るのなら」

織斑先生には従順なラウラは、ISを戦闘形態から待機状態へ移行する。

「・・・・・・・・了解しました」

顔は見えないが、不満そうなルルーシュの声と共に『蜃気楼』は消え、制服姿のルルーシュへと戻る。

「柩木、織斑、デュノア。お前達もそれで構わないな？」

「わかりました」

元々止めようとしてたので異存はない。

僕も『ランスロット』を解除する。解除された『ランスロット』は待機状態の起動キーへ戻る。

「あ、あ————は、はい!!」

「僕もそれで構いません」

言い直す一夏にシャルルも追従する。それを聞いて織斑先生はアリーナ内の生徒全員に言う。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

バンッ！ と織斑先生が手を強く叩く。

「ランペルージは私について来い」

「ちっ………わかりました」

微かな舌打ちが聞こえたが、おとなしくルルーシュは織斑先生について行く。

「さ、二人を保健室に連れて行こう」

僕の言葉に呼応して一夏たちはアリーナを出た。

て安心したぜ」

「こんなの怪我のうちに入らな——————いたたたたっ！」

「そもそも横になってること自体無意味——————つうう！」

一夏とセシリアたちが話して、大声を上げたせいか二人が苦痛で悶える。

「今回ばかりは、ルルーシュの言うとおりだよ。二人とも」

負けず嫌いは結構だが、今回は負けを認めないといけない。誰が見ても彼女たちの負けだ。

「・・・だな。四対一であそこまで圧倒されたんだから、仕方ない」

「圧倒なんかされてない——————いたたたたっ！」

「わたくしならば余裕で——————つうう！」

一夏の言葉に反論する二人。そのプライドは呆れを通り越して感心するよ。

「きっと、好きな人に恥ずかしいところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「「？」」

シャルルが飲み物を持ちながら入ってきて、何かを言ったが僕には聞こえてこなかった。

しかしそれは僕と一夏だけだったらしく、ちゃんと聞こえたらしいベツトで寝てる二人は顔を真っ赤にした。

「ななな何言ってるのか、全っ然っわかんないわね！こここここれだから欧州人って困るのよねっ！」

「べべっ別にわたくしはっ！そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですが頂きましょうっ！」

二人は飲み物をひったくり、ゴクゴクと一気に飲む。

「先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら――――」

ドドドドドドドドツ・・・・・・！

一夏の言葉を遮るように変な音が聞こえてくる。

「な、なんだ？ 何の音だ？」

「僕に言われても」

地鳴りのような音は、どんどん音が大きくなってる気がする。いい予感はない。

ドカーン！

「のわっ！？」

「何っ！？」

いきなり保健室のドアが吹き飛んだ……。目の錯覚でなければ本気でぶっ飛んだ。

「織斑君！」

「柩木君！」

「デュノア君！」

入ってきたと言うより、雪崩れ込んだが似合うように女子達が保健室に来て、僕らを見つけるなりその周りを囲んだ。な、何？僕らが何かした！？

「な、な、なんだなんだ！？」

「い、一体これは何の事態？」

「ど、どうしたの、みんな・・・？ちょ、ちょっと落ち着いて」

「「「これ!」」」

状況が読めない僕ら。それを悟った女子一同は一枚の紙を渡す。

それは学内の緊急告知分が書かれた申込書だった。

「ん?・・・『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦を行うため、二人一組での参加を必須とする。締め切りは――――』」

「ああ、そこまでいいから!　とにかくっ!」

わっさわっさと伸びてくる手。こういうの洋画で見たことある。

「私と組もう、織斑君!」

「私と組んで、デュノア君!」

「私と組んでよ、枢木君!」

え・・・・・・・・ええー。組んでって言われても・・・あ、そうだ。

「「僕（俺）はシャルルと組むんだ・・・・・・・・え?」」

なぜか一夏とハモった。この頃彼とハモることが多い。

「スザク。ここはちょっと譲ってくれないか?」

「いやいや。ちょっと待とう一夏。ここは僕に譲ってくれないかな

「？」

「俺に女子と組めというのか？」

「それは僕も同じだよ。・・・よしシャルル。僕と一夏、どっちと組みたい？」

「えっ!？」

いきなり話を振られたシャルルは驚く。しかしこれが一番の解決方法だ。

「えっと・・・それじゃあ・・・す、スザクが・・・いい・・・かな？」

顔を赤くして遠慮気味に言うシャルル。

「マジかよ。俺女子と組むしかないのか・・・」

「まあまあ。頑張って」

シャルルは女子だから、正体を知っている人以外と組むのはマズイ。なので必然的にシャルルは僕と組むことになる。と言う事で一夏、僕も女子と組んでるよ。

「まあ、そういうことなら・・・」

「他の女子に組まれるよりはいいし・・・」

女子達が残念なんだか嬉しいだか分からない呟きをもらす。

「んじゃ俺、誰と組めばいいんだ・・・？ あ、箒でも誘ってみよう。幼なじみだし」

「ま、妥当だね」

そんな会話の中、女子達は愚痴りながら退室していた。

「幼なじみってズルイ・・・」

「卑怯だ・・・」

って感じの愚痴だった。これでやっと静かになったと思ったたら・・・。

「一夏っ！」

「一夏さんっ！」

ガバッとベットから飛び出て一夏に詰め寄る鈴とセシリア。

「あ、あたしと組みなさいよ！ 幼なじみはあたしもでしょ！？」

「一夏さん！ ここはクラスメイトとしてわたくしと！」

「・・・怪我人が無理しちゃいけないよ」

一応言っておいたが全く聞いてない・・・仕方ないか。

「ダメですよ」

いきなり声がしたので後ろを向くと副担任、山田先生がおられた。

「お二人のISの状態をさっき確認しましたがけど、ダメージレベルがCを越えています。今は当分修理に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

・・・うーん？　よくわからないけど、鈴とセシリアはトーナメントに参加できないと言う事か。

「じゃあ大丈夫そうだし、僕は先に退室させて貰うね」

「？　おう。また明日な」

「うん」

そうして僕は保健室を出る。

「ルルーシュの機体『蜃気楼』・・・僕らの世界の『蜃気楼』と形が酷似していたな・・・」

これはカレンと話し合ったほうがいい。

「また新たな議題か・・・」

憂鬱な気持ちになりながら僕はカレンを探しに歩いた。

絶対守護領域も飛翔滑走翼も酷似していた。はたしてこれは偶然と
言う事なのか？

「じゃああのルルーシュはやっぱり、私たちの世界のルルーシュっ
てこと!?!」

「いやそうとは限らない。ルルーシュの機体を作った人が、僕らの
世界の人かもしれない」

さらにこれら全てが、全くの偶然と言う可能性も捨てられないから
厄介だ。

「早い話、ルルーシュに聞けば全て解決だけど、そうになると僕らの
事情も話さなきゃいけない」

「それは……今の段階では軽率すぎるわね」

結局は今まで通り、下手な動きをしないで様子を見るということか。

「だけど心に留めて置いて。学年別リーグマッチトーナメント、何
が起こるかわからない」

平行世界のルルーシュの機体が『蜃気楼』ということと、この前の
『モルドレッド』によるアリーナ襲撃。共に僕らの世界が関係して
いる。

これは偶然にしては話が出来すぎてる。僕らの世界の誰かが仕掛け
たというのは確実だろう。つまりまた仕掛けに来る可能性が高い。

だけど、それだとまた新たな疑問が浮上する。

「目的はなんだろう？」

「………さあ？」

その人物の目的。一体何を目的にしているか、僕らにはわからない。

「まあ悩んでも解決しないか。今日の所は帰ろう」

「そうね。それじゃあおやすみ」

「おやすみ」

手を振って自分の部屋に行くカレンに、同じく手を振りかえして僕も帰路につく。

—————誰であろうと仲間を傷つけるなら、僕と『ランスロット』が黙ってない。

「僕らを敵に回すなら、相応の覚悟をしておけ」

誰もいない暗がりの廊下で、僕はまだ見ぬ敵にそう呟いた。

「『蟹^{ソイツ}気楼』は、私が奴^{やつ}からもらったデータを基に作った。なら私にも口出しする権利はあるだろう？」

「……………はい。しかし強制権は無いはずです。彼女^{彼女}はどこ吹く風ですから、止まったのがたまたま貴方^{あなた}だったと言うだけ」

「まあな。だがそれはそれだ。とにかく、あまり多様はするなよ。バレたら面倒なことになる」

「はい。それで奴ら……………『黒騎士^{黒騎士}』については？」

「今のところ情報は無い。情報^{情報}が無いというのが情報だ」

「……………動いてるという事ですか」

「気をつけろよ。お前の力をまだ奴らは……………」

「わかってます。決着は自分の手でつける。あの時、そう誓ったので」

「……………ふん。ならもう帰っていい」

「失礼します」

ルルーシュは流れるような動作で、その部屋を後にした。

一人になった千冬は、簡易な鉄パイプ椅子に体重を預ける。

「『黒騎士』……………お前は何故、彼女^{彼女}にあんな咎^{とが}を背負わせ

たんだ・・・・・・・・」

それは独り言か、あるいは誰かに対する問いか、それがわかるのは千冬だけだった。

彼らに数々の疑念を抱かせる元凶、学年別リーグマッチタッグトーナメントまで、約一ヶ月。

この世界は彼らを中心に、些細なほどゆっくりと――――
だが確実に狂い始めた。

それは様々な戦いゝ対抗戦の前ゝ（後書き）

次回は学年別トーナメントです。ついにあの機体が！？（ルルーシユのじゃないです）

感想あったら下さい。

翼を持った紅蓮は飛翔し、白き騎士は迎え撃つ（前書き）

題名長いし内容が……。けど気にはしていないよ？

※新キャラです。ちょっと重要なキャラです。放置してた問題にかかわりのある人です。フラグは知りません。多分……。立つ……。かな？

翼を持った紅蓮は飛翔し、白き騎士は迎え撃つ

六月も最終週に入り、IS学園は月曜から学年別トーナメント一色にと変わる。

その慌ただしさは予想どおりというか何と言うか、一回戦が始まる直前まで色々と仕事があった。

仕事から開放された生徒はアリーナの更衣室へとダッシュする。

「一夏」

「ん？　なんだスザク」

「あの話、本当なのかい？」

「……………嘘つく理由も無いだろ」

呆れたように僕を一瞥する一夏。でもいきなりあんな話されても信じろって…………。

「でもそれが原因みたいだね」

「ああ。俺だってあん時は無力な自分が許せなかった。だが、それを理由にラウラと戦う気にはならない…………ま、アイツとは違う理由で闘いたいけどな」

「へえ。でもまあ、僕は僕でベストを尽くそう……………気に

なることもあるし」

聞いてみたのはラウラと一夏の因縁。

簡単に話をまとめるところだろう。

一夏は突然『謎の組織』に誘拐され、それを救ったのは織斑先生だったという。

だけど織斑先生はその日、第二回IS世界大会『モンド・グロッソ』の決勝戦を投げ出してきたという。

その結果、織斑先生は不戦敗で、世界大会二連覇という偉業を達成することは出来なかった。

なぜ織斑先生が一夏を助けることが出来たかと言うと、何故か当時その情報を持っていたドイツ軍から一夏の情報を貰ったため。

つまり織斑先生は、ドイツ軍に一種の『借り』を作ってしまった。

それを返すため織斑先生は、一年間ドイツ軍で主にISに関する教官を務めたという。

そしてラウラは当時の織斑先生の教え子であり、その織斑先生の強さに心酔や敬愛をしている。

そして織斑先生の経歴に傷をつけた————世界大会二連覇という偉業を邪魔した一夏が、ラウラは許せないというらしい。

これがラウラと一夏の因縁。

僕から言わせれば『そんな理不尽な話があるか』と思うところだが、一夏もラウラもそれぞれ固い決意があるので、僕から言えることはない。まあ部外者^{ぼく}の言葉など必要も無いだろうし。

「あ、そういや、シャルルはどうした？」

「え！？ い、いや、先に行ってたと思うよ？」

「ふーん。そうなのか」

いきなり驚くべき質問をされたが、なんとか誤魔化せた。

「……ここだけの話、シャルルは女子なので男子と一緒に着替えと言うのは……ダメ。」

だから先に行って着替えて欲しいとお願いした。アチラもOKを出してくれた……当然か。

なんて考えていたら、更衣室の方まで着いた。

「あ、来たね」

入るとすでにISスーツを身に纏っているシャルルがいた。

それでも男子の更衣室には、僕や一夏で三人しかいないからさびしい。

「しかし、すごいなこりゃ……」

一夏がモニターから観客席を見て眩く。

そこには各国の政府関係者や研究員、その他諸々……いろんな人が観客席を埋めてた。

（うーん……。『ランスロット』はちよっと控えめに使うべきか

な)

各国のIS関係者が来ているということは、僕のISが目をつけられる可能性が大。

そうなるその後々、色々と面倒なことになりそうだ。目立たない程度に負けておくべきだろうか。

(あ、すでに『ISを使える男子(二人目)』ってことで、僕は有名なんだっけ)

これは盲点だった。でもそれじゃあ控えめにすることは不可能。開き直って派手に行こう。

一応僕は日本の代表候補生だし、日本政府の方々が何とかしてくれると信じよう。

「まあ、三年生はスカウト、二年生は一年間の成果をそれぞれ確認しに来てる人も居る。一年生は今のところ関係ないけど、トーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労なことだ」

「人事じゃないよ。一夏は有名なんだから」

「・・・ああ」

「一夏はラウラさんの対戦だけが気懸かりらしいね」

「まあ、な」

ちなみに一夏はちゃんと箒とペアを組んだ。箒の様子が普段と違っ

たが、何があつたのだろうか？

「セシリアたちの分も頑張らないと。仇って言うのは変だけどさ」

「そうだな。自分の力を試せないのは・・・辛いだろうからな」

一夏は無意識なのか左手を握り締める。緊張してるような口ぶりだ。

「シャルル。頑張ろう」

「うん」

「俺も頑張るか・・・。二人とも、言っとくが負けないからな？」

そんな一夏の言葉に僕は思わず笑ってしまった。

「ハハッ、冗談がうまくなったね一夏。振り返ちにしてあげるよ」

「—————言ったなスザク？ 後悔しても知らないぞ」

「—————前言撤回はしないよ。君こそ、覚悟しておくんだね」

バチバチと僕と一夏の間で、視線が火花を散らす。男は意外と負けず嫌いなんだ。

「盛り上がってるとこ悪いけど、そろそろ対戦表が決まると思うよ」

「そうだな。準備も出来たし行こうか」

「はいはい」

そういえばそうだった。

どういう理由かは知らないけど、突然のペア対戦への変更が成されてから従来まで使っていたシステムが、うまく機能しなかったらしいから今朝手作りの抽選クジを作ったらしい。

なんか作為的なことを感じているのは、僕だけではないだろう。

「一年の部、Bブロック一回戦一組目なんて運がいいな。二番目だが」

「そうかな？ 自分の手の内を早めに晒す事になるけど・・・ああそっか。晒すも何も、一夏は隠すことが特にないか」

「・・・・・・・・悪かったな。接近戦オンリー機体で」

ちなみに僕らはAブロック一回戦一組目。つまり一夏より前————というか一番初め。

「あ、対戦相手が決まったみたい」

シャルルの言葉で僕らはモニターへ視線を向けた。

「————え？」

出てきた文字を見て、シャルルと僕はポカンと口を開けてしまった。

僕が試合前に心を落ち着けようと、なにか飲み物を飲みに向うと、ちょうど二人と会った。

カレンはウーロン茶、ルルーシュは相変わらずコーヒード。僕はスポーツ飲料を買う。

「いや驚いたよ。まさか一回戦目でカレンと当たるなんて」

「それはコッチのセリフよ。でも、負けないから」

「どうかな。翼の無いカレンには、勝率はあまり無いように思えるけど」

僕はコンクエスターとなって縦横無尽に空を飛べるが、カレンはまだ紅蓮式式のままだ。

闘いにおいて、空を制したものが勝負を制すといっても過言ではない。

「ふふん。そうやって余裕ぶって、負けたら恥ずかしいわね」

しかしカレンはルルーシュのような不敵な笑みを浮かべる。

（・・・なにか策でもあるのか？ やっぱり気は抜けないな）

元の世界では、機体の性能差を覆すカレンの操縦技術にいつも驚かされてきた。

そして舐めてかかると痛い目を見ることが経験済みだ。

「あ、そういえば、ルルーシュは誰と組んだの？」

「・・・・・・・・知らん」

「え？ 知らない？」

僕が何気なく聞くと、ルルーシュは苦虫を噛み砕いたような表情をして俯く。

「・・・・・・・・実を言うと、私はペア申請の締切日まで、学年別トーナメントがタッグ制になっていた事を知らなかった」

「え・・・・・・・・えええええっ！？ じゃ、じゃあ――――」

「ああ。間抜けな話だが、他にペア申請をしなかった奴と組むことになるそうだ」

ペアを組めなかった人は、組めなかった人同士の抽選でランダムに選ばれるという。

「しかしいつタッグに変わったんだ・・・？」

「え？ それってラウラとルルーシュがアリーナで一悶着したすぐ後だよ」

「・・・・・・・・その日は、織斑先生に捕まってたな・・・」

「・・・・・・・・ああ・・・・・・・・」

僕とカレンの口から、そろって同情的な声が出た。

あの人は一度捕まると、開放してくれるまで時間が掛かる。身を持

って体験した僕らなのでわかる。

「一体誰になるのやら・・・」

「ハハ・・・まあ頑張って」

「・・・スザク。一応私たちは敵同士なので、敵に激励される覚えは無いぞ」

「・・・はいはい。絶対に負けないから」

「コッチのセリフだ」

強気なルルーシュらしい、そんな捨て台詞を残して行った。

「さてと。私もパートナーと話してこなきゃ」

飲み終わったウーロン茶の容器をゴミ箱に捨てて、カレンもそういう。

「パートナー？」

「ええ。二組のヴァング・G・ベイルって子。なんというか・・・
明るい子よ」

「・・・・・・・・男の子っぽい、名前だね」

「それ本人の前で言っちゃダメよ。本気で怒るから」

そう言うカレンの目が据わっている。どうやらこれは真剣なことから

しい。

「わかった。けどなんでその子と？」

カレンとなれば、その動きについて行くことは容易ではない。それこそ同じ専用機持ちじゃないと。

「私の動きについてきたから。ちなみに『リヴァイブ』でね」

「ッ！ それは・・・スゴイね」

つまりそれは『リヴァイブ』でもカレンと張り合えると言う事だろう。

山田先生とまでは行かないだろうが、それでも一年生なら充分に異常だ。

「彼女が言うには『医者話によると、他の人よりちよいと神経系が発達してるんだって。ハーハッハッハッ！ ラッキーラッキー！ 幸福幸福！ ビクトリイイイイ！』って言ってたわ」

「え、えー・・・」

神経系が発達してるというのにも驚いたが、それよりそのハイテンションなノリに驚いた。

「ま、彼女は強いし気が合うしで組んだの」

「そうなんだ。あ、そろそろ試合が始まりそうだ」

「え？ あ、ホントね。それじゃあまたアリーナで会いましょう」

今はアリーナ。一回戦開始まであと少し。

シャルルとカレンのパートナーはISをすでに展開している。

僕はまだISを展開していない。それは目の前にいるカレンも同じだ。

「カレン……！ 専用機持ちを倒すとか、やっぱ無理だから……」

大声で自身のパートナーへ叫ぶ金髪の女子。彼女がヴァング・G・ベイルという方か。

容姿はクールっぽく、例えたとルルーシュ系の美少女と思える。体つきはスレンダーでスタイルがいいが、それより目を引くのは彼女の身長。

僕や一夏よりほんの少し低く、ルルーシュと同じか少し高い背がある。あれは女子としてはかなり背が高い方に分類されるだろう。それだけならルルーシュっぽいが、常時仏頂面のルルーシュと違い、彼女は人懐っこく余裕そうな笑みを浮かべている。元の世界で例えるならジノみたいな。

それが大人びいた容姿とは違って、僕と同年代と思わせる……
・なんとなく不思議な人だ。

ちなみに身に纏っているISは『リヴァイブ』だ。

「何言ってるのよ！ さっき余裕そうに『私に任せておいて（ギリッ）』って格好つけてたのはなんだったの！？」

「ソレハ、ワタシノオ？ ブリティッシュジョーク！」

出身はイギリスなのかな。日本人でもアメリカンジョークって言うけど。

「無駄に発音良くしないで！ ここはヴァング以外専用機持ちだから仕方ないでしょ！」

「それはそうだけどさあ？ 負ける戦いをしようとは思わないし〜」

「ああもうっ！ じゃあ負けないようにしなさい！」

「それが出来たら苦勞無いからっ！！」

なんか言い争ってる……。チームワークとか大丈夫なのだろうか・
・って敵の心配なんて不要か。

『そろそろ始めますよ。よろしいですか？ ベイル・紅月ペア』

教師らしき女性のアナウンスが響き、二人とも『も、もちろんです！』と焦ったように口論を止める。

「んんっ！ ヴァング？ とにかく負けられないようにね」

「はいはい・・・簡単に言ってくれるなあ・・・」

意気消沈の様子ヴァングさんだが、瞬時にライフル&mp,アサルトライフルを呼び出す。

「私も展開しなきゃ」

その言葉と共に、カレンの体の回りに赤い粒子が飛び回り、ピカッ！という光が消えると『紅蓮式』を纏ったカレンが佇む。左手にナイフを呼び出している。

「そういえば、僕もか」

まだ展開してなかった僕も『ランスロット』を纏う。そして片手にMVSと《ヴァリス》を呼び出す。

「カレン、僕は負けないから」

「私もよ。覚悟しなさい？」

試合開始まで後3，2，1――――スタート。

「先手必勝！」

試合開始のブザーと共に、僕は左手の《ヴァリス》を放つ。

「でしょうね！」

しかしといえば当然だが、それはカレンに読まれてかわされる。

「シャルル！ ヴァングさんをよろしく！」

「わかった！」

ヴァングさんはシャルルにまかせ、僕はカレンと一対一を仕掛ける。これが妥当だろう。

「はっ！」

僕はランドスピナーを轟かせ、カレンに急接近してMVSで斬りかかる。

「甘いわっ！！！」

だがその攻撃はカレンの十手に阻まれ、そのまま輻射波動の付いた右手が僕に迫る。

「だがっ！」

僕はアリーナ上空へ『瞬時加速』して難を逃れる。

そういえば、この状態で射撃すれば『紅蓮』を簡単に倒せる。アレは接近戦の武装が主だし。

（だけど上空から射撃するのは、ちょっとフェアじゃないな）

そう思って僕は高度を下げる——————所でカレンの様子がおかしいことに気付いた。

(・・・？　なんで機体が発光しているんだ？)

『紅蓮』の装甲が淡い緋色のように発光している。その光はどんどん強くなっていく。

(あれは確か—————僕があの時・・・っ！　マズイ！)

確かアレは—————アリーナ襲撃のときに僕が『一次移行』したのとはほぼ同じ現象だ。

つまりカレンの『紅蓮』はすでに—————

「スザク。今まで黙ってたけど、翼があるのは貴方だけじゃないのよ！」

カレンの怒号に呼応するかのよう、『紅蓮』の緋色の光がより一層強く発光する。

「飛べえええええええっ!!」

そして発光しながら、空を飛んで僕の方に接近してくる。

「くっ！」

僕はその場を旋回しそれをかわす。

『紅蓮』はそのままさらに上空まで上がる。そこで鼓動するかのよう
に緋色の光が点滅する。

――その姿は、空を染め上げる真紅の太陽のように――

「舞い上がれ！ 『紅蓮可翔式』！」

光が収まって行くと、『紅蓮』の姿が変わっていた。

頭部が大きい流形なフォルムへと改まり、背中には赤き翼《飛翔滑
走翼》が、まるでX字を描くかのように開いた。

そして『紅蓮』の主装備である右腕をこちらに向ける。十メートル
は離れている僕に。

「来るか！」

ここにいる全ての人にはわからないが、僕だけは闘ったからわかる。

今まで『紅蓮』の輻射波動は、絶大な威力の代わりに零距离で照射
しなくてはならなかった。

だが『紅蓮可翔式』は違う。その右腕はゼロ距離だけではなく――

「いっけええええええっ!!」

――ロングレンジ照射も可能となったんだ。

予測したとおり、『紅蓮』の右腕から赤黒いレーザーが照射された。僕は《ブレイズルミナス》を張って軌道を逸らす。アレを防御するのは無謀だから。

「っ………カレンも人が悪いよ。いつの間に『一次移行』を？」

防いだ僕は上空にいるカレンと高度を合わせる。

「アリーナ襲撃から少し経った後かしら。訓練していたら『一次移行』ってコマンドが出たから、とりあえず押してみたら『可翔式』になったわ」

「……教えてくれても良かったのに」

「ふふん。驚いたでしょ？」

生憎、僕らの機体は全身装甲なのでお互いの顔色はわからないが、おそらくカレンは『イタズラが成功した子供』のような笑顔をしているんだろうなあ……。

「さあズザク。これでスペック上は貴方と同格よ」

「…………その通りだね。空を飛べるという条件は同じか」

『可翔式』は翼を手にしただけではなく、輻射波動のロングレンジ照射など応用性に富んでいる。

『コンクエスター』である僕と、マシンポテンシャル機体性能に差はないだろう。

「だが、その程度で負ける僕じゃないよ」

右腕の《ヴァリス》をバーストモードに切り替え、カレンに向ける。

「でしょうね。だから、力づくで勝たせてもらうわ」

カレンは左腕を後ろに下げ、アチラも右腕にある生まれ変わった輻射波動をコチラに向ける。

「叩き潰す」

————ドウウウンッ!!

僕の《ヴァリス》とカレンの輻射波動が同時に放たれ、その轟音と共に僕は突撃した。

————強き紅蓮を駆る稲妻と、白き死神を名乗る閃光が、この異世界で再びぶつかった。

[illegible]

数十分後。

「はぁ！」

僕の《ヴァリス》による連射で空を飛ぶ『紅蓮』を撃ち続ける。

「それぐらいっ！」

だが翼を手にした紅蓮は、まるで鳥のように自由自在に空を駆け、僕の攻撃をかわす。

「コッチの番ね！」

その言葉と共に、《飛翔滑走翼》から小型ミサイルが放たれる。

「くっ！」

僕はその場から移動するが、ミサイルなのでコチラを追尾してくる。

「それなら！」

僕は地面に急降下し地面スレスレを低空飛行する、それを追うミサイルは地面にぶつかり爆発。

それを見届け、僕は右手の《ヴァリス》を《ハドロンブラスター》と連結。発射体勢に入る。

「当たれっ!!！」

僕は低空飛行しながら、空にいるカレンに《ハドロンブラスター》

を放つ。

「当たらないわよ！」

それはかわされ、輻射波動による砲撃がコチラに迫る。

「チッ！」

僕は急上昇しそれをかわして、そのままMVSを持ちカレンへ接近する。

（このままじゃあジリ貧。ならこの突撃で一気に片を付ける！）

《ハドロンブラスター》を放った後、すぐに瞬時加速。アチラはどう出るか？

「————— なかったわね？」

ニヤリという擬音が聞こえてきそうな、カレンのその声に罠にかかったと言うのに気づいた。

それと同時に僕の機体の動きがおかしくなる。

「な、なんだ！？ う、動かない?!」

接近する途中で、急に『ランスロット』が停止した。空は飛んでいくからPICは止まっていない。

「忘れたのかしら？ 『可翔式』の装備を！」

その言葉で————一連の現象の原因がわかった。

「ゲフィオンディスターバー・・・！」

僕の周りに複数、リング状で浮いている緑色に発光している機器。

元の世界ではKMFの動力源に磁場を与えて、その活動を停止させるシステム。

元の世界で何度も引かかったシステムだ。そしてこれにはもう一つ副産物がある。

「ジャミングか・・・！」

そう。この機器には部分的なジャミングが働く。だから罠としては高性能なシステムだ。

「もちろん、細かい場所は違うけど、効果的にはアチラと同じよ」

右腕を僕に向けながら、ありがたーい解説をしてくれるカレン。

「なるほどね・・・。だけど、どうやら『ランスロット』もアチラと同じらしいよ？」

「え？————ぐっ！」

僕はゲフィオンディスターバーがかかっている状態で、カレンに対し《ハドロンブラスター》を放つ。

カレンは何とかかわしたが、それでも右肩に軽い被弾をさせた。

「『コンクエスター』はそれに対し、対策を施してあったからね」

ブラックリベリオン以降から、ブリタニアはゲフィオンディスターバー対策をKMFに施した。
そのため第五世代以降のKMFに、ゲフィオンディスターバーはほぼ効かない。

それは第七世代型KMFであった『ランスロット』も同じだ。そしてこのISはKMFの『ランスロット』を何故か忠実に再現している。

今まではPICが無かったりと不利な点が多かったが、今回はそれが利点となった。

「勝負はこれからだ！」

「・・・そうらしいわね！」

これで戦いはほぼ振り出した。勝負はまだわからない。

素早く考えを切り替えたカレンが、僕に対し右腕を向ける。

僕も《ハドロンブラスター》をアチラに向け、その引き金を引く――

「うぎゃああああああああっ!!！」

「「っ!？」」

いきなり女子とは思えない悲鳴がアリーナを木霊する。

「な、なに？」

「この声・・・ヴァングね」

呆れたような声でカレンが呟く。そして地面に叩きつけられてるヴァングさん。

「うきゅ〜・・・カレン！ やっぱり無理だっ〜！」

プシューと彼女の『リヴァイブ』の装甲から煙が出る。シールドエネルギーが尽きたのだろう。

「もう少し長引かせてよ！ これからだっただのに！」

「簡単に言うな！！ これでも頑張ったのにいいいいっ！！！」

カレンとヴァングさんが口論を繰り広げる。僕は・・・・・・・・どうすればいいかな。

「スザク！」

そしてシャルルが僕の所まで飛んでくる。

「シャルル。倒したようだね」

「うん・・・でも試合に勝って・・・勝負に負けた気分かな」

「え？」

シャルルが引っかかることを言う。

ちなみにシャルルのISの被弾は、右肩と左足の装甲が損傷、腹部にグレネードでも当てられたような痕。
これだけ見れば、苦戦したというのは伝わってくる。

「手強かったみたいだね」

「『みたい』じゃないよ。もしヴァングさんが専用機持ちなら、僕は負けてたと思う」

「そ、そんなバカな・・・」

シャルルの実力は一年生でもトップクラス。それは専用機持ちだからではない。彼女の単純な技量だ。
そのシャルルが技量で負けていた？

「—————僕の持ってる武装のうち、約八割が完全に破壊されちゃった」

「っ!？」

シャルルの武装は20以上の数。そのうちの八割？半分どころかお釣りが来る。僕もカレンも・・・できるかもしれないが、容易なことでは無い。

「そ、それ本当？」

「うん。損傷した武装も入れれば九割だね。無傷の武装なんて殆ど無いよ」

シャルルの言うとおり、両手に持っている武装も、スコープが吹っ

飛んできたり、バレルの一部が曲がってたりしている。

つまりそれだけの事が出来るということは、操縦者を倒すことなど難しくは無い。

あの余裕な笑みは本当に実力があるから浮かべていて、事実IS操縦技量はシャルルを超えているってことか……末恐ろしい人だ。

しかし引つかかることもある。

（でも、なんでシャルルに対し手を抜いたんだ？）

自分の力をわからせるため？
でもそれなら速攻でシャルルを倒せばよかった。わざわざ武器だけを中心に破壊する必要は無い。

なら一体何故？

「でも、まだ闘えるから大丈夫」

そのシャルルの声に、僕はまだ戦闘中だったことを思い出した。

「ならよかった。……さてカレン」

僕は未だに口論しているカレンに対し、言葉と銃を向ける。

「これで二対一だけはどうする？　僕は別に二対一をしてもいいけど」

「・・・・・・・・・・意地悪いわね、貴方も」

「ハハッ、だろうね」

ようは二つに一つの道だ。

僕とシャルルの二対一をするか、僕との一対一の後シャルルと一対一をするか。

「私にだってプライドぐらいあるわ。相手に譲歩された勝負なんて、やる意味ない」

「・・・・・・・・それじゃあどうする？」

「・・・・・・・・くやしいけど、降参よ。私たちの負け」

その言葉でカレンはナイフを戻し、右腕を下げる。それを見届け僕も銃を下げる。

そして試合終了のブザーが鳴る。

『試合終了。紅月カレンの降参宣言により、デュノア・枢木ペアの勝利とします』

アナウンスが響き渡り、この試合は僕らの勝利となった。

[illegible]

「いやいや～～！！
枢木は強いねえ！！
カレンから聞いたとお
りだ！」

「は、はは・・・はあ」

バンバンと僕の背中を叩くヴァングさん。そのほかには誰もいない。僕はこのハイテンションに、どうリアクションを返せばいいんだろうか？

ちなみに今は休憩所。

全てのブロックの一回戦第一試合が終わったので、一度数十分の休憩時間が設けられた。

これが終わったら各ブロックの第二試合が行われる。

人が何時間も集中し続けるのは不可能なので、一度休憩を入れなければ観客たちの負担が増すだけ。さらに外来の人も多数居るので、休憩時間は通常より多めに取られている。

ついでと言っては何だが、箒・一夏ペアも一回戦を難なく勝ち進んだ。

で、なぜ僕がヴァングさんと一緒にいるかと言うと・・・僕になんか興味があるとかで、今二人つきりで休憩場で飲み物を飲みながら話している。彼女はコーラ（ゼロカロリー）、僕は天然水（イオン水）だ。

ちなみにカレンとシャルルは鈴とセシリアのお見舞い。

「ホント強くてビックリしたよ！ まあ直接闘った訳じゃないけどさ」

その言葉で、僕はちょうど聞いてみたかった事を聞いてみた。

「それはつまり、シャルルとの戦いの中でも、僕の戦いを見てる余裕があったって事？」

「っ・・・・・・・・へえ。それに中々切れ者らしいね」

その言葉に彼女は驚愕の表情を浮かべる。しかしすぐに表情は余裕の笑みに変わる。だが今度は織斑先生のように高圧的な笑みとなった。

さながらそれは、エモノを見つけた豹の笑みだ。ついでに口調も変わった。

「・・・猫の皮を被った狼って所かな？」

「アハハッ！ 確かにそれは的を得てるね。枢木はユーモアだ」

何が面白いのかは知らないが、ヴァングさんは噴出しながら言葉を紡いだ。

「褒め言葉ってことにしとくよ」

「褒めてるよ？」

「そんなことより、なんで貴方が猫を被ってたか、気になるな」

と僕が言うと、ヴァングさんは飲み終わったコーラをゴミ箱に捨てて、僕が座るソファの隣に流れるように来る。あまりに自然すぎてイマイチツツコめなかった。

「貴方には心当たり、あるんじゃない？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わからないから聞いてるんだけど？」

「あっそ。じゃあまず、自己紹介から始めましょうか」

そしてヴァングさんは肩にかかった髪を後ろに流す。

「私の名前はヴァング・G・ベイル。これは本名よ。でイタリアの国家代表候補生で、政府の特務IS秘匿部隊——通称『テンペスター・クロイツ』の室長よ」

「ッ・・・・・・・・随分なご身分らしいね。明かしてよかったのかな？」

「そういう状況なのよ。主に貴方と、所持しているISのせいでね」
そしてズイツと僕との距離を狭めるヴァングさん。

「な、なに？」

「？別に。近くにいたほうが小声でも聞こえるでしょ」

いやでも・・・・・・・・急に美少女の顔が目の前に来れば、誰だって驚く。
妙に落ち着けない。

「誰だってISを動かせる男子がいたら、それを調べなくなるじゃない」

「・・・・・・・・・・」

「織斑は・・・・・・・・まあ姉が姉だから下手な手は出せない。と言うわけで白羽の矢が立ったのが貴方」

「・・・・・・・・・・」

「で、その担当をしたのが私。まあ各国も私のような人を送り込んでるでしょうけど」

「・・・・・・・・・・」

それを聞いて内心舌打ちをする。これではもう下手な行動は出来は

しない・・・いや手遅れかも。

「私の調べた結果を言うと、貴方は小学校低学年で両親は事故で他界。そしてすでに親戚などの血縁関係は無い・・・いわゆる天涯孤独。しかしいい経歴ね、都合よく過去を改竄できるわ」

淡々と僕の経歴を言うヴァングさん。すでに暗記してるってことか。

「それから政府からの奨学金で生活、中学三年の時に展示用として置かれたISに接触、そして起動させた。そのため特異ケース・・・組織一夏の事よ、と同じように問答無用でIS学園へ編入、現在に至る」

「・・・・・・・・・・」

「これだけ見れば、まあ異常だけど納得できないレベルではない。でもね、ここからが問題」

そう言って人差し指をピンツと立てる。

「まずは、貴方のIS操縦技術の異常性。私が見た貴方の経歴の限りには、特別目立った身体能力は無い。でも今までの戦闘記録は代表候補生と並ぶ・・・いやそれ以上の可能性が高い」

「・・・・・・・・・・」

こうなれば黙秘だ。下手なことを喋るわけには行かない。

そしてヴァングさんは次に中指を立てる。

「そして、貴方のIS・・・『ランスロット』って名前だったかしら？ 円卓の騎士に同じ名前の人がいたわ。だからイギリス関係かと思ったけど、そうじゃない。貴方にはイギリスと特別なかわりは全く無い。まあコチラの調べ不足かもしれないけど」

「・・・・・・・・・・だから？ どうなんだい？」

話を聞く限り確定した証拠は無い。なら開き直ってしまえばいい。

「貴方はそのISと操縦技術、一体どこで身につけたのかしら」

「・・・・・・・・・・わざわざ喋る必要性は感じないな」

「でしょうね。でも私みたいな人は結構周りにいるから。気をつけたほうがいいよ」

「気をつける？」

「だってそうでしょ？ 所属不明のISを所持し、異常な身体能力を持ち、さらにISを起動することの出来る男子。探るなって言う方が無理」

「・・・・・・・・・・君は、そのことをどうするんだ？」

ドスの効いた声で聞くと、彼女はあまり動揺せずに答える。

「政府に報告———と言いたいけど、貴方は紛いなりにも日本の代表候補生。変な事になれば国際問題に発展する。だからこれは伝えない。私は傍観ってことになるわね」

「・・・・・・・・賢明な判断で助かるよ」

「そんな殺気飛ばしておいて、よく言うね」

「そうか。それはすまない・・・で、カレンはそのことを知ってるのか？」

「喋ってないけど、私とその手の人間ってことなら気付いてるんじゃない？ 意図的に近づいたことも気付いてるでしょうし」

「それはなぜ・・・？」

と聞くと彼女は一度息を吐いて、コチラの質問には答えずアチラが質問する。

「貴方はカレンから、私について何か言われなかったかしら？」

「・・・・・・・・テンションの高い明るい子」

「はあ?!」

と言うと、彼女は顔を赤くして変な声を出す。おそらく恥ずかしいんだろう。

「そ、それは違うのっ!・・・ホラ! カレンみたいな正体のわからない人に接触するには、今の私みたいなキャラじゃなく、お気楽キャラの方がいいって思っで・・・だ、だから・・・えっと・・・」

「ふっ」

「わ、笑わないでよ！ あのキャラって結構恥ずかしいんだから！」

「ゴメンゴメン。なんか新鮮で」

常に余裕の笑みを浮かべた彼女が焦る姿と言うのは、とても可愛らしく面白かったので、つつい笑ってしまった。

「んんっ！ 話を戻していいかしら」

咳払いで息を整える彼女。

「好きに」

「じゃあ改めて聞くけど、カレンは私の事なんて言ってた？」

「……さっきの「じゃなくて」……自分について
これる、強い子」

「そうよ。『リヴァイブ』でついていくの大変だったんだから」

はぁ……とため息をつく彼女。僕は使ったことが無いのでわからない。

「でもおかしいと思わない？ カレンがどうして私が強いって思ってるか」

「……模擬戦闘をしたんじゃないの？」

カレンはほぼ毎日、アリーナに顔を出しては訓練している。偶然そこにヴァングさんが来て、そのまま模擬戦をして……と思ってた

けど。

「なんで二組で大した接点もない私に、カレンと模擬戦が出来るの？」

「それは・・・」

確かにそう言われると引かかる。

「まあ簡単。予めカレンの行動を監視して、アリーナでブックイングするように『リヴァイブ』の使用許可申請をする。で、そこで私がわざと操縦技術をアピールすれば、カレンの興味が私に向く。そこに今の私の『調子のいいお気楽者』ってキャラで話しかける。そして模擬戦に誘う。これで終了」

「・・・・・・・・・・」

「最初は正直、計画通りって感じで余裕だったけど、一緒にいてカレンの身のこなしが、一般人とはかけ離れてることに気付いて『これはヤバイ』と思った。けどもう気付いちゃったみたい」

「意図的に近づいたことが？」

「まあそれと私の目的とか。わかった上で泳がせてたんじゃない？ 食えないよねえ・・・カレンも」

と口で入ってるが、ヴァングさんは満更でもない感じだ。

「これで難しい話は終わって欲しいんだけど。僕はまだ試合があるから」

「それもそうね。私も疲れてきたわ」

そう言って立ち上がる。そして座った僕に視線を向ける。

「できれば、みんなの前では私のキャラにあわせてくれないかしら」

「どうだろうね」

「……あゝ今、誰かの経歴をブログにUPしたい気分だな
ゝゝ、しちゃおっかなゝゝ」

「ひ、卑怯だ！ プライバシーの侵害！」

「わかれば、言う通りにしてもらえないかしら」

「……はあ。わかったよ。そうする」

抗いは無駄。素直に受け入れておこう。別にデメリットがあるわけでもない。

「それと伝言も」

「伝言？ 誰に？」

「カレン。代わりに伝えてくれない？ 『改めて友達になりたい』って」

「……それは自分の口で言うべきだよ」

「ちゃんと言うわよ。だけど、乙女には色々と事情があるの」

「はいはい・・・そうですか」

朴念仁らしい僕には全く理解できませんよ。

「それじゃついでに。貴方の事スザクって呼んでいいかしら。その代わり私の事も呼び捨てでいいわ」

「別に構わないよ、ヴァング」

「ん、ありがとスザク」

と言われて手を出される。へ？

「なに？」

「なについて、友情の握手よ。日本ではこうするんでしょう？」

「ああ・・・そう」

僕も立ち上がり、彼女の正面に立ってその手を握る。

「改めて、ヴァング・G・ベイル。よろしくね」

「枢木スザク。よろしく」

こうして共犯のような友情関係が成立した。成立してよかったのか、疑問はあるが。

「あ、そういえば」

「なに？」

「君の名前に入ってるGって何の略？」

フルネームを聞いた時、ちょっと気になって何気なく質問した。・
・後で後悔するが。

「・・・まあ隠す必要も無いね。Gは『ジノ』の略よ。私の本当の名前は『ヴァング・ジノ・ベイル』」

「へえ、ジノか。・・・・・・」
「え？」

ジノ？ あれ、偶然にも知り合いに同じ名前の人があるな。

いや・・・・・・ちよつと待てよ。彼女の名前・・・・。

『ヴァング・ジノ・ベイル』↓↓↓並び替えると『ジノ・ヴァインベルグ』になる。

えっと・・・つまり？ この金髪美少女は・・・？ 平行世界の・・・
ジノ？

「ウソオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！？！？
！！？」

「嘘じゃないわよ！ 人の名前に文句言わないで！」

ハハハ・・・僕は改めて、平行世界が恐ろしくなったよ。

[illegible]

「いきなり失礼よ。人の名前にケチつけないで」

「ゴメン」

「ま、許してあげる。私にとっては優しいから」

⌈
•
•
•
•
•
•
⌋

「何か言いたそうね？」

「別になにもないよ。自己申告ほど信用できるものはないって実感してただけだから」

「・・・喧嘩売ってる？なら買うよ？」

「まさか」

長い休憩時間が終わり、各ブロック一回戦第二試合の組み合わせが決まった。

（でもアレはないよ・・・）

そしたらなんと、ラウラとルルーシュが組んでしまった。

なんだそれ、強敵すぎる。しかもAブロックなので次の試合で当たる。

負ける気は無いが、勝つには修羅場を潜らなければ。

そして今は、ヴァングと共にアリーナの観客席を歩いている。もちろん目的は、ルルーシュたちの試合を見るため。

「あ、スザク。こっちこっち」

「遅かったわね」

「シャルル。それにカレンも」

観客席に陣取っているカレンとシャルルがいた。

「あれ？ ヴァングさん」

「およ？ ああ〜デユノア君。さっきの試合凄かったよ！私もまだまだね〜」

「そ、そんなこと無いよ！ 専用機があればヴァングさんも僕に勝てるって」

「そう？ そう言ってもらえると嬉しい〜。それと私は呼び捨てでいいよ。その代わり名前で呼んでいい？」

「うん。よろしくヴァング」

「よろしく〜シャルル〜」

といって握手するシャルルとヴァング。

「……………スゴいな」

隣で見ている、あのキャラのヴァングを知った後、このキャラを見ると別人だ。

「あれれ？ スザク、何がスゴイのかな？ かな？」

僕の小言が聞こえたらしいヴァングが、笑顔でコチラに言ってくる。しかし目は笑ってない。これはあれだ、『余計なこと言うな』と訴えかけている。

「いや別に」

「そう？ ならいいけどね〜」

軽い身のこなしでシャルルの隣に座るヴァング。僕もカレンの隣に座る。

「スザク」

「ん？ 何カレン」

「・・・・・・ヴァングの事だけど」

少しトーンを落とした声で呟く。なるほど、ヴァングの事はすでに気付いていると。

「ここでは言えない。後で直接聞いて」

「・・・・・・わかった。貴方何か言われた？」

「別に大した事は。あつ、でもさ」

「ん？」

「彼女が言ってたよ。『改めて友達になりたい』って」

「ッ！ そう・・・・そうなの」

カレンはその言葉で何かを納得し、流し目でヴァングに視線を送る。ヴァングはシャルルにハイテンションぶりを見せつけ、こちらの視線に気付き手を振った。

「聞いてみましょうか」

「それがいいよ・・・っと。そろそろか」

アリーナの入口からISに身を包んだラウラとルルーシュ、その反対側からは対戦相手が出てきた。

「ルルーシュの実力・・・」

「どうなのかしら。チームプレイはしないだろうけど」

それには賛成だ。ラウラとルルーシュなんて異色過ぎるコンビに、コンビネーションはキツイ。

『両ペア、指定の場所まで移動してください』

アナウンスが響き、ルルーシュたちは所定の位置に移動する。

「・・・・・・・・・・蟹気楼」

「カレン。今はそれよりルルーシュたちの技量だ」

「・・・・・・・・ええ。わかってるわ」

試合開始まで・・・・・・・・・・3、2、1――――スタ
ート。

ブザーの音と共に、
蜃気楼まぼろしと黒い雨シュバルツェア・レーゲンは動いた。

翼を持った紅蓮は飛翔し、白き騎士は迎え撃つ（後書き）

いきなりRADIOだぜ

ルルーシュ・作者「『作者の愚痴りRADIO』始まります」

ちょっと短いISオープニング曲

作者「は〜い読者の皆様、どうも〜。作者ですよ」

ルルーシュ「どうも。ルルーシュ・ランペルージです」

作者「いきなり始まりました」

ルルーシュ「ほんとにな。いきなり何を言い出すのやら」

作者「あ〜聞こえないZE！ これからもちよくちよくやろうかと思ってます」

ルルーシュ「ご苦勞なことだ。もしかしたらこれが本文を越すかな」

作者「何を世迷言を。私の本文は大体5千文字を越えるのだよ」

ルルーシュ「無駄なことをダラダラな」

作者「うつせ！」

ルルーシュ「なんでもいいから、さっさと帰らしてくれ」

ルルーシュ「終わったらね。この番組は、IS《コードギアス》だけの提供でお送りします」

ルルーシュ「金はかかってないがな」

作者「気にしないで。私たちがパーソナリティだからこう言わないと」

ルルーシュ「私は強制だろうが」

作者「作者一人のラジオに、一体何の需要が？」

ルルーシュ「まずこのラジオ……っぽいものをやる意味が分からない」

作者「え？ 題名の通り愚痴でも語ろうかと」

ルルーシュ「よし、帰るか」

作者「いや待ってよ！ 少しぐらい付き合ってよ！」

ルルーシュ「……………仕方ないな。可哀想な作者のためだ……」

作者「いや……そんな嫌そうな顔されてながら言われても……」

ルルーシュ「さっさと進行して、さっさと終わらせてくれ」

作者「ああもうっ！ 了解いたしました！！」

ルルーシュ「で？ 常時お気楽で能天気な作者が愚痴りたいことは何だ？」

作者「貴方は一々私に毒言わなきゃ喋れないの？！」

ルルーシュ「今更気付いたか」

作者「まさかの肯定！」

ルルーシュ「さっさとしろ。私がつまらなくなつて眠る前に」

作者「・・・仕方ない。じゃあ愚痴るぜっ！ 前話の感想にあったけど、なぜ登場機体がバレた！？ コチラが漏らした覚えは無いのに！！」

ルルーシュ「伏線の張り方が下手だから読まれたんだ。乙」

作者「乙だけかつ！」

ルルーシュ「お疲れ様」

作者「変わってないよ！？」

ルルーシュ「えー、こんなダメダメ作者の駄文な駄作に、嫌々ながらも同情のような形で付き合っていただき、誠にありがとうございます」

作者「・・・よく本人の前で、そんな毒言えるね・・・悲しみを通り越して尊敬しちゃう・・・」

ルルーシュ「？ 事実を躊躇う必要がある？」

作者「それは思っても言わないで！ってか自分でも思ってるから！」

スザク「まあまあ二人とも。こんな会話、読者様に読ませなくていいよ」

作者「おおっ！ 我が小説の主人公（仮）の枢木スザク！」

スザク「どうも。主人公（仮）こと、枢木スザクです」

ルルーシュ「（仮）はなんだ？」

作者「もう一人の主人公ってこと」

ルルーシュ「なんだ。それだけか」

作者「勝手に答えのハードル上げないでくれる！？」

スザク「まあまあ落ち着こうよ。ええっと、僕はこの小説では主人公じゃないんです。一夏が原作の主人公で僕はイレギュラーですから」

作者「そうそう。こっちにも考えがあるの」

ルルーシュ「……………ハッ」

作者「鼻で笑われた!？」

ルルーシュ「ああすまない。作者があまりに愚図で笑えたので鼻で笑ってしまった」

作者「ヒドイ! こうなったら次回の予告しちゃうんだからね!？」

ルルーシュ「キモイからさっさとしろ」

作者「そこまで言う!？ ……ええつとですな、それでは予告っぽいことをさせてもらいます。学園別トーナメントは……おそらく5話ぐらい続くと思います」

スザク「今回は変な場所で切ったしね」

作者「仕方ないのだよ。更新が遅れる訳にはいかないし」

スザク「それもそうだね」

作者「……………喋り方にツツコミが入らなかった……………」

ルルーシュ「話を戻すが、話はこれより短くなる可能性があります」

作者「そして!間違っても長くなることはありません」

スザク「誤字脱字、感想があったらお願いします」

ルルーシュ「さて、これに飽きたし私は機体の調整にでも行くか」

スザク「それじゃあ僕も。まだトーナメント終わってないし」

作者「ええっ！？放置プレイ！？私にそんな趣味は無いよ！？」

ルルーシュ・スザク「「コツチにも無い（よ）。ただ面倒なだけ（だ）」」

作者「ええっ！？ほ、本当に行ってしまった・・・グスンッ・・・寂しい・・・もういいや、終わろう。読者様のみなさま・・・さようなら。また次回に会いましょう！そんなじゃ！」

終了

黒き雨は白を潰す豪雨となる（前書き）

題名は気にしない。

黒き雨は白を潰す豪雨となる

これは試合開始数分前の会話。

組み合わせが決まったラウラとルルーシュは、ISスーツに着替えながら話している。

「まさか貴様と組むとはな」

「まったくだ。お前を叩き潰したかったのに、本当に残念だ」

「ふん。私は織斑一夏を排除すれば、それでいい」

「そうか……まあ私には関係ない」

着替え終わったルルーシュは、時間つぶしのため自販機の天然水（アルプス産）を買う。

「私の邪魔をするなよ」

ギロリと水を飲むルルーシュを睨むラウラ。ルルーシュは気にせず話す。

「わかった。だがそちらが私の邪魔をしたら、コチラも対応の対応を取らせて貰うが？」

「貴様は黙って見物してればいい。私が全て終わらせる」

X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X

時は戻り試合。

動き出したと思った二機だが、実際はラウラしか動かなかった。

ルルーシュの駆る蜃気楼は、少し後ろに下がって直立して腕を組んだ。

さながら、やる気がない見物者のように。

「・・・邪魔する気は無いようだな」

それを見届けたラウラは、改めて『打鉄』と『リヴァイブ』を纏った対戦相手に向き合う。

「世代差と言うのを見せ付けてやるか」

肩にある大型実弾砲を、シュバルツェア・レーゲンを見て気押されてる対戦相手に向ける。

(・・・・・・ふん。素人が私の前に立ちふさがるからだ)

それを見て密かにA I Cを発動、砲撃に備えた二人の場所まで領域を広げる。

すると当然、領域内の相手は動くことが出来ない。

「あ、あれ?!動かない!」

「ど、どうして!!」

大砲を向けられたといって、バカ正直に砲撃が来る訳でもない。まして相手が性能差で下回ってるなら、先手を取った方が戦場を有利に運べる。

そんな事もわからず動揺してはただの的だ。それこそ『砲撃してくれ』と言ってるようなものだ。

「・・・・・・自分で考えるんだな。ともあれ、もう終わりだ」

そして大型実弾砲が、止まった二人に連射される。

「きゃああああああああっ!!」

かわすことのできない二人は、その連射に成す術なく撃たれて行く。

(・・・・・・ここまでレベルが低いのか。くだらない、虫唾が走る)

ラウラはA I Cはすでに切っている。だから動こうと思えば動くことが出来るはず。

なのに相手は、自分の連射にかわすどころか防除の姿勢も見せない。

つまりすでに勝負を諦めている。もしここが戦場なら、それは生き
ることを諦めたと同義だ。

（やはりここは教官がいるべき場所ではない。あの人の力が廃れる
だけだ）

いくら世代差があろうとそれは絶対ではない。覆す手段などいくら
でもある。

それは技量であり、意思であり、覚悟だ。これらは機体に左右され
ない。純粹な操縦者の実力。

そして機体は、動かす操縦者の実力についてくる。諦めた操縦者な
ど、意思も技量も覚悟も全て無駄にしている。そんな腑抜けた人間
に、千冬が教えることなど何も無いはず。

（あの人は、なぜこんな場所に留まっているのだ）

そして思ったのは、世界で唯一ISを動かせる男であり千冬の実弟
である、織斑一夏。

（やはり奴は排除しなければ）

ラウラがそんな考え事をしていたら、試合終了のブザーが鳴った。

『試合終了。勝者、ランペルージ・ボーデヴィツヒペア』

それを聞いて、ラウラは大型実弾銃を下げる。

「くだらん・・・」

そして颯爽とその場を立ち去る。ルルーシュはすでにその場にはいない。

Aブロック第二試合は、ラウラの圧倒的な力で呆気なく終了した。

[illegible]

「圧倒的か」

「妥当じゃない。負けるわけ無いでしょ」

「でも開始してまだ5分も経ってないよ」

「それほどの実力ってことだよ」

「ルルーシュの実力は見れなかったけどね」

全ブロックの一回戦第二試合が終わり、僕らは昼食の休憩時間に食堂で話し合ってる。

ちなみに僕はざる蕎麦（麺のコシがスゴイ）、カレンはきつねうどん（七味投入）、シャルルはキノコクリームパスタ（キノコたくさん）、ヴァングがピザ（タバスコ超投入）だ。

話した内容はもちろん、休憩時間が終わったら始まる試合、Aブロック二回戦第一試合、つまり次に控えたラウラ・ルルーシュペアの事についてだ。

「とりあえず、ラウラはルルーシュと手を組むそぶりは無い」

「つまり二対一ってことになる？」

「多分ね。それだと勝機が見える」

シャルルの言う事は間違ってる。だが僕は蕎麦を進める箸を止める。

「シャルル。悪いけど、彼女とは一対一の対決がしたいんだ」

「……………分が悪いよ。ラウラさんの機体は一対一に適してる」

「わかってる。けど、行かせて欲しい」

彼女とは戦う以前に、一度でいいから話をしておきたい。それができれば結構。後は全力で戦う。

「・・・・・・・・わかった。僕がルルーシュさんの相手をするよ」

呆れた感じのシャルルだが、苦笑の微笑は決して苛立ちではない。

「ありがとう」

「でもやるからには勝ってよ」

「当たり前さ。負けるつもりで勝負なんてしないよ」

蕎麦を汁につけて食べる。ここの蕎麦のコシはクセになる。汁もアツサリしてて食べやすい。

「助言したいとこだけど、私はそういうシステムとかに疎いから・・」

「私は知ってたりするより、ボーデヴィツヒの機体のシステムシステム♪」

ピザの一切れを口に入れながら喋るヴァング。・・・・・・・・やっぱキャラ作ってるなあ・・・・・

「A I C、慣性停止能力。文字通り、一定空間内で指定した対象の動きを止めるシステム。これは一対一だと反則的な力を発揮する。けれど弱点は、対象物に意識を集中させなくてはいけないってこと」

「つまり？」

「一番有効なのは意外性。相手の意表を突けばA I Cは解除されるよ」

「結局は行動予測か・・・」

「機体性能に大した差は無いんだから、そうなるのは仕方ないよお？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

蕎麦を取る手を止め、一度状況を整理してみよう。

まずラウラと僕に明確な技量の差はない。といってもI S操縦に関してだが。

後、僕の『ランスロット』と彼女の専用機には、明確な機体性能差も特にはない。

そしておそらく、A I C以外に突起した武装と言うものないだろう。そこは警戒しなくていい。

勝負の鍵は、長く生きた僕の実戦経験と、A I Cをどう突破するによって左右される。

「・・・・・・・・・・難しいな」

「というより、なんでヴァングはそこまで詳しいの？」

シャルルがパスタを食べながらも、真剣に聞いてくる。だがヴァングは、相変わらざる余裕の笑みを浮かべてピザを一切れ食べる。

「べっつにいい？ 前に聞いた事があるだけだよ」

「そ、それより。シャルルは武装とか大丈夫なの？」

早々にヴァングへの質問を中断させ、シャルルに聞いてみる。

「八割破壊されたといってたけど」

「ええっ?! あれで八割なの! ? 全部破壊したと思ったのに・・・
シヨオオオック・・・」

なんていうヴァングはスルー。

「一応大丈夫だよ。こういうときの予備の武装とか、奥の手はあるから」

「それは頼もしい。期待してるよ」

「任せて」

最後のざる蕎麦を食べ終えて、僕は食べ終わった容器を持って立ち上がる。

「一夏には悪いけど、倒させてもらおう」

「ここにはいないけどね」

「どこにいろの? 」

「たしか、もう昼食は済ませて試合の準備とか、そう言ってたと思うよ」

「へえ〜そうなんだ。ご苦労だね〜」

「そりゃ、もうヴァングはやらないからね」

「その通りだぜえ〜♪」

何て話をしていたら、みんな昼食を食べ終えたらしい。

「私たちは、観客席で応援してるわ」

「二人とも、ガンバガンバッ！」

「ありがとう。頑張るよ」

「こら、そこは『絶対に勝つよ』って所でしょ〜？」

僕の言葉に握りこぶしで反論するヴァング。

「はいはい。必ず勝つよ。これで満足？」

「うむ。よろしい〜」

突き出された拳に、僕もまた拳を突き出して打ち合わせる。

「む〜……………」

その景色を見て、何故かうめき声？を上げるシャルル。

「な、なに？」

「・・・別に。スザクとヴァングって仲いいなーと思って」

「そ、そうかな？」

「？ 普通じゃない？ ワテはよわからないけどなあ」

「キャラ作るなら、最後まで演じようよ」

「そいつはあゝ無理！」

なんと驚き。断言されてしまった。

「・・・・・・・・そう。それじゃあ先に行って、着替えておくよ」

「あ、ああ、うん」

釈然としない表情で去って行くシャルル。もしかして緊張してるのだろうか。

（仕方ないな、ルルーシュが相手だもの）

もちろん僕、それにシャルルやみんなも、直接戦いを見たわけではない。しかし専用機を所持してる時点ですでに強いと言ってるような物。

しかもルルーシュは知略にとっても長けている。彼女の読みを覆すのは難しい。

もしラウラとの勝負に、ルルーシュが介入してきたら・・・マズイ

場所は変わり、アリーナ。今はAブロック第二回戦第一試合が始まる数分前。

「また貴様か。正体不明機」
アンノウン

「そうみたいだ、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

専用機に身を包んだ彼女が、『ランスロット』を纏い直接顔の見れない僕を睨む。

「貴様は邪魔だ。私の行動に一々突っ掛かる」

「………開始前に、少し話はいいか？」

「聞く耳持たん」

「答えてくれ。君にとって力とはなんだ？」

その言葉に、先ほど斬って捨てたはずの質問にラウラは答えた。

「敵を排除するための強さ。それ以上でもそれ以下でもない」

「それは、一体何のために？ 自分のため？ 仲間のため？ 家族のため？」

「違うっ！ 私にそんなもの必要ない！」

冷静沈着の一匹狼であるラウラが、こんなわかりやすく激情したのは初めてだ。

（踏み込みすぎたか？・・・いや、どの道踏み込むんだし、地均しだ）

僕がこの質問をしたのは、いたって単純。

彼女は危険だからだ。

強さという概念・・・執念といってもいい。まるで悪霊に取り付かれたかのごとく動いている。

彼女は自分を中心と考えてるが、自分のために力を欲していない。

一方的な善意。

人と思うが為、自分の周りが見えなくなる。結果だけ見て過程を忘れている。

それはある意味良心的で、いつ爆発してもおかしくない爆弾だ。放置する訳には行かない。

「なら何のために力を使う？」

「全ては教官のためだ！ 私が強く憧れた教官に私は・・・私は・・・！」

眼帯をかぶせた左目から、悲しみのような、それでいて孤独のよう

な・・・辛い感情を感じる。

「そのためには、貴様や織斑一夏が存在が邪魔だ！　今ここで私が消してやる！」

「・・・・・・・・君の覚悟はよくわかった。やっぱり闘うしかないよ
うだ」

彼女は、自らの圧倒的な強さで過程を省略しようとしている。
速さでいうなら断然、コチラの方が早いだろう。

だが、間違った過程で得た結果に意味は無い。

結果のために過程を無視して急ぎすぎている。ならば、ここで一度
たおす
止めるべきだ。

「これが・・・わからせるのに一番手っ取り早い・・・」

覚悟を決めた者に言葉は不要。

闘い——————そして敗北させなければ、コチラの言葉は届か
ない。届くわけがない。

それが、人の覚悟だから。

「・・・・・・・・」

僕は無言で《ヴァリス》とMVSを呼びだす。アチラは大型実弾砲を構える。

スタートまで3、2、1――――スタート。

「いくぞっ！」

「ふざけるなっ！ 貴様如きが私に！！！」

後方に素早く下がり、《ヴァリス》の連射を浴びせる。

ラウラはその場を滑走してかわし、間合いを制すためこちらに接近する。

「消えろっ！」

「始まって早々、消される訳には行かないよ」

プラズマ手刀を展開するラウラに、僕は右腕の《ヴァリス》と左腕のMVSで応戦した。

だが天には、必ず一筋の稲妻が、まるで黒い紙を破いたかのように
驅る。

[illegible]

ラウラとスザクが激しい戦闘をしてる最中、専用機を纏ったルルーシュとシャルルは、互いに向き合うだけで動かない。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

互いに不動。しかし決定的なチャンスを狙っているシャルルと違い、ルルーシュはやる気が無いように腕をダランと下げている。

上でスザクとラウラが白熱した空中戦を開始した頃、不動だったルルーシュが口を開いた。

「・・・・・・・・・・シャルル」

「・・・何かな。ルルーシュさん」

「悪い。ちょっと休憩させて貰う。睨み合うのに疲れた」

といってルルーシュはアリーナの壁に寄りかかる。その様子に完全に戦意は無い。

「・・・・・・・・・・は？」

「ここでスザクたちの戦いでも見よう。ある意味特等席だしな」

そして空で過激な空中戦を繰り広げる二人を見上げる。

「え？ い、いやでも・・・」

仮にも真剣に勝負をしようとしてるときにこう言われては、誰しもすぐには納得できない。

「どうせ武装の大半が使えないんだろう？ そんな奴倒したところで意味が無い。面倒だ」

「ッ！」

感情のこもっていないルルーシュの言葉に、シャルルは眉を吊り上げる。

それはつまり今の状態のシャルルなら、倒すことなど簡単と言っているようなものだ。

「・・・さすがに・・・舐められたものだねっ！！」

ドドドドドドッ！！

ほぼ無傷の武装の一つである、ショットガンとアサルトライフルの連射を浴びせる。

「—————無駄だ。お前では、私の世界を侵すことは出来ない」
ルルーシュは、かわすそぶりも見せずその攻撃を一身に受ける。
その弾丸が『蜃気楼』の装甲が破壊するのは、ここにいる誰の目にも明らかだった。

しかしそんな期待は、ルルーシュの周りに張られた何かに当たったことにより、それは間違っていたとわからされた。

「う、嘘……そんな……そんな……一体どうやって……！」

シャルルはそこで狼狽したような声を出す。

ISにとってこれぐらいの砂煙による視界妨害は、あつてないようなもの。つまりシャルルには、一連の出来事が全て見えている。

見えていたにもかかわらず、目の前で起こったことが理解できなかった。

「だから言っただろう。私の世界は、何人たりとも侵す事は出来ない」

砂煙が晴れて、一步も動かず無傷の『蜃気楼』が姿を現す。
それだけでも驚きだが、観客が目を引いたのは『蜃気楼』の周りにある赤い障壁だ。

「その障壁が、僕の攻撃を防いだ……？」

「その通り。この『絶対守護領域』————我が最高の聖域、やぶることは叶わないと知れ」

その言葉を聞いた瞬間、シャルルがアリーナの壁に吹き飛ばされた。

「————ガハッ!! ごほっごほっ!」

轟音と共に壁に激突して、そのままシャルルは倒れる。そして耐え切れず何かを吐いた。思わず見るとそれは赤い液体。それに口から鉄の味がするのを感じる。

(まさか・・・吐血!? 今の一瞬で絶対防除を貫いたってこと! ? 一体何が!?)

状況を整理しようと頭を働かせた矢先、いつの間にか目の前にいたルルーシュに頭を掴まれる。

「ぐっ!」

「何が起きたか、まったくわからない顔か?」

「っ・・・・・・・・・・・・・・・・」

凶星を指され、無言となるシャルル。ルルーシュは頭を掴んだまま、上へと持ち上げる。

「わかったか? 今のお前を倒すなど私には造作もない。心遣いはありがたく受け取っておけ」

「っ・・・・・・・・余計なお世話だよ。そこまで僕は腐ってはいない」

シャルルは掴まれた状態でも、全身装甲のため顔が見えないルルー

シュを睨む。

「フツ、だろうな」

と言ってルルーシュはシャルルをそこに投げる。シャルルは空中で体勢を整え、再びルルーシュに両手の銃を突きつける。

「だが万全でないお前を倒したくないのも本心だ。今回の勝負は先送りにしてくれ」

「・・・・・・・・・・」

シャルルは悩んだが、相手に戦闘の意思がなく、尚且つ攻撃が効かないなら仕方ない。

（どの道僕は負ける。なら今は行動のときじゃない）

決定的なチャンス逃さないため、シャルルはあえて銃をしまった。

「さて、スザクは何をしたいのかな」

空に視線を動かし、そこで一進一退の攻防をしているラウラとスザクが見えた。

（スザク、負けないでよ・・・！）

伝わる訳ではないが、シャルルは空を駆ける白き騎士に武勇を祈った。

[illegible]

数分後。

「なぜひつかからない!？」

「考えればわかるさ」

大型実弾砲の連射とAICを、僕は加減速と旋回で紙一重でかわす。途中からワイヤーブレードなどの波状攻撃もくるが、それも全て同じようにかわす。

「くらえっ！」

僕の《ヴァリス》の連射は、ラウラの俊敏な動きで決して停止せずにかわす。

「当たるか！」

そのまま手刀で突撃を仕掛ける。僕は《ヴァリス》をしまってMVを呼び出す。

「はっ！」

そして二本のMVSとプラズマ手刀がぶつかり火花が散る。だが押してるのは僕の方だ。

「小賢しいマネを・・・！」

「褒め言葉として受け取っておくよ」

「黙れ！」

ガンッ！と力いっぱい手刀を振って、僕と間合いを開ける。そして四つのワイヤーブレードがこちらに放たれる。

「そんなものっ！」

僕はMVSを握り締め、あえてワイヤーブレードの方に突っ込む。そして難なく動きを予測、全てのワイヤーを容易に切り裂く。

「なにっ!？」

「悪いけど、そういった武装は慣れてるんだ」

もちろんこれに似てるハーケンのおかげ。あれはKMFの標準装備だから。

「こんどはコチラから行かせて貰うよ」

そして瞬時加速。MVSを両方とも順手で持ちながら一気に間合いを詰める。

「っ!」

「そらっ!!!」

急な接近で動きが硬直したラウラに、両手のMVSで斬りつける。

「—————かかったな？」

その声が聞こえたとき、斬りかかる寸前で腕が止まる。引いても押してもビクともしない。

初めて引っかかったがこれが—————

「AICか・・・!」

「今更遅いっ!」

そして今度はアチラが手刀を振りかぶる。動けない僕には防除は出

来ない。

「なんてね」

「なにっ!？」

A I Cの弱点は予想外。つまり気を引かせるものを当てれば、自然と解除される。

僕は両腕は動かない。だが腰にあるハーケンは動く。そして二つとも射出する。

「そんなものが!？」

さすがにこの武装は予測してなかったようだが、A I Cでハーケンを二つとも止める。

「けど、油断大敵だ」

「っ! しまっ—————ぐっ!！」

ハーケンを止めるためA I Cを使った、つまり僕の方のA I Cに集中できなかったため、僕は自由の身。その隙を逃さず、僕は二本のM V Sでラウラの大型実弾砲と左肩の装甲を斬った。そして重力を赴くままに、斬られたラウラは地面へと叩きつけられた。

これでシールドエネルギーは大幅に削られただろう。しかも武装はおそらく、残りのワイヤーブレードとあの手刀、そしてA I Cだ。形勢はコチラに傾いている。こう言っては悪いが、決着も時間の問題だろう。

「冷静さが欠けていた。彼女は熱くなりすぎたみたいだ」

それは何故か。僕との会話のせい？おそらくそうだろう。アレ以外に心当たりは無い。

「つまり、その程度の覚悟ってことか」

あんな会話で揺らぐような覚悟なら、ここでいつそ粉々に砕いた方がよかった。と言うより、それは覚悟とは言わないか。

「ハッキリ言って、拍子抜けしたかな」

もう少し手こずるかと思ったが、頭に血の上った彼女は酷く単調だった。あんな獣のような闘い方をする人に、僕は負けるわけにはいかない。

「終わらせよう」

《ハドロンブラスター》を展開し《ヴァリス》と連結させる。これを何発か撃てば終わるだろう。

地面で大の字で沈黙しているラウラに向け、引き金を引く。

ドウウウウウウンッ！

敵を倒す赤黒いレーザー、戦いを終わらせる一点集中のハドロン砲が放たれる。

「この……舐めるなあああああああっ!!!」

だがそれは、雄叫びを上げるラウラが上空に飛翔、そのままやり過ぎられた。そして僕に手刀を出して突撃してくる。

彼女はまた我を忘れている――――

「わけでもないみたいだ」

僕は急いでその場を移動する。おそらくあの場所にはA I Cが張られる。

そして、さっき僕がいた場所にラウラは止まる。僕との間合いは数メートル。

「よく見破ったな」

「君が、あんな挑発に乗るとは思ってない。もう少し演技を覚えた方がいいよ」

あんなわかりやすい突撃。罠と疑わない方がおかしい。彼女が熱くなったら話は別だが。

「敵からの助言など知るか」

「頭は冷えたかい？ 地面に叩きのめされて」

「っ！……一々喋るな鬱陶しい」

口ではそう言ってるが、最初に驚いた表情をしたのを僕は見逃さな

X X X X X X X

「・・・・・・・・枢木君、本当に強いですね！」

場所は変わりモニター室。

そこにあるモニターから試合を見て、なにやら騒がしい真耶に千冬はいつもの感じに答えた。

「ああ。IS操縦は代表候補生レベルだが、状況判断や身体能力は他の人間よりはるかに優れている」

「な、なるほどお……。私との模擬戦も、エネルギーさえあれば勝てたでしょうし……」

「あればな。無ければ負け惜しみにしかならん。だから奴も潔く負けを認めた」

「そ、それでも、すごいですよねえ……」

「そうでもないさ。現にボーデヴィツヒを倒せていない」

「ま、まあ彼女は一年生の中ではトップでしょうし・・・それに状況を見ると、ボーデヴィツヒさんの方が不利ですし」

「そうだな」

それきり千冬は口を開かなかった。空気が急に変な感じになったので真耶が話を逸らす。

「そ、それにしても学年別トーナメントの形式変更は、やっぱり先月の事件のせいですか？」

先月の事件————全身装甲ISの襲撃は、一般的には反政府組織の仕業と言うことになっている。

IS学園を襲撃したと言うだけでも重大なことなのに、それが無人機だと分かればますます事態は危うい方向へと向ってしまふ。

今でも各国が敵対国の仕業ではないかとお互いを疑っている状況なのだ。

「詳しくは聞いていないが、おそらくそうだろう。より実践的な戦闘経験をつませる目的で、ツーマンセルになったのだろうな」

「でも一年生は入学してまだ三ヶ月ですよ？ 戦争が起きるわけでもないのに、今の状況で実戦的な戦闘訓練は必要ない気がしますけど・・・」

千冬はその疑問が来る事は分かっていたらしく、表情を変えずに答えた。

「そこで先月の事件が出てくるのさ。特に今年の新入生には第三世代型兵器のテストモデルが多い。そこへ謎の敵対者が現れたら、何

を心配すべきだ?」

「――――あっ！　つまり、自衛のため、ですね」

「そうだ。操縦者はもちろん、第三世代兵器を積んだISも守らなくてはいけない。しかし教師の数が有限である以上、それらは原則自分で守らなくてはいけない。そのための実線的な戦闘訓練なのさ」

「はあ、なるほどなるほど」

真耶は疑問が解けたので何度も頷く。

しかし新たな疑問が出たので聞いてみた。

「話は変わりますが、ランペルージさんはどうしたんでしょう？
ほぼ全く動きませんが」

という言葉で、モニターがシャルルとルルーシュの方に切り替わる。

千冬はため息をつきながら、予想通りと言いたげに答えた。

「・・・大方、戦うのが面倒なんだろう。奴が本気を出すことなど無いからな」

「ええっ?!　で、でもデュノア君は強いですし・・・!」

「専用機があればあれぐらいは普通だ。もっとも、デュノアが強いのは認めるが」

そう言って、ルルーシュとシャルルが無言でにらみ合ってるモニタ

ーを向く。

「奴にとっては、やる気が無いんだろう。普段の行いを見るとそう思える」

「はい・・・でも彼女はやるべき事はできてるので、こっちからは何も言えないんですよね・・・」

しかもエリートレベルで、と真耶は付け足す。そこに千冬が忌々しいように語る。

「そうだな・・・そこが奴の厄介な所だ。ここの都合上、いきなり退学という訳にもいかないしな」

「そ、それはやりすぎですよ。ランペルージさんは専用機持ちですから、強いでしょうし」

「そうでもないさ。・・・・・・・・・・砲撃と防御しか自慢が無いからな」

最後の方は真耶に聞かれない様に言った。

「あんな地味な試合より、こっちのほう更重要だろう」

そういつて、スザクとラウラの戦っている方のモニターを見る。

そこには互いに剣をぶつけ合う————そして押され始めているラウラがいた。

「少し・・・熱くなり始めてますね、ボーデヴィツヒさん。勝負を

焦っているように見えます」

「ふん・・・・・・・・」

鋭い指摘を言う真耶に対し、千冬は心底つまらなさそうな声を漏らす。

「変わらないな。強さを攻撃力と同一だと思っている。なら奴は――」

―――――― 枢木にも一夏にも勝つことは出来ない。

しかし、その言葉はけして口に出さない。もし言ったら真耶に何を言われるか分かったものではない。

「さて、試合の続きだ。どう転ぶか見物だぞ」

「は、はいっ」

そして二人は無言でモニターを見る。

そこには激戦を繰り広げる二人、白き騎士を駆るスザクと、黒き雨を名乗るラウラが飛び交う。

――白と黒の対決は終わろうとしている。そう、このまま何も起
きなければ・・・。

黒き雨は白を潰す豪雨となる（後書き）

誤字脱字、感想あつたらよろしくお願いします。

白の騎士は黒を刈り取る死神となる（前書き）

今回はバトルだけ。文句のある奴は前に出ろっ！作者がorzするぜ？

白の騎士は黒を刈り取る死神となる

「はっ！」

「それぐらい！」

ガギン！

「ええい・・・！」

「悪いけど、剣の扱いは少し自信を持ってるんだ」

「戯言を！」

ガギン！ ガギン！

幾たびもアチラの手刀と僕のMVSがぶつかり合い、激しい金属音と火花が散る。

第二ラウンド開始から、おそらく10分ぐらい経っただろうか。

一応状況的に有利なはずの僕だが、未だにラウラとの決着をつけていないでいる。

何故かと言うと、そろそろお互いの戦法がマンネリ化してきたので、行動が読みやすくなったから。

「はっ！」

互いに少し距離が空けば、AICを発動して僕の動きを止めにかか

るラウラ。

「こうも多用されると厄介だな！」

そのたびに、僕はその場で派手な浮遊術ハイマニユーバをしなくてはならない。

実を言うとこれ、結構頭と体力を使うんだ。ちゃんとかわせているからいいけどさ。

（それにしても、A I Cって無制限に使用できるものなのか？）

僕はエネルギーの都合上、ハーケンとM V Sによる中距離戦を中心にして、《ヴァリス》や《ハドロンブラスター》といった、砲撃及びエネルギーを大量消費する武装を自粛している。

しかし彼女は、A I Cをバンバン使って動きを止めに掛かり、隙を突いては瞬時加速からの手刀による接近戦。エネルギーはまだまだ余ってるって事なのか？

（なら長引かせる訳にはいかないな）

焦ったらミスを犯しやすくなってしまいが、こうもギリ貧では仕方がない。瞬時加速から双剣の連撃で一気に終わらせよう。

「よしっ！」

僕は瞬時加速の体勢に入る。それにラウラも気付き、A I Cを作動させているだろう。

こうなれば、練習中のアレをするしかない。……成功率は

低いが。

「いくぞ！」

「なに？」

僕は右腕のハーケンを射出する……ラウラがいる場所とは全く違う方向へ。

「なにをする気だ」

「こうする気だ！」

ハーケンのブースターを最大出力。ハーケンのブースターだけで瞬時加速。
一瞬でラウラの上へ向う。

「なにっ?! 小賢しいマネを！」

ラウラは驚くそぶりを見せるが、その場でワイヤーブレードを射出する。

「まだまだ！」

今度は左腕のハーケンをラウラよりさらに下に射出する。
そして同じようにハーケンのブースターだけで瞬時加速。そしてすれ違い様にMVSで切り裂く。

「くっ！」

「まだ終わらないよ！」

そして腰のハーケンを射出。またそれを使い瞬時加速。またすれ違いに切り裂く。

「ああっ！」

「まだだっ！」

もう一つ腰のハーケンを射出。それを使い瞬時加速してすれ違い様に斬り――――

「そう何度もやられるかっ！」

僕の行動を先読みしたラウラが進路上に手刀を置く。このままでは突っ込んでしまう。

僕はついついニヤリと笑ってしまう。

「わかってたさ！」

「っ!？」

さすがに何度もやれば読まれる。
だから僕は腰のハーケンを最大出力にただけで、瞬時加速はしていない。

そのため、ラウラと僕は至近距離で向き合う形になった。

「このっ！」

「はっ！」

ラウラが両手の手刀を振り下ろし、それを僕は両手のMVSを使って受け止める。

「ちっ」

忌々しそうに舌打ちするラウラ。そこに僕はニヤリと笑って一言。

「何を安心してるんだ？」

「っ！？　しまっ——————グハッ！！」

僕のもっとも得意とする技————足刀蹴り。しかもブレイズルミナスを張った状態の蹴りだ。

彼女が油断した一瞬。その一瞬について腹に渾身の一撃入れた。

今までの行動は、元々この一撃のための布石。僕の作戦を彼女は読みきれなかった。

ラウラはかわすことなどできず蹴られ、そのまま地面に叩きつけられて沈黙した。

おそらくシールドエネルギーをこっそり削った。彼女は動くことは出来ずISも解除されるだろう。

（はぁ・・・成功したぞ。オールレンジ連続瞬時加速）
リボルバイダニッション・ブースト

前にシャルルに言われた『直線にしか使えない』という弱点を知

り、何とかしようと考え出したのがこの、オールレンジ連続瞬時加速。^{リスト}

瞬時加速中に別方向へハーケンを射出し、そのブースターでハーケンを出した方向へ瞬時加速する。僕はこれを連続で行った。

これで別方向へ瞬時に加速できる。つまり『直線にしか使えない』という弱点を克服できる。

（本番で成功してよかった・・・）

内心でホッとした。まさかここまでうまく行くとは思ってなかった。練習では時々しか成功していないし、ミスをすればこっちがダメーシを食らう。

「だが、僕の勝ちだ」

沈黙したラウラに宣言する。

だがこの試合はツーマンセル。もう一人倒さなければいけない——
——ルルーシュだ。

僕はルルーシュを探すため視線を巡らせる————いた！

彼女はシャルルと無言で向き合っている。すばやくその間に割って入る。

「スザク！」

「…………ラウラは負けてしまったか」

「その通り。後は君だけだよ」

片手のMVSをしまい、そこに《ヴァリス》を呼び出してルルーシュに向ける。

「気をつけてスザク。あの機体は見たこと無いシステムを使うよ」

僕の後ろでショットガンを構えながら、そう呟くシャルル。

心の中で”知ってるよ”と呟いて、そのまま意識はルルーシュの方に集中させる。

「ちっ……。私が片付けると言いながら……。だから傍観してたのに」

面倒そうにため息& amp; 舌打ちをして呟くルルーシュ。

「はぁ……。やるのも面倒だ。私は降参させてもr—————」
「」

「—————ああああああああああっ!!!!!!!!!!」

「「っ!?!」」

ルルーシュが降参宣言しようとした矢先、突然ラウラが断末魔のような悲鳴を上げる。

そして異変が始まった。

[illegible]

（こんな・・・こんなところで負けるのか、私は・・・）

想定外の出来事にうまく対処できなかったのは自分のミスだ。しかし……。

（私は負けられない！負けるわけにはいけない………！）

ラウラ・ボーデヴィツヒ。それが私の名前。識別上の記号。

一番最初につけられた記号は—————遺伝子強化試験体
C—〇〇三七・

人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた。

———暗い。暗い闇の中にいた。

ただ戦いのために作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。

知ってるのは人体に攻撃する知識。わかっているのはどうすれば敵軍に打撃を与えられるかという戦略。

格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法も体得した。

私は優秀であった。性能面において、最高レベルを記録し続けた。

しかしそれは世界最強の兵器—————ISの出現により一変した。

その適合性向上のために行われた処置『ヴォーダン・オージェ』によって異変が起きたのだ。

この『越界の瞳』は肉眼にナノマシンを移植処理された目の事を示す。

危険性は全くない。理論上ではなんの不適合も起きない。

しかしそれはあくまで”理論上”だった。現実はそんなに甘くなかった。

私の左目はその処置によって金色に変質し、常に稼動状態のままカ
ットできなくなった。

その『事故』によって私はIS訓練において後れを取るようになる。
そしていつしかトップの座から転落した私を待っていたのは、部隊
員からの嘲笑からの侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった。

『出来損ない』の私は深い闇へと・・・・・・・・・・まるで後押
しされるように落ちていった。

だがそこで初めて光を目にした。それが教官・・・織斑千冬との出
会いだった。

「ここ最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。一ヶ月
で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ私が教えるのだから
な」

その言葉に偽りはなかった。あの人の教えを忠実にこなす事で私は
再び最強の地位を手に入れた。
しかし、安堵はなかった。自分を疎んでいた部隊員も、もう気にな
らなかった。

それよりもずっと、強烈に、深く、あの人に—————憧れた。

その強さに。その凛々しさに。その堂々とした様に。自らを信じる
姿に、焦がれた。

—————ああ、こうなりたい。この人のようになりたい。

そう思い、私は時間を見つけては教官の下へと通い、話をした。

そして、ある日私は『勇氣』を出して聞いてみた。ずっと聞きたかったが、聞けなかったこと。

「教官はどうして強いのですか？　なぜ強くあろうとするのですか？」

「・・・・・・・・難しい事を聞くな、お前も」

教官は珍しく苦笑しながら・・・・・・・・しかし懐かしむように、そしてわずかだが優しさを見せるような笑みをした。

私にとってそれが納得いかない表情だったというのは今でも覚えている。

「そうだな・・・・・・・・私には弟がいるんだ」

「・・・・弟？」

「知らなかったか？　私には弟がいる・・・・・・・・正義感の強い悪ガキだな」

「そう・・・・・・・・なのですか」

「私が強いのもあいつを見ているからかもしれない。あいつを見ると、分かるときがある。強さとはどういうものなのか、その先に何があるのかをな」

「・・・・・・・・よく分かりません」

「今はそれでいいさ。いずれわかるはずだからな」

優しい笑み。それにどこか気恥ずかしそうな表情。それは――――

（それは違う。私が憧れる貴方はそんな表情をした貴方じゃない。貴方は強く、凛々しく、堂々としているのが貴方なのに）

だから――――許せない。教官をそんな表情にしてしまう存在が。

そんな風に教官を変えてしまう弟を。

そいつを認められない。認める訳にはいかない。

だから――――

（敗北させると決めたのだ。あれを、あの男を、私の力で、完膚なきまでに叩き伏せると！）

ならば――――こんなところで負けるわけにはいかない。

まだ奴とは戦っていない。それどころか、生意気な男が私に立ち塞がる。

なぜ、あんな正体もわからない奴に、私が負けなければならない。

奴も動かなくなるまで、徹底的に破壊しなくてはならない。私の目的の邪魔をする奴など消すべきだ。

そうだ。そのためには――

（力が、欲しい）

ドクンッ……と、私の中で何かがうごめく。

そして、いつかの会話を思い出した。

そうだ――アレは確か――教官がいなくなったすぐ後。

悲しみを紛らわすため、訓練に明け暮れていたある日、私に面会を求めた人物がいた。

心当たりは無いが一応面会に応じた私は、面会室に待たせている人物の下へ向った。

『失礼する』

『ああ。急に呼んで悪いな、ラウラ・ボーデヴィツヒ』

馴れ馴れしそうに、ガラス越しで話しかける女。

――印象的だったのは、照明に照らされ反射する長く美しい緑色の髪と、前髪に隠れていた額に書かれた赤い鳥のようなマー

くだ。

『誰だ貴様は』

『そうだな・・・死ぬに死ねない魔女とでも言っておく』

『・・・・・・・・？』

『そんなことはどうでもいい。それより、これから世界は大きな変革を迎える』

『・・・・は？』

突拍子も無い事を言うので、その時の私は間拔けた声を出してしまった。

『近い未来、I S出現以来の、再び世界のバランスが崩れる事件が起こる』

『・・・・ま、待て貴様。一体何の話をしている』

『まあ聞け。あるお人よしとひねくれ男に・・・不本意だが頼まれてな。私はそれを見届けなければならない。当然お前もだ』

『・・・・・・・・私が？』

『ああ。お前は世界を見てみたことはないか？ ドイツという籠に閉じ込められたお前は』

そのときの私は、単なる戯言と聞き流した。

『余計なお世話だ。私は暇じゃない、帰らせてもらう』

『フツ・・・そうか。それはすまなかった』

大人のような美しい微笑を浮かべ、私より先に扉に手を書ける女。

『願え。自らの変革を望み、力を振るう為の強い覚悟を持て”このワードは覚えておけ』

そう呟いて女は何処かへ行った。それからしばらく経って『世界で唯一ISを使える男子』が登場した。

なぜあの女がこのことを知ってたか、そしてあの女は何者か私には分からない。

だが私の中を蠢く鼓動————そいつは言った。

『——願うか・・・？ 汝、自らの変革を望むか・・・？ より強い力を欲するか・・・？』

あの女が言ったようなことが頭の中に響く。いや、根本が違うような・・・？

『————汝、力を欲するか？』

繰り返し言われて、そんなくだらない考え事など吹き飛んだ。

——力があるなら、それを得られるなら、私など————空っぽの私など何から何までくれてやる！

だから、力を・・・比類無き最強を、唯一無二の絶対を――――私によこせ！

D a m a g e L e v e l D .

M i n d C o n d i t i o n U p l i f t .

C e r t f c a t i o n C l e a r .

t. 《 V a i k y r i e T r a c e S y s t e m 》 b o o

” はあ・・・やはりこうなったか。まあいい、そこのお人よしが決してくれるか。”

「っ！ グッ！」

シュバルツェア・レーゲンから激しい電流が放たれ、接近したルルーシュをまるで追い払うように吹き飛ばした。

「一体なんだ……。――――！？」

「な、何！？」

「あ、アレは何だ？！」

ルルーシュ、シャルル、僕はラウラに視線を合わせて、その光景に目を疑った。

シュバルツェア・レーゲンを模っていた装甲が黒い液体となり、眼を瞑り眠るラウラを黒く濁った深い闇へと沈めて行く。

これは一体なんだって言うんだ……。

「……………スザク、シャルル、下がれ。おそらくアレは……………」

「知ってるのか！？」

言葉を濁したルルーシュに僕は問い詰める。

「…………いや、アレは知らないが、ラウラ自身も想定してなかったことは間違いない。ここは危険だ」

「で、でもラウラが・・・」

「先生たちが何とかしてくれる。学生が一々出しゃばるべきじゃない」

「っ！ 見て二人とも！」

シャルルの言葉で再度ラウラの方へ視線を向ける。

「・・・ちょ、ちょっと待ってよ。ルルーシュ、ISって変形は出来ないはずじゃないの？」

「・・・私に聞くな。公式ではそうになっているだけだ」

シュバルツェア・レーゲンだったものは、ラウラを包み込み倍速再生をしているかのように形を成していく。

そこにいたのは全身装甲である『何か』。
フル・スキン

前回の『モルドレッド』とは全く違う。

まず色が違う。『モルドレッド』は主に赤紫を基本とした装甲だがコレは真っ黒だ。

ボディラインはラウラのそれを表面化した少女のそれであり、最小限のアーマーと腕と足に付けられている。

「・・・なんで・・・う、嘘だ・・・。あの機体は・・・！」

真っ黒の機体の背中からX字を模った翼が現れ、髪のような赤い髪織

維が出てくる。そして一つ目のカメラアイが『ギョロッ』と僕らを捕捉する。

そのシルエットから、僕はすでにその機体は何なのか気づいていた。

「『斬月』・・・!」

『巖島の奇跡』という歴史的な快挙をした人であり、元の世界の日本で精神的な支柱であった人。

かつての僕の師で格闘術や剣術など色々教えてくれた・・・しかし数年後、日本をブリタニアから開放するため、黒の騎士団の指揮官やパイロットとして、そして倒すべき敵として、僕といくたびも剣を交えた機体。そしてダモクレス決戦で僕が破壊した機体のパイロット。

藤堂鏡志朗・・・藤堂さんの専用機だ。

「そんな・・・どうして君が・・・その機体を使うんだ!」

「・・・」

その言葉に呼応するかのように、持っている刀——————斬月のものではない——————を構える。

「っ! マズイ! スザク下がれ!」

「————逃げる必要はない!」

ルルーシュの忠告を無視し、僕は《ヴァリス》を放り投げMVSを両手で握り締める。

「うおおおおおおおおおっ！」

「・・・・・・・・・・っ」

ランドスピナーを轟かして、僕は『斬月』へと急接近する。

「スザク！ よせ！」

「スザク！」

ルルーシュとシャルルの止める声が聞こえるが、これは譲れない。

（僕がケリをつけるべきなんだ！）

「はああああああっ！」

「・・・・・・・・・・」

ガギン！

僕のMVSと敵の刀がぶつかり、衝撃と金属音が辺りに響く。

「なぜ君がこの機体を使う！ 答えろ！」

「・・・・・・・・・・」

相手は答えない。喋ることに意味は無いとでも言いたそうだ。無言

で鏢迫り合いに勝とうとしている。

「なら、力ずくで聞き出すまでだ！」

そして僕は意識を集中させる。

そうすると、僕の瞳の周囲は赤く染まった。ギアスの呪縛の発動状態だ。

———これで負けるわけには行かない。

僕はその場で右足の蹴りを放つ。敵は後ろに跳躍してそれをかわす。

「はっ！」

僕は追撃に左腕のハーケンを飛ばして、そのまま接近する。

敵はハーケンを紙一重でかわし、ワイヤーを刀で切り裂いた後、接近する僕に迎撃の構えを見せる。それは居合いに似た中腰に引いた構え。ようするにカウンターか。

「そんなものに！」

僕はもう一本のMVSも呼び出して、それをアチラに思いっきり投擲する。

「っ！」

飛来したMVSは、居合い切りの要領で上へと弾く。そして再び僕

の視線を合わせる。

「っ！」

「————遅いっ！」

次の瞬間、MVSに気を取られた奴の腹に、僕のブレイズルミナス展開状態の回転キックが炸裂した。

奴はその場から吹き飛ばされるが、素早く体勢を立て直し、再び中腰に引いた構えをする。

「まだ倒れないのか！」

「・・・・・・・・・・」

そして今度はアチラから接近してきた。僕は残っているハーケンを全て発射する。

しかしそれは奴の居合い切りによって、全てのワイヤーが同時に斬られた。

「ちっ！」

僕は残ったMVSも投擲する。しかし奴は、足を振り上げ飛来するMVSを蹴り飛ばした。

そして僕と一メートルの距離に差し掛かり、奴の構えが上段へと移る。

「くっ！」

僕は《ハドロンブラスター》を展開する。しかし《ヴァリス》はないので撃つことは出来ない。
せめてもの盾代わりだ。時間稼ぎの。

「・・・・・・・・・・」

奴は《ハドロンブラスター》を縦に真っ二つにし、《ハドロンブラスター》は爆発する。

もう僕に残された武器は無い。――しかし時間稼ぎには充分だ。

「上に弾いてくれて、ありがとう」

「っ！」

僕はその場で力の限り跳躍。そして奴がさっき上に弾いたMVSをキャッチする。

「うおおおおおおおっ！！」

それを両手で握り、重力を味方につけて下にいる奴に向かって振り下ろす。

「・・・・・・・・・・っ」

奴は己の刀を上にかざす。そして防除の体勢を取る――

バギイン！

奴は刀身で防御するが僕のMVSは甘くない。奴の刀を真っ二つに折ってやった。

「・・・・・・・・・・っ」

それでも奴は、もう折れて半分となった惨めな刀を僕に振り下ろす。

「もう、やめようよ」

僕は左腕のブレイズルミナスで受け止める。

「そこまでして、闘うことはないんだ」

そしてトドメの右足による足刀蹴りを放つ。

奴はアリーナの壁まで吹き飛ばされ、背中から衝突してその場に倒れ――――

「・・・・・・・・・・」

――はせず、片膝をついた状態で僕へ視線を向けていた。そしてまだ立ち上がりとしている。

僕にとってその姿は”まだ闘える”と物語っていた。武器は無くても闘える。

「けど・・・もう終わりなんだ」

僕はゆっくりと歩いて《ヴァリス》ともう一本のMVSを拾い、奴の目の前まで移動する。

「ラウラを・・・返してもらおうよ」

目の前に来た僕に奴は折れた刀でまだ斬りかかる。しかしその動きは獣の様に単調だった。

僕は左腕のMVSで、隙だらけの奴の装甲を横薙ぎ。

そこから瞳を閉じたISスーツ姿のラウラが出てくる。

出てくる際眼帯が取れ、ラウラの右目が赤ではなく、キレイな金色になっていることに気付いた。

「おっと」

MVSを捨ててラウラを受け止める。

改めて『ランスロット』の腕の中にいるラウラを見ると、規則正しい微かな寝息を立てる。

（目立つ外傷はなし・・・眠ってるだけか・・・よかった）

安堵した後、改めて奴と向き合う。

そしてすでに抜け殻となった『斬月』に、僕は《ヴァリス》をバーストモードで構える。

「おやすみ」

そう呟き————僕は引き金を引いた。

ドゥウウウウンッ！！

《ヴァリス》から放たれた容赦ない閃光に、抜け殻となった奴は飲まれて消し飛んだ。

「終わったか・・・」

消し飛んだ奴を見届け、僕は『ランスロット』と”ギアスの呪縛”を解除する。

眠っているラウラはその辺りの地面の上に寝かせた。

「「スザク！」」

異口同音で呼ばれたので振り向くと、シャルルとルルーシュがコチラに走ってくる。

「・・・やあ、二人とも。お疲れ様」

とりあえず笑顔で手を振っておく。

「大丈夫?!」

「無事か?!」

「まあ、ね」

「そう……。よかった……」

「まったく……無鉄砲すぎるぞ」

息を吐き胸を撫で下ろすシャルルと、呆れたように腕を組むルル・シュ。これは心配をかけたな。

「二人とも、心配かけて……。……ご……。……め……。……?」

言葉の呂律が回らなくなり、ぐらり、と急に視界が傾いた

(あれ……。……。? 体が急に重くなった……。……。?)

「スザク?!」

「……。……。スザク!?!」

シャルルとルル・シュの声が……。……。とても遠くから聞こえる。

(一体なにが……。……。?)

いきなり……。自分の立ってたはずの地面が……。?

目の前に、現れた……。?

そして――――僕の意識は途切れた。

” 流石はお人よしか。しかし・・・これでは事態が進みすぎだな。
そろそろ私が動くべきか。”

白の騎士は黒を刈り取る死神となる（後書き）

誤字脱字、感想あったらお願いします。

序章は終わり、世界最強の騎士達が動き出す（前書き）

今回は物語に色々と伏線を張る話です。ちゃんと回収できるかな・・。

今日から学校が始まったので、更新スピードが落ちると思います。すいませんが、ご了承ください。

序章は終わり、世界最強の騎士達が動き出す

「・・・ふぁ・・・・・・・・あれ？」

目が覚めたら、知らない天井でも見えるかと思ったが、その予想は大きく外れ、知らないどころか天井の見えない真っ白い空間だった。
・・・・・・・・もしかして。

『久しぶりです』

直接、この果てしなく広がる空間に、美しく聞き覚えのある女性の声が響く。

「お久しぶりです・・・えっと、神様・・・でいいですよね？」

『・・・・・・・・ええ。まあ、それでいいです』

少し間が開いたのは、気のせいとしておこう。

「あの、僕は何でここにいますか？」

『私が呼んだからですが』

「いや、そうではなく・・・なぜ僕がここに呼ばれたんですか？」

『・・・・・・・・』

と聞くと、何故か神様は黙ってしまった。そして何となく気まずい空気が漂う。

「あの……」

『……バグが、予想以上に強大だったのです。そのことを伝える……』

「……そうか。だから貴方が言わなかったのか。あの世界に入り込んだ『バグの正体』を」

『っ！……気付いていましたか』

おそらく驚いただろう。息を呑む声が聞こえた。

「ええ。貴方はバグの発生源を調べることが出来る。つまりバグの正体はわからずとも、おおよその見当はついていたはずだ。だから『ランスロット』は初期状態だった」

『ええ……私は、それで事足りると思ったので』

「でも貴方はその事を、僕にもカレンにも言わなかった」

考えてみれば当然だ。

なぜ最初から一番強い『ランスロット・アルビオン』じゃなかったか。

なぜわざわざ弱い『ランスロット』だったか。

バグを解決したいなら、最初から『ランスロット・アルビオン』であつた方が都合がいいはず。

でも神様は『ランスロット』状態で僕に渡した。つまりそれは”これで充分”という考えからだ。

だから神様は『バグの正体』をわかっていたはずだ。

でも神様は僕にその事を言わなかった。ただ漠然と『バグを取り除いて欲しい』とだけ。

目的は話したが、その正体にはほとんど触れないで。なかみ

「その時点で、僕は貴方を信用していなかった」

『正体話をすると、コチラにも色々不都合があるんですよ。詳しいことは言えませんが』

「……………貴方の目的はなんなんだ」

『愚問ですね。世界を見守る者の目的はただ一つ、全世界の完全調和。わたし世界は決して交わってはいけない。だが交わってしまった。だから貴方を呼んだ。そして世界を乱さぬ程度の力を与えた。けれど……………』

「……………僕を送り込んだ後、バグが突然変わってしまった」

『……………ええ。そのため貴方に授けた力が、目的を達するためには、不足してしまった』

「ただそれを言うために、僕を再びここへ呼んだと言う事ですか」

『貴方が、先ほどの事に気付いていなければ、でしたが』

「言われたとなれば？ 一体どうするんですか。色々不都合があるみたいですが」

『それはもう関係ないです。なので、できるかぎりお話ししましょう。まず、私が知っていたバグの正体は、王の力です^{ギアス}』

「ギアス!？」

『正確には『赤い鳥の形をした人の意思』です。それが色々な世界を駆けていた』

「……そしてある世界^{えだ}に止まった。それが今僕らがいる世界だと」

『ええ。私が最初に貴方を呼んだのは、強い意思なんてもんじゃないやありません。貴方がギアスに抗うことが出来たからです。絶対遵守の力に』

「……だからバグとなったギアスを止めるには、有利な人材だと思っ僕を指名した」

『その通りです。だが、貴方を送り込んでしばらくしてから、バグが突然変異した』

「……だからカレンを送り込んだって言うのか？」

『察しがいいですね。今思えば、彼女の機体だけでも強くしておくべきだったと後悔しています』

「それほどまでに、バグの力が強いものだった」

『ええ。だから非常用の力が発動した。それが『一次移行』と”ギアスの呪縛”・・・そして』

「—————
《旋律誓約》^{コードギアス}」

『その通りです。しかしアレについては喋ることはできません』

「なぜ？」

『・・・言い方が悪かったですね。私はアレについて知ってることが限られているんです』

「・・・アレは、貴方が加えたシステムのはずだ」

『確かにその通りです。しかしそれは本来、貴方が使うはずではなかったシステムです。つまり詳細を元々設定していなかった』

「ということは？」

『今の貴方に適したアビリティーになっている。としか私には言えないんです』

「・・・今の僕に適した・・・か」

『時が来れば、わかると思います。彼女の機体にも同様のアビリティーがあります』

「・・・これから、僕らはどうするべきですか」

『貴方達を介入させた時点で、もはや私はその世界を変える事は出来ません。こうして話すことで精一杯です』

「では、今のままで頑張るしかないか」

『貴方にもイレギュラーはあります。そのアビリティーが力となるはずです』

「・・・・・・・・貴方は信用していいんですか」

『好きにどうぞ。それを決めるのは私ではなく貴方です。でも、私は貴方を信用していますよ？』

「・・・・・・・・今は・・・・・・・・保留にしておきます」

『そうですか。まあ妥当ですね。ではそろそろ、目覚めて貰いましょうか』

「・・・・・・・・わかりました」

『では、白き騎士の導く道に、精一杯の幸あれ・・・』

という言葉で僕の視界は真っ白い輝きに埋め尽くされた。

『言い忘れましたが、もうすぐ貴方の目の前に私が現れますから。
その時はよろしくお願いします』

「ええっ!？　　そ、それってどういう――――」

そこで僕の意識は途切れた。

そしてベットからいきなり目覚めた。

「おっ。起きたか」

そう言ったのは、水を用意していたルルーシュだ。

「ルルーシュ……ここは……保健室かな」

前に一度来たことがあるので、おそらくそうだろう。保険の先生とかはいないが。

「気分はどうだ？」

「ちよつと頭がボーッとする」

「ならまだ寝とけ。寝てても話は聞けるだろ」

「話……？　そうだ！　あ、アレからどうなったんだ！？」

隣で座るルルーシウの肩をつかむ――――は、ずが腕が動かなか
った。

「
・
・
・
あ、あれ？」

「安静にしている。ホラ」

呆れたようなルルーシュが、上半身だけ上げて僕の肩を掴み、ベ
ットに押し付ける。

容赦が無いし、体が動かない僕は成す術が無いので、

言われるまま従った。

「話すことがたくさんあるな。何が聞きたい？」

「・・・・・・・・なんで僕は寝てるの？」

とりあえず現状確認がしたかったので聞いてみた。

「そう、だな・・・・・・・・」

ルルーシュは顎に手を当てて考えるポーズ。その仕草が妙に可愛らしかった。

「・・・・・・・・アリーナでお前が倒れた後、ラウラと共にお前を運んで、一通り検査を受けた後に個別で寝かされている感じだな」

「そうなんだ・・・・。ちなみに、僕は何で倒れたの？」

「医者が言うには、精神的な疲労らしい。要するにストレスだな」

「・・・・・・・・へえ」

「・・・・・・・・『へえ』って・・・・。お前、そんな体調であんな事してたんだぞ？　わかってるのか？」

ベシッ、と僕の頭を叩くルルーシュ。

病人に容赦をしてくれないルルーシュに叩かれた頭を押さえる。

「いや、人事じゃないけどさ・・・・。戦う前は別に調子が悪かった覚えは・・・・」

もしかしてギアスの呪縛のせい？…………ま、まさか…………いやでも可能性はあるか。

「聞きたいことはこれだけか？」

「…………ラウラは、どうなった？」

実は気になっていた。

目立つ外傷は見当たらなかったが、僕のような精神的ダメージがあったかもしれない。

「聞いた話によると、全身に打撲やら軽傷など負担が多かったらしいが、しばらく寝ていれば大丈夫だそうだ……………そういえば、腹に打撲が集中していたらしいぞ」

「うつ…………その補足はいらないよ……………」

ニヤリと意地悪い笑みを浮かべるルルーシュ。

いや…………仕方ないじゃないか。絶対防御を貫くとは思わなかったし……………しかしこれから回転蹴りを自重した方がいいかな。

「そういえば、今何時？」

「夕方の五時辺りだ。お前が倒れてから三時間ぐらい経過したな」

「なるほど。道理でお腹が空くわけだ」

「なんだ。それじゃあ私が行く。何かリクエストはあるか？」

「え・・・？ いやでも」

「寝てる奴に無理させるほど、私は鬼でも悪魔でもないさ。ほら、リクエストを」

「・・・・・・・・食べれば、何でもいいよ」

妙にルルーシュが優しいので、僕は咄嗟にそんな事を言った。

「IS学園の食堂を何だと思ってるんだ・・・。まあいい、要は何でもいいんだな」

ため息をついてルルーシュは立ち上がる。

「水を用意したから飲め・・・・・・・・って、できればな」

「・・・・・・・・嫌がらせ？」

「まさか。単なる善意さ。じゃ、I'll be back」

妙にカッコよく英語の捨て台詞を残し、ルルーシュは保健室を出て行った。

「・・・・・・・・ふう」

ルルーシュの気配が遠のくを感じて、改めて安堵のため息を吐いた。

「『斬月』・・・・・・・・ラウラとどんな関係があるんだろうか・・・」

暴走したのだから、操縦者であるラウラも知らなかった可能性が高い。

あれは正式なドイツの専用機。つまり、開発段階から僕の世界の誰かが介入した可能性がある。

「敵はドイツか・・・それとも」

味方なのか。いつか実際に行って見なければ。それともアチラが来てくれるか？

そして神様から言われた、バグの突然変異と僕のアビリティーというイレギュラー。

これが一体何を意味するのか。そしてこれらは関係が無いのか・・・
どうなのか。

「・・・・・・頭痛くなってきた。今は・・・寝よう」

今の体調で考える気がしない。真偽を決めるのは、後でカレンと相談してからだ。

「おやすみ・・・」

誰もいないが・・・なぜかそう呟いて、僕は再び意識を手放した。

八つ当たり？」

「・・・ボロ雑巾のように使った後に、何も残さず消してやる」

「冗談が通じないなあ」

わざとらしく肩を竦めるヴァング。

「貴方はアリーナの件はいいのかしら？」

「まあな。他の奴はアリーナの件で色々書かされてるだろ。缶詰状態だ」

「流石はルルーシュ。面倒事に慣れてらっしゃる」

「お前は一言多い。これは冷やかしか？」

「んなわけ無いでしょうが。スザクから何か問い質したんでしょ？
教えてよ」

「っ・・・してない」

バツ悪そうな顔をして、あからさまにヴァングから視線を逸らすルルーシュ。

それで何かに気付き、ニヤリと意味深な笑みを浮かべるヴァング。

「ええ、私情を挟むの？それは同じ円卓の騎士として、ナイトオブラウンズどうかと思うけど」

「・・・はあ・・・アイツが素直に答えるはず無いだろ」

「まあ確かにね。だったらアレ使えばいいじゃない」

「あれは・・・できれば使いたくない」

ルルーシュにしては珍しく口籠る。ヴァングはあえて指摘はせず続ける。

「ならどうするのよ。他の人達にそんな言い訳するの？」

「ああ。ラウンズに上下関係は無いだろ」

「まあね。各国から選出される代表IS操縦者の集まりで、しかも未成年が大半だし」

「欠員が多く規則の緩い——————というか、ほぼ皆無の特務機関だな」

「そうじゃないと、各国の代表が集まるわけ無いじゃない」

「まあ、それだけのメリットはあるが」

「なんて難しい話はいいかから。今回の件で、スザクの立場は非常に危ういのよ」

「そうだな。危ういな」

「・・・完全に人事・・・まあいいわ。けど近々、ナイトオブファ円卓の騎士第五位イがここに来るらしいよ。まあ未確定情報だけど、十中八九スザク

と織斑目当てでしょうね」

「おいおい洒落にならん冗談だぞ。一つの学校にラウンズが三人もいる事態になる。どれだけシュールな地獄絵図だ。日本を征服する気か？」

「アハハハッ。それだけイレギュラーなんでしょ？ 今回の事は世界にとって」

「まあわかってはいるが……そういえば、天下の円卓ナイトオブの騎士第三位様は、専用機をどうしたんだ？」

「忘れちゃった。テヘッ♪」

「殺すぞ」

「じよ、冗談冗談。ちゃんど持ってるよ」

といって耳にあるトリコロールのイヤリングを見せる。

「そうか……大丈夫なんだろうな？」

「心配性だなく円卓ナイトオブの騎士第二位様は。仮にも私はラウンズの一員よ」

「仮にもな」

「いやそこ強調しなくてもいいんじゃない？」

「事実だろ？」

「まあそうだけど。それ今度の集会で言っちゃダメだからね」

「ああ——って集会？いつだ？」

「忘れたの？毎月第三日曜日はナイトオブラウンズ・テーブルの円卓の騎士議会日でしょ」

「悪い、今思い出した。……だがアレは主欠席自由だろ？」

「私はなんとなく欠かさず行ってるわよ。ナイトオブワンの円卓の騎士第一位もそうだし」

「暇なだけだろ。しかも十二人中二人だけか」

「いやでもさ、毎月三人くらいは来てくれてるよ。入れ替わりで」

「ホント暇だな。お前らは」

「いや一年以上ほったらかしの貴方もどうかと思うけど」

「『黒騎士』の行方を捜すのに必死なんだ。仕方ないだろ」

「『黒騎士』？……ああ……裏切り者の事。ゼロ変なあだ名ね」

「アイツとはケリをつける。そう誓った」

「その左目に？」

「……右目だ」

[illegible]

「悪い。遅くなったが持ってきた――って」

「すう・すう・すう」

トレーに豚の生姜焼き定食を乗せてきたルルーシュは、ベットのうえで寝ているスザクにため息をついた。

「はあ……寝てるか」

とりあえずトレーを近くの机に置き、自身は先ほど座っていた椅子に座る。

「……起こすべきか」

と顔面にチョップの姿勢を見せたルルーシュは——躊躇った。

「何幸福そうに寝てるんだ・・・こいつは」

コチラの苦勞も知らずに、と愚痴るが、ルルーシユは優しい笑みを

浮かべていた。

「仕方ない……。今日ぐらい、休ませてやるか」

何故か保健室にあった、食品用のラップを持ってきた定食にかぶせる。

「ついでだ」

置手紙を書いておいた。内容は簡潔に『飯だ。食ったら自分で片付けろよ』とだけ。

「……。ふぁあゝあ……。流石に眠くなってきたな……」

朝から試合、予想外のアリーナ事件、そこから地味な書記、さらに何時間も誰かの付き添いをしていたルルーシュは、らしくも無い欠伸を見せた。

パシャ。

「ッ?!」

「アハハ♪ ルルーシュの欠伸姿ゲット♪」

カメラのシャッター音が聞こえて、ルルーシュが慌てて振り向いたら、携帯を持ったヴァングが扉の近くでニコニコしてた。

「ヴァング!」

「しいー。そんな大声出すと、スザクが起きちゃうよ」

「うっ……な、なんのつもりだ」

「通ったら、見知った人が寝ている男といい感じだったので、水を差してみました（ニヤニヤ）」

「い、いい感じ?! ど、どういう意味だそれは!」

焦りと恥ずかしさで顔を真っ赤にしたルルーシュ。

「やばっ、ルルーシュが怒った。と言うわけでヴァング、全力で逃げます!」

ビュンツとその場を後にしたヴァング。ルルーシュは数秒固まったが、

「ま、待てヴァング! とりあえずその写真は削除しろ!」

慌ててその後を追った。

そして――――。

「うるさいなあ……一体何の騒ぎ……?」

ベットでスヤスヤ寝ていたスザクが、目を擦りながら目覚めた。

そして騒ぎの元凶を探そうと辺りを見渡すが、自分以外の人は居ない。

「・・・・・・・・・・？」

首を傾げるスザク。その時いい匂いが鼻を刺激した。

「・・・・・・・・あ、これ」

視線は花瓶が置いてある机。その上にラップで包まれた生姜焼き定食を発見。

「・・・・・・・・おいしそうだ」

もう動くようになった腕でラップを剥がす。暖かいから時間はあまり経っていない。

「・・・・・・・・お箸お箸・・・・・・・・って」

箸を探す過程で白い紙を見つけた。書かれている文字は――――

「『飯だ。食ったら自分で片付けろよ』・・・・・・・・ルルーシュか。起こしてくればよかったのに」

置手紙に苦笑しながらも、箸を取ってごはんの容器を持つ。

「いただきます」

そうして一口味わう。お腹が空いていたスザクは食べる食べる食べる。

「・・・・・・・・ありがとう」

誰に向けたか。それとも単なる独り言か。スザクは感謝の言葉を呟いた。

これから、自分が世界を大きく変えてしまうことも知らずに・・・。

次の日。

[illegible]

「部屋に戻るか・・・」

僕は、無理をしなければ大丈夫だと判断されたので部屋に戻れといわれた。

見舞いにはセシリアと箒と鈴とシャルルと一夏とカレンとヴァングとルルーシュ・・・って僕が主に関わった人達が来てくれた。

「嬉しかったなあ・・・あっちじゃあ、見舞いをする人なんて殆どいなかったし」

それが当然とも思っていたけど。やっぱり心配してくれる人が居ると言うのは、嬉しいものだ。

「・・・・・・・・おっ」

食堂の前を通ったら、一夏とシャルルが仲良く飯を食べていた。

「一夏、シャルル。隣いいかな？」

僕はそこの定食を取って二人の食べてる場所に行った。

「スザク。いいよ座って」

「ありがとう」

シャルルが手招きするので、シャルル側のほうへ座った。

「？ スザクか。凄かったぜお前とラウラの戦い。しかも勝っちゃまうとは」

「そ、そうかな・・・？」

途中で暴走したし、ルルーシュと闘ってないから、胸を張って”勝ちました”とは言いづらい。

「スゴイ騒ぎだったから、それを気にする余裕が無かったよ」

「ああ、そういえば。俺たちは観客席にいたから、騒ぎのとき避難したんだ」

「そうなんだ。怪我人はいないって聞いたけど」

「ああ。アリーナのバリアーが破壊される事態にはならなかったって」

「スザクのおかげだよ。スザクが奴を倒さ————」

「シャルル。ストップ」

「あっ・・・ゴメン」

先ほど口止めの書類を、病み上がりに大量に書かされたのを思い出して、シャルルに待ったをかける。

「・・・口止めか？」

しかし経験者の一夏には伝わったらしい。

「まあね。あまり詮索しなくてももらえると、コチラは助かるかな」

「わかってる。俺も面倒ごとはゴメンだ」

この話題は掘り下げるべきではない。話を変えるために僕は違う話題を出した。

「そういえばトーナメントは中止らしいね」

「そりゃそうだろ。ホントスゴイ騒ぎだったしな」

そう、トーナメントは学園側が不慮の事故と言うことにして中止となった。

実際の事を知っているのは、巻き込まれた僕とシャルルとルルーシュ、それにラウラと一部の生徒及び先生だけ。

しかし僕らはあの『斬月』モドキの事を、あまり知らされていない。ただ”既存のシステムに、何者かが改良を加えて作り出した”と言われた。

（これで間違いない。僕らの世界の誰かがいる。そして僕らと敵対行動をとる）

その人が、この世界で言うバグで間違いないだろう。カレンともその意見で一致した。

「・・・・・・・・・・」

「スザク？」

「えっ？ あ、何？」

「いや、早く食べないとご飯冷めちゃうよ」

「あ、ああうん。そうだね」

慌てて定食の味噌汁を一口。

（今考えるのはよそう。また違う話題でも・・・）

で頭を切り替えるため新しい話題を提示。

「さっき女子達が泣きながら走り去ったけど、何か知ってる？」

「いや俺は知らない。そのあとなんか知らんが箒に殴られたし」

「僕も知らない。そしてあれは一夏が悪いよ」

「そうなのか？　女子って言うのはよく分からん」

「なんだ。トーナメント中止ってだけで泣いてたから、何か重大なことでもあったのかなと」

「そんな訳無いよ。スザクは心配しすぎ」

「そうだぜ。お前って時々律儀って言うか・・・神経質になりがちだ」

「そ、そうかな」

言われて見て、少し思い当たったりもする。そこまで酷かったか・・・。

「あ、織斑君たちはここにいたんですね。それと枢木君とデュノア君はお疲れ様でした」

話しかけてきたのは山田先生だ。

「山田先生こそ。ずっと手記で疲れなかったですか？」

「いえいえ、私は昔からあいった地味な活動が得意なんです。心配には及びませんよ。なにせ先生ですから」

えへん、と言う感じに胸を張る山田先生。あの大きな膨らみが重たげにゆさつと揺れた。

だけど特に気にはせず、ただ”大きいな”と思っただけでスルーした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

だが、一夏は揺れた山田先生の胸を凝視していた。

「・・・・一夏？」

「な、なんだスザク!？」

「止めた方がいいよ、そういうの。女性に誤解されるから」

「なっ?! な、何の事が俺にはさっぱりわからないがっ!？」

「・・・・・・・・そう。友達として忠告はしたよ。後は知らないけどさ」

「し、仕方なかったんだ！　そういう多感な時期なんだよ！　俺は悪くない！」

「そうなんだ」

「た、頼むからそんな目で俺を見るな！」

ちなみに僕は、そういう多感な時期をすでに卒業してます。一度天寿を全うしましたから。

取り乱すこともありますが、この程度なら大丈夫なのです。

誰に説明してるのかはさておき。

「？　どうかしましたか？」

「いえ、何でもありません。一夏が外道に堕ちただけです」

「コラ待て。いつ俺が人の道を外れた」

なんて呟きは無視。

「は、はぁ・・・」

「無視してください」

「そうですか。それよりも朗報です！」

「おい。特に山田先生。納得が早すぎではないですか？」

愚痴る一夏を無視し、グッと山田先生が両手拳を握り締めてのガッツポーズ。

「なんとですね！ ついに！ ついに今日から、男子の大浴場使用が解禁です！」

「「おおっ！ そうなんですか！？」」

僕と一夏の声がハモった。この頃彼とハモることが多い。

「実はですねー。今日は大浴場のボイラー点検なので、元々生徒は使えない日なんです。ですけど点検事態はもう終わったので、それなら男子の三人に使ってもらおうってはからいなんですよ！」

「そうなんですか・・・！」

やっどだ。ついに僕の一番好きと言ってもいいぐらいの日本文化、お風呂が堪能できる。

さらに聞いた話によると、ここのお風呂は大浴場！！ 初めてのお風呂が大浴場とは運がいい。

「ありがとうございます！」

一夏は無意識のうちに山田先生の手を握っている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シャルルはそんなに変化はなかった。

うーん、フランス人はあまりお風呂は好きじゃないのかな？

「と、とにかくですね三人は早速お風呂に入ってください。今日の疲れも、肩まで浸かれれば疲労もスッキリですよ！」

若干照れた山田先生が僕らを促す。

「はい！それじゃ早速お風呂に行きましょう！」

「そうだね！　早くお風呂に————あっ」

勢いよく返事する一夏に賛同するように返事したが、あることに気付いた。

『三人は』・・・三人、それは僕と一夏・・・それにシャルルだ。

これは非常にマズイ状況だ。シャルルはまだ男子と言うことで通している。

しかも一夏はシャルルが女だということは知らない。

いち早く危険を察知した僕は、小声でシャルルに意見を求める。

「シャ、シャルル・・・どうしよう？」

「どうしようって・・・どうしよう？」

「とりあえず・・・着替えを取りにいきながら、何かしらの案を考えておこう・・・」

「そ、そだね・・・」

そして上機嫌で部屋の着替えを取りに行く一夏を尻目に、僕とシャ

ルルは何かいい案を考えるが、こんな経験は初めてなので全く浮かばない。

そして何時の間にか――――

「あ、来ましたね。それじゃあどうぞ！一番風呂ですよ！」

「はい！」

「「そ、そうですね・・・」」

上機嫌で返事する一夏と暗い感じで返事する僕とシャルル。

時は脱衣所、一人は女子、二人は男子。

「どうしたんだ？二人とも。元気が無いぞ？それにスザク、さっきの元気はどうした？」

「さ、さあ・・・？ 病み上がりで気分が上がらないのかな・・・？」

「いや”かな？”って。俺に聞くなよ」

「そ、そうだね。ゴメン」

一夏の言葉をテキトーに返事する僕。はっきり言って今は風呂どころではない。

（どうすべきか・・・ルルーシュならいい案を思いつくのかな）

とある親友の助けを借りたい気分だ。借りれたらの話だが。

「ん？お前ら着替えないのか？」

早っ。すでにタオル一枚だけの一夏。シャルルは両手で顔を覆っている・・・隙間があるのは何故か。

「先に行ってるぞ」

「あ、うん」

「い、いってらっしゃい」

一夏はさき到大浴場に入る。

本当なら僕も彼に賛同して、この世界初めてのお風呂を堪能したい。

しかし・・・。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

ルームメイトの彼女をほっとくのもどうかと思うし・・・けど一緒に入る訳にも行かない。

だけどシャルルも入りたいだろうし・・・けどそんな事したら僕は変態だし。

どうしよう。

「むむむ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・す、スザク？」

「ほえ？　なんだい」

ついつい変な声で返事をしてしまった。自分の声だったのか？

「僕はここで時間を潰してるから、スザクはお風呂に入っちゃいなよ」

「え？　でもお風呂なんていつでも入れるさ。今回は一夏の独り占めにしておくよ」

と進言すると、シャルルは苦笑しながら言う。

「僕の事はいいいから。部屋のシャワーで我慢するよ」

「うーん・・・・」

確かにそれがこの場の一番の解決策だと思う・・・・が、シャルルに申し訳ない。本来なら女子の方がお風呂に入りたがるものだし。そのため、シャルルが安心して大浴場に入るためにはどうしたらいいか。

おお、簡単じゃないか。一夏をこの場から削除すればいいんだ。

「・・・・よし。シャルル、ちょっと待ってて。パパッと一夏を気絶させてくる」

そうと決まれば迅速に。

僕はバスタオルとゴム手袋を着用。一夏をそこらに締め上げるため浴場へ移動を開始する。

「う、うん————じゃないよ!？　なんでそんな結論になるの!？」

まさかのシャルルから、ノリツツコミを叩き込まれました。

「いや、それが手っ取り早いし・・・」

「いいから！　それは一夏に申し訳ないから！　とりあえずそれはやめて！」

と言われたので、バスタオルとゴム手袋をそこらに置く。

「なんでそんなの持ってるの・・・」

「ゴム手袋は掃除用具に入ってたよ。バスタオルはロッカーから」

「あっそ」

何故だ。なぜシャルルは呆れた目で僕を見つめるんだ。なにもしゃべってないのに。

「はあ・・・じゃあ、二人で部屋に戻ろう」

「そうだね」

結局その結論でカタがついた。

[illegible]

「もう寝ちやおう」

「そ、そうだね」

二人で交代にシャワーを浴びた後、特にやることも無いのでベツトにダイブ。

まだ歯切れの悪いシャルルを気にしながらも、僕は部屋の電気を消した。

「ふああ・・・」

一つ欠伸。もう色々と疲れた。

「大丈夫、大丈夫・・・勇気を持て、僕・・・」

なんて独り言を言ってるシャルルだが僕は無視して眠ろうとした。

すると・・・。。。

ムニユムニユ。

変な感触が僕の背中から伝わってくる。気になり振り向くと・・・。

「ど、どうも・・・」

顔を赤くしたシャルルの顔がすぐ隣にあった。

どうやらシャルルが僕のベットに潜り込んで来たらしい。

「・・・・・・・・どうしたの？」

内心スゴイ動揺しているがどうにか隠して、一番聞きたい事をストレートに聞いてみた。

「あ、その・・・大事な話があるから・・・スザクに聞いてほしいんだ」

「なんだ。だったら明かりでもつければ・・・それにこんな格好じ

やなくても」

「と、とにかく！聞いてほしいんだ」

「あ、うん・・・」

大事な話なら聞かないわけにはいかないだろう。心当たりもあることだし。

「その・・・前にいった事なんだけど・・・」

「前のって言うと・・・学園に残るかどうかという？」

「うん。僕は学園に残ろうと思う。だって僕の居場所はまだ見つかって無いし・・・」

「そうか。ならシャルルは僕を頼ってよ？一度偉そうに説教した手前、ちゃんと責任を持ってシャルルをサポートするからさ」

「うん。ありがと・・・それに・・・もう一つ・・・」

「もう一つ・・・？」

？ 何かあったかな？

「スザクが僕のあり方を示してくれたから、僕はこんな決断を出来たんだと思う。ちょっと前の僕ならこんなことは考え付かなかっただろうから」

「それは違うよ。君が『変えたい』と思ったから、変わったんだ。

君自身の覚悟だよ」

「うん。………それでもスザクと言う存在があったから、僕は前に進む決意をしたんだ」

「………そうか。それなら、よかったよ」

僕が思う『僕』という存在は、この世界でイレギュラーで元の世界では大量殺人鬼で英雄だ。

相反するように見えて、実は同じ意味の二つ。戦争という事情があればだが。

もしシャルルがこの事を知ったとき、彼女にとって僕は、どういう存在になるのだろう。

学園の友達か、畏怖すべき殺戮者か、賛美すべき英雄か………蛇足かな。

僕はこれからも彼女達を騙していく。そんな僕がここにいるべきなのか。彼女を導くべきだったのか。

………それでも、今はシャルルの新しい決意と門出を祝おう。きっかけを作った者として。

「最後に、目標が出来たんだ。スザクのおかげでね」

「へえ。どういう？」

素で聞いたら急にシャルルが笑い出した。

「ふふっ。スザクって自分の事に関するとスゴイ鈍感だよ。嫌味

なくらいに」

「そ、それは……ごめん」

元の世界で散々言われた事を、まさかここで言われるとは思わなかった。

「いいよ。許してあげる。ただし、僕の事はこれからシャルロットって呼んで。二人きりのときだけでいいから」

「それが本当の……？」

「そう。これが僕の名前。母さんがくれた、本当の名前」

「……わかった。シャルロット……さん？」

「さん付け？」

「呼び捨てでいいの？」

「断る理由が無いよ」

「わかった。シャルロット、これからよろしく」

「ん。ありがとう」

嬉しそうだがどこか名残惜しそうな表情のシャルル————じやなくてシャルロット。

初めてかも知れない。こんな歳相応の表情を君が見せてくれるのは。

山田先生の説明はよく意味がわからなかった。疲労で変なことを口走ってしまったのかな？

「それじゃあ、入ってください」

「失礼します」

・ ・ ・ ・ ・ 。 今のは聞き覚えのある声だったような ・ ・ ・ ・ ・ ？

「シャルロット・デュノアです。皆さん改めてよろしくお願ひします」

優雅に歩いた転校生————スカート姿のシャルロットがこちらに一礼。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした……。はあ……。また寮の部屋割りを組み立てなさいと……」

なるほど。山田先生の疲労の源はそれか。頑張ってください。

ん？ ちよつと待ってくれ。

「え．．．？ デュノア君って女．．．？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね！」

「って、枢木君、同室だから知らないって事は――」

「ちょっと待って！ 昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

「・・・・・・・・・・とんでもない誤解が広がって行く。どうしろと。僕にどうしろと。」

「す、スザク！ お、おい！」

一夏がコチラに詰め寄る。

「ま、まさか女子と一緒に風呂に入っていないよなあ！？」

「してないよ！」

バギyun！

「「うわっ！」」

セシリアがビーム撃ってきた！

「フフ・・・・・・・・ウフフフ・・・・・・・・」

「ご、誤解だよセシリア！」

「ウフフフ・・・・・・・・一夏さん？ 覚悟は出来まして？」

「え、えー・・・・・・・・」

引いてる。一夏の顔が引き攣ってる。あれ？ じゃあ僕関係ない？

バキュン！

なんて無駄な思考をしていたせいで、もう一度撃たれるビームに反応できなかった。

（ってなんで！？　一夏に覚悟しろって言って僕に撃つなんて！）

ああ・・・今無駄な思考を巡らせたせいで、ISを起動することが出来なかった。

覚悟して目を閉じるが、いつまでたっても衝撃は来ない。

「・・・何をしてるんだお前は・・・」

目を開けると、セシリアと僕の間でISを展開したラウラさんがいた。

AICの応用でビームを外にずらしたらしい。

「ありがとう、ラウラ。そういえば、ISは無事だったの？」

「・・・かろうじてだがコアが無事だったからな。予備パーツで組み直したから問題ない」

「そうか。なっと————むぐう！？」

・・・・・・・・・・・・・・・・。。

僕はラウラに胸ぐらを掴まれ、そのまま引き寄せられて・・・キスをしてしまった。

「・・・・・・・・・・なぜ？」

自問自答すると、何故かうウラが答えてくれた。

「お、お前を私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「・・・・？ 僕は男だから・・・婿じゃないの？」

いや、その前にツッコむべき所があつた気がする。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』と言うのが一般的慣わしだと聞いた。故にお前を私の嫁にする」

解説ありがとう。でも僕は何一つ納得してないよ。

そして今の光景を見て、クラスの人が全員硬直してます。

・・・うん。さっさとこの教室から退場しよう。皆にも僕にも時間が必要だ。

「先生。ちょっと保健室に行ってきたま————痛っ」

扉を開けようとしたら、赤い障壁がそれを邪魔した。

「どこへ行く気だ？スザク」

・・・・ルルーシュの仕業らしい。ドスの響いた声になっているのは、何故だろう。

「い、いや、別に深い意味は無く・・・」

「そうか」

納得してくれたはずなのに、能力を解除してくれない。

「・・・なんで解除してくれないの？」

「女性の敵に聞く耳など持たん」

どうやら誤解された方向らしい。

じゃあ窓しかないな。と思い窓までダッシュしたら、シャルロットが僕の前に立つ。

「にこっ」

ああ、エンジェルスマイル・・・地獄に仏とはこれの事だ・・・。

「スザクって他の女の子の前でキスしちゃんだね。僕、ビックリしちゃったあ」

「あの・・・シャルロット？ 誤解があるから言うけど、僕はしたんじゃない、されたんだし・・・とりあえず、そのISをしまおう？」

「—————無理だね」

いきなり左腕の盾がパージする。

そこには六九口径パイルバンカー《グレート・スケール灰色の鱗殻》通称『シールド・ピアース盾殺し』が

剥き出した。

トーナメントで使わなかったが、第二世代型最強の攻撃力を持つ武器……らしい。

「えっと……なんで？」

せめてさ、吹き飛ばされる理由ぐらい、教えてもらっていいかな。

「さあ、吹き飛ば」

「ま、まま待って！落ち着いて冷静になr————」

————ドカアアアアアアアン！！

僕の言葉と意識は、そこで途切れた————もとい、轟音でかき消された。

序章は終わり、世界最強の騎士達が動き出す（後書き）

辛い・・・一万五千文字オーバー辛い・・・話自体、辛いし・・・。
まあこれで2巻終わった・・・次はキャラ紹介・・・だったりする。

誤字脱字、感想があったらお願いします。

キャラ紹介1 ※ネタバレ注意(前書き)

ルルーシュとヴァングの設定(ネタバレかな?)を載せようかと思っています。

キャラ紹介1 ※ネタバレ注意

名前…ルルーシュ・ランペルージ

性別…女

身長…169cm

体重…書くことが出来ません。どうかご了承ください。orz

出身…アメリカ

イメージCV…清水香里（仮）

容姿…腰に届くぐらいの黒く艶やかな長髪で、顔の造形はアメリカ人寄りだが、その中に少し日本人の面影を感じさせる。これは日本人の血筋が混ざっているため。

普段は下ろしているが、戦闘時や気分によってポニーテールやツインテールなど色々と髪形を変える。

前は指に黒と金の指輪をつけていたが今はつけていない。その代わり、金色のチェーンに深い漆黒の宝石のついたペンダントがある。瞳は紫で、男装したら美少年に見られるほど中性的な容姿をした美少女。

体格…少し痩せ型でスレンダー。胸は箒と鈴の間ぐらい。つまり通常。

好きなこと…読書。静かなところ。チェス。面倒ごとを傍観すること。

と。

嫌いなこと…騒がしいこと。面倒ごとに巻き込まれること。運動。

性格…自分から行動はあまり起こさない傍観者。しかし巻き込まれれば終わらせようと動く。

いつも冷静沈着で取り乱すことの少ない、同性が憧れるクール系女子。だが実際はとてもテンションが冷めているダウナー系女子。これは本人も自覚してるが、どうしようもないと諦めてる。

知力はIS学園全体でもトップクラスで、しかも自身が大人びた容姿な為、クラスでは孤高の存在として扱われる。そのためか精神年齢が学生にしては成熟していて、同年代によく『年上』と間違えられるてしまう。本人は自分の容姿が老けていると勘違いし、心の中で密かに気にしている。

家族構成…不明

IS専用機…『蜃気楼』『ガウエイン』※使えるのは今の所『蜃気楼』のみ。

経歴…色々と不明な点が多い平行世界のルーシユ。

アメリカの国家代表候補生であると同時に、ある特務機関にも所属している。

小学生の頃にある事件に巻き込まれ、それがきっかけでISに関わることになった。

家族構成はわかっていないが、天涯孤独というわけではない。実家は金銭に困っていないらしい。

自身の専用機を、政府の特例で二つ持っているが、所持や使用ができるのはどちらか一つとなっている。

ヴァングや千冬とも前から面識がある。IS操縦技術は専用機を

二つ持てるほど高い。

また彼女は他の人とは違った力を持っている。本人はそれを『絶^ギ対^ス遵守』と称す。

この力の詳細はわかっていない。

名前..ヴァング・G・ベイル ※Gは『ジノ』の略。

性別..女

身長..175cm

体重…以下同文。 o r z

出身…イタリア

イメージC V…佐藤利奈

容姿…肩にかかるショートヘアで鮮やかな金髪。特徴は髪の一部をリボンで纏めている所と、前髪で右目を隠している所。

片耳にI Sの待機状態である、赤と青と黄色のフレームに、薄く黒い筋の入った白い宝石が埋め込まれた、豪華そうなイヤリングをつけている。

瞳は明るい緑色で、コチラも中性的な容姿をした美少女。その上、名前と容姿のせいでよく『男』に間違えられる。本人にとってはコンプレックスらしい。

体格…背が高いためルルーシュよりスレンダーに見える。胸はルルーシュより小さい。

好きなこと…人をからかう事。騒がしく楽しい場所。運動。戦闘。

嫌いなこと…人にからかわれる事。面倒な仕事。勉強。

性格…社交的で基本的に何に対しても自由。自由というのは本来のキャラを見せないため。

というわけでいつもは作ったキャラである『お気楽能天気キャラ』で知られている。だが洞察力はとても長けているので、周りからはよく『猫かぶり』と言われてしまう。

いつも人と親しくあろうとし、常に人懐っこい作り笑顔^{……}を浮かべる。それは仕事柄『広く浅く』を信条としているので。そのため友人関

係も大体は広く浅い。

尚、戦闘になると人懐っこい笑顔が余裕の笑みに変わる。

家族構成…父、母、祖母、祖父。

IS専用機…『?????』※ご想像通りの機体です。名前は発表
しません。

経歴…イタリアの高名な資産家の一人娘で、国家代表候補生でもあ
る平行世界のジノ。

だが本人は、資産家と代表候補生の事を隠しているので、セシリア
のようなわかりやすさは無く、専用機を使うこともあまり無い。

高名な資産家である両親が、イタリアのIS研究に支援金を出して
いるため、幼少の頃からIS事情には詳しいが、そう言った経歴と
は関係なく、IS操縦は量産ISでシャルロットと渡れるほど高い
ので、自らの実力で今の地位を獲得した実力派。

その実力からイタリア政府の秘匿IS組織に所属し、ルルーシュと
同じ特務機関にも所属している。

ルルーシュとは前々から面識がある。またその他の国家代表生との
交流もある。

キャラ紹介1 ※ネタバレ注意（後書き）

ルルーシュは・・・男女逆転祭りをイメージしてもらえれば。

ヴァング（ジノ）は・・・髪が短くて金髪になった、TOAのティアとってください。細部はみなさんのご想像に任せます。

裏話。

最初にヴァングの容姿を書いていたら、何時の間にかシャルロットと見分けがつかなくなった。

設定が明かされる度に、コチラも更新していきます。
機体の設定は、またいつかどこかで。

機体設定3（前書き）

というわけで、機体設定です。

機体設定3

『紅蓮式式』…形式番号 Type-02-GUREN

カレンと共に黒の騎士団を支え、最強のエースとしてブリタニアに畏怖された紅き機体。

スザクと同じく神と呼ばれるものから授かった機体。

コチラもISのどの世代にも分類されない。しかし機体性能は『ランスロット』や第三、第四世代型とも並ぶ。

こちらも装備の関係で全身装甲と言う設定がなされている。尚、すべて初期設定である。

ただコチラは『ランスロット』のような、特別な条件での『一次移行』は無い。ただ一定以上の戦闘経験値が堪れば普通に『一次移行』する。

待機状態は、紅蓮の翼型の起動キーと同じ形。ライターに偽装することも出来る。

見た目はKMFの紅蓮式式と同じ。

エネルギー消費する兵装が少ないため持久戦に強い。しかし近接戦闘型なので、長距離戦闘では殆ど攻撃手段は無いので、そこは難題となっている。

ランドスピナー
高機走駆動輪は足に内蔵されているため、『ランスロット』などのブリタニア製のKMFのそのような、フレキシブル可動はしない

が、接地圧可変タイヤを採用し、不整地であっても安定した路面追従性、走破性を惜しみなく発揮してくれる。

後付装備はなし。これから紹介する武装は全て初期装備。

装備一覧

《輻射波動機構》

この機体の主武装で、紅蓮を象徴する鋭利な右腕に内蔵された兵装。右腕で掴んだ場所を強力な加熱で破壊する兵装で、これを放たれたら既存の兵器は耐えられず破壊され、操縦者にも危険が及ぶので、いつもは威力を制限して使う。そして零距离でしか使えない。

また発生する振動波で、砲撃から機体を丸ごとガードする障壁としての使い方もある。これは『ランスロット』の《ヴァリス》も耐えることが出来る。

右腕は大型に加え伸縮機構が備わっており、二メートル分離れた間合いでも射程圏内に入る、破壊力・汎用性を兼ね備えた、盾とも剣ともなる強力な兵器。

ただしこの機体の兵装の中で、一番エネルギー消費は激しい。

《呂号乙型特斬刀》

背部に収納された、鎧通しと十手を融合させたような構造の小型ナイフ。

接近戦では敵の攻撃を受け止めたり、自身から切り込めたりと機性能が高いが、十手を模してるので攻めより守りの方が向いている兵装。

またエネルギーを使う兵装ではないため、カレンは常時左腕で保持している。

《グレネードランチャー》

左腕上腕部に装備された、この機体の数少ない長距離用武装。

近接戦闘を得意とする紅蓮のために、ナイフなど物を持ったままでも使用が出来る。

威力はあまり高くないがその分距離を稼いでいる。

また緊急撤退時などのために、視覚妨害とレーザー妨害のチャフスモーク弾へ変更することが出来るため、色々と応用が効く武装である。

《飛燕爪牙》

KMF標準装備のスラッシュハーケン。

これは『ランスロット』のハーケンより、鋭利に尖った形状をしているため貫通力はある。

しかし、胸部分に一つだけ装備されてブースターも付いてないので、応用性には欠ける。

エネルギーをあまり消費しない中距離武装だが、カレンは非常時以

外ほぼ使用しない。

——システム一覧——

《パワーラシステム》

『ランスロット』と同じ、操縦者の身体能力を機体性能に大きく反映するシステム。

詳しい説明は、前に書いたため省くとする。

《?????》

名称不明のワンオフ・アビリティー。詳細不明、初期設定のため使用不可。

『紅蓮可翔式』形式番号 Type-02/F1A GUREN
Flight-Enabled version

見た目は頭部が流形状のフォルムに改められ、背中にX字に開く《飛翔滑走翼》で空を飛ぶことが出来るようになり、新型の右腕パーツ《徹甲砲撃右腕部》などを装備した紅蓮の強化型。

尚、新装備である《飛翔滑走翼》は後付装備扱いとされる。

《徹甲砲撃右腕部》や《飛翔滑走翼》が装備されたおかげで、長距離攻撃方法が増え、遠距離は紅蓮の弱点どころか一種の強みとなり、全距離の攻撃方法が豊富となった万能型。

――追加武装一覧――

《徹甲砲撃右腕部》

この機体の主装備である右腕が強化された。しかし見た目はあまり変化していない。

だが《輻射波動機構》より機能が向上し、新システムが付け加えられている。

それは、これまで零距离接敵を必要とした《輻射波動》を、無反動式の砲撃兵装である《輻射波動砲弾》として遠距離へも照射できるようになった。

この《輻射波動砲弾》は収束・拡散の切り替えが可能で、遠距離の敵を砲撃するためのロングレンジ照射ができる。これは《ハドロンブラスター》と並ぶ威力を誇る。

また、広域照射によって複数の敵を攻撃するワイドレンジ照射も可能。ただしこれは、ISの動力部分に干渉して動きを封じるだけなので、直接的なダメージは期待できない。

ただし、これらはエネルギー消費がさらに激しくなったため、腰に非常用のカードリッジが幾つか備え付けてられた。

《飛翔滑走翼》

背中についたX字に開く翼。これのおかげで紅蓮も空を飛ぶことが出来る。

しかも基部にはミサイルポッドが内蔵されており、小型の浮遊式『ゲフィオンデイスターバー』である《ゲフィオンネット》や追尾式ミサイル等を搭載・射出することができる。

機能がたくさんあるためエネルギーを多用しているが、それだけエネルギーを削るメリットはある。

――判明システム一覧――

《せいてんかしよう聖天可翔》

『ランスロット』の《旋律誓約》と同じ、正体不明のワンオフ・アビリティー。

『一次移行』したため名称が判明した。しかし名称が判明しただけで、まだ一度も使用することが出来ていない。特別な条件がある可能性が高い。

機体設定3（後書き）

意見があったらどうぞ。

GO for the NEXT!! 次に進むために (前書き)

学校忙しい。定期更新が辛い・・・。

それはそうと、三巻突入だぜ! 物語が動くぜ! 今回も超長いよ!

・・・IS最新巻が買えなかったぜ! う、うわぁーん (泣)

※題名変えました。英語の題名ってカッコイイよね。

Go for the NEXT!! 次に進むために

「うーん・・・」

どうも、枢木スザクです。

僕は今自室で、相棒である『ランスロット』の武装一覧を見て唸ってます。

その理由は。

「この『?????』ってなんだろうか・・・」

この通り。

代表者トーナメントと学年別トーナメント。そして神様との会話。二つの事が僕らの世界の誰かの仕業とわかったから、僕もこのままの状態では心許無い。だから戦力強化のため、この『?????』の武装の正体がわかれれば、僕の戦術が広がるはず。

だが――――

「まったく見当もつかない・・・」

詳細を知ろうと『?????』を押してみるが、すぐに『Error』と表示される。

「やっぱり、ワンオフ・アビリティーと同じなのかな」

コードギアス
《旋律誓約》は、『ランスロット』が進化したときに発動した。
ということは、この『? : ? : ? : ?』も時期が来れば判ると言う事だろう。神様もそう言ってた。

「そろそろ、切り上げようか」

今日も学校だ。遅刻する訳には行かない。

「じゃあ行くか」

誰もいなくなった二人部屋で呟く。

シャルロット——ではなくシャルロットは、女子という扱いに戻ったため、速攻で部屋が変わった。

おそらく一夏と相部屋になると思う。それ以外だったらどうしよう。

「考えるのはよそう。うん、それがいい。そうしよう」

と言うわけで僕は部屋を出た。

かもそんな大量に」

僕のお皿、日本流の冷やし中華（主にキュウリや卵焼きがトッピングされてる）を見て、シャルロットが呟く。まったく酷いことを言うなあ・・・そんなに変なのかな。

自分のトレーを僕の隣に置いて、トースト（ピザトースト？）を一口頬張る。

「とりあえず朝食は一番取っておきたいんだ。一番動く時間が午前中だからね」

「まあそれはわかるけどさ……。でも冷やし中華を見ると『夏が来た』って思うね」

「そうなんだ。僕もさ、この頃温度が上がってきたから、ちょうど目に付いた冷やし中華を選んだんだ」

と言ってまた一口ちぢれ麺を食べる。

シンプルな醤油タレなため、程よい酸味と後味すっきりという、よく目が覚める朝食向きに作られてるのは食堂の気遣いなのだろうか。キュウリや卵と具材も多種に及ぶので楽しめる。

まあなんにしても、おいしい。

「日本って凄いよね。こう、四季があるって新鮮で面白いよ」

「まあ四季がある国って珍しいから。だから季節に合ったものを食べれるって言うのは、結構幸福なことだよね」

日本が褒められたから結構嬉しい気分になって、饒舌になっていたかもしれないな。

「キャアアッ!？　な、何あれ!？」

「か、カッコイイ・・・羨ましい・・・いつかあなりたい・・・」

「まるで千冬お姉さまみたい・・・あのスタイルが恨めしい・・・
だけど・・・カッコイイ」

その時、朝の食堂に相応しくない感じの歓声が響いた。

「な、なに？」

「さあ？」

僕らは歓声の発生源である人物を探す。・・・そして見つけてしまった。一目でわかった。

その人物は、食堂で野菜ジュースとサンドイッチを持つ。

そして、彼女は絶句している僕達の目の前まで歩いてくる。

「二人とも。隣座ってもいいか？」

「え・・・あ、うん」

「ど・・・どうぞ」

「すまないな」

と言って僕の向かい側に座る。

そしてサンドイッチ（卵サンド）を一口頬張り、まだ絶句してるコチラを見る。

「どうした？ 私の顔に何かついてるか？」

「・・・いや・・・ルルーシュ。その格好、どうしたの？」

「？ ああ、なるほど。さっきから妙に周りから浮いてると思ったが、これのせいかな」

そう。僕らが絶句していたのはルルーシュ。そしてその格好だ。

まず彼女の髪型がツインテールになっている。身近で例えると鈴みたいなの。

とりあえずそれは似合っている。結ばれた白いリボンがアクセントとなり、改めてルルーシュの黒く艶やかな長髪が映える。しかしこれは初めて見たので驚いた。

だがそれよりも、今の彼女の服にご注目だった。

「なんでそんなに制服が真っ黒なんだ？」

ちなみに、ここIS学園の制服は、白を基本とし所々に赤と黒を入れた配色だ。

だがここは制服がカスタム自由らしくて、箒のようにスタンダードな制服もあれば、鈴のように肩を露出させた使用の物など多種多様

に及ぶ。

だが彼女の制服は真^まっ黒だ。主に制服の白^{しろ}だった部分が全て黒く染まっている。

その姿はさながら、漆黒の法衣を纏ったお姫様のようだ。

「ほ、本当にどうしたの？ 学校に喧嘩でも売る気？」

「スザク。いや非行に走ったわけじゃない。・・・まあ何だ。・・・この頃暖かくなってきただろ？」

「うん。ちょうど夏の話話を話してたんだ」

「で、私は暑いのが苦手だな。実家に頼んで夏服を用意してもらったんだ。だが・・・」

黒に紺のラインが入ったスカートを摘み上げる。

「とある知り合いのせいかな、こんな服が届いてしまったという訳だ」

「へえ。ルルーシュの実家って結構お金持ち？」

「・・・まあ私が代表候補生だからな。色々と金が入ってくるだけだ」

苦笑いのルルーシュ。だが僕にはなぜか自虐^{じじく}的な笑いに見えた。

(・・・ルルーシュは、やっぱり何か隠してるんだな)

しかし追求すべきではないだろう。僕にも隠していることがあるし。

「着心地はいいんだが、ここではとても目立つな・・・私はそういう性分ではないのに・・・」

あのドSメイドが・・・、とルルーシュが愚痴る。

僕とシャルロットは顔を見合わせて、苦笑を浮かべるしかなかった。とりあえず話題を変えよう。

「夏か・・・IS学園では何か行事があったりするのかな？」

「あ、確か来月辺りに臨海学校へ行くよ。旅館に泊まるとか言ってたね」

「へえ。臨海学校か」

「そうだな。確か一日目は完全にフリー、後はIS起動訓練・・・だったと私は記憶している」

「そうなんだ」

「まあ、そういう情報は朝にSHRで伝えてくれるだろう」

「了解っと。ごちそうさま」

冷やし中華をキレイに食べ終わり、空となった容器を持つ。

キンコンカーンコン。

「全員いるな。ではSHRを始める」

チャイムの音と同時に織斑先生が教壇に立つ。

「まず連絡事項・・・と行きたいがその前に。ランペルージ、その格好は何だ」

指名された、真っ黒な制服に身を包んだルルーシュはクラスの視線を浴びる。その視線は『気になってたけど聞けなかった』と物語っている。

「制服ですが」

ルルーシュは『予測してました』的に、目を閉じて視線を無視しながら答えた。

「IS学園の制服は確かにカスタム自由だが、あまりにカスタムされるとコチラも容認しかねる。出来る限り改善しろ」

「前半の苦情は私の実家へどうぞ。後半は善処します」

眼を瞑って受け答えるルルーシュ。その様子から何となく、怒っているような雰囲気が出ている。

だが織斑先生は気にせず

「ならいい。では連絡事項だ。まず今日は通常授業の日だ。I S 学園生とはいえお前達も扱いは高校生なのだから、赤点などは取ってくれるなよ」

そうなのだ。僕等はいくらI S 操縦者と言っても世間的には高校生。

平均的な高校生の知識は持っておかなければ、成人しても社会で役に立たない、というわけで回数は少ないが普通の授業もちゃんとする。

僕は元の世界でそう言った事を学んだが、戦争と言う事情があったので詳しくは出来なかった。

なので正直コレはありがたい。

今は織斑先生が教室で連絡事項を伝えてる。

「それと来週からはじまる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。三日間だが学園を離れることになる。自由時間で羽目を外しすぎないように」

そう。七月頭の校外実習——すなわち臨海学校。

その三日間の日程のうち、初日はルルーシュに聞いた通り丸々自由時間。しかも場所が臨海——つまり海となれば、十代女子はテンションはうなぎ上り。

そう、先週からずっとテンションが上がりっぱなしになるぐらいに。

最初はなぜここまでテンションが上がるか不思議だったが、今日のSHRでやっとわかった。臨海学校と言うのは、女子達のテンションを底上げる……らしい。

らない。

「うーん、やっぱり買いに行くしかないなあ、水着」

そう。

せっかくの臨海学校なので泳がなければ損と思い、滅多に漁らない荷物の中を探すが、悲しいことに海パンらしき物は見つからない。神様もそこまで気を遣ってはくれないらしい。

「買いに行くしかないか……。でも問題は……。それを買う場所か」

僕はこの世界に来てまだ二ヶ月ぐらいしか経っていない。そんな僕がどうやって水着を揃えればいいというんだ。……。一人ならの話だが。

「誰か誘うと……。しかし誰を誘おうかな」

先週からテンションから上がった女子なら、すでに水着を用意してるのは当然。とすると自然に選択肢は一つとなる。

「一夏を誘おうか」

さっそくそれを伝えるに僕は部屋を出る――――――

ガチャ

「きゃあっ！」

「え？ あれ？」

そして扉をあけた時、何故か僕の部屋の前にシャルロットが立っていた。

「・・・す、スザク。驚かせないでよ」

「ゴメンゴメン。でも僕の部屋の前でどうしたの？ 何か用でも・・・」

「あっ・・・そ、その、大した事じゃないんだけどさ・・・」

「？」

なんだろう。シャルロットは俯きながら言葉を濁している。用は言いにくい事なのか？

「用が無いならもういいかな？ ちよっと一夏を誘いに行くところなんだ」

「？ なんで？」

「僕は水着を持ってなくてさ。でもどこで買えばいいかわからないから、同じ男子の一夏に道案内を頼もうと思ってるんだ」

「っ！！」

と言うと、何故かシャルロットは驚愕の表情をした。えっと、どう

して？

「じゃ、じゃあスザクはこれから買い物をするんだね！？」

驚愕から一転、鬼気迫る勢いで僕の肩を揺らすシャルロット。

「う、うん」

「ほ、ホント！？ホントにホント！？」

「ほ、ホントにホントだよ」

「そ、そう……なんだ……よかった……」

僕の答えに満足したのか、安堵の表情を浮かべるシャルロット。最近、彼女の考えることが全くわからない枢木スザクです。

「で……それがどうしたの？」

「あっ……そ、その、僕も臨海学校用の水着が無くて……」

「そうなの？」

「う、うん。男物の水着は入ってたんだけど、履く訳にはいかないから……」

それはわかる。

「そ、それでね？ 今度の休みに、よかったらスザクに水着を選んで貰おうと……」

「え？ うーん、そういうのは女子が行った方がいいと思うけど」

男子がどうやって女子の水着を選べばいいのだろう。

「それは・・・そうなんだけど・・・ほ、ホラ！女子は皆水着を用意してるし、僕と行くと二度手間になっちゃうから。スザクが行くならついでにどうかなって・・・だ、だから・・・」

恥ずかしいからか、頬を朱に染めながら喋るシャルロット。

「ま、断る理由は無いか」

「え？！じゃ、じゃあ！」

「うん。お誘いを受けるよ」

「ほ、ホント！？ホントにいいの！？」

「う、うん」

「あ、ありがとうスザク！」

そんなに喜ぶようなことでも無い気がするが・・・。まあ喜んでくれるならいいか。

「じゃあ、一夏を誘いに行こう」

「え・・・あっ・・・そっか。そうだったね・・・」

僕の一言でシャルロットの表情が悲しみに一転。今の会話で何度彼女の表情が変わったことか。

「じゃ、一夏の部屋に行k—————」

「織斑なら確か、鈴とセシリア、あと箒と一緒に何処かへ行ったよ」

「……………語尾を間延びさせる独特の声に…………一夏を苗字で呼び捨てにするのは、一人だけだ。」

「ヴァング」

「やや、おはよう？こんにちは？こんばんは？お二人さん。部屋の前で何してるの？」

ヴァングは手に持ったハンバーガー（チーズ？）を咀嚼しながら聞く。

「次の休みに、一緒に水着を買いに行くって相談」

「水着って言うと、臨海学校か。水着を買いに行くなら、駅前の大型ショッピングモールがいいと思うよ。色々あるしここからなら近いだろうし」

「そうなの？でも場所がよくわからないな……………」

「そう？じゃあ私が案内してもいいよ」

これは願っても無い提案だ。

「ホント？」

「うん。貸しで」

「ハハッ、抜け目ないね。わかった、よろしく頼むよ」

「えっ?!」

いきなりシャルロットが声を荒げる。

「どうかした？ あ、何か都合でも悪い？」

「あ、別にそういうわけじゃあ………（チラッ）」

横目でヴァングを流し見るシャルロット。それを見て”ポンッ”と手を叩いたヴァング。

「大丈夫大丈夫！ 私はもう水着があるから、買い終わるまでどこかで待つよ。だからそっちは二人^{……}つきりで水着を買えばよろしい！」

『二人つきり』というのを、妙に強調されたのは気のせいかな。

「えっ……いいの？」

「OK OK。友達であるシャルロットのためなら、このヴァング、一肌脱ぐぜえ？」

「あ、ありがとう……」

「You're welcomeってね♪」

僕の知らない所で話が進んでいる。ヴァングとシャルロットは一体何の話を……。

「じゃ、それでいいよね」

一通り話したらしいヴァングが、相変わらずのにこやかな笑顔で言ってくる。

「そうだね。僕に異論は無いよ」

「そう。なら来週の日曜、十時に駅前で集合ね。じゃあよろしく」

それだけ言って、ヴァングはハンバーガーを食べながら通り過ぎた。

「なんか変な事になっちゃったね」

「そ、そうだね。まあなんにせよ、これで水着を買いにいけるね」

「うん。今日はもう帰ったほうがいいよ」

「わ、わかった。じゃあまた明日！」

という訳でシャルロットは急いでこの場を離れた。顔が赤かったのは何故だろう。

「まあいいや」

気にしても仕方がない。ってなわけで僕も部屋に戻った。

[illegible]

「ふふふ」

シャルロットはその後、上機嫌で部屋に戻って行く。

「やったあ……！スザクとデート……。まあ、二人つきりじゃないけど……」

男装してこの学校に来たから、ボロが出る訳には行かなかったの
で、持ってるものも全部男物だった。当然水着も。

だが改めて女子として学校に編入したから、もう男物の水着を着ける訳には行かなくなった。

しかしこれは父の命令を無視した行動。つまり実家から女子用の水着が支給されることは無い。

だから、自分で買いに行くしか手は無かった。

しかしそれを逆に利用して、『一緒に水着を買いに行く』という名目で、シャルロットはスザクとデートしようと考え出した。

作戦は一応成功。一応と言うのは、二人きりではないからだ。

「まさかヴァングも・・・間が悪い・・・」

もちろん、ヴァングが自分の邪魔をしようとしたわけはなく、困っていたスザクを助けようという善意で動いたことはわかる。だが、どうしてもそう思ってしまう。

「でも、ヴァングは僕に気を使ってくれてるし・・・」

あの時、『二人っきり』を妙に強調したと言う事は、シャルロットのスザクに対する思いはすでにバレている。それでわざわざ、一人だけで時間を潰すといってくれた。

そんなヴァングに恨めしい気持ちを抱く自分に、たまらなく苛立ってしまう。

でも、スザクと二人っきりになりたいという感情も存在してる訳で。

「あゝ・・・モヤモヤするよ・・・」

「・・・まだいない、か」

待ち合わせ場所である駅前に、僕は一時間前に推参した。

ちなみに、服装は元の世界でお忍び用として使っていた服。実は気に入っていたため着てきた。

「ふう・・・」

とりあえず駅前の時計台に寄りかかって、他の二人を待つ。

「ねえねえ！ あの人、カッコよくない！？」

「ホント！ 芸能人かな！？」

「は、話しかけてみる！？」

「ええーッ！ やめとこうよー！」

・・・・・・あれ？

（なんか目立ってるな・・・お忍び用の服だったはずなのに・・・）

通行人の人（主に女性）に指差されながら、コソコソと話されている。

なんだろうか。サングラスや帽子も付けてるから、そんなに目立つはずは・・・置いておこう。

「しかし早く来すぎたかな」

寄りかかった時計台を見て、ため息をついてしまう。時刻は約束の五十分前。

女性を待たせるのは忍びなかったので、一番早く来ようと思ったが、早すぎるのも考え物だ。

「仕方ない。このまま待つか」

暇つぶしに持ってきた本（貸してもらった推理小説）を開く。

本の題名は『トリックオptrラスト』。舞台は十九世紀のアメリカのとある町。

主人公はそこにあるアパートの大家であり、その一部を私立探偵所に改造し運営している、眉目秀麗でクールな探偵である所長、カイル。

そしてそれをサポートするのが、運動神経だけが取り得の肉体労働者である助手、トリア。

最後にカイルの幼なじみでトリアの姉であり、料理、洗濯、運動、勉強と何でも出来て、さらに誰もが振り返るほどの美人である助手、アクレト。

現役大学生のカイルと、アパートに居候しているトリアとアクレトを色々な依頼主が尋ね、カイルは自身の暇潰しの為、トリアは居候の身で生活費を稼ぐため、アクレトは弟と幼なじみの危険にあわせたく無い為、依頼を解決して行く推理小説。

見せ場は天然であるトリアに、無口なカイルがクールなツツコミを入れるというギャグ要因。

だがちゃんと理屈の通った推理を披露してくれ、さらに無意識の内

に女性の心を掴んでしまうカイル。

そう言ったことで、よく誤解されてしまって困っているが、鈍感な彼は気付かない。

こんなところが、大多数の男女に支持されている。そして何故か僕の背中に悪寒が来た。なぜ？

トリアの格闘シーンがカッコイイと言うのも、人気の一つだ。

天然な助手も戦いとなると雰囲気が変わり、バツタバツタと犯人達を薙ぎ倒して行く。そういったギャップが好まれている。トリアには主に女性ファンが多い。

ちなみにトリアは、銃を持った犯人五十人を、素手で瞬殺できるほどの戦闘ができる。

僕でも出来るかな・・・。

そしてアクレトの何でも許してしまいそうな、それでいて厳しい性格も愛されている。

さらにアクレトはトリアに武術を教えた師匠でもある。今ではトリアのほうが強いが、彼女もマシンガンを持った犯人に恐れもせず倒した『強い女性』の代名詞とも言われる。

男女の街角アンケートで、理想の女性のタイプに上げられるくらいの人気がぶりだいだ。アクレトはトリアとは逆で男性からの支持が多い。もちろん男女ともに愛されているが。

ちなみにアクレトはカイルの事を意識しているが、鈍感なカイルは気付いていない。

そういった歯痒い所も愛されている。カイルに何となく親近感が沸くのは何故だろう。

この『トリックオptrラスト』は、すでに一〇シリーズまであり、アニメ＋漫画＋ゲーム＋映画化もされている大ヒットロングセラー

大作だ。

「確か今の話は・・・っと」

挟んで置いた付箋の場所を開く。

今読んでいる話は、警察でも手を焼く事件を次々と解決して行く、カイル達の噂を聞きつけたアメリカのとある貴婦人がアパートまで押しかけた所だ。

貴婦人が言うには、自分の夫である公爵が不可解な死に方をしたらしい。

警察では自殺と扱ったというが、貴婦人は納得できないので、カイル達に依頼を申し込んだという。

『もちろん、報酬は弾みますわ』

『それはかまわないが、コチラが調べて自殺と断定した場合はどうなる？』

『報酬は払います。しかし依頼内容は”夫を殺した人間を暴く”ですから、額は減らさしてもらいます』

『わかった。金を払ってくれるなら問題ない。その依頼、引き受けよう』

『こらカイル。そんな言い方はお客様に失礼よ。すいません、この男は素で”世界は俺を中心に回っている”なんて言うもので』

『そ、それは昔の話だ。このバイオレンス女の戯言は気にしなくて

いい』

『へえ・・・バイオレンス女・・・かぁ・・・（ポキポキ）』

『え、えっと・・・引き受けてくださって、ありがとうございます』

『期限は無制限で頼む。いくぞ筋肉バカ。とりあえず現場検証しないと話にならない』

『ふえ？　ちょっと待ってください。後ピザ一切れを二十五回食べないと・・・』

『少ないように言ってるが、枚数で表すと六枚オーバーだな。食べすぎだ』

『ハア・・・食べすぎよ。一応私たちは居候なんだから』

『ば、バレた。一切れ四分の一というのもしバレた。でも姉さん』

『俺の推理を甘く見るなよ。それより行くぞ。来ないと給料を払わないからな』

『あつ所長！　待ってくださいよー！』

『あっカイル！　また私が留守番！？　私も連れてってよ！』

『いやお前が来ても・・・』

『何？　私がついていったら都合が悪い？　医学と生物学は私の得意分野よ』

『だがなあ……いつも言うが、女が見て気持ちのいいものじゃないぞ』

『……医者志望なんだから、いつか当たる壁よ。それに現場に死体は無いでしょ』

『そうか。そこまで言うならこれ以上は野暮だな。ただし居候に――』

『――使うお金は無い、でしょ。電車ぐらい乗れるから。……貴方といれるなら、安い物よ』

『？ まあわかってるならいい。じゃあ行くか』

『……そうね。さっさと……行きましようか……』

『あちや……鈍感だなあ……所長』

『ん？ 土管がどうした？』

『いいえ、なんでもありませんよ。所長』

『トリア。さっさと行くわよ。……余計なことは、言わなくていいの』

『は……本当に歯痒いなあ……所長があそこまで鈍感だと』

ここまで読んで急に辺りが騒がしくなった。

「ねえ貴方。さっきからここで留まってるけど、暇なの？」

「暇ならウチらと一緒に遊ばない？」

「てか暇でしょ？早く行こうよ」

「あ、いや僕は・・・あ、ちょ、ちょっと！」

ド派手な格好や髪型をしている・・・よくわからない女性たち腕を引っ張られた。

「僕は待ち合わせしてるんです。何を当たって貰えませんか」

「ええ、貴方十分以上ここにいたじゃん」

「まだ約束の時間になってませんから」

「何？彼氏が彼女より早く来てるの？キモイよそういうの迷惑だし」

『僕がいつどこで貴方たちに迷惑かけた』という言葉は飲み込んだ。

「なんでもいいんで、何を当たってください」

と言うと、金髪にツインテール・・・みたいなものを頭に乘せた女性がイラついた顔で。

「何？男が女に命令できると思ってんの？」

「っ・・・・・・・・」

そうだった。この世界は女尊男卑が成り立ってしまった世界だった。僕の世界の常識は通じないんだった。かといって女性に暴力したらそれこそ終わり。

（どうしようかな・・・ダッシュして逃げて、改めてここに戻ってくるのか）

それがいいか、と思いダッシュする体勢をしたとき、黒髪が・・・爆発している女性が蹴られた。

「うわっ！」

バシャーン！

その女性はよろけたまま、子供たちが遊んでいる噴水の所に頭から突っ込んだ。

「キャア！？」

「な、何すんのよ！」

「いや、僕は何もしてないけど」

「そうそう。やったの私だし」

「誰よ！」

茶髪に凄い黒肌のボブカットな女性が、ヒョコつと時計台の後ろから出てきた、金髪・の女性を睨む。

「ふっ……名乗るほどのものでもないよ」

カッコイイアルトボイスで言い残し、呆然としている僕の手を引く金髪・の女性。

「ちょ、ちょっと!」

僕の抗議を無視し、金髪・の女性はどうどん僕を引きずって行く。

「無視?!」

そして駅の中に入ったとき、やっと反応を返してくれた。

「まったく。なあゝに逆ナンされてんの。男ならシャツと断らないと」

「……………うん。ヴァング。助けてくれてありがとう」

そう。助けてくれたのはヴァングだった。

ちなみに格好は、紺のブレザーと白地に文字が印刷されたシャツ、下は黒地に白と灰色のチェックが入ったズボン、そして靴は白のスニーカー。さらに頭にはロゴがある黒の帽子。

これは確かにとてもよく似合っているが……完全に美青年にしか見えない格好をしている。

胸も目立たないから、周りから『男装している』言われても仕方ないと思っ。

「……………男っぽい格好だね」

「え、何言ってるの？この格好って凄い女の子っぽくない？」

引っ張った腕を放して、その場でヴァングが一回転。

スカートならよかったのだが、残念ながら革ベルトで締められたズボンは、ピッタリとヴァングの足についてきている。

「……………」

「え？何その微妙な表情。それでも服選ぴに一分も使ったのに」

「あ、それだけ……………そうなんだ」

僕の表情は苦笑に変わった。ヴァングのセンスはどうやら歪んでいるらしい。

「もう何なのよ！？　言いたい事があるならハッキリ言えばいいじゃない！」

いきなりヴァングはキレた。もうそれは、僕の胸ぐらを掴んで持ち上げるぐらいに。

「ま、待った待った！　ぐへえ！く、くるじい……………！」

「ふん」

そしてパツと手を離す。いきなり離されたので、宙ぶらりんの僕は尻餅をついた。

「いてっ」

「さっさと来なさい。シャルロットはもう来てるし。今はトイレに行ってるけど」

「あ、待ってヴァング」

呼び止めると、ヴァングは不機嫌そうにこちらを向いた。

「……何よ。どうせ心の中で『男っぽい』とか、『女の子らしくない』とか思ってるんでしょ。そうよ、どうせ私の好きな服はみんな男物よ……逆にスカートとかありえないし。なんで他の女子はあんなヒラヒラ穿けるのよ……露出が多すぎるのよ……そりゃあ女子として、アレに憧れが無い訳じゃないけど、だからって街中で穿くものじゃないし、ズボンの方が機能性は高いのよ……それなのに他の女子は……（ブツブツ）」

ぐ、愚痴っている。これでもか！ってぐらいに愚痴ってる。しかも喋り方が素に戻っている。

コレはやバイ……。フォローしておかなければ！

「大丈夫さヴァング。すっごく可愛いよ。おもわず見惚れちゃった」

「っ！」

駅の中なので、ヴァングによく聞こえるよう、耳元まで顔を寄せ小声で言ってみたら、ヴァングは何故か顔を赤くして目を見開いた。照れてしまったのかな？

「・・・あ、す、スザク。それ・・・ホント？」

「嘘つく理由が無いよ。少なくとも、僕の中ではね」

今僕に出来る最高のスマイルを浮かべながら、そう答えておく。

（機嫌を治してくれたか・・・？）

おそろおそろヴァングの表情を伺うと、

「そ、そう・・・？ あ、ありがとう・・・」

ぎこちないが笑顔でそんな言葉を呟いてた。

「す、スザク・・・」

「へ？」

ヴァングが妙に潤んだ目で僕の名を呼ぶ。どうしたんだろうか？

そういえば、まだヴァングと顔を近づけたままなので、妙に顔が赤いことにも気付く。

まあ白人なので、赤と言うよりピンクと言った方がいいかもしれない。

バシッ！

「痛い！」

「ふん、いい気味だよ」

後ろからいきなり頭を叩かれた。この声は……トイレに行ってたらしいシャルロットか。

「いきなりなんで……」

「ふん」

今度はシャルロットが不機嫌になってしまった……僕が何をしたんだ。

「さっさと行こうよ」

「う、うん。……シャルロット……た、他意はなかったのよ？
ただスザクが……」

「あ、謝られても困るけど……」

「そ、そう……ね」

なんて会話をシャルロットとヴァングがそんな会話をしていた。話
はよくわからない。

まあなんにしても、僕は駅内の大型ショッピングモールに繰り出
した。

[illegible]

「本当に、ここには色々あるね」

「当然。ここに無い物はこの街にはないって言われるほどだし」

「ランチとかも充実してるし、時々訪れてみよう」

ヴァングの案内の下、僕は周りを観察しながら水着売り場を目指している。

「ここ、ここだよ」

しばらく歩いて、ヴァングが目的地である水着コーナーを指差す。

「それじゃあ別行動だね」

「どれくらいかかる？」

「うーん・・・三十分ぐらいかな」

「そう。じゃあ三十分ぐらいしたらここに集合と言うことで」

「「わかった」」

そしてヴァングは一度シャルロットの耳元まで顔を寄せ、

「じゃあ、頑張^{……}ってよ？」

と呟いたのが聞こえた。何を頑張るんだ？水着選び？

「ちよっ、ヴァング！」

「ナハハ、そんなじゃあね」

赤面したシャルロットがヴァングに叫ぶが、彼女はどこ吹く風。スルリとこの場から離れた。

「もうっ・・・」

「どうかしたの？」

「い、いや、何でもないよスザク」

「そう、じゃあ各自で見つけよう。僕は男子コーナーへ行くから」

「うん。それじゃあ」

ここで一度僕とシャルロットは別れた。

男子の水着コーナーを見ながら、どれがいいか選ぶ僕。

「水着か・・・まあ、特にこだわる必要も無いかな・・・」

水着なんて着る事は少ないだろうし、一番安くてあまり目立つものじゃないのを買おう。

と言うわけで、僕はシンプルなネイビー色の水着を取る。

「うん。スタンダードにコレでいいはずだ」

しかし早く買いすぎたな。時間が有り余っている。

「・・・とりあえず、先に集合場所に行ってこよう」

水着の会計を済ませて、僕は一足早く集合場所へ足を進めた。

齒切れの悪いシャルロットに首を傾げる。

「と、とにかくっ！ 一緒に来て！」

と手を引かれてしまったので、僕はシャルロットと一緒に女性用水着コーナーへ入った。（強制）

と言うわけで、一応アドバイスをしなくてはならなかった僕は、陳列している水着の数々を見る。

種類は色から形から、多種多様の及んでいる。

本当に男の水着売り場とは大違いだ。ここでも女尊男卑の影響が出ているのだろうか。

「色々あるんだなあ・・・」

「そうみたいだね」

ついでは何だが、男子が女性用水着売り場に居ると言うのは注目を集めるらしく、日曜日でもあるので女性の視線が厳しい。

「そのあなた」

「はい？」

いきなり声を掛けられて、おそらく僕らを呼んだ方のほうを見る。

「この水着、片付けておいて」

と名前も知らない女性から、そんな言葉と水着を押し付けられた。

（こんな所でも女尊男卑か・・・本当に、ブリタニアとナンバーズの格差みたいだな）

もつとも、あちらではブリタニア人の服を汚しただけで罪に問われる事もある。

それに何もしていない日本人を、ブリタニア人が集団で暴力を振るうなど珍しくは無かった。しかも軍人や警官は、それを止める所か自分たちもやっていた。ストレス発散という身勝手な理由で。

この世界はそれほど酷くはないが、こういった男子Ⅱ雑用といった風習が根付きつつある。

「お断りします。従う理由が無いので、ご自分でどうぞ」

これに屈すると言う事は、元の世界の格差を受け入れると言う事だ。仮にも、ブリタニア人と日本人の格差を失くそうとした僕が、それを受け入れる訳にはいかない。

「ふうん。そういう事言うの。自分の立場がわかってないようね」

そしてその女性客は警備員を呼ぼうとする。

もしここで、彼女が僕に『暴力を振るわれた』と言えば、僕は間違いないただではすまないだろう。

「呼びたいのであればどうぞ。しかし日本には、偽証罪という刑法があることをお忘れなく」

もしここで彼女が警備員にそう言っても、それを立証する証拠が無

い。むしろこの店の監視カメラでも見てくれれば、僕が無実だという証拠が出るだろう。

犯罪は証拠がすべてだ。その証拠の一つ、証言を偽証すれば自分自身に罪に問われる。

そうなるぐらいなら、自分でやるほうがはるかにマシだ。

「っ！・・・」

「もう行こうシャルロット。それでは。僕らも暇ではないので、失礼します」

「う、うん」

睨みつける女性客を無視し、僕はシャルロットと共にその場を移動した。

しばらく水着コーナーを歩いて、唐突にシャルロットが喋りだした。

「す、スザク」

「ん？なんだい？」

「さっきは、ごめんね。なんか嫌な思いさせちゃって・・・」

「？ さっき？」

「あの、女性客が・・・」

「・・・ああ、アレね。気にしてないからいいよ。それより、本来

の目的を」

「そうだね」

シャルロットの水着はまだ決まっていない。選ぼうという誘いを受けたからには、果さなければ。

「シャルロットは、どういった水着がいいの？」

「ど、どういった……かあ……」

「ある程度基準がないと、さすがにどうしようもないよ」

「そうだね……。なんだろ……。黄色が好きだから、そういう感じのかな」

「黄色か・・・いつぱいあるね」

ある程度は絞れるが、それでも水着の多さには適わない。

「シャルロットなら、何でも着こなせそうな気がするけどね」

「えっ？　そ、そうかな？」

「うん。君ってキレイだしさ」

と自然に口に出した途端、シャルロットが水着を持ったまま硬直、顔を朱に染める。

うむ、なぜだろう。

「なっ・・・・・・・・す、スザクッ！　こんな所で何言い出すの！」

「え、いや、別にただ思った事を・・・」

と言うと、シャルロットは肩を落として落ち込む。なんなんだこの
テンションの浮き沈みは。

「・・・・・・・・スザク、そういうのあまり言わない方がいいよ。誤解されるから・・・」

「え？　あ、そう」

よくはわからないが、現に女性シャルロットがこう言ってるので、止めておこう。

「でも何を誤解するの？」

「・・・・・・・・はあ。スザク、頼むから結婚詐欺師にはならないでよ」

「ハハハッ。変なこと言うなあ、シャルロット」

「・・・・・・・・もういいよ」

一体何なのだろう。僕は結婚詐欺師になる可能性でもあるというのか？　まったく酷いなあ。

「とりあえず、黄色ね」

言ってみるのは簡単だが、何が似合うのかよくわからない。

「シャルロット、じゃあとりあえずこれは？」

「え・・・いや、さすがにそれは・・・」

僕が手に取ったのは、まあ簡単に言うとう黄色いスクール水着。当然ゼッケンはないが。

「あれ、ダメ？」

「それ、オシヤレする気が無さ過ぎるよ」

言われて見ると確かに。ただ紺色のスクール水着が黄色になっただけだった。

ハッキリ言って小学生とかが着るものだ。ならなぜこの大きさがあ
るんだろう・・・。

「ふむ・・・難しい」

「スザクのファッションセンスに、ちょっと疑問を感じるよ・・・
私服はカッコイイのに」

などと呆れているシャルロットはさておき。

「じゃあコレは？」

「うーん、まあ保留かな」

「これも？」

「微妙なんだよね。イマイチって言うか」

「え．．．ゴメン。ファッションセンスが無くて．．．」

「あ、いや。別に責めてる訳じゃないからね!？」

「そう．．．じゃあコレは？」

「いや、さ、さすがにこれは．．．」

「それじゃあ————」

などと会話をして、数十分。

「やっと．．．決まった．．．」

「時間、掛かったね．．．」

共にぐったりした状態で、やっとの事で選んだ水着の会計へと向かった。

「はあ．．．．．もう無理．．．メンタルが．．．」

水着を買っている最中、常に周りの女性客から視線を集めて落ち着

「「すいません・・・」」

到着早々、ヴァングに怒られてしまった。

なぜかという、集合場所についたのは約束の時間よりも、さらに三十分過ぎだったからだ。

「五分か十分なら許容範囲だけど、いくらなんでも三十分は長すぎっ!!」

「「すいません・・・」」

さっきからヴァングの説教に頭下げて謝ってるだけの僕ら。

「あゝあ、じゃあそろそろ昼だし、昼食でも奢ってもらいましょうかな」

「はいはい・・・」

としようがなくこの場を移動したとき、

アアアアアアタタタタタタタタッ！ホワタア！

「「何?!」」

「あ、ゴメン。電話だわ」

ヴァングの言った通り、彼女がポケットから取り出した携帯から声は出ている。

（（着メロ・・・・・・・・））

これはボケ？素？

「もっし〜？ お電話いただきました〜・・・あ、なんだ。どうして彼女の電話で・・・え？無くした？ハハハッ、バツカね〜♪」

どうやら相手は、違う人の携帯を使って話しているらしい。

「え？黙って話を聞け？ハイハイ・・・で、用件は？・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・何？馬鹿なこと言うなよ。喧嘩売ってるなら買うけど？」

な、なんか相手と険悪な雰囲気になってきている。

「・・・・・・・・わかった。今からそっちに行く。ただし、逃げたら承知しないから」

そして電話を切るヴァング。そこでさっきの険しい表情から、いつもの笑顔に戻った。

「ゴメンゴメン。急な都合が入っちゃった。てなわけで先に帰るね〜」

「あ、ちょっ・・・」

言うが早し、さっさとヴァングは行ってしまった。

「・・・・・・・・行っちゃったね」

「・・・・・・・・そうだね」

「どうする？」

「目的は達成したし・・・」

「僕は疲れた・・・そろそろ帰ろう・・・」

「・・・・・・・・そうだね。クタクタだよ・・・」

そんなわけで僕らはショッピングモールを後にした。

ヴァングの不自然な行動を気にしてはいたが・・・。

ナイトオブスリー

「善処するかもしれません」

「・・・まあいい。それでは用件だ。七月にIS学園は校外演習と言う事で臨海学校へ行くだろ」

「知ってるだろ」

「黙って聞け。それとほぼ同期にアメリカが、第三世代型新鋭機『シルバーバリオ・ゴスペル銀の福音』の起動演習を行うという報告があった。もちろんアメリカの候補生からな」

「へえ。だから？」

「クロイツの隊長から直々に、専用機使用制限を一時的に解除すると伝達があった。もし不測の事態になった場合のためにと。」頼りにしてる”と伝言もある」

「え、あの人が？・・・はあ、何か起こるって言ってるようなものよ・・・まあ了解しました。円卓の騎士第一位」
ナイトオブワン

「それは昔の話だ。ラウンズはもうアイツに一任している。今の私はただの民間人だ」

「失礼。”元”がついたな」

「だから敬語を使え」

「これはこれは。二度の非礼お許してください」

「ここで貴族の血筋を出すな。まったく、お前は相変わらず面倒だ」

「はいはい……。じゃあ帰らせてもらいます。制限解除の受領は確かに承りました」

「ああ、もう帰れ帰れ」

そんな会話が終わり、ヴァングともう一人の人物はその場を去った。

GO for the NEXT!! 次に進むために (後書き)

すいません、ここで終わらせました。

本当はもう少し続けたかったのですが、二万越えそうなので、そこまで精神が続きませんでした。

ちなみにスザクの服は、R2の13話(ぐらい?)で着てた服です。

誤字脱字、感想があったらお願いします。

英語の題名ってカッコイイですね。てなわけで三巻の題名は全部英語にします。

ISの題名も英語が入ること、ありますしね。

そして、IS最新巻なんとか買えたー！よかったー！

※えー、この前個人的に『ラウラとのフラグはどうなった』とメールが来ました。

答えますと、フラグが立っただけで、まだラウラは自分の心を理解していません。恋心を経験したことが無い彼女なので・・・何の気持ちかわかってないんです・・・・ってことにして下さい。orz

例えるなら『友達以上恋人未満』レベルです。というわけでラウラがスザクのハーレムメンバーに入るのは、もう少し後かと思っています。いつかラウラとスザクのラブコメ話を織り込みたい・・・と思っています。

Welcome in the Summer!! 臨海学校初日

「「海っ！ 見えたあっ！」」

何時間もバスにゆられ、やっとのことで舗装された海辺のトンネルを抜けたとき、視界全体にコバルトブルーに輝く場所————要するに太平洋が見えた。

女子達は海を見ただけでテンションが上がり、一部女子は窓を開けて声を出している。中には手を突き出している女子もいる。危ないなあ・・・

「みんな？ 盛り上がり上がってるかあああああああ！？」

『イエエエエエエエエー！！！！』

ってヴァングが率先して盛り上げてる。いいのか、いくらそれがキヤラ作りと言っても。

まあ、それは一度置いておく。

みなさんならここまででわかったと思うが、今は七月初旬、つまりは待ちに待った臨海学校だ。

天候に恵まれ無事快晴。何週間も前からテンションが上がっていた女子なら、喜ぶべきことだろう。

かく言う僕も、女子ほどテンションは上がってないが、それでも楽しみにしてた事に変わりは無い。

「キレイだな・・・」

窓からこれから行くであろう海へ視線を移す。

「ふう・・・はぁ・・・暑いな・・・？なんだスザク」

その過程で、隣に座っているルルーシュの顔が視界に入る。

服装は前と同じく真っ黒の制服。髪型はポニーテールで、暑い為か多少胸元を着崩してる。

暑さで火照った顔と、そのため漏れる色っぽい吐息、妙に胸元を着崩していたルルーシュは、やはりというか、とても魅力的に見えた。

「い、いや。ただ海でも見ようかなって」

「島国では特に珍しくも無いだろう。まあ私は海に特別な思い入れは無いが」

相変わらず辛辣だ。優しいルルーシュなんてあまり見たくは無いが。

「それでもさ。これから行く場所なんだから、見ておきたいって思うんだ」

「そうか」

大して興味も無いようで、読み途中だった小説（『トリックオートラスト』だ）に視線を下ろす。

どうやらルルーシュは乗り物に強いらしく、IS学園を出発してかrazzと小説を読んでいる。

僕は海を見ているフリをして、本を黙読するルルーシュの横顔を見る。

（コチラも、やっぱりキレイだな・・・）

何度も思ったことだが、改めてそう思う。

彼女にはやはり知的と言うイメージがあるので、無表情で本を読むというのはとても似合ってる。

「・・・・・・・・そこまで凝視されると、本が読みづらいのだが」

あくまで視線は本、しかし言葉は僕へと向けられている。

「あ、ゴメンゴメン。つい見惚れちゃって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゲシッ！

「いてっ！」

「バカは治ったか？これに懲りたら、もうそんな事を言うな」

本心を言ったら、急に口をへの字にして僕の足を思いつきり踏んだ。褒めたのに・・・。

「・・・なにを怒ってるのさ」

「・・・・・・・・私は怒ってない。だからもういいだろ」

怒ってないなら、なぜ未だに僕の足を踏んでるんだ。しかも力入れすぎ。

「あゝ静かにしろ。そろそろ宿に着く」

パンパンと織斑先生が手を叩き、女子達は無言でバスを降りる準備に入った。

「僕も準備しなきゃ」

というわけで上に乗っている荷物を取り出す。初日は完全フリーなんだから、今日は悔いが残らないように楽しまなければ。

「・・・Silverio gospel・・・私の杞憂なら・・・
いいんだがな・・・」

ただ――――ルルーシュは一人、とても複雑な表情をしていた。

[illegible]

ほどなくして旅館に到着。僕らはバスを降りて、IS学園一年生一同、宿の前に整列する。

「さて、これで全員だな？それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいします」」」

織斑先生の言葉の後、全員で（もちろん僕も）挨拶をする。

この旅館は理由は知らないが毎年使われていると聞いた。なにかIS学園に関係のある宿なのかもしれない。しかしそんな事はどうでもいいか。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」
着物姿の女将さんが手馴れたお辞儀を返してきた。

失礼ながら外見から想像できる年齢は三十代。

ヴァングのように笑顔を振りまくが、しっかりとした大人の雰囲気
を纏っている。しかしその笑顔は妙に若々しく見え、女将と言うより若女将といった印象だ。

「あら、こちらが噂の……」

おそらく僕と、その後ろにいる一夏を見て、女将さんが織斑先生に
尋ねた。

「ええ、まあ。今年は男子が居るせいで浴場分けが難しくなってますって、申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、二人ともいい男の子じゃありませんか。二人ともしっかりしてそうな感じを受けますよ」

「両方とも感じだけです。挨拶しろ、馬鹿者共」

一夏の頭を鷺掴みして織斑先生が言う。わかってますって。

「枢木スザクです。三日間の間、お世話になります」

「お、織斑一夏です。よろしく願います」

みっともなく一礼する一夏を見ながら、僕も一礼する。

「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲景子です」

女将さんは営業スマイルとキレイなお辞儀をする。

それは刀を扱う剣士のように、すべて流動するように？がった自然な動作だった。

これはベテランだ。只者じゃない……って何を考えてるんだ僕は。

「バカな弟共々、よろしく願います」

「あらあら。織斑先生は教え子には厳しいのですね」

「甘やかしたら、怠けるだけですから」

それはわかるが・・・一夏のとばっちりを受けてると思っていだろうか。

てなわけで、靴をしまつて宿の中へと入って行く。

中は一言で言うとな風な旅館だ。そして当然といえば当然だがとても綺麗で、歴史を感じさせるオブジェや装飾が惜しみなく使われている。

さらに所々に施設用の大きな空調設備が見える。そのため中の温度は夏にもかかわらず、ひんやりと涼しくてちょうどいい。

日本の風流を感じられるが、高級旅館ということも感じられた。

「それではみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館で着替えるようになってますから、そちらをご利用下さい。場所がわからなければ、そちらにいる従業員達にお聞き下さい」

中に入ってしばらくあるいたら、個室の前に到着して女将さんがそう言った。

『はい』と女子達が返事する。僕はなんとなく、女将さんが指差した従業員の方々を見る。

「・・・・・・・・っ?!」

その時、従業員らしき紺色の浴衣を纏った、長い緑髪が見えた気がした。

目を擦りもう一度見てみると、彼女は廊下の突き当たりに消えていた。

(いや、まさか・・・彼女か?)

いやいや。

そんなわけ無い。緑髪の人などこの世界には何人もいる。しかも彼女だったらこんな宿にいるはず無いだろう。どこぞの大きいホテルでピザでも頬張ってるはずだ。

心の中で疑問に思いながらも、人違いだろうということで自己完結させた。

「ね、ね、ねー。クルルン」

この声は学年一スローペースな、のほほんさん(本名…布仏 本音。一夏のあだ名を取った)か。

相変わらずダボダボな制服を着ている。それより、そのあだ名をどうにかして欲しい。

「いやのほほんさん。いくらなんでもそのあだ名は・・・著作権に引っかかるよ」

「まあまあ気にしないで。それよりクルルンって部屋どこ? 一覧に書いてなかったー。遊びに行くから教えてよ」

のほほんさんの言葉で、周囲にいた生徒たちの眼がコチヲを向いた。ちなみにその視線は、『聞きたかったが勇気が出なかった』という感じがする。

何故だろう。僕の部屋に来てやることなど何も無いだろうに。

「あゝ。多分一夏と同じ部屋じゃないかな。でも何しに来るの」

「遊びにだよ。でもそっかーやっぱおりむーと同じかー。それでどこにあるの？」

「・・・さあ」

僕にもわからない。まさか廊下で寝ろと言っても言うのか？

「織斑、柩木。お前らの部屋はコッチだ」

織斑先生呼び出された。遅れる訳には行かないのでさっさと行こう。

「それじゃあのほほんさん」

「そんじゃあね。ちゃんと教えてよー」

のほほんさんと別れ、一夏と共に織斑先生の後について行く。

「先に言っておくが、今回はIS学園教師及び生徒の部屋が、一部屋だけ足りなくなってしまった」

「え、そうなんですか？」

しかしそれはおかしい話だ。ここに来る事はすでに、何ヶ月も前から決まっていたはず。

つまり人数調整などいくらでもできたはずだ。IS学園は生徒と教員、つまり全員を泊められない旅館に来るはずなのだから。

「いくつかの部屋の水道管が不都合と連絡が入った。洗面からトイレまで使えないそうだ」

「あ、なるほど」

それは仕方ないか。妙に勘ぐってしまった。

「というわけで、織斑は教員用の……私と同じ部屋だ」

さすがに言いにくそうに——だが、ハッキリとそう織斑先生は言った。

「え、マジで？」

バシッ！

「いてえ！」

「敬語を使え」

「……………すいませんでした。織斑先生」

といういつもの漫才？はさておき。

「では先生、僕の部屋はどうなるんですか？」

「女子と相部屋だ」

「……今サラッと、とんでもないことを言われた気が……しなくもない。」

「……え？」

「本来、お前達は一つの部屋に納まるはずだったんだがな」

歩きながら解説を始めた織斑先生。

「織斑を私と同じ部屋にした事で、お前は一人になってしまった。しかしすでに教員部屋に空きは無く、空き部屋らしきものも無いので、しょうがなく女子と同じ部屋になった」

「……事情はわかりました」

一部屋確か四人ぐらいだったはず。つまり男女の比率は3…1ということだろう。

女子三人と一緒に二泊三日……間違いを起こさないようにしないと。

「……大丈夫か？」

一夏が肩に手を乗せながら声を掛けてくれた。

「まあ……仕方ないんだと割り切るしかないさ」

「ほう。物分りが早くて助かる」

「どうも」

仮にも貴方より長く生きた僕ですから。駄々をこねるのはみつともない。

なんて話をしていたら、教員用と書かれた部屋の前で織斑先生は止まった。

「ここが私と織斑の部屋だ」

ドアを叩きながらそれを示す。

「それと、これがお前の部屋の鍵だ」

織斑先生はポケットから鍵を出して、コチラへ乱暴に投げる。

「・・・308」

投げつけられた鍵を受け止め、そこに書かれた数字を見る。

「部屋番号だ。確か300番台は三階だったな」

「・・・案内は」

「自分で探せ」

「・・・さすが、弟思いの素敵なお姉さんですね。」

「わかりました。失礼します」

鍵を手で遊びながら僕はその場を後にした。

[illegible]

「
・
・
・
・
・
・
やってきた」

二人と別れた後、三階まで階段を使って登り、『308』と書かれた扉の前に僕はいる。

「……とりあえずノックか」

コンコンコン

「? はい」

中から女子の声が聞こえる。足跡もどんどん近づいてくる。

そしてついに――――

「ホッホホーイ。一体どちらさ・・・・・・・・スザク？」

「あ、どうも。ヴァング」

相変わらず金髪の一部をリボンで纏めた、見た目はクール系女子（中身はよくわからない）のヴァング。

その彼女が、僕とほぼ同じ目線で向かい合ったまま固まった。

「何か用？」

「あ、何も聞いてない？」

「・・・・・・・・あ、あゝ。あの件か。男子のどちらかがコチラに来るって言う」

ポンッとヴァングが手を叩く。

「そうそう。その結果僕と言う事になった」

「なるほど。ちょっと待って。ルルーシュ〜カレン〜、男子が押しかけてきた〜」

「誤解のある説明は止めてくれよ！・・・・・・・・ってルルーシュにカレン？」

ヴァングが部屋の奥へ叫んだ名前に眉を寄せる。

「おいヴァング。何をふざけてるんだ？」

「何々？」

そして部屋の奥から見知った二人が現れる。

「？スザクじゃない。あ、もしかして部屋の件？」

「そういえば、メンバーを決める時に織斑先生に言われたな」

「だから、私たちは三人で組む事になったのか」

カレン、ルルーシュ、ヴァングと納得の言った答えを言っている。

「納得してくれて何より。じゃあ、上がっていいかな。荷物を置きたいんだけど」

「え？どうぞどうぞ」

というわけで部屋に上がらせて貰う。

「おっ。意外と凄い」

「だよね。でもルルーシュは冷めた反応しか返してくれない」

「悪かったな。私はこういうキャラなんだ」

中は四人部屋ということもあり、やはりというかとても広い。

東側の壁は一面窓で、しかもそこから太陽に照らされる海を一望できる。しかもコチラは東なので、早朝の日の出が拝めると言う事だろう。これはなるべく早起しなれば。

中の壁には派手な装飾は使われてないが、天井の木による色合いが日本風で落ち着ける。

後、トイレとバスルームはセパレート。しかも洗面所は専用の個室が完備されている。空調のエアコンも施設用なので、広い部屋を満遍なくエアコンコントロールしてくれる。

それに浴槽までヒノキで惜しみなく作られている。ヒノキのほのかな香りと、僕でも足を伸ばせる大きさはとても快適に見えるし魅力的だ。

（本当に高級旅館・・・さすがは国立であるIS学園、お金はあるってことか）

「さてさて。一応男女が一緒の部屋なので、線引きは必要でしょう」その言葉でヴァングに視線が集まる。

「線引き？」

「あ、いらない？フリーダム？」

「「「そんなわけない」」」

僕、ルルーシュ、カレンの声がハモツた。ヴァングは肩を竦める。

「じゃあどうする？お風呂は時間交代、わちきとカレンは大浴場に行くけどな」

「そうだったわね」

「私は部屋の風呂を使いたい。人ごみは苦手なんだ」

「あらら。じゃあスザクは？」

「僕？僕も大浴場に行くよ。といっても女子とは時間が違うから、それまで部屋にいるけど」

「なるほど。じゃあお風呂は別にいいらしいね。じゃあ次は？」

「・・・布団の間取り？」

カレンがそんな事を言う。

「何で？」

布団なんてテキトーに敷けばいいのに。こんなに部屋が広いんだから。

「でもねえ・・・なにか間違いが起こると困るし」

「間違い？何が？」

「男女比率1…3で、しかも同じ部屋で寝るのよ？」

「・・・はあ？」

「貴方ホント鈍感ね！男女が同じ部屋で一緒に寝るのよ！？事の重

大きさに気付いてないの!？」

「・・・・・・・・あ、そういうことか。でも・・・」

言っただけには納得した。確かに女子にとって重大な問題だろう。

しかしながらこの場にいますメンバー、眠たそうに欠伸をしているヴァング、コチラの話に興味をなさそうに本を読んでいるルルーシュ、そして僕の目の前で憤慨しているカレン。

・・・・・・・・・・ハハハッ。

「このメンバーを襲える勇者がいるなら、見てみたいよ」

もう僕に墓は不要だ。自ら死に行くような愚行は犯さない。

一度死に、また生を与えられたなら身なら、最後の最後まで足掻かないと。

「大丈夫。このメンバーを襲うぐらいなら、悪魔に魂を売るほうがまだマシ・・・ってあれ？」

本心を述べていたのだが、ゆらりゆらりと三人がコチラに寄ってくる。なぜだ？

「へえ・・・そう。じゃあ今すぐ悪魔の下まで行ってもらおうかしら」

「それがいいね。さっさと魂でも売っ払って、送ってあげた私たちに利息でも貰いたいねえ」

「だな。このバカは私たちを魔王か何かと勘違いしてるらしい。早急に矯正しなければ」

あ、アレー……………。

三人の背後から”ゴゴゴゴゴ……………!”という効果音と、紫炎のエフェクトが見える。

「え……………ま、待ってよ。僕はただ、君達を襲う気が無いことを証明しただけで……………」

僕の精一杯の弁解に彼女達は素敵な笑顔で、

「「「黙れ♪」」」

と返してくれた。

ドガッ！バギッ！ゲシッ！バシユ！グシヤ！バギユン！ドオオオオオオオオオオオオオオオオ！

「あ、柁木君だ！」

「う、うそっ！わ、私の水着変じゃないよね！？大丈夫だよね！」

「わ、わゝ。体かっこいいゝ。鍛えてるねゝ」

「柁木くゝん。後でビーチバレーしようよゝゝ」

「え？ わかった。時間があれば」

海に来るまで色々と難所があったが、何とか乗り切った柁木です。まあ簡単に言うと、ルームメイトの女子三人を怒らせてしまったからです。その後の事は、記憶にモザイクが掛かったみたいに見れません。

どうやら僕の防衛本能がそうさせるらしいです。ならば深追いはしないほうがいい。

「あちっ・・・この季節の浜辺は熱いな・・・」

考え事してたら砂に足の裏を焼かれた。

しかしこの感触は何年ぶりだろうか・・・僕が子供の・・・小学生低学年の時以来ではないか？

軍に所属してから、海でのんびり遊ぶなんてことは無かった。プールでならあったけど。

まあなんにしても、懐かしい限りだ。

「へえ・・・みんな楽しそうだな」

周りを見ると、ビーチバレーをしていたり、泳いでいる子がいたり
と様々。しかもいろいろな国の子がいるから、遊んでる姿を見るだ
けでコチラも楽しい気分になる。
これだけ様々なことがあるが、共通してることはみんな笑顔だとい
うところだ。

「ん？」

周りを見てみると、一つのビーチパラソルの下に一夏とセシリアが
いる。

どうやら一夏はセシリアにサンオイルを塗っている所だ。妙に覚束
無い手使いだが。

「や、二人とも」

「お、スザク。お前部屋はどうなったんだ？」

「・・・・・・それ、聞く？」

「え・・・・・・どうしたんだ？」

「まあ・・・・魔王三人がルームメイトだよ」

「・・・・・・がんばれ」

「ハハハ・・・・・・で、そちらは何してるの？」

「オイルを塗ってるんだ。みりゃわかるだろ？」

ペシペシとセシリアの背中を叩く。

「い、一夏さん?!」

「あ、悪い悪い」

「……どうやら邪魔するのは悪いらしい。」

「そっか。邪魔してゴメン。じゃあ僕は泳いでくるよ。それじゃあごゆっくり」

「おー。ちゃんと準備体操しろよ」

「わかってるさ」

と言うわけで一夏達と少し離れた場所へ移動して、とりあえず屈伸から始める。

「いち、に、さん、し、ご、ろく、しち、はち」

「—————とうっ!」

ゲシッ!

「いった!」

「ナ~~~~イスヒッ~~~~ト!」

屈伸してたら後ろからいきなりとび蹴りを食らった。こんな理不尽をするのは一人だけだろう。

「・・・ヴァングか」

「そうです。私がヴァングですが？」

起き上がって、改めてヴァングの格好をしてみる。

「・・・似合ってるよ」

「そう？ やっぱりね〜そうだね〜。リンリンに選んでもらったんだけど」

その場でターンするヴァング。

格好はスポーティーなタンキニタイプ。紺色と水色の似てるように対照的なストライプで、へそが出ている感じ。流石に泳ぐのに邪魔だと思ったのか、いつも髪の一部を纏めているリボンはない。

「なんだ。自分で選んだんじゃないんだ」

「ええ。私の選んだのは『男っぽい！却下！』でボツされた」

「・・・期待を裏切らないように何より」

「何か言った？」

小声で言ったつもりだったが、聞こえてしまったようだ。

「なんでもないよ」

「・・・ならいいけど。それよりさっさと泳ぎましょ」

「わかった。って、そういえばルルーシュとカレンは？一緒じゃないの？」

「カレンは先にそこで泳いでて、ルルーシュは『外は暑い』ってワケで、部屋でエアコンガンガンにつけて本読んでるよ」

「・・・あそう」

カレンはともかく、相変わらず集団行動は苦手なルルーシュだ。

「まあいつか。それじゃあ泳ごう」

「ふっふっふ。イタリアで『人の形をした魚』といわれた実力、見せてあげましょう」

「・・・」

その別名は、褒められているのか？罵倒されてる気がする。

「ゴールはあのデカく尖った岩、そこまで泳いだらまたコッチに戻ってくるってわけで」

「わかった」

一度頷いて、僕は腰を低くして構える。ヴァングは背伸びをして「ん〜！」と言ってる。

「それでいつスター」「よおい、スタート！」ってええ！？ちよ、ちよっと！」

いつ始まるか聴いた瞬間、ヴァングはキレイな弧を描きながら海に飛び込んだ。

「くっ！ヴァングの性格を忘れていた！」

彼女なら不意打ちなど普通にやりそうだ。ってそんな事考えてる場合じゃない！

僕もそれを追う形で海に飛び込んだ。

僕はクロールでヴァングを追う。ヴァングはクロールをしながらコチラを見る。

「おやおや、やるじゃないか！不意打ちスタートしたのに」

「自覚があるなら、あまりそういうのはやって欲しくないよ！」

会話をしながらも、ヴァングと僕の距離は徐々に狭まる。

「くっ・・・この『人の形をしたフィッシュ』の異名を持つ私に・・・！」

「微妙に変わってる」

「同じ意味だからいいんだ〜！」

なんて叫びを上げたヴァングは、先ほどの尖った岩をタッチした。

いくら差を縮めたとしても、追いつけなければ意味は無い。

「まだだっ！」

僕も岩をタッチし、ヴァングを追おうとして向きを反転したとき――

ズルッ

（あ、れ――――？）

岩に足をつけたとき、海草か何かを踏んだらしく、滑ってそのまま後頭部をぶつける。

「ガッ！」

激しい衝撃と共に、方向感覚が一瞬にしてリセットされる。今自分がどこにいるかわからない。

（いつもならこんなミスはしないのに・・・ああ、三人に吹っ飛ばされたからか）

なんて考えてたら、ブクブクと僕の体は沈んで行く。

普通は激しく動揺するはずなのだが、いくつも修羅場を潜った僕は冷静に沈んで行く。

（ブクブク・・・）

X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X

「・・・・・・・・っ」

突然だが、僕はベットの上で目覚めた。

首だけ動かして辺りを見渡すと、ここは旅館の部屋だと言う事が分かる。

その時、後頭部に鋭い痛みが走る。

「っ・・・・・・・・ああ、そういえば溺れたんだっけ」

諸事情で体力が切れてたときに、泳いで岩場で足を滑らせて後頭部を強打。

（そのまま溺れたと・・・救いようが無いドジッぷりだ）

「さて、と」

とりあえず起きたのなら、誰かに伝えておくべきだろう。

僕はベットから降りようと体を動かして――――。

「ううん・・・・・・・・」

――――ヴァングが、僕の腹を枕代わりにして寝ていることに気付いた。

「・・・・・・・・え？」

思考急停止。

なぜ僕の腹を彼女が枕代わりにして寝てるんだ。しかもスヤスヤと気持ちよさそうに。

「うん・・・・・・・・？ スザク・・・起きたの・・・？」

僕の声に気付いたのか、ヴァングが目覚める。しかし虚ろな目でコチラを見上げる。完全には目覚めていないらしい。

「あ、うん。どうして僕はここに？」

「それは・・・貴方が溺れた後・・・私が潜水して引き上げて、浜辺で応急処置をしたあと、織斑が貴方をここまで運んだからよ・・・」

「あ、そうなんだ。ヴァング、ありがとう」

「・・・・・・・・っ」

お礼を言ったら、ふらりとコチラに力なく倒れるヴァング。なんで？

「ご、ごめんなさい。寝起きで・・・力が入らなくて・・・」

と口では言うヴァングだが、おそらく僕に気を使った嘘だろう。さっき口走った海で潜水したと言うやつで、必要以上に体力を消耗したと言う事だろう。水の中では人間の運動量は倍以上になる。

（無理をさせてしまったな・・・）

「ヴァング、無理させてゴメン」

「・・・・・・・・私のせいだから・・・ね」

「え？」

何の話か分からなかったが、僕の胸に倒れこんだままのヴァングは
呟く。

「ごめんなさい・・・吹っ飛ばされた後、泳ぐなんて無理させて・・・」

「あ、それか。いいよ別に。気にしてないからさ」

僕の所為でもあるし、それでヴァングを攻めるのは筋違いだろう。

「それで、今何時？」

何となく尋ねてみたら、ヴァングの顔があからさまに引き攣った。

「・・・私が寝たときは・・・2時くらい・・・」

「へえ・・・・・・・・・・・・・・・・え？2時？」

僕が溺れたのは午前の10時頃のはず。つまり・・・？

「ええ・・・確か」

「え・・・・・・・・じゃあ僕は・・・」

「少なくとも、10時間は寝てると思う・・・」

「・・・・・・・・・・そっか」

初日の自由時間、頭打った後寝て終わりか・・・どうやら僕はそんなところらしい。

「昼食逃したな・・・・・・・・」

「うっ・・・・・・・・ごめんなさい」

ヴァングが僕の胸の中で、申し訳なさそうに目を伏せる。

普段の不敵な笑みからは想像も出来ない、弱々しく儂い美少女である彼女を見ると・・・。

（なんとなく、からかってみたくなる）

というわけで、ちょっとからかってみよう。

「時計を見ると、すでに八時か。これは夕食の時間……の二時間後だね」

「うつ……た、確かに……」

「あゝあ……お腹空いたな（チラッ）」

横目でヴァングを見る。ここで彼女ならきつと『面倒だし』とか言うと思うが……。

「……わかったよ。取りに……行って来るから。ちょっと待ってて……」

「え？」

言うが早し、ヴァングは立ち上がり部屋を出ようとする……フラフラの状態で。

「ちょ、ちょっと待った！」

「え？————キャ!？」

立ち上がったヴァングの手を引き、再び僕の胸へと抱き寄せる。

「な、なに？」

戸惑った表情をしながら、胸の中で僕を見上げるヴァング。……下心は無いですよ。

「ゴメン。いつものヴァングなら『自分で取り行け!』とか言うと思うんだけど・・・」

「え・・・そうかしら」

「元気が無いのが心配でさ、ゴメン。もう大丈夫だから自分で取りに行くよ。ヴァングは休んでて」

ベットから降りて、胸にいるヴァングを優しく寝かせる。

「そんな・・・まだ無理しちゃ――――」

「いいからいいから」

抵抗するヴァングだが、今は状態が状態なので力が入ってない。やられるがまま、ベットにキチンと寝かされる。

「私より貴方の方が――――」

「だーかーらー、今体調が悪いのは僕じゃなくて君だろ?」

未だに起き上がろうとするヴァングの両肩を持って、ベットに優しく押し付ける。

「・・・で、でも――――」

その時、後ろからガチャッと、扉の開く音がヴァングの言葉を遮った。

「あっスザク! 起きて――――・・・」

・何してるの？」

入ってきたのはシャルロットだった。

何か僕の名前を言った気がするが、僕とヴァングの状況を見て、瞬時に－273℃の瞳が僕を貫く。

「倒れたって聞いて、何時間も眠ってるから心配になって来て見れば・・・」

「あ、ち、違うのシャルロット！別に貴方の思ってるようなこと―――――っ」

起き上がって叫んだため体力を使ったのか、ヴァングが再び横にいる僕に寄りかかる。

「あ、ヴァング」

「あ、ご、ごめんなさい・・・」

僕らは互いにギクシャクしながらの会話。下心はありませんって。緊張と言うのです。

「・・・・・・・・『リヴァイブ』」

それに無表情で一言、自身の愛機の名を呼ぶシャルロット。

その腕の盾がパージされ、剥き出しのパイルバンカー・・・
《グレー灰色の鱗殻》が現れる。

「・・・・・・・・準備はOK？」

最高に美しい笑顔で、パイルバンカーをこちらに向けるシャルロット。

「・・・・・・・・またコレか・・・」

”前に一度こんなのがあったな”と思いながら、ヴァングに視線を向けると・・・静かに合掌してる。なんと無情な人だ。まあ仕方ないかもしれないが。

「いい夢を♪」

——————ドカアアアアアアアアン！！

本日二度目の教訓。

一度あることは二度もある。覚えとこう。

・・・・・・・・まあ、僕みたいなのが起こる人は、そんなにいないだろうが。

一騒動後、やっと部屋に帰還した戦士への言葉がコレ。

「頭打ったって知ってる？」

「ああ。” 自業自得 ” で頭を打ったことは知ってる」

訂正された。言ってる事は間違っていないが、そうストレートに言われると傷つくよ。

「ヴァングは大丈夫なの？」

「え、まあ・・・ちよつとクラクラするぐらいだから。寝れば治ると思うよ」

「無理はするなよ。一見遠回りのように見えて、案外近道だったと言う事も多いからな」

「うん。そうするよ、二人とも」

一方ヴァングは、ルルーシュとカレンに背中を押されながら、布団の方へ向かう。

「・・・・・・・・・・はあ」

思わずため息が漏れる。玄関に寂しく一人だけ。少しぐらい気を使ってくれても・・・・・・・・。

（今日は疲れた・・・・・・・・。早めに布団に包まりたい）

ということ僕も後を追うように部屋に入る。

「さて、では布団の配置でも決めよう」

ルルーシュが部屋に広げた布団の上に座り、この場を仕切る。

「僕はソファで寝ればいいのかな？」

「それがいい。そうしろ」

ヒドイ、即答だ。

「待ってよ。私のせいで怪我したから、私がソファで寝るよ」

ヴァングの申し出。しかしそれは僕が申し訳なく思う。助けて貰ったのだから。

「いいって。もう、ソファで寝るから」

「でも・・・」

なおも食い下がるヴァングに、痺れを切らしたのかカレンが、

「じゃあもう、二人でソファに寝ればいいじゃない」

「「は!？」」

そんな事を言ってきた。

「何言ってるのよ!カレン!」

「いや、二人がソファに寝たい寝たいっていうから」

「そ、それは・・・そうだけど・・・！」

「と、とにかく！僕はソファに座る、後の皆がそれぞれ布団で寝る。これでいいね！」

話が脱線しそうだったので、僕が無理矢理終わらせる。

「まあ。私は構わないが」

「私も」

「・・・・・・わかった」

三人とも納得して、それぞれ布団にもぐる。

「電気消すよ」

照明のスイッチをOFFにする。

部屋の明かりが全て消え、月明かりだけがこの部屋を支配していた。

「おやすみ」

「ああ」

「おやすみ」

「・・・おやすみ」

ソファに寝転がって、上着を布団代わりに、ソファのクッションを枕代わりにして眠った。

こうして、僕の臨海学校初日は終了した。

X	X
X	X
X	X
X	X
X	X
X	X
X	X
X	X
X	X
X	X
X	X
X	X
X	X
X	X
X	X
X	X
X	X
X	X
	X
	X
	X
	X
	X
	X
	X
	X
	X
	X

「・・・・・・・・始まるか」

旅館から少し離れた場所に存在する崖。そこで一人の少女が佇んでいる。

少女の顔は空に煌々と輝く満月のせいで、顔はあまりよく見えない。だが、その光に照らされる長い緑色の髪は、圧倒的な美として存在感を出している。

その少女は、微動だにせずただ海を見下ろしている。

不意に空を見上げると、ここには都会のような明るさは無いので、月明かりと無数にある星の輝きがよく見える。それは、時間が経つことも忘れさせる幻想的な風景だ。

一番満月がよく見える崖、視線を満月の浮かぶ空とそれを映す海へ変えて、眩く。

「私はここにいる・・・・・・・・・・はやく辿り着け。裏切りの英雄、紅蓮の反逆者・・・・世界がお前達を待っている。そして・・・・これでは、私が面白くない」

手にあるピンク色のUSBメモリ型————ISの待機状態だろう————を指で回す。

「私に出来ることは大体した。後は、お前達次第だろう」

手のUSBメモリを握り、それを服にしまう。

「いずれ近いうちに、出向いてやろう。枢木スザク、紅月カレン・
ナイトオブラウンス
・そして円卓の騎士達よ」

少女はその場を振り返り、美しい緑髪が弧を描く。

「お前達を選んだ道……罪と因縁は、生半可ではない」

——それでも茨の道を進むというのなら、覚悟しておくんだな。

そして少女はその場から消えた。

それと同時に、天空には淡い緋色の流星が———無数に光る星々の中を駆けた。

Welcome in the Summer!! 臨海学校初日 (後書き)

ヴァングは、個人的に書いて楽しいキャラです。

内容が薄い・・・と思う方もいると思いますが、自分はラブコメが苦手なのです。なので、ここから内容がシリアス＋超濃くなります。まったく、先が思いやられるZE・・・後、紅蓮の機体設定をすっかり忘れていたことに気づいた作者です。なので載せました。『機体設定3』を見てください。

誤字脱字、感想があつたらお願いします。

※一度、幾つか書き直したいと思ってる自分がいる。

Enemy or Friend 敵か味方か (前書き)

まずギャグと言うよりは、シリアスです。

次に超！東アンチです。スザクの性格上、東を認めることが出来な
いと思うので。まあやりすぎた・・・(?) 感もちよつとあります
が。

最後に・・・またも長いです。でも一万文字は越えてないよ。9千
文字オーバーだけど。

Enemy or Friend（敵か味方か）

「・・・・・・・・っ・・・・・・・・」

朝、未明。僕はそんな朝早くに目が覚めてしまった。

（頭打って、何時間も寝てたからかな・・・）

ゆっくりとなるべく音を立てないように、寝転んでいたソファから起き上がる。

「ふう・・・・・・・・うん・・・」

「すう・・・すう・・・」

「・・・・・・・・」

周りを見ると、まだ三人はぐっすり寝ている。ここで起こすのは忍びないかな。

（顔でも洗うか・・・）

僕は二度寝をあまりしない。だがそれでは暇なので洗顔でも先にしておこう。

枕代わりにしていた上着を着て、なるべく足音を立てずソファから移動する。

しかし、彼女達の布団は床に惜しみなく敷かれているので、起こさ

ないように歩くのは一苦労だ。

（抜き足差し足、忍び足・・・）

僕は元軍人なので、己の気配を消しながら歩く・・・というもの訓練した。

だが――――

カタンッ

「っ!？」

急に何かが倒れた音がした。そのため僕の心臓も驚いたような音を出す。

音の発生源を探ると、僕の足元にヴァングの持ち物らしき・・・・スプレー缶?が倒れていた。

「なんだろ・・・」

気になるが、人の所有物を勝手に見るのはダメだろう。ただ立てておくだけにした。

「ふうっ・・・乗り切った」

なんとかみんなを起こさずに洗面所へ到達。

蛇口を捻って水をコップに溜める。それを寝起きの自分の口に流し

込む。

そしてコップを置き、そのまま顔を豪快に洗う。

「—————ぷはっ！」

目覚めの洗顔は気持ちいい。鏡に映る自分もスッキリしてるな。

「今日は確か・・・IS起動訓練だったな」

今日は午前中から一日かけて、ISの各種装備試験運用とデータ取りらしい。

まあ、専用機持ち以外の一年生のデータを取ったところで・・・言っちゃ悪いが意味はないので、装備を体験させるのが実質的な目的だろう。

そして僕ら専用機持ちは、搬入された装備のデータを非限定空間で取ることになる。

「僕としては、『ランスロット』のデータ取りは遠慮したいけどな・・・」

だがこれを必要以上に断ると、逆に怪しまれてしまう。

カレンと相談した結果、『当たり前障りの無いくらい』でやるということだまどまった。

「ふうっ・・・っど？」

ため息をついて鏡の自分を見ると、上着のボタンが壊れていることに気付いた。

「あちゃー。変な寝方をしたからかな」

合宿2日目、僕らは織斑先生の前で整列している。

「ようやく集まったか————おい遅刻者」

「は、はいっ」

一年生が集合しているなか、一人だけ遅刻してきた人がいた。
銀色の髪と眼帯がとても特徴的な少女、ラウラだ。

「そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明してみろ」

「は、はい。『コア・ネットワーク』とは、宇宙空間における相互位置情報交換のために設けられた、操縦者同士の会話や各種データのやりとりができるシステムで、専用の通信機器での情報のやり取りもできます。それ以外に、コア同士が『非限定情報共有^{シェアリング}』を行うことで、コアが独自に自己進化する糧になります。これらは製作者の篠ノ之博士が、自己発達の一環として無制限展開を許可したため、まだ進化の途中であり、全容は掴めないとのことですよ」

ラウラが『コア・ネットワーク』について説明した。

単純に考えると、操縦者同士で色々な情報をやり取りできるシステム。だが全容は明らかになってないってことだな。

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

「は、はい」

ホッとした表情で胸を撫で下ろすラウラ。織斑先生はそこまで怖いのかな・・・？

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISを順に使用し、装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

『はい』と生徒全員が返事をする。

一年生全員と数名いる教師全員がいるこの場所は、ISの非限定空間での使用のため設置した場所だ。

周りは崖で囲まれていて、ヘリで空から来るか、専用の機器で水中トンネルを通ってでしか、ここへは来れない場所で、さらに立ち入りが禁止されており監視カメラや警備員が常駐している。

（ホントお金かけてるな・・・この臨海学校に、どれだけのお金が使われたのかな）

おそらく税金だろうと勝手にまとめた。

それから、専用機を持たない生徒たちは『打鉄』と『ラファール・リヴァイズ』に乗り、それぞれの振り分けられた場所でISの装備を準備する。

「ああ、篠ノ之。おまえはちょっとここに来い」

「はい」

打鉄の装備試験を行う順番待ちをしていた筈が、織斑先生に呼ばれてそこへ向かう。

「お前には今日から専用機——」

「ちーちゃーん!!!」

何かが砂塵を撒き散らしながらコチラに近づいてくる。

その速度・・・生身の人間には絶対出せない。おそらく何かの機械を介しているのだろ。

「————『ランスロット』!」

「————『紅蓮』!」

立ち入り禁止の場所に無断で入る!!侵入者!!敵。しかもISらしき機械を使う。

というわけで僕とカレンはISを展開、僕は左腕と《ヴァリス》を、カレンは右腕を構える。

「やあやあ! 会いたかったよ、ちーちゃん! さあ、ハグハグしよう! 愛を確か————ぶへっ」

だがしかし、侵入者は織斑先生に抱きつき、織斑先生はその侵入者の顔面を掴む。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬ・・・相変わらず容赦の無いアイアンクローだねっ」

その拘束をスルリと抜ける侵入者。そしてなにやら箒と話している。

「・・・・・・・・織斑先生、簡潔な説明を求めます。場合によっては・

「……………」

できるだけ平常心で、しかし《ヴァリス》を侵入者に向けながら聞く。

まあ実際、この人が誰だかは織斑先生が口走った『束』と言う名で、わかっているのだが。

「……………奴は篠ノ之束。ISを作った張本人だ」

確かに簡潔な説明だ。わかりやすい。

「ならあの人は、政府に指名手配されていたはずですよ。さらに立ち入り禁止区域へ無断侵入、完璧に現行犯ですが」

「……………『IS関係者以外立ち入り禁止』だから。生みの親も関係者だろう」

「ですが、指名手配されていることに変わりはありません。捕まえて、政府へ引き渡します」

「ちょ、ちょっとスザク。いったいどうしたのよ」

僕と織斑先生との会話に、紅蓮の右腕を展開したままのカレンが割り込む。

「何不機嫌になってるのよ」

「……………別にないよ」

言葉ではそう言ったが、僕は確かに怒ってるのかもしれない。

目の前にいる、この世界を歪ませた張本人『篠ノ之束』のことを。

今の世界になる元凶を作った、この人を。

「枢木。お前の言う事はわかるが、個々の力で束を敵に回すな。紅月共々、武装を解除しろ」

「……しかし————」

「やめておけスザク」

食い下がろうとした僕を、後ろにいるルルーシュが肩を掴む。ちなみに髪型はポニーテールだ。

「ルルーシュ……」

「わざわざ騒ぎを大きくしないでいい」

「……わかった」

しょうがなく僕はI S装甲と《ヴァリス》を解除する。カレンも同様に解除した。

「おい束。自己紹介ぐらいしろ。でないと怪我するぞ」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー終わり」

そういつてクルンとこの場を1回転。そこでやっと周りの生徒も、乱入者が誰か納得した。

「はぁ……。もう少し真面目にできんのか、お前は」

「いやー、生意気な少年が私の気分を害したおかげでね———わかったなら、口出ししないでよ」

顔はにこやかだが、後半の言葉は明らかに僕への忠告だろう。

「好きで口出しはしていない。そこを履き違えるな、不愉快だ。自称天才」

だが、気分が悪いのはコチラも同じだ。

元とは言え、世界平和の時を進めた英雄^{ゼロ}として、僕は貴方を認めない。

「ふーん、君口が悪いね。年上には敬語を使えって習わなかった？」

「申し訳ございません。僕としては、貴方を敬う気がまったく無いので」

「っ……。ホント口が悪いね。この束さんを怒らせると、アリに懺

悔するぐらい後悔するよ」

「ちゃんと敬語は使ったが？ 文句があるなら僕の前から去れ」

「それが今時の若者の礼儀なんだね。人に物を頼む態度かな？ とりあえず土下座しなよ」

「ハッ、貴方に対して礼儀？ 敬うに値しない人に礼儀を弁える必要は無い。そして僕の前から去れ。ちなみにこれは、頼みごとでも要求でもなく命令だ」

「っ・・・初対面の大人に対して、随分な物言いだね。命令？ 寝言は寝て言うから許されるんだよ。眼を開けたまま寝るなんて無駄に器用だね」

「最初に敬う気は無いと言っただろ。日本人なのに日本語もわからないのか？ 『自称天才』」

口調をラウンズの時にして、さらに挑発の言葉を加えて話す。

そうするとあの人の冷たい視線が僕を射抜く。なので僕も殺気を飛ばした視線を向ける。

「やめろ束」

「やめておけスザク」

そのときまた後ろから肩を掴まれた。当然ルーシュだ。

「ちーちゃん。ちよいと離してよく。大人を怒らせるとどうなるか、

わからせたいんだから」

「お前にも非はある。それに、精神年齢的に言えばお前も子供だ」

「ヒドイ！ ヒドイよ！ちーちゃんく！」

「黙れ」

そんな二人の漫才を見ていたら、バカらしくなってこちらの気分が萎えた。

「スザク。さっきいった事がわからなかったか？」

「・・・喧嘩を売られたから、買ったただけだよ」

「お前らしくないな。好戦的なのは感心しない」

「そりゃ君から見れば誰でも好戦的だよ。それに僕らしさって言うのは、僕が一番わかってる」

「・・・・・・・・そうか。それは・・・悪かった」

何か言いたそうなルルーシュだが、一度僕の顔を見て黙った。

なんとなく、緊張した空気が流れる。僕と篠ノ之博士のせいだろうけど。

「あ、あの・・・頼んでおいたものは・・・？」

そんな空気の中、箒が躊躇いながら篠ノ之博士に聞く。

「あ、忘れてたよ。うつふつ、すでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

空を指差されるので皆その方向を見る。

すると・・・。

ズーンッ！！

いきなり激しい衝撃を伴って、金属の塊が砂浜に落下した。

「織斑先生。もう捕まえていいでしょう？」

「悪いがそれはやめろ。お前の言う事はもっともだが、爆発物とかではない」

（はぁ。いくら知り合いだからって、そこまで擁護する必要があるのだろうか）

と思いながら、空から降ってきたものを見る。

その正体は真紅の装甲に身を包んだ機体。

「じゃじゃーん！これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

ISだったのか。しかも箒の専用機。それを皆はジロジロと見てい

る。

で『紅椿』とやらは、箒にフルディングとパーソナライズをはじめた。

それらは、無駄話をしながらどんどん進めていく。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……？身内ってだけで」

「だよねえ。何かずるいよねえ」

そんな女子達の愚痴に、真っ先に篠ノ之束は反応した。

「おやおや、君達は歴史の勉強をしたことがないかな？有史以来、世界が平等であつたことなど一度も無いよ」

その言葉で、僕はさらに不愉快となった。

（……この人は、どこまで僕に喧嘩を売る気だ）

それはつまり、”この差別は仕方ないから受け入れろ”と言う事だろう。貴方が世界を乱したくせに、收拾もつけず荒らすだけか。そのため犠牲になる人の事を考えていない。

僕の親友とは大違いだ。いや、彼とこの人を比べること自体おこがましい。

「貴方こそちゃんと歴史を見たか？有史以来、人々は世界が平等であることを望んでいる」

身勝手に世界を乱すなら、自分で落とし前を付けるべきだ。僕の親友がしたように。

やはり篠ノ之束は、僕の中では『自称天才』で決定だ。

「つ・・・また君。・・・いくら人が望んでも、結果が伴ってなければ意味無いよ。つまり君の言ってる事に意味は無い。平等でなかった歴史が証明してる」

「それは所詮過去の話だ。今を生きる僕らに、未来を変えられないはずは無い」

「理想論だね。現実はそのなに甘くないよ。弱者は弱者でしかないし、強者は強者でしかない。二つがあるから世界は成り立ってる。強者が弱者を虐げることだね」

「・・・貴方は随分過去が好きらしいな。なら僕から一つ忠告だ。有史以来、時代を変えるのは、いつだって弱者の覚悟だ」

こんなところで勉強した歴史を活用する僕。臨機応変は戦士の基本です。

「・・・君、男でISが使えるからって、ずいぶん有頂天になるね」

「たかが『ISを動かせる男』なだけで有頂天？虫唾が走る言いがかりは困る」

「開発者の目の前で、よくもそこまで言えるね。君の力は私が与えたも同然だよ」

「世界で唯一 I S を作れるからって、ずいぶんと世界を見下してる貴方だからな。自意識過剰もここまでくると、呆れを通り越して哀れに見えるよ」

そのとき、今度は一夏が僕の手を引いた。

「おいスザク！ あの人は千冬姉が言うように、篠ノ之束さんだ。知ってるだろ？」

「悪いけど僕にとってあの人は、指名手配されている侵入者ってだけだから」

「それは・・・そうだが。いくらなんでも言いすぎだ」

「でも僕は、あんな人物に使う態度なんてこれしか持ち合わせてない。君は犯罪者を敬うのか？」

「・・・・・・束さんは犯罪者じゃあ—————」

「一夏と顔見知りみたいだけど、ハッキリ言うよ。僕はあの人が嫌いなんだ」

「スザク・・・」

なんとも言えない表情の一夏。その表情を見ると申し訳ないが、僕は妥協しない。

篠ノ之束を見ると、元の世界の昔のルーシュに重なる。反逆者『ゼロ』であった頃のルーシュと。

それは否が応でも認めたくない。そして一生認めることも無いだろう。

「それよりも、『自称天才』が君を呼んでるよ」

「っ……今、行きます」

そして一夏は自称天才の方に歩いて行く。

それからしばらく、織斑先生やその他専用機持ちは筭のISに夢中。ルルーシュやカレンや僕は、ロクにデータ取りが進んでいない。これは良かったと思うべきかな。

「帰っていいかな。あまりここにいたくない」

「無理でしょ。終わるまで待つしかないわよ」

「だな。私情で帰らせてもらえるほど、織斑先生は甘くも優しくもない」

まあその通りなんだろうな。僕もそう思ってるが、どうしても口に出してしまう。

（仕方ない、大人しく待つか）

「たっ、大変です！お、おお、織斑先生っ！」

と思ったところで、慌てた様子で山田先生が来る。

「どうした？」

「っ、こっ、これをっ！」

小型端末を渡されて、その内容を見ており斑先生の顔が曇る。

「特務任務レベルA、現時刻を持って対策をはじめられたし・・・」

「そ、それが、その、ハワイ沖で――――」

「しっ。機密事項を口にするな」

「す、すみませんっ・・・」

「専用機持ちは？」

「一人欠席してますが、それ以外は」

そして二人は手話で何か話した。元の世界でもあるような、軍事用の手話だと思う。

「そ、そそ、それでは私は他の先生にも連絡してきますのでっ」

「了解した。――――全員注目！」

パンパンと織斑先生が手を叩く。

「現時刻を持って、今日のテスト稼動は中止。ISを片付けて旅館にもどれ。連絡が入るまで各人部屋で待機すること。以上だ！」

「え……?」

「ちゅ、中止?なんで?」

不測の事態に女子達がざわめく。

「とっとと戻れ!以後許可なく外に出たものは我々が拘束する!いいな!?!」

「「「は、はいっ!」「」「」

全員が慌てて動く。これは僕らも含まれてると思っていいな。

「尚。ランペルージ、ベイルは残れ。後の者は全員解散!」

と織斑先生が言ったので、近くにいたルルーシュを見た。

「……ちつ。杞憂で済んでくれなかったか。ヴァング」

「ホッホホーイ。ちゃんと言こえてるよ」

後ろから、口調こそいつものヴァングだが、顔自体は真剣そのものだった。

「スザク、カレン。戻っておけ」

「わかってるよ。行こうカレン」

「ええ」

「黙って聞け。まあその通りだが。これはアメリカ政府から直々に依頼された」

「ルルーシュのせいで巻き込まれたじゃない」

「少なからずお前にも原因はあると思うが。クロイツの室長殿」

「まあそうだけどっど」

「あゝ、無駄話はそれだけにしとけ」

パンパンと手を打つ千冬。

「ともかく、お前達二人で行ってもらう事となった」

「織斑や箒、その他諸々と一緒に行った方がいいんじゃないんですか？」

「お前達二人で充分だろう。それに二人の方が”都合がいい”。見られて隠蔽するのが面倒だ」

「嬉しいこと言ってくれますね」

「ナイトオブスリ円卓の騎士第三位。そろそろ真面目にしろ」

「……………了解しました。仕方ありませんね。しかし貴方は、私に命令できる立場じゃないと思うんですが。でもそれをわかって従う私、感無量でしょう。泣いて喜んでください」

「……………はあ。相変わらずのクセだな。嫌味ばかり並べおって」

「私はこのクセに、多少の自信を持っていますから」

「まあいい。準備が出来次第迎え。アメリカから対象座標は来ているだろう、ルルーシュ」

「ええ。リアルタイムで」

「お前達に一々作戦など必要は無いだろ。ただしこのことは他言無用だ」

「了解」

そしてヴァングとルルーシュはこの部屋を後にした。

「ちーちゃん」

「何だ束」

一人部屋に残っていたとき、束が立ち入り禁止を完全無視して侵入してきた。

「やっぱあの二人に行かせるんだね」

「私たちの身内を行かせた方が良かったか？ 他の専用機持ちより、はるかに安心できる」

「ふーん。ま、その点は私も同感だけどね」

「そういえば。よくお前が、あの二人と初対面を偽ったな」

「ルルちゃんとヴァンちゃんは、可愛いし好きだけど・・・なーんか、得体が知れないんだよねー」

何の動力を使ってるのかは知らないが、うさ耳カチューシャがガシヤガシヤ動く。

「それにしても、あの少年は生意気だったな」

「柩木スザクのことか？」

手元の小型端末を投げて遊びながら、千冬は確かめるように聞く。

「そうそう。世界で二人目の男I S操縦者だから、どういふのかなーと思ってみれば・・・」

「私的には、束の言ってる事は間違っていないだろう」

「まあ、天才の私にかかればね」

「しかし、奴が極端に間違ってるとも言えないな。確かに人の歴史はそう歩んだ」

「同じことの繰り返しだったからね。まったく、昔の偉人さんは何が面白くて繰り返すんだか。しかも末路も皆同じような感じだし」

「まあな……。東……。奴を甘く見ないほうがいい。弱者は決して弱くはない」

遊ぶ手を止め、壁に体重を預けながら千冬は言う。

「うん。それはあの眼を見たとき、感じたよ。彼は絶対人を殺したことがある。それも多分、十人や二十人なんて比じゃないだろうね」

束が今までのテンションとは違い、真剣な言葉を紡いだ。

「そうだな。私もそれは感じていた。だが、それなら奴は若すぎる」

「だね。しかも私が調べた限り、ここに来るまではただの中学生だったし。人と殺すこととはまったく関係ないんだよね」

「だがあの眼は、敵を殺すことに……。躊躇いの無い者の眼だ。一体何者なんだろうな」

「そこまでわかってるなら、何で野放しにするの？」

「これは勘の部分が大きいからな。それに、IS学園にいる限り野放しとはいかない」

「そっか。それで……。ちゃんとあの二人がやられるというシナリオも、考えておいてよ」

「・・・そうなのかな。やっぱり」

起動訓練中止と命令が下された僕らは、各々自分の部屋に閉じこもっている。

例外は、僕らと同じルームメイトの二人だけだ。

「まあ、あの二人が呼ばれたんだから、大丈夫じゃないの？」

「でも逆に考えると、”彼女達でなければいけない” って裏返しでもあるよ」

「・・・・・・・・考えても仕方ないんじゃない？」

ボスッとカレンがソファに飛び乗る。

「情報が少なすぎるもの。私たちがするのは、待っていることよ」

「・・・・・・・・だね。危険がないの事を祈るばかりだ」

僕も窓側に備え付けられた、木の椅子にクッションを置いて座る。

（・・・まさか、また僕らの世界絡みの事件なのだろうか）

ここ毎月に、そういった事件が起こっている。今回もその可能性は無いはない。

（なら・・・僕らがケリをつけるべきだろうか）

だがそうではないかもしれない。それに今動いたら先生達に拘束さ

れる。

（・・・やっぱりカレンの言う通り、情報が少なすぎる）

ということで、外の景色を見ながら黄昏ようかと思ったとき、

「ただいま戻りました〜！」

「戻ったぞ」

ガチャッとドアが開かれ、噂をしていた二人が来た。

「ヴァング。それにルルーシュも。おかえり」

「おかえり」

僕とカレンが迎える。彼女達は部屋に入るなり、隅に置かれた布団に座った。

「なにがあったの？」

「まあ、面倒ごとに巻き込まれた」

「学生も暇じゃないね〜辛い辛い」

詳しく喋る気はないようだ。はぐらかすような態度を二人は取る。

「そっか。頑張って」

「ああ。出来る限りはやるさ」

「あゝあ。せつかくの臨海学校だったのにな」

そして二人は鏡で身嗜みを整える。

「ふう・・・取るか」

ルルーシュは纏めてある髪を下ろす。黒く広がる艶やかな髪は、常闇のように美しく見えた。

「私も取りましようかね」

ヴァングも前髪の一部を纏めていたリボンを取る。

いつも右目を隠している彼女だが、そのリボンが取られたため、両目が前髪に隠れる。

「うん。やっぱこれが一番しっくりくる」

「そうなんだ」

「まあね。両目が隠れれば、私は相手の眼を見れないし」

改造された制服のズボンを払いながら、ヴァングはそう呟く。

「・・・え？」

「あ、気にしないでいいから」

そしてヴァングはリボンをポケットへしまふ。

「先に行ってるよ」

「ああ」

「「いってらっしゃい」」

僕ら二人の言葉に、ヴァングは手を振ってこの部屋を出た。

「私も行くか」

ルルーシュは結んであったリボンを・・・何故か僕に渡す。

「何？」

「預かっててくれ」

「え、なんで？」

「なんでもいいから。終わったらちゃんと取りに来る」

と力押しで僕にリボンを握らせるルルーシュ。一体なんなんだ。

「はぁ・・・わかったよ」

「頼むぞ。それじゃあカレン、行ってくる」

「いってらっしゃい」

「ああ」

さっぱりとした短い返事を残して、ルルーシュも颯爽とこの部屋を出た。

「で、スザク」

「何？」

二人が出ていった事を確認し、カレンがこちらに寄ってくる。

「ルルーシュはなんだったの？」

「・・・・・・・・僕が知る訳無いだろ」

苦笑しながら窓から見える景色を見る。相変わらずこの部屋は特等席だ。夕日がよく見える。

「あっ・・・・・・・・キレイだな」

景色を見て一言。ただ単純に、無意識の内にそう呟いていた。

夕焼け空に、微かに漂う無数の星々の中。

その空に不釣り合いなほど輝く、金と白の流星が駆けた景色は・・・
皮肉にも美しかった。

E n e m y o r F r i e n d 敵か味方か (後書き)

しかし、篠ノ之束は初期のルルーシュと、意外と通じるところがあるなと自己解釈している自分です。

誤字脱字、感想あったらお願いします。

DEAD or ALIVE（世界が交錯する空）（前書き）

題名はそれっぽいです。

今回はホント話が進みます。そして敵も出てきます。
久しぶりに1万4千を越えたぜ。シャツハー！

DEAD or ALIVE（世界が交錯する空）

ザザ・・・・・・・・ン・・・・、ザザー・・・・・・・・ン。

「・・・・・・・・」

ここは旅館から少し離れた場所にある浜辺。

生徒達がIS操縦訓練に使うはずだった場所は、すでに片付けられ、ある一人を除いては誰もいない。

夕日が反射する赤い海は静かに波を打ち、吹きすさぶ穏やかな風は砂塵を微かに舞い上げる。

さらに夕焼けの赤い空と木々の掠れる音が、この場所の静けさを加速させている。

昼間とは違い、活気も何も無く殺風景で・・・・これからおそらく戦場になる海だ。

（これから戦いに行くというのに・・・・随分と静かな海ね）

誰もいない海岸でただ一人、夕日を見るヴァングはふと、そんな事を思う。

「ヴァング、ここにいたか。探したぞ」

そこに、ISスーツを纏ったルルーシュが歩いてくる。

「ルルーシュ。やっと来た」

ヴァングは待っていた人物である、旅館の方から歩いてくるルルーシュに向き合う。

「目標の現在位置は確認できてるの？」

「ああ。衛星からのLIVE情報と、政府から送られた『福音』のスペックデータと、この辺りの環境情報を統合、そして誤差を私が修正と演算して、目標の推定通過座標を割り出した。奴のスペックなら95.2%の確率で、その場所を18時57分24秒頃に通過する。その前にコチラで先回りだ」

「へえ。意外と早いね。それじゃあ・・・行こうか・・・『トリスタン』」

その言葉と共に、ヴァングの体を白や青といった光が包む。

「久しぶり・・・かな。この機体で戦闘をするのは」

一度強く光った後、体を包んだ光が徐々に収まって行く。

光が収まると、そこには全身装甲の機体が佇む。

頭部にある金の二本角が印象的で、装甲はトリコロールを中心とした色合い。そして腕に装着されている、巨大だがスザクの腕のハーケンに似ているものがある。

今まで出てきた全身装甲の機体の中では、小さいほうの印象を受ける。おそらくヴァングの背を少し上回るぐらいだろう。全体的にスリムな体型をしていて、盾やスラスターといった装備はついていない。

そして背部にある左右の翼には、鎌のような武器が二つ収納されて

る。

だが、それよりも驚くべきことがある。

「相変わらずだな。その機体は」

「いいじゃない。これ速いよ？」

「その状態で速くなかったら、何のための変形なんだろうな」

そう。

ヴァングの機体は”人の形をしていない”のだ。

胸部が突き出て、頭部は内部に収納され、手足は折り畳まれて、戦闘機のような姿になっている。

「貴方は変形しないの？」

「するさ」

その言葉に呼応するかのように、ルルーシュは『蜃気楼』を纏い、そのままヴァングのような戦闘機の姿へと変わる。

「さっさと終わらせるか」

「同感ね」

そして二人は夕焼けの空、海に沈んで行く夕日をバックに飛び立った。

[illegible] $\left[\begin{array}{c} h \\ \vdots \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \end{array} \right]$

「さあ、どっちにする？」

「えつと……じゃあ……コツチね！」

ピシッとカレンはスザクのトランプを引く。

「ああゝゝっ！！」

「ごめんなさいね。また私の勝ち！」

「また負けた〜！！」

華やかに勝利宣言するカレンと、頭を押さえて死神が書かれたカードを放り投げるスザク。

「これで12連敗ね。ここまでくると、もう感心するわ」

「はぁ・・・負けるコッチはいい迷惑だよ」

旅館の自室、スザクとカレンは暇つぶしにトランプを使って遊んでいた。

「もう一度！」

「諦めれば？」

「いや！ここで諦めたらナイトオブゼロの名折れだ！」

「関係ないと思うけど・・・まあ、また負かしてあげる」

「それじゃあ・・・」

「「勝負！」」

数分後。

「また負けた・・・」

「また勝ったわね」

手札に残ったジョーカーのカードを呆然と見るスザクと、揃った二枚のカードを投げるカレン。

「・・・・・・・・もう心が折れた、トランプはやめよう・・・」

「あらら。ナイトオブゼロが情けないわね」

「前言撤回させてもらうよ・・・・。はあ・・・・」

スザクはトランプをしていた敷布団から立ち上がり、窓のそばまで移動する。

「落ち着かない・・・・？」

「・・・まあね。二人が行ってから、そろそろ一時間ぐらいたったかな」

スザクは備え付けられた時計を見て呟く。ちなみに時刻としては1

「見えたね」

「ああ。予定通りだ」

二人は海上の上で、ハイパーセンサーが捕捉した対象を見る。

二人の視線の先には、頭部から一对の翼を生やした、銀の全身装甲である『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルが、スラスターを噴かせながら二人に向う。

「通りすぎて拍子抜け」

「お前・・・私の計算を信じてなかったのか？」

「もちろん信じてたよ。疑う余地は無いからね」

そういうヴァングの姿――『トリスタン』は、最初の戦闘機形態ではなく人の姿をして、手には翼部分に収納されていた、二つの鎌のような、それでいて槍のような武器がある。

二つの鎌は連結して、全長は機体の身丈を越えてる武器を、ヴァングは両手で手馴れたように回転させながら構える。

「フッ、当然だ」

ルルーシュは、自身の機体——『蜃気楼』は、こちらも戦闘機の形態ではなく、人型の形態となっている。長い腕は何も持たず左右に小さく開き、両足は綺麗に揃えている。

一見空きだらけに見えるその姿は、ルルーシュらしい余裕と威圧を放っている。

「目標との接触は10秒後。準備は？」

「・・・No problem・・・だな。お前こそ」

「フッ————OK！」

このやり取りは、ヴァングが突撃する瞬間で、10秒ジャストであった。

「はっ！」

瞬時加速したヴァングは手にある鎌を振りかぶる。

しかしその攻撃は福音の急加減速&rotation, rotationで、決して止まらずに攻撃をかわす。

「この武器を————舐めないでね！」

「っ！」

しかしヴァングは後ろ側の鎌を突き出し、旋回した福音を横薙ぎに振りかぶる。

福音はかわせないと瞬時に判断し、驚嘆に値するぐらいの驚異的な

反射速度で、ヴァングの攻撃を防ぐ。

しかし福音は、一撃の重さに耐えれず吹き飛ばされる。

「ん？その武器は・・・まさか」

怪訝に思ったルルーシュはヴァングの鎌を見る。

「気付いた？スザクの剣・・・MVSだったっけ？あれの正式名称は、メーザーバイブレーションソードって言うのよ。そのシステムを独自（勝手）に解釈&mp;構築、機体に積んでみた。これは実用化への試作品」

その言葉と共に、スザクのMVSのようにヴァングの鎌も赤く発光する。

「名をつけるなら・・・これも”MVS”——『メーザーバイブレーションサイズ』」

「よくもまあ・・・スザクが協力したのか？」

「いえ。彼いくら頼んでも首を縦に振らないから、彼の模擬戦やその他の戦闘データを下に、私があのだ剣に近いシステムを作っただけ」

つまり無断でパクりました、と笑いながら言うヴァング。

実際スザクのMVSは個々の、しかも一人の少女が、そんな面白半分で簡単に作れるものではない。

しかしそれは固定概念。それを証明する証拠や確証などどこにも無い。

常識など人が勝手に決めたこと。彼女は作れても不思議ではない。

たとえそれが簡単に面白半分でという理由だったとしても。

彼女が手に持つ、刃が赤く発光したその武器が、この現実を物語る。

「さあ、楽しい狩りの時間と行きましょうか」

ブンブンと風を切る音が、ヴァングが高速回転させるMVSから放たれる。

満月の月に照らされたその姿は、見るものを恐怖の虜にすることも可能だろう。

向き合う福音も、無意識なのかその姿に気圧されてる。

————その姿は、全てを断罪する死神のように————

「覚悟しなさい？ 銀の子猫ちゃん♪」

その言葉は死刑宣告にして、勝利宣言。

いきなりヴァングの姿が消えたと思ったら、福音の腹部をMVSで薙ぎ払った。

「せめて1分ぐらいは保ってよ？ じゃないと————私が本気出す

から」

何の躊躇いも無くヴァングはそう呟く。

薙ぎ払われた福音は、頭についたスラスタ―で態勢を立て直し、

「迎撃モードへ移行。《銀の鐘》シルバー・ベル、稼動開始」

機械音声と共に機体の翼が大きく広がる。そしてヴァング目掛け、幾重の光の弾丸が撃ち出される。

ヴァングはかわすそぶりを見せない。あのままでは直撃――――

「ふん。《絶対守護領域》展開」

――――はせず、ルルーシュによって構成された赤い障壁が、ヴァングを守る。

「ありがとう」

「どうやら・・・私の出番はこれぐらいだからな」

そういつてその場で腕を組むルルーシュ。ヴァングは密かに苦笑しながら、福音に向き合う。

「どうやら、1分もかける理由がなくなったわね」

そして連結していたMVSを戻し、手ぶら状態となった。

しかし――――

「はっ！」

その場で可変、戦闘機形態となりはるか上空へ舞い上がる。

そしてある程度上空から、真下にいる福音目掛けて急降下。

「っ！」

福音はそれに気付き、翼の砲門からまた幾重の光弾を放つ。

「当たらないよ」

しかし無数に放たれる光の雨と化した砲撃を、ヴァングは旋回だけでかわし、減速どころかさらに加速して飛ぶ。

「《メギドハーケン》」

距離を詰めたところで、ヴァングの両腕にあった青い武装———
《メギドハーケン》が射出される。

それを福音は余裕でかわすが、スザクのハーケンブースターのように、こちらのハーケンもブースターで再度福音を狙う。

「っ！」

それは予想外だったのか、左右から襲うハーケンの直撃を食らう。

装甲の一部を抉られるが、福音は素早く切り替えてその場を立て直す。

そして福音は敵であるヴァングの姿を探す。

「・・・っ!？」

「気付くの、遅いよ」

ヴァングは福音の上で、《メギドハーケン》を合体させて構えていた。

そして――――

「チェックメイト」

《メギドハーケン》から高出力レーザー――――《ハドロンスピアー》が放たれた。

その虹色に輝くレーザーは――――

――――ズバアアアアン!!

「っ!?!?!?!?!」

容赦なく福音の体を貫き、そのまま轟音と共に海をも貫いた。

それは冠された名———ハドロンスピアー神聖なる槍が如く。

福音は成す術もなく装甲を解除され、操縦者は力尽きたかのように海へと落下して行く。

「おっと」

操縦者は傍観していたルルーシュが咄嗟に抱きかかえた。

「目立つ外傷は………ヴァング」

「ほい？」

「お前、《ハドロンスピアー》を加減したか？」

「したよ。7割だよ」

「多すぎだ。5割でないと絶対防御を貫くんだぞ、それは」

ルルーシュが抱きかかえる操縦者の腹部には、ISスーツが吹き飛んで肌が露出している。

「しかもナターシャさんだったとは……」

「知り合い？」

「ああ。本国ではたまにお世話になってる………才色兼備で

有名な先輩だ」

「へえ。私も是非知り合いたいね」

「お前とナターシャさんなら・・・ま、すぐに馴染めるんじゃないか？」

「ホント？」

「ああ。先輩もテンションは高い方だk————熱源接近！」

言い切る前にハイパーセンサーからの警告。

「ッ！————イレギュラーってわけ？」

「マズイ————コイツは速すぎる！————《絶対守護領域》！」

素早くルルーシュが、自分とヴァングを守るため赤い障壁を張る。

次の瞬間、ミサイルが飛来した。

それは、ルルーシュの障壁に阻まれて爆発する。本体には届いていない。

しかし爆煙がジャミング機能を持っているのか、ミサイルを放った敵を視認できない。

「ホント困るわね————死神に刈られたいのは誰？」

ヴァングは背部からMVSを出し、連結させて再び敵に構える。

ルルーシュは福音の操縦者を抱えて、障壁を前面に張りながら後退する。

ミサイルの煙が晴れると、そこには一機の機体が鎮座していた。

頭部や両肩に鋭く尖った円錐状のものと、右腕にある四つのクローが印象的な機体。

全身装甲で、全体的な装甲の色合いは薄紫を基本とし、『トリスタン』ほどではないがスリムな体系をしている。大きさは『トリスタン』と同じぐらいの、標準的な大きさと思える。

そして先ほど、ミサイルを撃ったであろう盾は、まだ煙を上げている。

「答えて。貴方は誰？」

「……貴様らに用はない。枢木スザクはどこだ」

「「ッ！ 男!？」」

ルルーシュとヴァングの驚愕した声が重なる。

それもそのはず。ISは例外があるとはいえ、原則は女性しか動かせないのだから。

「もう一度だけ聞く。枢木スザクはどこだ」

対して気にした様子もなく、二十代ぐらいの男の声が、オープンチャネルで放たれる。

「答える義理も優しさもないね。それより貴方何者？」

ヴァングは挑発するような声色で尋ねる。

「・・・チツ。さすがはヴァインベルグ卿。平行世界とはいえ、性格は変わらんか」

「？」

何かを呟く男だが、オープンチャンネルではないので二人には聞こえない。

「ならいい。力づくで聞くまでだからな」

男がそういうと、機体の右腕にあるクローが高速回転する。すると徐々に緑色の槍が形成されていく。

「さあ、お前達の大事なものは何だ？ 命か？ 友達か？ 恋人か？ 家族か？」

「な、何コイツ・・・いきなり」

先ほどの冷静な喋り方と違い、何かに取り付かれたかのような、狂った喋り方をする。

流石の変わりように、ヴァングも怯えたように後ずさりする。

「お前の大事なものを——————ぶちまけろおおおおおっ！！」

「何ワケわかんないことを——————言ってるのよっ！！」

ガギイン！

瞬時加速したイレギュラーである男の攻撃を、ヴァングはMVSで受け止める。

「はっ！」

そして受け止めたまま、後ろ側のMVSを後ろから押し出す。

「当たらんよ」

しかしそれはイレギュラーの盾によって阻まれる。そのまま盾からミサイルを放つ。

「っ！」

押し出したMVSは爆発で弾かれ、武器共々ヴァングは体勢を崩す。

「死ねえ！」

そしてその隙を見逃すはずはなく、イレギュラーは右腕のランスを正面から突き出す。

（これは————死ぬ————！）

「このっ！」

しかしヴァングは、驚異的な反射神経で体を捻りかわす。そのまま

一度距離を取る。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・っ」

ヴァングは全身装甲なため、表情は見れない。

だがその仮面の下では、苦悶の表情と共に息切れを起こしている。

いきなりの死を感じたことにより、ヴァングの額に嫌な汗が垂れる。

「どうした？ 殺し合いは初めてか？ それとも・・・自分より強いものと闘うのが初めてか？」

「っ！」

ヴァングの心臓が跳ねる。事実を言い当てられたからだ。

「なぜ・・・それを・・・」

「簡単だ。貴様の闘いには誇りが足りん。人を殺したことがある人間は、そんな戦い方ではない。いつも安全圏で戦いを傍観してるような奴の闘い方だ。そんな者が、自分より強いものと闘ったことがあるわけない」

「・・・・・・・・・・」

ヴァングは何も言い返さなかった。否、何も言い返せなかった。

事実ヴァングは、類い稀なる反射神経を持っていたため、同年代とは二歩も三歩も先へ進んでいる。さらに実力はもちろんだが、自身の両親の関係で、大した苦労もなく専用機所有権を持っていた。

イタリアの同年代との模擬戦ではほぼ無敗。専用機を使った状態では、引き分けはあったが負けたことはなかった。

故に、常に圧倒的な実力でねじ伏せてきたので、殺し合いなどになる戦いがなかった。

「あなたは・・・人を殺したって言うの」

「ああ、何度もな。どれだけ殺したかは一々数えてないが」

何の躊躇いもなくそういつて、狂ったように笑うイレギュラー。

その言葉に、ヴァングもルルーシュも衝撃を受ける。

（この男・・・人を殺すことに快樂でも覚えているの？）

「ルルーシュ」

プライベートチャンネルで、ヴァングはルルーシュに通信を入れる。

「っ！な、なんだヴァング」

「私が時間稼ぐから、その人つれて逃げて」

「な、何言ってるんだお前！？正気か？！」

「正気も正気、大真面目。もう一度言うよ、ここから逃げて」

憤慨するルルーシュに、ヴァングは冷静に指示を促す。

「どうせその人抱えたままじゃあ、聞えないでしょ。私が時間を稼ぐから」

「だ、だが一人であの男を————」

「大丈夫だって。私は天下の騎士の第三位よ？————信じて」

ナイトオブスリー

後ろにいるルルーシュには振り返らず、MVSを敵に構えなおすヴァング。

「だ、だが————」

ルルーシュは止めようとするが、ヴァングの姿を見て言葉を飲み込んだ。

その後ろ姿には、すでに恐怖も怯えも無い。あるのは、敵を倒すと決めた覚悟だけだ。

「・・・ほう。その気迫、貴様とて少なくない場数を潜ったようだな。先ほどの言葉は訂正しよう。矮小とはいえ、誇りと呼べる物は背負ってるようだ」

イレギュラーである男も、目の前にいるヴァングを敵と認識した。

「くっ・・・言っても無駄なようだ・・・」

「・・・・・・・・・・」

スザクは相変わらず自室にいた。ちなみにソファに寝転がり本を読んでいる。

「はぁ〜。上がったわ〜」

バスルームから頭にタオルをかぶせたカレンが出てくる。

服装は動きやすさを追求したような、短パン白地シャツといった軽装だった。

「やあ」

「暇そうね。暗いオーラがドンドン出てるわ」

「失礼な。・・・暇なのは否定しないけどね」

「テレビでも見てればいいじゃない」

「興味あるのがやってなくて。音楽番組とかコメディドラマとかは、あまり見る気がなくて」

「で、静かに本を呼んでたと」

「そう」

首肯して僕はまた読書へ戻る。

カレンはそれに反応する訳でもなく、パパッとドライヤーで頭を乾かす。

ドドドドドド・・・！！

突然地鳴りのような音が聞こえる。階段を登る音にしては変だな。

「何の音？」

「さあ？」

その音はどんどんコチラの部屋に近づいてく。

そして・・・。

バンッ！

「スザク！」

ルルーシュが血相変えて、乱暴にドアを開けながらコチラに來た。

「あ、ルルーシュ。おかえ—————ぐへっ！」

「一体どう言う事だ！説明しろ！」

いきなり首を掴まれて、僕が一体何を説明すればいいんだ。
なんなんだ、この理不尽。どちらかと言うと僕が説明してほしいんだが。

「な、何？」

「一体どうしたのよルルーシュ」

「とぼける気か！？敵がお前を呼び出して来たんだ！」

「・・・・・・・・・・は？」

というわけで、ルルーシュの話を聞いて数十分。

「なんだって！？ヴァングが一人で時間稼ぎ！？」

「ああ。正体不明の・・・おそらく男だ。だから急いで戻らないといけない」

でも情報が少なすぎる。イレギュラーだから仕方ないか。

「ISを使う男・・・でも、それなら何で僕らの所に？」

「敵はお前を探していた。それに・・・言っていたんだ。『お前の探し物は私が知っている』と」

「さ、探し物？何のことだろう・・・」

本気で何のことだろう。・・・あ、そうだ。

「敵は僕を呼んでるんだろう？ だったら、出向くのが一番手っ取り早い」

「何！？馬鹿なことはよせ！あの敵は――――」

「誰であれ！」

「っ！」

声を張り上げて、ルルーシュの言葉を打ち切る。

「・・・ご指名を受けて逃げるのは、騎士の名折れだ。止められても行くよ」

「だ、だが奴はお前を呼んでいる！ 罠に決まってるだろ！」

「わかってる。だから、カレンとルルーシュはここに残った方がいい」

「………何故だ」

「もしかしたら、一人じゃないかもしれない。奴の仲間が来たら、ここを守って欲しい。ああ、不確定な情報だから、先生達に知らせなくていいよ」

「……わかったわ。とりあえず、先生達には知らせないでおくわ」
ついてきそうな顔をしていたカレンだが、一応了承してくれた。

「……断る。私も行くぞ」

だが、ルルーシュは無理そうだ。

「………生きて帰れる保証ないよ」

「死が怖くて戦場に出れるか。……あの時から、覚悟はできている」

「………わかった」

”あの時”と言うのは何か知らないが、ルルーシュの瞳を見れば、止めることが出来ないことぐらいはわかった。

「行こうか」

「はあっ！」

ガギイン！

「無駄だあ！」

ガギイン！ ガギイン！

その頃ヴァングは、未だにイレギュラーとの決着がつかないままだった。

（こ、このままじゃあ・・・負ける・・・かも）

『トリスタン』は、足と胸部に抉られた様な痕が出来て、さらに頭部の一部が破壊されて、そこからヴァングの顔を覗かせる。しかも頭部からは血が流れている。

対するイレギュラーは、ヴァングほど大した損傷はしていない。胸部分に少し大きい切り傷、肩の武装である突起と、手に持つ盾が少し損傷している程度。

「平和ボケしたこの世界の戦士としては、よく頑張ったと褒めてや

ろう」

「・・・そりゃどうも」

”褒められても嬉しくない”と言った感じで、ヴァングは言葉を返す。

「だが、所詮は子供だな。人殺しにまだ躊躇いを持っている」

「・・・人殺しに快楽を覚えてるのかしら。貴方は」

「ああ！確かに大事なものを奪うのは楽しいな。貴様は、戦場の真実を知ってるか？」

「・・・・・・？」

「日常では人を殺したら罪となるが、戦争では殺した数だけ英雄になれる！」

「・・・へー。くだらない」

「・・・無駄話はこれぐらいにしてやろう」

そしてイレギュラーは右腕の槍を構える。ヴァングも二本のMVSを再び連結して構える。

「私が用のあるのは枢木スザクだけだ。今逃げれば、命だけは助けてやろう」

「・・・どうせ、逃げたらスザクのいるところへ向うんでしょ？」

「ああ。どこぞの高級旅館だったか？　枢木が出てくるまで全員皆殺しだ」

その言葉でヴァングは内心舌打ちする。

（やっぱり、この場で倒すしか道はないわね）

「なら貴方はここで・・・殺す」

「無闇に人を殺すと言ってはいけないな。その言葉は――己が死ぬ覚悟があるのだな？」

「死が怖くて、戦いなんて出来ないわよ」

即答。とても十代女子が言う覚悟ではない。しかし、ヴァングの言葉はハツタリでもない。

「フッ、大した心意気だ。この平和ボケの世界で殺すには惜しい逸材だな」

「知らないわよ。それにしても、随分とこの世界をバカにするわね」

「おっとお、喋りすぎたな」

次の瞬間、イレギュラーは瞬時加速と同時にランスを突き放つ。

「それぐらいっ！」

しかしそれはヴァングのMVSで受け止め、互いの武器が火花を散

らせて衝突する。

「おらっ！」

イレギュラーが突起した盾で殴る。ヴァングは予測していたように、連結したMVSで受け止める。

「もう同じ手は食わないわよ！」

「ああ、そのようだ。だが、これならどうだあ!？」

その言葉と共にイレギュラーの頭部の角が傾く。そしてそれはハーケンのように射出される。

「なっ————グッ！」

予想外の攻撃であるそれは、『トリスタン』の頭部に直撃して、装甲はほぼ破壊した。

そのためヴァングの顔が全て露出してしまう。

「うぐっ………！」

美しく整ったヴァングの顔は、頭部から流れる血で染まっても、尚も変わらず美しい。

赤く染まる金髪は、血の飛沫が弧を描くように振り乱れる。

その隙が出来たところを、イレギュラーは盾をしまい、手でヴァングの首を鷲掴みする。

「ぐっ！」

「ほお……。中々端整な顔立ちをしているな」

「……。アンタに褒められても、嬉しくないわよ……。！」

つかまれたままでも、ヴァングはイレギュラーを睨みつける。

「だろうな」

そしてイレギュラーは力を入れて、首を絞める。

「ガハッ……。！」

苦しそうに顔を歪めるが、イレギュラーはさらに腕に力を入れる。

「そろそろ死ね」

そして大腿部から、単発式のハドロンショットが無数に連射される。

ドドドドドドドッ！

「か……。は……。ッ！」

その攻撃に成す術ない『トリスタン』の装甲は、どんどん破壊されていく。

そしてヴァングは、力尽きたように手をダランと垂らし、MVSを落としてしまう。

(もう・・・指が動かない・・・)

頭部のダメージが大きすぎた。そこへ今の攻撃。すでにヴァングは限界を超してしまった。

「終わりか。中々足搔いたが、これが現実だ」

イレギュラーは、ヴァングを上に掲げ、右腕のランスを構える。

「っ・・・・・・・・！」

ヴァングもそれを察知し、何とかして抵抗しようとするが、限界を超えた体は動いてくれない。

(・・・・・・・・動かない・・・か。ゴメンルルーシュ。生きて帰れそうにない・・・)

「死ねえ！」

そしてイレギュラーのランスが、ヴァングの腹を目掛けて突き出される――――

「っ！」

ヴァングは腹を貫かれる覚悟して、思わず眼を閉じる。

(せめて――――恋愛ぐらい・・・したかった・・・かなあ・・・)

・・・)

最後に思った未練は、戦士としてではなく、何でもない十代女子としての小さな願い。

でも運命は———そんな願いさえ無情にも貫く———

「・・・・・・・・・・」

———五秒

「・・・・・・・・・・」

———十秒

「・・・・・・・・・・？」

——二十秒経った所で、ヴァングは未だに攻撃がこないことを怪訝に思った。

そして恐る恐る眼を開けると————

「・・・ゴメン遅くなった。でも、もう大丈夫だ」

「あ・・・・・・・・」

月光に輝く白き騎士が、自分を抱きかかえて優しく語りかけてくれた。

「ス・・・・・・・・ザ・・・・・・・・ク・・・・・・・・？」

ボロボロの体でもなお、ヴァングは突然の救世主の名を呼んだ。

[illegible]

時は巻き戻り、ルルーシュとスザク。

「もっと速くならない？」

「なるが、それだとお前を下ろさなくてはいけなくなるぞ」

『蜃気楼』を纏ったルルーシュは、戦闘機形態となり、その上に『ランスロット』を纏ったスザクを乗せている。

「お前のP I Cがエネルギーを大量消費しなければ、普通に急げんなのだがな」

「ゴメン。でも、敵と戦える余力は少しでも残しておかないと」

この通り。

スザクの《フロートユニット》は、エネルギーを大量消費してしまう使用だ。

しかも、そのエネルギーは《ヴァリス》や《ハドロンプラスター》と同じ系統。つまりP I Cで消費しすぎると《ヴァリス》などが使えなくなってしまう。

なので、スザクはルルーシュの上に乘せてもらっている。

「しかし・・・本当に良かったのか？」

「？ 何が？」

「私は一定の自由行動権を与えられているが、お前は何もかも無断だろう。戻ったら間違いない拘束されるぞ。それだけで済めばいいが・・・もしかすると・・・」

先の言葉は言わないルルーシュ。スザクは苦笑しながら言った。

「戻ったときの事なんて、どうでもいいよ。いつか僕は君に言ったと思うけどね」

「・・・何をだ？」

「『生憎頭が悪いからね。行く理由なんて』親友がピンチ”ってだけで充分だろ?』」

「ッ！」

いつかの対抗戦のときのセリフを喋るスザクに、ルルーシュは驚いたように息を呑む。

「僕とランスロットが必要とされる限り、闘い続ける。使いたいときに使えなくて、何が世界最強の力だ。宝の持ち腐れをする気なんて僕にはないよ」

「・・・・・・・・・・」

ルルーシュは少し黙って、スザクの言葉に耳を傾けていた。

（『僕とランスロットが必要とされる限り』・・・か。”自分のため”とは・・・言わないんだな）

もしかすると、それがスザクにとっての”自分のため”になるのかもしれない。

「ルルーシュ。敵の特徴は？」

とスザクから聞かれ、ルルーシュは蛇足な考えを振り払った。

（私が気にしてもしようがない。今は目の前の事に集中すべきか）

「そうだな・・・色は薄紫で・・・所々に突起があって・・・あ、お前の盾と同じような性質の槍を、右腕に装備してたな」

「っ！」

スザクはその言葉で一つの機体が思い浮かんだ。

（まさか・・・『パーシヴァル』か？ それを使う男は・・・ブラッドリー卿しかないない）

「・・・・・・・・また、あの男に会わなければいけないのか・・・？」

忌々しいように小声で呟くスザク。

「————ッ！見えたぞスザク！」

「っ！」

ルルーシュの怒号で、スザクは考え事を中断し、ハイパーセンサーに意識を向ける。

その時ちょうど、ヴァングがイレギュラーに捕まった。

「ルルーシュはこのまま前進！」

「お前は!?!」

「僕はこのままアイツを斬り落す」

その言葉通り、スザクはMVSを引き抜き片手で順手に構える。

「————ハッ！」

射程範囲内に入った瞬間、スザクはルルーシュを踏んで、力の限り跳躍＋スラストスターを噴かせる。

そしてイレギュラーの、ヴァングを掴む腕を斬る為に剣を振りかぶる。

「————チィ！」

イレギュラーは舌打ちをして、ヴァングを掴んでいた手を離し、MVSの射程範囲外へ後退する。

スザクはそれを見るなり、ボロボロの姿となったヴァングをお姫様抱っこする。

「————」

そしてスザクは、お姫様抱っこした相手を見て————絶句した。

頭部から流れる赤い血が、鮮やかな金髪の一部を染め上げる。そして彼女の端整された顔と、その流れる血が絶妙なコントラストを演出する。

そして彼女は、まるで人形のように眼を閉じて、月光にその寝顔が照らされる。

ヴァングの美しさは、例えば血塗られたとしても、衰えることは無い。それを表現しているかのようだった。

（さしずめ・・・”眠れる空の美少女”・・・かな？）

こんなときでも、スザクは思わずヴァングの美しさに眼を奪われてしまった。

（もしかしたら・・・キスでもすれば、目覚めるか？）

などと冗談で考えていると、ヴァングの目が徐々に開いて行く。

最初その眼は虚空を彷徨うが、徐々に光を帯びた眼は、抱きかかえるスザクを捕捉した。

「・・・ゴメン遅くなった。でも、もう大丈夫だ」

「あ・・・・・・」

小さな呻き声を上げて、ヴァングは血で濡れた瞳で見つめる。

「ス・・・・・・ザ・・・・・・ク・・・・・・？」

「ほ……本……当に……す、ス……ザク……なの……
？」

まだ納得が言っていないのか、痛みに顔を歪めながらヴァングは呟く。

「ああ。君の騎士^{ナイト}さ、お姫様」

ちょっとしたジョークでスザクはそう言ってみると、

「なっ！………もう！」

ヴァングは顔を赤くして、抱きかかえられたまま彼から視線を逸らす。

（………はれ？予想してたリアクションと違う）

まあなんにせよ。

「……………もう、大丈夫だ」

そしてスザクは、近くに居るルーシュへヴァングを渡す。

「ヴァング……大丈夫か？」

「る、ルルーシュ・・・・・・・・ま、まあ・・・・ハハ・・・・ハ・
・・」

「そうか・・・・。よかった・・・・本当に・・・・本っ・・・・当に・・・・
・・・・ッ！」

生憎ルルーシュの機体は全身装甲。故に彼女の今の表情はわからない。

だが、その全身装甲かめんの下を無粋に想像するだけ・・・・野暮というもののだろう。

「ついに来たかあ！ 枢木卿！」

しかしそんな感動的なムードは、イレギュラーの発狂した声で遮られた。

「・・・・できればもう、貴方には会いたくなかったな。ブラットリ
ー卿」

嫌々ながら、スザクは呼んだ人物の方を見る。

イレギュラー————ルキアーノは、ヴァングの首を絞めていた
手に盾を呼ぶ。

スザクは《ヴァリス》を呼び出し、元から持っていたMVSで、一
刀一銃の構えを見せる。

「久しぶりだな枢木卿。中々様になってるじゃないか。己がKMFになる気分はどうだ？」

「・・・案外悪くはないな。それよりも、何故貴方がここにいる。答えろ」

スザクはルキアーノに銃と殺気を向ける。

「それを貴様が聞くか？」

ルキアーノはスザクに盾を向ける。その盾は装甲がスライドし、ミサイルの前頭部分が露出する。

「何？」

「ここは戦場だ。私の楽しみを何の惜しみも無くできる、最高の舞台だからだ」

「相も変わらずだな。死んで少しは更生してくれば良かったのに・・・狂った吸血鬼が」

仲間を傷つけられたスザクは、怒気と殺気を混ぜながら言葉を吐く。

「貴様に言われたくはないな。1千万人の命を一瞬で奪ったくせに、正義面する貴様には」

「っ！・・・なぜ・・・それを貴方が知っている」

一瞬顔を歪めたが、スザクはすぐに平常心を取り戻す。

「おっとつと。これはまた口が滑ったな」

「答えろ。貴方では僕には勝てない、それに今の僕は非常に不愉快だ・・・手加減できる保証は無い」

その言葉にルキアーノは眉を吊り上げる。

「舐められたものだな。ぬるま湯に浸かりすぎて、本当の殺し合いを忘れたか？」

「逆だ。ぬるま湯に浸かってたから、今までの殺し合いというのを、改めて自覚できた」

スザクの言葉には、真摯の響きが宿っている。それは決してハツタリではない。

「ほお・・・それで貴様は私に勝つというか」

「少なくとも、負ける気はしないな」

そしてスザクは《ヴァリス》をバーストモードにして、MVSと共に構える。

「それは、私とて同じだ」

ルキアーノの機体である『パーシヴァル』、右腕の《ルミナスコーン》が豪快な機械音を上げる。

「もう一度死ぬか？死にぞこないの吸血鬼！」

「アーハッハッハ！ ならばやってみるがいい！ 裏切りの死神がぁ
」

ドゥウウウウンッ————ドガアアアアンッ！！

放たれた緑色の閃光が、同じく放たれたミサイルを撃ち落とす。

それがこの世界初めての殺し合いにして、イレギュラー同士が世界で交錯する幕開け^{フイオーネ}だった。

DEAD or ALIVE（世界が交錯する空）（後書き）

うゝむ・・・今更ながらに思ったが、原作ヒロインが空気となっている。はたしてこれでよかったのかな？

まあスザクがメインだし、原作ヒロインたちは一夏とラブラブしてるし（一部例外）、スザクと関わらないと、書く事は少ないからね！

しかし、ルキアノのキャラがイマイチうまく書けない。本当にこれでよかったのかな・・・。

※どうやって変形してるかは・・・聞かないでね！作者は答えられないから！

誤字脱字、感想があればお願いします。

BLACK and WHITE 黒へ落ちた白き騎士 (前書き)

今回もなっがうい。

自重しろ作者！と言われても仕方ですね。まあ無理ですけど。

そういえば、ついにタグの”戦争”の部分に触れますな。

BLACK and WHITE（黒へ落ちた白き騎士）

「おらっ！」

「このお！」

ルキアーノの槍とスザクのMVSが衝突する。

それは互いに火花を散らせて、ルキアーノはこの状態で盾による打撃を繰り返す。

スザクは《ヴァリス》を持つ腕の《ブレイズルミナス》を展開して防ぐ。

そして足でパーシヴァルの腹を蹴り、お互いに一度距離が開く。

「どうした？手加減してるのか？」

「貴方には聞きたいことがある。不本意だがまだ殺さない。だから早々に投降しろ」

「断る。私はただ貴様を殺したいだけだからな！」

そしてアチラの盾からミサイルが放たれる。スザクは冷静に《ヴァリス》で撃ち落とす。

「はあ！」

「その程度っ！」

その間に瞬時加速で距離を詰めたルキアーノは、スザクに対し右腕の槍を突き出す。

スザクは体を右回転してかわし、その勢いに乗せて右腕のMVSで切りつける。

しかしそれは、ルキアーノが寸前の所で体をくの字に曲げてかわした。

「—————甘いっ！」

「なっ—————ぐうう!!！」

しかしスザクはかわされた次の瞬間、回転によって勢いついた左足による足刀蹴りを繰り出す。

それはくの字に曲げた際、前に突き出た頭に直撃、ルキアーノは槍を振り回した後距離を取る。

「くそっ・・・サルがあ！」

「万全の状態ならもっと苦戦しただろうが、ヴァングとの戦闘が大きく影響したな」

スザクは未だにほぼ無傷の状態のまま、《ヴァリス》をルキアーノを向ける。

一方のルキアーノは、蹴られたため損傷した顔装甲を押さえている。

「・・・そうだな・・・この世界の戦士も、少しはやるようだ」

「戯言はいい。諦めて投降しろ。でないと—————殺してしま
う」

「そう急かすな。楽しくなって来た所じゃないかあ！」

ハドロンショットを放ちながら、右腕のランスを構えて、スザクに突撃を仕掛けるルキアーノ。

「無駄だっ！」

腕の《ブレイズルミナス》を張り、ハドロンショットを防いで、足を振り上げてランスを弾く。

「うらあ！」

「このお！」

ルキアーノが盾による打撃を繰り返し、スザクも手に持つMVSで斬撃を放つ。

「死ねえ！」

「断る！」

幾重にも放たれる斬撃と打撃の応酬。

スザクは片手の《ヴァリス》による牽制、MVSによる容赦の無い斬撃、さらに《ブレイズルミナス》展開状態の足による打撃を繰り返す。

一方のルキアーノは、盾による打撃とスラッシュハーケンでの波状攻撃で陽動し、ランスによる一撃決殺の攻撃。

その一進一退の殺し合いを、傍から見ている彼女たちは、どう思ったのか。

[illegible]

二人の激しい戦鬪——いや殺し合いに、ルルーシュとヴァングは呆然としてしまった。

「……二人とも、殺すことに躊躇いが無いのか……？」

《絶対守護領域》を前面に張り、最強の盾に包まれてるはずなのに、ルルーシュは言いようの無い不安を感じる。

そんなルルーシュの呟きに、少し回復したヴァングが答える。

「私も戦ったけど……本当にあの人は、私を殺そうとしていた。何の迷いも無く」

それを聞き、さらにルルーシュは呆然としてしまう。

確かに軍事的な観点から言うと、邪魔な敵を殺そうと思うことに、不思議は無いだろう。

しかしこれは、口で言うのは簡単だが、実際に行うとなると話は別。

人を殺すことに躊躇いを持たないなど、一体どこまで人を殺せば到達できるのだろう。

この平和な世界で、なぜそこまで人を殺すことに固執するのだろう。

—————そんなことどうして殺し合いが、彼にできるのだろう。

「アイツは……何者なんだ……」

闘うスザクに感じる、あの気迫や殺気。そして殺すことに迷いの無い闘い方。

それを見れば、彼は人を殺したことがあると容易に推察できる。しかも一人や二人ではない。

それこそ、戦場で命のやり取りをしてきた者同士の、本当の殺し合いないんだと。

確かに自分たちも兵器を扱うのだから、命を掛けて戦った時はある。だがそれは殺し合いと言うわけではない。この歳で殺し合いをする事態など、皆無に等しい。

だがそれを、何の躊躇いもなくやってのけるスザク。これが彼の本性だと言うのか。

二人の殺し合いを傍か見て、ルルーシュは底知れない恐怖を感じた。

「普段の彼からは・・・想像も出来ない闘いね・・・」

しかしヴァングは、驚くことはしても怯えるような素振りは見えない。

「ヴァング・・・お前は、怖くないのか・・・？」

ルルーシュがそう尋ねると、ヴァングは優しい微笑を浮かべた。

「まあ、確かに怖いけど・・・それが彼じゃないでしょ？　今までの彼もあれば、こういった一面もある。でも隠していたからって、それが彼の本性じゃない」

「それはわk————」

ルルーシュが”わからないだろ”と言う前に、ヴァングは言葉を紡ぐ。

「それも全部、彼なのよ。だから私は否定しない。それに・・・助けに来てくれたしね」

照れたように言うヴァングに、ルルーシュもつられて笑みを浮かべる。

「・・・そうか、そうだな。今までのアイツが嘘というわけではないか」

「だけど・・・見守るしかできないというのが、歯痒いところね・・・」

「ああ・・・そう、だな・・・」

寂しそうな瞳で呟くヴァング。それにルルーシュも同意見だった。

—————スザクは、自分たちより強い。

それを二人は、羨望や嫉妬とかではなく、ただ単純に寂しいと思っていた。

見守ることしか出来ない悔しさと、あの殺し合いに割って入るとい

「もう諦めて投降しろ。そうすれば命まではとらない」

「余計なお世話だ。私が死ぬときが、私の負けたときだ」

「・・・・・・・・その潔さは、僕が唯一貴方を尊敬するところかもしれない」

戦いしか能の無い。それは闘いしかできないという意味も込められている。

ならば、その身が朽ちるまで闘うことしかできない。普通の人なら”戦闘狂”と侮蔑して蔑むだろう。

だがそこに一切の迷いや邪念は無い。故にその力は真っ直ぐで鋭い。

戦いに身を置く戦士なら、いつかは到達したいと思う高みだ。

「枢木卿。貴様にとってこの世界はどう映る？」

「・・・・・・・・・・」

突然の質問にスザクは答えない。ルキアーノは構わず続ける。

「貴様なら”この世界も元の世界も大して変わらない”などと思っているだろう。女尊男卑の世界か、異世界は面白いことばかりだな」

「それがどうしたというんだ」

「世界最強の力、『インフィニット・ストラトス』・・・・どこぞのバカが作ったこの力は、たちまち世界のバランスを崩し、互いが互いを牽制し合う・・・・いわば冷戦の状態を作り出した」

「・・・・・・・・・・」

「密閉された空間に、拳銃を持った多くの人間が、その銃を突きつけ合う状態だ。誰か一人でも撃ったら即戦争。この世界は実に単純に出来ているな」

「だからなんだというんだ」

「私達は――戦争を引き起こしたいのさ」

「ッ!」

突然の言葉に、スザクは驚きを隠せない。

「そしてこの世界を正しくするらしい。まあ、私は戦いさえあればそれでいいのだが」

「・・・・・・・・・・まだそんな事を――」

「――――お前にとって、この世界は正しいのか？ 守る価値があるというのか？」

「――――っ・・・・・・・・」

その質問にスザクは言葉を飲み込んだ。

「いつ戦争が起こるかわからず、それに備えて人々は戦いに身を投じる。だったら、さっさと戦争を起こして、人々を正した方が効果的だろう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「しかもお前は这个世界ではイレギュラー。なぜ这个世界に来れたかは知らないが、大した目的があるわけでもないだろう?」

「・・・・・・・・・勧誘しに来たって所なのか?」

”建前はどうでもいい”と言いたげに、スザクは質問する。

「まあ簡単に言うとななるな。貴様の力は世界を揺るがすほど強大だ。野放しにするほど私たちの目は曇っていない」

「・・・買い被りすぎだ。今の僕は、ただの高校一年生。世界をどうこう言える力はない」

「貴様こそ自身の實力を把握してるのか? 貴様は世界最強のIS操縦者とも決定的な遜色は無い。ISの実戦を積みめば、すぐにでも世界のトップに躍り出る」

「・・・・・・・・・・」

そういわれて、スザクは少し黙ってしまう。

（確かに弱いつもりは無いが・・・そこまで強いのか? イマイチ実感が・・・）

「どうだ? 私たちと一緒に世界を変えよう。枢木卿とて、今の世界は不満だらけだろう?」

「・・・確かに僕も、この世界には不満があるし、正しいとも思っていない」

「ほう」

「————だが” 守る価値はある ” と思っている」

スザクはそう言い切った。その答えは予想外だったのか、ルキアーノは質問を投げかける。

「・・・なぜだ？ いつ戦争が起こるかわからない世界、元の世界より危険だろう？」

「だから守る必要があるんじゃないのか？ 貴方みたいな輩から」

「危険で正しくない世界をか？」

「世界に” 正解 ” なんて無い。こういう言葉を知っているか？ 『正義と悪は紙一重』、見方によって正義は悪になるし、悪は正義となる。世界に正しいなんて基準は無い」

「だったらどうだと言うんだ？」

「だからもっと個人的な理由。僕は貴方のやり方が気に食わない。だからその誘いは断る」

「・・・残念だな。貴様はもう少し利口だと思っていたのだが」

「世界に対し、正解不正解を求める時点で、貴方と僕は分かり合えない。それにさっきの質問に答えると、僕は頼まれたからこの世界

へ来た。貴方のような人を屠るために」

「……………最後にもう一度だけ聞く。お前は私たちと共に来る気は無いのか？」

「ない。イレギュラーなら、この世界に一々口を出すべきじゃない。この世界の人が解決すべきだ」

「……………ならば交渉は決裂だな。貴様と私は敵同士だ」

そう言って右腕のランスを一度引く。

「邪魔者は邪魔者同士で、決着をつけるべきだろ。ブラットリー卿」

スザクも手に持つMVSと《ヴァリス》を構える。

（まあ本当は……そんな小難しい話じゃないんだけどな）

心の中でスザクは、自分が言っただけなのに苦笑する。

（僕はただ単純に……守りたいだけなんだ。仲間を、友達を……
例えば血塗られた手だとしても）

スザクの武器を握る手にさらに力が入る。

（戦争なんてもう二度と起こさせない。あんなものに———友達
を巻き込みたくない）

本音はそれ。世界とか正しいとかそうじゃないとか、そんなことは
どうでもいい。

ただ——あんな理不尽から、仲間を守りたいだけ。

最初に言った通り、本当に個人的な理由だ。

（平和は犠牲の上で成り立つ。そう言えば聞こえはいいが、失うものは果てしなく大きい）

スザクの頭の中には元の世界の人達、愛すると誓った姫、親友を愛して死んだ少女、自分で殺してしまった父や・・・生まれて初めてできた親友の顔が過ぎる。

確かに奴の言うとおり、元の世界は戦争が終結したことにより平和となった。

しかしそのための犠牲となったものは大きすぎた。平和の代償は重く・・・二度と戻らない。

（僕はあのやり方が良かったとは思っていない。だから——二度と繰り返し返す気は無い）

そのために大切な仲間が危機に晒されるなら、尚の事だ。なんとかしてもそれは阻止する。

「これ以上、貴方の好きにはさせない」

「そうかそうか。期待を裏切らないようになによりだ」

しかしルキアーノは、断られたというのに笑いを堪えながら言う。

「何？」

「正直、この誘いを貴様が乗ったら、どうしようかと思っていたところだ」

「どういう意味だ」

「何、私は貴様と殺し合うのを望んでいたからだ！」

構えたランスで突撃を仕掛けるルキアーノ。

「僕としては、まったくもっていい迷惑だ！」

その突き出されたランスを、また《ブレイズルミナス》展開状態の足で蹴って、軌道をそらす。

そしてその場で回転^{ターン}して、MVSを斬りつける。

ガキーン！

しかしそれは、攻撃を読んでいたルキアーノの盾に阻まれる。

「まだだっ！」

「なにっ!？」

さらにその場で前転、スザクの右足のかかと落としが、ルキアーノ

の肩に直撃した。

「チィ————くそがあ！」

舌打ちしながらも、右腕のランスを振り回してスザクと距離を取る。

「もう諦めて投降しろ。僕は無益な殺生をする気は無い」

「私を止めたければ、殺せばいいだけの話だ。同じことを言わせるな」

「…………貴方には聞きたいことがある」

「喋る気は無い」

スザクの言葉をルキアーノは切って捨てる。

だがスザクは、今のところルキアーノを殺す気は無い。

（どうやって止めるべきだろう……。あまり手加減しすぎると、僕がやられてしまう）

今スザクが手加減できるほど有利なのは、アチラがヴァングとの戦闘ダメージを負ってるからだ。

もし万全の状態なら、本気で殺し合わなければいけなかった。

しかし万全の状態ではないのなら、それを最大限利用すべき。

（あの人がこの世界のバグだろう。しかし”私たち”と言う限り仲間がいるはず。あの人にはそれを吐いて貰わなければ）

他にもなぜ男の身でISを使えるのか。自分と同じ理由かもしれないが、聞いておかなければ。

「戦闘中に考え事かあ!？」

「ッ！」

その言葉で現実引き戻された。ルキアーノはハドランショットを連射する。

「このっ！」

防御は無理と判断したスザクは、その場で急上昇してかわす。そして牽制にと《ヴァリス》を放つ。

「この時を待っていた！」

「何—————しまった！」

ルキアーノがいきなり声を張り上げ、スザクは怪訝な表情をするが、すぐに何か気付いた。

スザクは今まで、ルキアーノと近距離戦闘を行っていた。

それは『パーシヴァル』が得意とする戦闘距離だ。万能型の『ランスロット』なら、『パーシヴァル』の不利な遠距離からの攻撃も可能。

だがスザクはあえてそれをしなかった。それはなぜか？

「やっと距離を取ったな！」

「くそ————ルルーシュ、ヴァング！」

簡単だ。後ろで控える、闘えないルルーシュとヴァングを守るため。

「来るかっ！」

「私が————グッ！」

「ヴァング！？！」

ヴァングを抱えてるため両手が塞がり、防御に徹するしかないルルーシュ。

そのヴァングは、ダメージがまだ残ってるため、ロクに動くことも出来ない。

スザクはそれをわかっていたから、ルキアアノがその場を離れないように、あえて接近戦を中心に闘っていた。

しかし今————スザクが離れてしまったため、ルルーシュ達を守る人はいない。

「止めろブラットリー卿！」

スザクが叫ぶが、ルキアアノはランスを構えて瞬時加速の体勢に入る。

「大事なものを——————」

「くそっ！」

上空にいるスザクは《コアルミナスコーン》を張って、コチラも瞬時加速の体勢に入る。

「————ぶちまけろおおおおおっ！」

「やめろおおおおおっ！」

ガギイイインッ！！

名の通り、瞬時加速による一瞬の激突。

ルルーシュたちの目の前で、瞬時加速した『パーシヴァル』と『ランスロット』の、互いの武器が重なる。

そして————

「が……は……っ！」

「「スザク!?!」」

―――『ランスロット』の横腹に、
『パーシヴァル』のラン
スが突き刺さった。

姿は燕尾服、いわゆる執事だ。女性だから男装執事といえるかもしれない。

「ん？どした？」

「紅茶を飲もうとしたら、取っ手が折れちゃった」

「マジか。不良品持ってきたのか？」

「なぜわざわざ不良品を持ってくるのかしら。それに食器の手入れは、貴方の仕事でしょう？」

「アタシの仕事はボディガードですよ。お嬢様」

わざとらしくお辞儀する入ってきた女性。

その姿を見て、額を押さえながらため息をつく”お嬢様”と呼ばれる女性。

「一応貴方は私の執事なのだけれど」

”一応”執事ですね。女ですが」

「『メイド服はやダヤダヤ！』と、小学生みたいに駄々をこねたのは誰かしら？」

「さ、さあ？誰だったかな〜？」

ピューピューと口笛を吹いて顔を逸らす、執事といわれる女性。

「映像流しましょうか？」

「あるのか?!」

「もちろん。永久保存版よ♪」

「よし。今すぐ私に提出しろ、お嬢様」

ポキポキと拳を鳴らしながら、顔を赤くして迫る執事（男装）。
対するお嬢様と呼ばれる女性は、手を振りながら”アハハ”と笑みを浮かべるだけ。

「まあそれは置いておくわ。それで、例の件はどうなったのかしら？」

「・・・チツ。第三位が福音を倒した所までは観測した。だが、その後AHS+アンチ・ハイパーセンサジャミングミサイルをやられた。しばらくアチラの子はわからん。偵察を向わせるなら話は別だけどな」

「わかったわ。とりあえず偵察は却下。アチラの無事を祈りましょう」

「ま、妥当な判断か。・・・ああ、それともう一つ」

「何かしら？」

「第二位が一度空域を離脱して、特異ケースを連れて再び空域に戻って来た・・・って情報がある」

「・・・そう。ちなみにどちら？」

「正体不明の乱入者だな」
アンノウン
イレギュラー

「へえ……。ちょうど、その人とは話してみたかったのよね」

「お？珍しいな。お前が男に興味を持つなんて。さては……。一目惚れか？」

「私の剣の錆びになりたいなら、今すぐしてもいいのよ？」

「遠慮しとく」

「そう。残念」

まったく残念に思っていないお嬢様といわれた女性は、立ち上がって、自分の身長の二倍はある窓まで移動し、すでに日が沈んだ空を見上げる。

「やっぱ……。あの名前のせいかな？」

「……。まあ、そうなるわね。貴方も気になるでしょう？」

「……………」

執事の女性は答えない。眼を瞑って腕を組むだけだ。

答えを聞く気は無かったかのように、お嬢様といわれる女性は言葉を紡いだ。

「――円卓の騎士最強にして長である『ランスロット』を・・・
自ら名乗る男性は」

そして女性は、机に広がるトランプの一枚――クラブのジャック
を、月が浮かぶ夜空へ放った。

[illegible]

「グ
ア
ツ
・
・
・
・
・
・
！」

二人を庇ったスザクは、代わりに『パーシヴァル』のランスが腹部に刺さる。

全身装甲の下では、苦悶の声と大量の血を出してしまっている。

「おや？これは儲けものだなあ！」

ルキアーノは想定外のラッキーに笑いながら、刺さっているランスにさらに力を加える。

「グッ・・・このお！」

さらに深々と腹部を進むランス。

内臓が抉られる激痛を我慢しながら、スザクは腰のハーケンを放つ。

「おっと」

ルキアーノは素早くランスを引き抜き、盾と合わせてハーケンを防御する。

「ッ・・・！くそっ・・・！！」

引き抜かれて大量に出る血を、スザクは手を当てて何とかしようとするが、血はどんどん流れ出る。

「スザクッ！」

「大丈夫！？」

その時すぐ後ろにいた二人が、スザクに駆け寄る。

「だ、大丈夫。まだ・・・・・・闘える」

「無茶よ！だって腹を・・・！」

近くで見て、改めてスザクの負った怪我に青ざめる二人。

「心配・・・ないよ。すぐに終わらせる」

純白の装甲は血によって赤く塗りつぶされていく。

それほどの出血だが、スザクは己の鋼の精神で何とか気丈に振舞う。

（《コアルミナスコーン》のおかげで、即死は免れた。だが一気にこちらが不利だ）

シールドバリアーを貫かれた。つまり絶対防御が発動したというのに、傷を負うほどの貫通力。

シールドエネルギーをごっそり削がれたし、二人を庇う力ももうないだろう。

さらに出血により、闘える時間も残り少ない。

「……………覚悟を決める……か」

「お、おいスザク。じょ、冗談はよせ。何を言ってるんだお前は」
ルルーシュが動揺しながらスザクの肩に手をかける。

「冗談じゃないさ。今から僕は奴を刺し違えてでも止める。二人はその隙に逃げてくれ」

「馬鹿な事を言うなっ！今のお前を残して行ける訳無いだろ！」

「ルルーシュの言う通りよ。だから一緒に闘った方が……！」

「————闘えるの？」

「「ッ!!」」

スザクの無情な一言が突き刺さる。

「確かに二人とも技量は凄い。だけど、殺し合いは出来ないでしょ？ 覚悟がまだ出来てない」

「そんなこと・・・！」

「ヴァングが彼に勝てなかった理由。わかっていないのか？」

「そ、それは・・・」

ヴァングは瞬時に”自分が弱かった”とは言えなかった。

なぜなら、実力自体は拮抗していたからだ。

自分と相手と同じぐらいの強さだったからこそ、ヴァングは長く戦闘ができた。

だというのに最終的にヴァングは負けた。それはなぜか？

「殺さないように手加減してた、だろ？」

「・・・・・・・・・・」

核心を突かれて、ヴァングは俯いてしまう。

「人殺しに躊躇いを持っている。なら今の君たちでは勝てない・・・
・まあ、それが普通なんだろうけどね・・・」

スザクの最後の小声は、二人に聞こえないほど小さい声で呟いた。

ルルーシュもヴァングも、今の言葉に抗う術を見出せず、ただ黙って俯くだけだった。

「納得したなら早くここから逃げて。長く持たせる保障は出来ない」腹部を押さえている手に、もう一本のMVSを呼び出す。《ヴァリス》は使わないので腰に保持してる。

「作戦は終わったか？」

わざわざ待っていたルキアーノはそう呟く。

「おかげさまで」

「では・・・続きといこうか！」

「その通りだ！」

「「スザク!!」」

ガギン！

後ろにいる二人に呼ばれたが、スザクは”二人のために”無視して突撃する。

そしてルキアーノのランスと、スザクのMVSが再びぶつかる。

「このお！」

スザクは足を振り上げてハイキック。ルキアーノは上半身を逸らしてかわす。

「甘いわぁ！」

そして頭部のスラッシュハーケンを射出。

スザクは冷静に、首を曲げてかわしたところで、腹部にルキアーノが蹴りを入れる。

「グッ！」

「無理は禁物だなぁ！」

怪我をした場所を蹴られたため、スザクの体は一瞬強張る。

その隙を見逃さず、ルキアーノは盾による打撃を繰り返す、それは『ランスロット』の頭部へ直撃。

「————その程度っ！」

「な————グワッ！」

殴られながらもスザクは、逆手に持ったMVSでルキアーノの盾を刺し、縦に切り裂く。

真っ二つになった盾は一瞬遅れて爆発し、その誘爆にルキアーノは巻き込まれる。

「このサルがあ！」

「それ以上喋るな！」

盾を失ったルキアーノだが、全く怯む様子もなく、右腕のランスで突撃を仕掛ける。

スザクは血の吹き出す腹部を放置し、MVSを両方とも順手に持つて構える。

「うらあ！」

「ハアッ！」

ガギイン！ ガギイン！

ランスとMVSを筆頭に、幾重にも幾重にも放たれる、斬撃、打撃、射撃の応酬。

ハイレベルな戦いは、見る者を圧倒させる。ルルーシュとヴァングも例外ではない。

「・・・なんて闘いだ」

「これが彼の言う・・・殺し合い・・・」

呆然と呟く二人。先ほどのスザクの言葉が痛いほど沁みた。

——確かにこの戦いは、自分たちでは割り込めない。

しかもそれが実力不足ではなく、自分の心の弱さだという事もあり、余計に苛立ってしまう。

しかし闘えないなら自分たちは不要。スザクが時間を稼ぐ間に、ここから逃げた方がいい。

だが――――

「できるわけ……ないだろ……！」

ルルーシュは絞り出すように言葉を放つ。

スザクは最初で善戦していたが、後半から不利になってきている。

なぜ？

簡単だ。二人を庇って怪我を負ったせいに決まっている。

そしてもし、その怪我のせいでスザクが負けてしまったら？

——もし、自分たちのせいで、スザクが死んでしまったら？

このことが、ルルーシュとヴァングをこの場に留まらせている。

「なんでよ・・・なんで私たちを・・・庇ったのよ・・・！！」

庇わなければこの戦いは、スザクの方が大いに有利だった。

戦場では自分が最優先。たとえ仲間が目の前でやられても、それを助けようとして、敵に背を向けてはとうしようもない。当たり前的事だろう。

だが、スザクはそうした。自分の身より他人の身を優先した。

この歳でも戦場を渡ってきた二人には、スザクのこの行動が理解できなかった。

「・・・・・・・・どうするべきなのかな。私たちは・・・」

「・・・・・・・・・・」

ルルーシュの言葉にヴァングは無言。答えが見つからないからだ。

ガギイン！

「クッ！」

「動きが鈍いなあ！」

突然の大きな金属音。

何事かと二人が向けた視線の先には、片方のMVSを落としてしまったスザクがいた。

「まだだっ！」

スザクは腕のハーケンを射出して、それをルキアーノがかわした所で、足刀蹴りを繰り返す。

「甘いわあ！」

ルキアーノはランスを打ちつける事によって、足刀蹴りを止める。

「甘いのはそちらだ！」

止められたのは予想通り、スザクは腕のハーケンを《メッサーモード》にして正拳突き。

ドゴンッ！

「ぐおっ!?!」

強烈なこのパンチは、ルキアーノの腹部にクリティカルヒット。
アチラは血を吐きながらスザクと距離を取る。

「はぁ・・・はぁ・・・ゴホゴホッ!・・・まだ倒れないか・・・
!」

少しでも気を抜けば吐血。腹部の鈍痛がスザクを苦しめる。

「チィ・・・!手負いでもその動きか・・・!」

陥没した腹部の装甲に手を当てながら、ルキアーノは舌打ちをする。

「そろそろゆっくりとしてられないか。決着をつけてやる」

「—————上等だ!」

ルキアーノの言葉に、瞬時加速と共にスザクは答えた。

「死ねええええええっ!!」

「うおおおおおおおっ!!」

そこから繰り広げられる戦いは、瞬時加速による超高速戦闘。

ぶつかったかと思えば、もう次の瞬間別の場所でぶつかっている。

両者互角の戦いかと思われたが、徐々に差が開き始めた。

「おらぁ！」

「ぐう！」

ルキアーノのランスの横薙ぎで吹き飛ばされるスザク。

すぐに体勢を立て直そうとするが――――

「ゴホッ！」

腹部の怪我のせいで、再び吐血をしてしまう。その隙を突こうとルキアーノは攻撃をする。

「くっ！」

それを何とかかわすスザクだが、状況はスザクの防戦一方だった。

（このままじゃあ負ける！・・・どうすれば・・・そうだ！）

何かを閃いたスザクは、改めてMVSを両手で握り締める。

「うおおおおおおおっ！！！」

そして突撃を仕掛ける。それをルキアーノはランスで対峙する。

「バカの、一つ覚えか？」

「黙れ！」

さらにMVSに力を入れて押す。そして《ルミナスコーン》にヒビが入る。

「なに！？」

「これで！！！」

「チィ！」

それを見た瞬間、ルキアーノはハーケンを撃ちながら距離を取る。

ルキアーノが距離を取ったとき、スザクも腕のハーケンを撃って牽制する。

（――これが一番確実な方法だ！）

そしてさっき撃ったハーケンで瞬時加速。ルキアーノの目の前へと移動する。

「なっ！」

「再び堕ちろ！吸血鬼！」

驚くルキアーノの右胸にMVSを突き刺す。それは装甲を貫き、中の人体も貫いた。

「ぐおおおおおっ!!」

右胸に剣が刺さったことで、ルキアーノが苦悶の叫び声を上げる。

「この——サルがあ!!」

痛みに耐えながら、ルキアーノはスザクの怪我を負った腹部に蹴りを入れる。

「ガハッ!」

「貴様が落ちろ!」

最後に空いている左手の拳で、スザクを海へと殴り飛ばす。

(これがもう限界……か)

最後の一撃に磨り減った全神経を集中しての、今のルキアーノの攻撃。

この二つで、スザクの力は力尽きていた。それこそ無抵抗で海へと落ちて行く。

「スザク!!」

そのとき、逃げろと言われたのに最後まで残ってくれた二人が見えた。

(ゴメン二人とも……. . . だけど……. . . ありがとう)

ボシヤアアンツ！

そしてスザク——『ランスロット』は落ちた衝撃と共に、黒く染
まる海へと沈んだ。

BLACK and WHITE（黒へ落ちた白き騎士）（後書き）

題名誤解した人いるかも。黒に落ちたはこういう意味ツス。

誤字脱字、感想があったらお願いします。

RETURN of FLEIA（その罪は決着の一撃）（前書き）

オリジナルなことが起きますね。

しかし久々に長い話書きました。なんと1万5千文字オーバー!!
疲れちゃったぜ。ちょっと話の展開も早かったし。しかしコイツを
書き上げれば、もうすぐIS三巻も終わり。

一応そこで、作者は一区切りしたいのですわ。だから色々と今回の
話はぶっちゃけてますよ。

最後に……………定期更新辛いかもですorz。

RETURN of FLEIA〈その罪は決着の一撃〉

———何をしているんだ私は。

「スザクっ!!」

傷ついたヴァングが、私に抱えられた状態で叫ぶ。

———私もできれば、叫びたかったかもしれない。

「・・・スザク・・・」

しかし私の口から出たのは、小さな呟き。そして落ちた騎士の名前。
黒く染まった海に、白き騎士が落ちて行く様を、ただ見てることしか出来なかった。

（なんで私の心は・・・こうも冷めているんだ・・・）

なぜ私は、いつもいつも肝心なときに、思った事を行動に移せないのか。

前のクラス対抗戦も、その後の学年タッグマッチリーグも、重要な場面でいつも私は傍観者。

ここに来る前に言ったスザクの一言。『宝の持ち腐れ』……まさに私の事だな。

（自ら傍観者を望んでるが……こんな時まで、私は何も手を出さないのか……！）

———苛立つ。

こんな自分に苛立つ。

仲間が倒れていく様を、見ているしかない自分に苛立つ。

ヴァングもスザクも闘ったというのに、まだ傍観者を望んでいる自分に苛立つ。

（”王の力は人を孤独にする”……か）

あの日、あの時、あの場所で、あの女性が言った事を思い出す。確かにそうかもしれない。

（それでも……私は……）

———死ぬ訳にはいかない。せめて、あの目的を果すまでは。

「ルルーシュ！スザクを助けに！」

「―――ああ。私はあの男を倒すから、お前が助けに行け」

「ええっ!? る、ルルーシュが!？」

異様に驚くヴァングをそこに捨て、スザクを海へ叩き落した男を見据える。

「枢木め・・・足掻いてくれたな」

スザクが最後の力で突き刺したMVS。それを強引に引き抜いて男は呟く。

私はソイツへ腕のハドロショットを放つ。

「っ！」

男は素早く察知してかわし、撃った射手である私のほうを見る。

「今度は貴様か」

「ああ。二人が闘って、私が闘わない訳には行かない」

「クックック・・・平行世界のゼロか・・・楽しませて貰おう」

怪しい笑いの後、何かを呟いたらしいが、生憎私の耳には入らなかった。

「ヴァング。早く行け」

「………わかった」

何か言いたげな表情だったが、ボロボロの状態のヴァングはスザクを助けに降下して行く。

そしてそれを、黙ってみているイレギュラー。

「……追わないのか？」

「ああ。落ちた騎士に用などない。次は貴様を殺すまでだ」

ヴァングとスザク。

この世界トップレベルの二人を相手にしても、まだ立っていられるのは正直驚嘆した。

それに私を倒す気にいる。事実、まだ私を倒せる可能性は残っているだろう。

だが――――

「貴様の勝利はありえない。今宵今夜この場所で、私が貴様を沈めてみせる」

これだけ大切なものを傷つけた相手に敗北しては、最強の騎士の名折れかもな。

（フッ……。普段ならこんなプライドなんて、持ち合わせてはいないんだが……）

今の私は珍しい好戦モードらしい。つまらないプライドさえも尊重してしまうほどの。

（まあ、それでもいいか。目の前の敵を倒せるなら）

もう、どうなってもいい。

何もかもどうなってもいい、そんな気分なんだから。

「言ってくれるな。人殺しも出来ない腑抜けた戦士が」

「何とでも言え。貴様の敗北は揺るがない」

私は片腕を天空———夜空に浮かぶ月へ向け、もう片手をイレギユラーに向ける。

「・・・何をする気だ？」

「後悔するなよ。お前は私の絶対^{なかま}守護領域を土足で踏み荒らした。ならば———」

———円卓の騎士の一人として、貴様を断罪し相応の代価を頂くことにした。

「我が命じる――」 絶対”が” 守護” する” 領域” を超えた力――」

もう、見てるだけというのはやめよう。

力があるなら振るうの覚悟を持ち、傍観者という言葉で逃げないように。

孤独という咎のせいで、大事な人達を失う前に。

自分の為に闘った親友と、他ならない、自分自身の為に。

「――ワンオフアビリティ―《完全支配領域》起動」

だから私は――自身の禁じ手である、最凶の能力を発動した。

「……………これが終わったら、彼に話を聞くべきかしら……」
と思ったが、終わったときの事を今考えてもしょうがない。

「今は目の前の事を……！」

そう意気込んだ私だが、『トリスタン』はPICが何とか発動して
る状態。

スラスターも武器もほとんど使用できない。出来るのは《メギドハ
ーケン》ぐらいだ。

だからゆっくりと降りて行くしかない。

「もう……！『トリスタン』！頑張つてよ！」

機体に叫んでも仕方ないと思うが、どうしても叫ばずにはいられな
い。

——————キイイイイン……………。

「？」

突然、耳鳴りのような違和感を感じる音が響いた。

「ま、まさか……………？」

心当たりのある私は、ルルーシュとイレギュラーがいるほうへ視線
を向ける。

「————ワンオフ・アビリティー《完全支配領域》発動」

————キイイイイン………。

ルルーシュの言葉と同時に、辺りに微かな耳鳴りのような音が響く。

「なんだ？」

しかしそれだけ。後は先ほどと何も変わっていない。

「虚仮脅しか！」

ルキアールはそう判断して、未だに動きを止めているルルーシュへ突撃する。

「————お前は私の支配下にある」

ガギイン！

ルキアーノのランスは、ルルーシュの赤い障壁によって止められる。

「やはりコレか。防御しかとりえの無い」

「そう思いたいのなら勝手にしろ。だが、このアビリティは《絶対守護領域》ではない」

ルルーシュは障壁を解除して、至近距離でハドロンショットを連射する。

それをルキアーノは、無数のハドロンショットをかわし、時にはランスで撃ち落してやり過ぎた。

「どうした？この程度か？」

「それはコチラのセリフだな」

「どういう————なっ!？」

ルルーシュの言葉に反応しようとしたとき、ルキアーノが驚愕の声を上げた。

当然だろう。

なぜなら、いきなり自分の周りが赤い障壁で埋まったのだから。

さしずめそれは、ルキアーノを閉じ込める赤い箱だ。

「確かにお前の言うとおり、《絶対守護領域》は強靱な障壁を展開する代わり、防御にしか使えない。まあ体当たりと言う方法はあるがな」

リーグマツチのときシャルロットにやったな、とルルーシュは呟く。

「だがこの《完全支配領域》は、一定範囲内の好きな場所に《絶対守護領域》を展開できる。形状も自由自在だ。今のお前のように。ちなみにその箱の名は《完全隔離》^{バンドラのはこ}だ」

長い腕でルキアーノを指差すルルーシュ。しかしルキアーノは不敵に微笑むだけ。

「クックック。面白いシステムだな。だが――――」

自身を閉じ込めた赤い障壁に、ルキアーノはランスを打ち付ける。

「この程度で私を拘束できるわけがない」

数回叩きつけた後、ランスを引いて突き通す。

バリイイイイン！

ランスがルルーシュの張った赤い障壁を貫き、亀裂が全体に回って碎けた。

「ふむ。案外もろいものだな」

「・・・・・・・・・・だろうな」

内心舌打ちをしながら、ルキアーノの言葉に賛同するルルーシュ。

（チッ、わかっていたがここまでとは・・・・・・・・・《完全支配領域》のデメリットその一か）

そう。一定範囲内を完全に支配下に置く、一見最強のシステムも弱点は多々ある。

まず一つ目は。

「うらぁ！」

「チィ！」

ルキアーノの瞬時加速による攻撃を、ルルーシュは赤い障壁を前面に張って防ぐ。

「よく防げてるじゃないか！」

「チッ・・・・・・・・！これは《絶対守護領域》だからな！」

この《完全支配領域》————一定の範囲内に《絶対守護領域》を展開するのだから、大量のエネルギー消費は避けられない。ルルーシュは少しでもそれを楽にしようと、《完全支配領域》のエネルギーを抑えて使っている。

だから”一応”ワンオフ・アビリティーは安定して使えるが、エネルギーを節約しているため、その強度は《絶対守護領域》時の約十分の一下。

それでも《ヴァリス》のバーストモードの直撃には余裕で耐えられるが、脆い事には変わらない。

これが《完全支配領域》の弱点その一だ。

そして二つ目は――――

「―――くあっ！・・・くそっ！！」

闘ってる最中、急にルルーシュが頭を押さえて呻き声を上げる。

「おや？頭でも痛いのかあ？」

ルキアーノはランスによる連続突きをしながら、突然の呻き声を攻撃によって指摘する。

「っ？！――――だ、黙れっ！！」

核心を突かれたルルーシュは、一瞬驚くがすぐにハドロシヨットを撃つ。

「何をムキになって否定してるんだ？」

「黙れと―――いつてるだろ！」

ルルーシュはどうしても気丈に振舞わなければいけなかった。なぜなら、それが《完全支配領域》の弱点その二を悟らせてしまう

からだ。

まず元々《絶対守護領域》は、展開配置計算や周辺環境演算や誤差修正など、常に頭の中で計算しながらでない并使用できない。だが常人ならこれを戦闘中に計算するなど不可能。

でもルルーシュは戦闘に支障が出ないほど、このシステムを使いこなしている。

しかし《完全支配領域》となると話は別。

この《完全支配領域》はISが自己判断し、《絶対守護領域》を基盤に発展したもの。なので操作方法自体に大した差はない。だが縦者の負担は倍以上となった。

《完全支配領域》はいわば”《絶対守護領域》を一定範囲内で自由に展開する”ものだ。つまり《絶対守護領域》を複数扱っているのと同じこと。

ただでさえ莫大な計算をしなければならないのに、それを同時に複数運用するのだから、いくらルルーシュでも頭がパンクするほどの情報量だ。しかも情報は常に頭の中に流れ込むので、いやでも自分で捌かなければいけない。

だからこれを使うときは、ほぼ常に頭痛が走って、知恵熱というものも発生する。さらに長く使いすぎると、最終的には脳の機能が一時麻痺してしまう。

最悪の場合、脳死も考えられる。

これが、ルルーシュがワンオフ・アビリティを『禁じ手』としている理由だ。

「————ぐっ！ま、まだまだ！！」

痛みに呻きながら、《完全支配領域》による障壁を作り出す。ただしその形は普通ではない。

「そんなこともできるとはなあ！」

「黙れ！————支配変化《完全孤独》ひとりのいたみ！」

その言葉と共に、蜃気楼を包む障壁全体に針状の棘が形成されていく。

まるで丸まったハリネズミのような、ハリセンボンの威嚇状態と同じような形状だ。

これは”攻撃形態”の《完全支配領域》と言う事だろう。もしこの状態で体当たりをしたら、『パーシヴァル』はたちまち蜂の巣となってしまう。

「これで終わらせる・・・！」

「やれるのかあ！？貴様が！！」

ルキアーノはルルーシュの障壁に臆することなく、ランスを突き出して突撃を仕掛ける。

それを見たルルーシュは、この状態で瞬時加速へ入る。

「これでっ！！」

「————めでたい奴だなあ!!」

バギイイイン!!

「なにっ!？」

ルキアーノのランスは、ルルーシュの障壁に当たった瞬間、衝撃に耐え切れず砕け散った。対するルルーシュの障壁は、何一つの傷も無い。

「確かにこれは防御しかとりえが無い……だがそれ故に、強度は世界トップレベルを誇る」

そしてルキアーノを《完全支配領域》で作った、障壁で作ったあの箱に閉じ込める。

「またこれか!」

「安心しろ。もう————終わる」

その言葉と共に、蜃気楼の胸部が稼動して、そこから砲身を覗かせる。

「《拡散構造相転移砲》……名称はどうでもいいか」

胸部の砲身——《拡散構造相転移砲》に、紫色のエネルギーが徐々に集まって行く。

「チィ！」

「もう逃げ場は無い。そして私は————お前を生かす気も無い」

その言葉は本心であるということとは、通常ではありえないほどのエネルギー収束をされている《拡散構造相転移砲》が告げている。

「この——サルがあ——！」

ルキアーノはランスを再構築し、ハドロショットと共に障壁を攻撃するが、壊れる様子は無い。

「もう出し惜しみはしていない。その障壁は《絶対守護領域》と同レベルの強度だ」

エネルギーを大量消費して得る、ISとしての次元を越えた防御力。決着がつくというのなら、エネルギーを節約する理由も無い。

「————終わりだ」

ルキアーノを囲む障壁を一部解除し、そこへ最大出力の《拡散構造相転移砲》を放つ。

ドゥウウウウンッ！！

凄まじい轟音は、ルキアーノを囲んだ《絶対守護領域》に衝突して

鳴り響く。

「・・・・・・・・《完全支配領域》・・・・解除」

—————キイイイイン・・・・・・・・。

辺りに耳鳴りのような金属音が響く。

衝撃による爆発でルキアーノは視認できないが、すでに限界を超えそうな脳のために、ルルーシュはワンオフ・アビリティーをやむなく解除する。

「ぐあっ・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・っ」

能力の代償である激しい頭痛に耐えながら、ルルーシュは麻痺寸前の脳を働かせる。

（やったか・・・・・・・・爆発が起ころうと言う事は、当たったことは間違いない。だが、ジャミングを使ってるからか、奴の生死は確認できない）

もつとも、奴がこの程度で死ぬ訳はない。

”客観的に想像し、主観的に行動しなさい。”

ルルーシュはとある人物の言葉を思い出した。確かに的を獲てるな

と微笑を浮かべる。

「・・・ふむ。どうやら貴様を甘く見ていたようだ」

「っ!?!」

ルルーシュは心臓が飛び出るかぐらい驚いて、咄嗟にその場で”振り返る”。

その瞬間、ルルーシュの頭部にスラッシュハーケンが飛来し、それは蜃気楼の装甲を抉る。

「グアっ!!」

その攻撃で隙が出来たところで、背後からルルーシュの首は掴まれる。

「グ・・・・・・ッ!!」

「油断したなあ！」

ルキアーノはルルーシュを掴んだまま、ランスを掲げる。

確かにルルーシュは、イレギュラーが生きていると思ってはいたが、まさか”背後を取られてる”とは思わなかった。

「くそっ・・・やはり死んでないか・・・」

「流石に肝を冷やしたがな。しかし撃つ瞬間に障壁が解除されただろう? 私はその一瞬で今のは避けられる。もっとも、無傷とはい

かなかったが」

頼んでもいない解説をしながら、ルキアーノはルルーシュと向き合う。

その装甲には右肩と右足に損傷が見られる。確かにルキアーノは無傷でかわせてはいなかった。しかし、あの一撃がその程度の損傷で済んでいるという事実は、ルルーシュを驚かせる。

「・・・この、化け物め」

「その通り。私は吸血鬼だ」

ルルーシュの苦し紛れの愚痴に、ルキアーノは大層真面目に答える。

「よく頑張ったと褒めてやろう。しかしこれが現実だ」

そう言ってランスで蜃気楼の装甲を抉る。

胸部分と左肩の装甲が吹き飛ばされるが、ルキアーノのランスは人体を傷つけていない。

「・・・・・・・・殺せ。敗者は吼えない」

何を躊躇ったかは知らないが、命乞いをする気の無いルルーシュは、負けを認める。

「私もできればそうしたいが、貴様を殺してはならないという事を思い出してな。逆らうと後々面倒となる・・・不本意だが貴様は殺さんよ」

「・・・・・・・・・・？」

（私を殺すなど命令？どこの誰だその物好きは・・・）

ルルーシュは、自分の価値など少し頭のいい女子高校生程度としか思っていない。過小評価にも程があるが、スザク同様ルルーシュも鈍さで定評があるらしい。

「さて、反抗する気も無いか。連れて来いとも言われていたな」

「・・・・・・・・・・」

ルキアーノの言葉にルルーシュは無言。それは肯定の意思を表した。

（悪い二人とも・・・・・・・・・・。倒すことは、できなかった・・・）

覚悟を決めたと思ったのに、また手加減をしてしまった。

やはり自分はまだ非情になりきれない。攻撃するときも人を殺す気にはなれなかった。

仲間がやられたというのに、敵に容赦する自分は、おかしくて冷たい奴なのだろうか？

「だがいざ”殺せばいい”と言われたところで、私は首を縦に振ることは出来ない。」

人を殺すだけの、それだけの覚悟がまだ、出来ていなかった。

覚悟のある者となない者の差。それが私の敗因。

（やはり私は・・・”孤独”からは逃れられないのか・・・）

イレギュラーは、己の運命と背負った咎に負けた私を連れて、この場を離脱しようとする。

「その血塗れた手を離せ。死にぞこないの吸血鬼」

不意に――――そんな声がこの場に響いた。

「血塗れてるのは貴様も同じだろう。まだ足掻くか裏切りの騎士」

ルキアーノはルルーシュを掴んでいる手を離して、己の背後にいる者に向き合う。

「僕には足掻く理由がある。まだ棺桶で眠るつもりは無い」

「ほう、おもしろい。ならばその理由とやらを散らせてやろう」

ルキアーノは、自信の右腕にあるランスを構える。

「————はぁ!!」

そして瞬時加速をして、ルキアーノはランスを突き放つ。

「それぐらい!」

しかしそのランスは蹴りで軌道をそらされ、そのままルキアーノは通り過ぎる。

「ルルーシュ!」

それを見送り、突然の乱入に呆然としているルルーシュの下へと向う。

「お、お前・・・!」

「君は充分頑張った。もう大丈夫————後は僕に任せてくれ」

そう言って乱入者————スザクは、全身装甲の下で微笑みを浮かべた。

[illegible]

これは少し時を巻き戻したほうが良さそうだ。

――――落ちた。

ルキアーノの攻撃で落とされた僕は、夜空にポツンと浮かぶ満月と、波打つ黒に染まる海面を見ながら、沈んで行く。

落ちた衝撃はISが肩代わりしてくれたが、すでに『ランスロット』は、装甲を保つぐらいの力しかないし、腹部から流れ出る血は、冗談というレベルを軽く超えてる。

（死ぬのか・・・僕は）

もうどうしようもない。

死ぬのは怖いが、諦めと言う気持ちが恐怖より勝っている。

最後に一矢報いたから、後はあの二人が頑張ってくれるだろう。

どうやら”ギアスの呪縛”も自動発動しているが、行えない誓約は果せない。

———せめて、カレンにバグの事を教えないと……。

（力尽きた僕には無理なことか……）

もつとも最後の一撃は、『パーシヴァル』の左胸も狙えたんだけどな。

最後に左胸を刺せなかったのは、僕自身の甘さなんだろう。

彼女達に、人の死を見せなくなかった。

人の死は、人生の中でいつかは当たる壁だろうけど、何も今当たることはない。

奴を殺して僕が生きると言う選択肢が、無意識のうち僕の中から消えていた。

———死ぬ今となつては、後の祭りか。

もう眼も開けられない。それに……酷く眠い……。

———本当にいいんですか？

その時、睡魔の襲う頭の中で、幻聴ではない確かな声が響いた。

女性とも男性とも、子供とも大人ともとれない、不思議な声だった。

………君は……誰……？

いや違う———僕はこの声が誰だか知っている。

———本当に、いいんですか？

いいって……何が………？

———諦めてしまって、いいんですか？

いいものにも・・・できることはないじゃないか・・・。

――残った問題を彼女達に押し付けて、自分は逃げるつもりですか？

・・・そうは言っていない。それに、彼女達なら大丈夫さ・・・。

――貴方は、それで満足ですか？

・・・未練が無いといったら嘘になる・・・けれど・・・。

———なら、なぜ諦めるのですか？生きる理由があるというのに。

・・・大量殺人鬼が抱いていい、未練じゃないさ。

———しかし貴方は、世界を救った英雄でもあるんですよ？

・ ・ ・ ・ ・ 僕は、僕自身を英雄とは思っていない。僕は汚れすぎてる。

―――それでもです。誰がなんと言おうと、理由があるなら生きなければいけません。

・ ・ ・ ・ ・ 随分強引な理屈だ。

———ですが理由があるのに、自ら死ぬというのはおかしいでしょう？

………そうかもしれないな。

———貴方は気づいている。これから生きる理由とその術を。ただ、見ようとしていない。

………僕にまた……あの力を使えというのか……。

――罪から逃げるのは、貴方らしくないじゃありませんか。
立ち向かってこそ貴方です。

・ ・ ・ ・ ・ わかってる。逃げたから解決する事じゃない。また ・ ・
・ 立ち向かうさ。

――なら、もう私の言葉は不要でしょう。

・ ・ ・ ・ ・ ああ。わかったよ、さすがに君の言うとおりだ。

———当たり前です。伊達や酔狂で貴方を見てきたわけじゃありませんから。

………ありがとう。そしてこれからも、僕の盾となり矛となつてくれるかい？

———私を振るう覚悟と力があるのなら、喜んで忠誠を誓いましょう。

・・・心外だね。君を振るう覚悟なんてとうの昔に出来るよ。

——ならばもう、理由があるのに諦めないでくださいね？

はいはい・・・わかってるって。もう、大丈夫だから。

——私は今までも・・・そしてこれからも、貴方の事をずっと・・・見ていますから。

ああ・・・” ありがとう” ———そして” また” よろしく———
— 『僕の相棒』 ———

” ワンオフ・アビリティー 《コードギアス旋律誓約》 発動”

ワンオフ・アビリティ二度目の発動を確認。最終決戦武装を解除^{アン}。
ロック承認。

オペレーション《Field Limitary Effective Implosion Armament》シークエンス起動。

損傷した機体装甲を再構築。

エネルギー不足のため、全身装甲は最低限の強度で再構築。

《ギアスの呪縛》の効果を使用、腹部の損傷細胞の再生を開始・・・
・・・終了。

《フロートユニット》へエネルギーを転換、PIC最大出力。

エネルギーを確保するため、全武装を解除。

その後《ヴァリス》を単独で構築。

《ヴァリス》の形状を変化させ再構築、銃身を巨大化、バレルアクション起動。

Field Limitary Effective Implosion
Armament——FLIEAを《ヴァリス》へ
搭載。

全システムオールグリーン、『ヴァリス・オペレーションF.L.
E.I.A』稼動。

『ランスロット・コンクエスター』セット完了。

[illegible]

海から這い上がってきた僕は、後ろにルルーシュを控えながら、再びルキアーノと向き合う。

「落した騎士が私の前に立つとはな」

「悪いが、下から這い上がるのは慣れてるんだ」

「クツクツク、ちがいないな」

と言つて、ルキアーノは変な笑い声を上げる。

「だが、貴様の武器はもはやそれだけか？」

その視線は、僕の手に持たれた《ヴァリス》………を基盤に変化した銃が握られている。

「————これで充分だ」

この銃は最終手段であり僕の罪の一つ。これが不明だった『???』の正体だ。

名を『ヴァリス・オペレーションF・L・E・I・A』というらしい。

「………罪に向き合ってこそ、前に進める……か」

実は、この結果は前々から予想はついていた。

このIS『ランスロット』は、元の世界の『ランスロット』の兵装に酷似している。つまり元の世界の『ランスロット』の武装が、このISの武装と言う事になる。

ならば今まで出ていない、『ランスロット』の武装と言うのは、消去法でこの力になる。

本来ならもう二度と、この銃を————この力を使おうとは思っていないかった。

（何の皮肉かなコレは……）

僕の脳裏にはあの時の————トウキョウ決戦の光景が浮かび上がる。

あの時は自分の意思で撃った訳ではない。だが自分がしたことであることには変わりはない。

己の手にある銃を、己の手で引き金を引いたのなら、事故で済む問題ではない。

だが今の僕には、もうこれしか残っていないんだ。

自分がしなければルキアーノは二人を攻撃する。今の二人で彼に勝つことは難しい。

しかしもし、それに抵抗した二人の攻撃でルキアーノが死ねば、二人は人殺しという咎を一生背負ってしまうことになる。

いつかは経験するかもしれないが、それだけでも避けたかった。

だから僕は今、この世界の仲間を守るために、この背負う十字架つみを振るう。

汚れた咎を背負うのは、すでに汚れてしまった僕一人で・・・充分だ。

諺ではこれを、毒をもって毒を制すと言うのだろう。

そして親友はこういうだろう・・・『悪を持って己が正義を貫く』と。

これは彼が言っていた言葉だ。『正義で倒せない悪がいた場合、貴様ならどうする?』と言う問いに対する答え。

「相棒」……君のおかげで、僕はまた前を向けるようになった」

ただの独り言。でも本当にその通りだから、言わせてほしい。

一歩前に踏み出した者が、タダで済むはずがない。どう足掻こうと必ず汚れる。

ならどんなに嘆いても、それから逃げるのは無意味。ましてや留まる事などできはしない。

だから僕は立ち向かう——そしてこの罪を振るい——

「悪と言う名の正義を持って、今ここで僕は貴方を沈めよう」

「す、スザ……ク……?」

後ろに控えているルルーシュが、”お前は何を言っている?” みたいな声を出す。

胸部から左肩の装甲が抉れて、さらに頭部の装甲は一部陥没して、そこからルルーシュの顔が見える。アメジストのようにキレイな紫の瞳が僕を捉え、怪我をしたのか頭部から血を流してるの見える。

「ルルーシュ。この空域から離脱してくれ」

「・・・・・・・・・・は？」

「もう一度言うよ。この場から逃げてくれ、巻き込まれないために」

「そ、そんなこと————」

「今の君がいたら足手まといなんだ。ここにいっても邪魔でしかない。下にヴァングがいるから、つれて逃げてくれ」

「ッ!！」

僕の言葉でルルーシュは目を見開き、ショックと凶星を受けたような表情をする。

————許してくれとは言わない。だけどゴメン、心の中で謝っておくよ。

正直に言えば、ルルーシュがいてくれれば確実に彼を仕留めれる。だが、それは彼女をフレイアに巻き込んでしまう。

守るために闘うのに、彼女達を巻き込んでしまっただけは意味が無い。

（だけど死ぬ気は無いから、安心してくれ）

「だ、だが————」

「足手まといだと言ってるだろ!! 人を殺せないならこの場に留まる意味は無い!!」

普段なら絶対出さない音量で、ルルーシュを拒絶する。

どうしても、彼女達を巻き込む訳には行かない。

そのためなら僕は、悪魔にでも死神にでもなるよ。

「っ……だがお前、腹に傷を！」

「治った。だから何も気にしないでいい。逃げてくれ」

正直、僕もなんでは知らないが、腹部の傷はキレイに塞がってる。まあ痛みは残ってるが。

「……え？な、治った？」

「いつまでここに居る気なんだ。早く逃げてくれないと闘えない」

「くっ………蟹気………楼……」

彼女は自身の機体の名を呼び、僕に背を向けてそのままヴァングを回収しに行く。

彼女の僕に対する言葉はなかった。それでいい、帰ったらいくらでも愚痴を聞くと。

「やっと思ってくれたか……」

「話は終わったか？」

空気を読んでくれたのか、ルキアーノが今更話しかけてくる。

「ああ、貴方も空気は読めるようで安心した」

「その銃を持っているのなら、迂闊な行動は禁物だからだ」

その言葉で思わず苦笑してしまう。ただフレイアを警戒していただけか。

「早い話、それを私に当てれば貴様の勝ち。その前にそれを手放したら、私の勝ちか」

「そうなるな」

僕の機体の武装は、すでにフレイア以外無い。《ブレイズルミナス》は使えるが、シールドエネルギーの残量の関係で、使えるのは後一回ぐらいだろう。

対するルキアーノも、機体の装甲はボロボロ。武装はスラッシュハーケンとランス、そしてハドロショット。しかしそろそろエネルギー切れを考えてもいいだろう。

「決着をつける！」

「同感だなあ！」

僕は銃を腰にしまい、右足に《ブレイズルミナス》を形成して、瞬時加速。

ルキアーノはあえて瞬時加速をせず、ランスを突き出して迎え撃つ。

「はあ！！」

何度もやってる、左足でランスの腹を蹴って軌道を逸らす。

「バカの一つ覚えが！」

「ッ！！」

しかしルキアーノは予想して、蹴られたランスで僕を殴り飛ばす。

「それぐらいでっ！！」

再び僕は、最後の力で張った足の《ブレイズルミナス》で足刀蹴りを繰り返す。

「甘いわぁ！！」

ルキアーノはランスを突き出して、僕の足刀蹴りと衝突した。

その威力はほぼ同格で、僕とルキアーノは互いに衝突した反動で離れる。

「貴様はその銃を放つ覚悟があるのか！？」

「理由がある限り、最後まで足掻く！」・・・それが僕の誓約だ
！！」

「それがこの世界を壊すということだとしてもか！？」

「だからこそ僕はこの罪を振るう！・・・世界を救った英雄・・・
いや、たった一人の盟友の騎士として！」

「貴様の存在自体が世界を滅ぼすのだ!!」

「黙れ!! 世界を滅ぼすのが目的の貴方に、そんな事を言われる筋合いはない!!」

瞬時加速をして突撃するルキアーノを、もはや唯一の武器である、右足の《ブレイズルミナス》によって迎え撃つ。

そこから蹴りとランスだけの接近戦が繰り広げられる。その攻防はほぼ互角。

「うらあ!!」

「このお!!」

激しい接近戦、蹴りとランスの応酬。しかしその最中、突如”虹色のレーザー”が放たれた。

「何っ!？」

「これはっ!!」

それは僕らの間を割り込むように通り過ぎ、ルキアーノと僕を強引に離れさせた。

「————ダメよスザク!! 何してるのよ!!」

この声は……ヴァングか。その姿はボロボロの『トリスタン』だ。おそらく『トリスタン』の武装である、ハーケンを合体さ

せて撃つ《ハドロンスピア》だろう。

ルルーシュに抱えられた彼女は、傷ついた姿でも僕を止めようと声を荒げる。

「ルルーシュから聞いてないのか。巻き込まれる前に逃げてくれ」

「貴方を置いて逃げるなんて出来るわけ無いじゃない!!」

「今勝てる可能性があるのは僕だけだ。君がいたところで何もできない」

「それは……でも貴方は刺し違える気なんでしょう!？」

「……なんで自分から相打ちを狙うのさ」

あきれたように肩を竦めながら、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしているヴァング達に告げる。

「……え?それって……?」

「約束する。生きて帰ったら、愚痴でも何でも聞いてあげるから」

そして僕はルキアーノへ瞬時加速、そして二人から遠ざけるべく、ルキアーノを力の限り押し出す。

「ぐおおおおおっ?!」

「はあああああっ!!」

「スザク!!」

僕へ叫ぶヴァングの声が、どんどん小さくなっていく。そりゃあれだけ速く離れてるから当然か。

出来るだけ離れたと思った瞬間、ルキアーノの蹴りが僕に当たり、距離を取られる。

「ふん、甘いな。奴らを巻き込まないために離れたのか」

「生きて帰ると約束したのに、迎える人がいないのは嫌だから」

「戯言を。平行世界のゼロ共に情でも移ったか」

「人として、友達として、仲間として助けようと思うのは、いけないことなのか？」

「それが貴様で無ければな。この世界はもう狂い始めている、貴様と言うイレギュラーによって」

「・・・上等だ。ならば後戻りはしない。この世界を貴方達の好きになど、させるものか」

—————きつとここが、僕にとっての後戻り不可能地点ワンポイント・ノーリターンだろう。

僕は《ヴァリス》を腰から手に持って、上空へ飛び上がり、ルキアーノの真上まで移動する。

「これで決着をつけてみせる!!」

「おもしろい! やってみるがいい!!」

ルキアーノはランスを僕の方に向け、突撃の構えを見せる。

僕は、ルキアーノへ正面から突っ込む。

「うおおおおおおおおおっ!!」

「突っ込むだけか!」

アチラのハドロショットが僕の装甲をを削る。しかし決して止まらない。

「はあっ!!」

そして目の前に来たとき、足の《ブレイズルミナス》によって蹴りを放つ。

「甘いわぁ!!」

それはルキアーノの、突撃したランスによって阻まれ、ルキアーノのランスと共に碎けた。

「これでえ!!」

ルキアーノは頭部のスラッシュハーケンを僕の頭へ撃つ。それは直撃したが、僕はそれを素手で掴んでルキアーノを捕まえる。

「グッ————これで終わりだっ!!」

「っ!!」

そして奴の腹部へ《ヴァリス》の銃口を向け、その引き金を引いた。

「まだだぁ!!」

「なっ————」

しかしルキアーノは、フレイアが当たる寸前に人体ではありえない動きで、体を捻ってかわす。

「まさか————」

「貴様も終わりだぁ!!」

外したフレイアは、そのまま海上へ進み空中で光りながら止まる。

（フレイアが爆発するまで、まだ時間はある!）

外れたからと言って、まだ全てが終わった訳ではない!!

「————言った筈だ!!最後まで僕は足掻くと!!」

奥の手《ギアスの呪縛》を発動、ルキアーノのパンチを寸前で掴む。

「これなら————」

《コンクエスターユニット》を展開し、後ろに付けられた《フロー

トユニット》を着脱。

「貴様っ!!」

「—————どうだああああああっ!!」

その場で前転して、かかと落としの要領で《フロートユニット》を前へ蹴り飛ばす。

「ぐあっ!!」

それは『パーシヴァル』の腹部に直撃し、ルキアーノをフレイアの場所まで突き落とす。

その瞬間—————フレイアの緋色の光は一層濃くなった。

（爆発まであと何秒だろうか・・・）

飛ぶことの出来なくなった『ランスロット』は、ルキアーノと共にフレイアの爆発から逃れられないだろう。

（絶対防御に賭けるしかないか・・・）

PICが無いので、地球の重力に逆らうことなく、僕は海————フレイアの下へ落ちて行く。

「スザク!!ダメ!!」

しかし————僕を呼ぶ声が意識を覚醒させる。

二人は急停止し、振り返って逃げるのか………
思いきや。

「スザクは!？」

「そんな事!」

「スザクッ!!」

「待てヴァング!!」

僕の事に気付いたのか、ヴァングは《ハドロンスピアー》を背後に放って、その反動でこちらに向ってくる。

ルルーシュもヴァングを追いかけるため、その後を追ってしまった。

「くそっ!!」
《絶対守護》………
「」

「キャアアアアアア」………
「」

「ぐおおおおお——………!!」
「ああああああああ——………」
「………!!」

だが無情にも運命
らを包み込んだ。

放たれた緋色の球体は、
容赦なく僕

後に残るのは、”美”しく”戦”を終わらせた”女神”の爪痕と――
――この場の静寂だけだった。

X X X X X X X X X X X X X X X X
X X X X X X X X X X X X X X X X

「わぁお。すごい熱量。米軍の核ミサイルよりもあるかも。よく搭載したね」

動乱の中心人物の一人、うさ耳カチューシャは、あの戦いを静かに見守っていた。

「紅椿の戦闘はできなかったけど……こんなにいいもの見れたし、引分イーブンかな？」

崖に腰を下ろすうさ耳カチューシャは、持っているモニターの画面を消す。

「アチラが結構いいジャミングを使ったおかげで、この私でも音声の傍受は出来なかったけど、まあそこまで気にすることじゃないよねっ」

そんな独り言を言った後立ち上がり、眼下に広がる海へ背を向ける。

「……『有史以来、時代を変えるのはいつだって弱者の覚悟だ』……か。まるで自分が時代を変えたような言い草だね、枢木スザク。百姓一揆でも起こしたのかな」

”でもその理論で行くと、かつては私も弱者だったのかな？”と考
える。

「まあ私は過去の強者のような末路は御免だけどね」

プロジェクター付き小型モニターを手で弄びながら、一人愚痴るう
さ耳カチューシャ。

「だけど彼が危険なのに変わりは無い……。あの機体も彼女の情
報を使っている————」

そう言って、うさ耳カチューシャは欠伸をしながら、夜空に浮かぶ
月に背を向け歩き出す。

「若くて邪魔な芽は、早めに摘んでおいた方がいいかもね．．．」

RETURN of FLEIAとその罪は決着の一撃（後書き）

蜃気楼の戦闘描写って超難しい・・・やりなれない。

ルキアーノのキャラが書けない〜〜！オワタ〜〜！！

※終盤で出たフレイアを撃った《ヴァリス》は、劇中でランスロットが持っていたフレイア銃と同じ形状ですので。一応言っておきます。

誤字脱字、感想があったらお願いします。

BELIEVE and TRUST ～一難去ってまた一難～ (前書き)

遅れちまったぜ・・・。高校は忙しいなあ・・・。

BELIEVE and TRUST 一難去ってまた一難

――これは契約――

ふざけるな……。

――貴方に力を与える……その代わりに、私の願いを一つ叶えてほしい――

ふざけるな……誰が力をほしいなどと言った!! 　　こんな! 　　こんな呪いの力など!!

――弱さを罪と言ったのは貴方。それは強さを望んでいると同義

なにが力をやるだ。貴様が私を縛るためだけに与えただけだろ！

——力を手に入れて、それを持って復讐者になったのは貴方のはず——

貴様さえ・・・・・・・・貴様さえ、私の前に現れなければ！！

——私が貴方の前に現れるのは、もはや必然。人々の意思、全ての運命、この世の理——

それこそふざけるな！私の道は私が決める！貴様に指図される筋合
いは無い！！

―――” 王の力は人を孤独にする。それを知ったとき、お前はど
うする？”―――

[illegible]

「・・・・・・・・うう・・・・・・・・？」

突然、私はベットから起きた・・・・・・・・・・は？

「ベットで寝た覚えは無い・・・・・・・・というより・・・・どうなってるんだ・・・・・・・・？」

見たことも無い豪勢な部屋。

広々としたスペースに、豪華な装飾を惜しみなく使われ、どこぞの外国人が作ったであろうアンティーク家具は、素人目でも高貴さを感じさせる物ばかり。

そんな金持ちの部屋の真ん中に置かれた、おとぎ話に出てきそうな天蓋付きのベット。そこで私は寝ているらしい。

「・・・・・・・・どこだここは？」

とりあえず率直な疑問を口にしてみる。

（思い出せ・・・・・・・・私が何故ここにいいのか・・・確か・・・）

臨海学校中に、福音の暴走事件が起きて、ヴァングが鎮圧して、イレギュラーが現れて、私たちがやられたところにスザクが来て、それでアイツが何かを撃って――――

「そうだ！　そしてあの爆発に巻き込まれて―――！」

蜃気楼の《絶対守護領域》を張ったが、それでも耐えられなくてそのまま気を失った。

「痛っ・・・・・・・・って、手当てがしてある」

私の姿は黒と金のISスーツ。これは出撃時にきていたものだ。そのスーツは所々がコゲたように汚れていて、腹の部分は無残で大胆に破れていて、湿布の張られた白肌を覗かせている。

頭に痛みが走ったとき、頭に包帯が巻かれていることに気付いた。それに腹部や足にも湿布やら包帯やら巻かれている。誰かに手当をしてもらったと思っていだろうか。

普通の部屋には不釣合いな窓の外空は、夜が明けそうで朝日が昇る少し手前、いわれる未明と呼ばれる時か。

（確か・・・・・・・・私が旅館を出たのは夕方、戦いの時間を合わせて21時ぐらいが相場だろう）

どうやら長い間・・・・・・・・いや普通に睡眠をとっていたらしいな。

今の自分の状況を冷静に分析してみる。こういうときでも取り乱さない私の精神は、はたして異常なのだろうか。

「とりあえず・・・・・・・・つう！」

激痛をどうにか我慢しながら、ベットを降りて立ち上がる。チャリッと胸のペンダントが揺れる。

「ISは・・・・・・・・ダメか」

首元にある、金のチェーンに黒の宝石をあしらったペンダントを見

る。

見た目が変わらないから大丈夫かと思ったが、空中ディスプレイを表示したとき、機能が完全にイカれていた。これはダメージレベルって問題じゃないな・・・あの威力は洒落になってない。

「一度、改めて作り直すしかないだろ・・・コレは」

だがコアが無事なら、大体の位置はわかってもらえるだろう。いずれ助けは来る。

「・・・・・・・・おとなしく待つべき、か」

これからの事を考えながら、フラフラと足を引きずりながら部屋の扉へと向う。

「二人はどこに・・・・・・・・ここにいるのだろうか・・・」

とりあえず、会ったらスザクを一発殴ってやる。散々言いたい放題言ってくれたからな・・・。

「殴ってやるから・・・・・・・・死んだら許さないぞ・・・！」

最悪のビジョンを思い浮かんだ瞬間・・・目にゴミが入って涙目になったが、私は進んだ。

「あら、起きたのね」

「っ!？」

突然の声に心筋梗塞しそうなぐらい驚いて、いつかのイレギュラーの時の様に私は振り返る。

「っ！ お、お前は・・・・・・・・!!」

「おはよう・・・・というのにはちよつと早いかもね」

といって、この部屋の主らしい女性・・・・・・・・できれば会いたくない眼帯女が、そこにいた。
ソイツは木の机で、トランプを広げながら紅茶を飲んでいる。

「とりあえず、座りなさい——————色々話すから」

「・・・・ああ。コチラも色々聞きたいから、な」

促されるまま、私はあの女の目の前に座った。

「じゃあ、なにから話しましょうかね——————」

「どこで通用する常識なのよ！」

この女は相変わらず……私に似てイタズラ好きね。

「ったく……落ちなかったらどうするのよ」

「だからホラ、一応水性で書いたから」

と言って”アハハハ”と笑う緑髪の燕尾服を着た女性……名はノネット・E・エニアグラムと言う。

ある人物の妹にして、私と同じ特務機関に所属する人。ちなみに歳は十七と私より年上。

性格は……男っぽくて、しかも色々残念だ。

「時々、貴方が私より年上という現実逃避したくなる」

「これまた失礼な。お前らが海に落ちて、どんぶらこってなつたところを助けたのは、このアタシだけだな」

「そうなの。それはどうもありがと——ってそうよ!! 何で私はここにいるの!？」

今更ながら自分の状況がよく分かっていない私だった。そこへノネットの補足が入ってくる。

「だから言っただろ。お前らが海でどんぶらこってたから、偶然全くの偶然で、米軍の小型空母がお散歩中だったから、お前らの救難要請を『アタシ』が出したってワケ。わかったか？」

「そ、そう・・・」

米軍の空母がお散歩・・・・・・・・中々シュールなことを言ってくれる。まあノネットらしいが。

「私のほかに、二人ぐらいいなかった？」

「第二位と、世界で二人目にISを動かせる男子の事か？」

「そうそう」

「第二位はお嬢様が観ていて、男のほうは姉貴が『監視』してるよ」

「か、監視？」

「おう。姉貴がお嬢様に無理言ってそうしてもらったそうだ。ま、最低限の治療は受けてるから死にやしねえよ」

「そう・・・なら良かった」

とりあえず安堵の息を吐く。あの死闘の後にこの平穏を迎えると、この場が夢のように感じてしまう。

「お前も大概酷かったぜ？ まああの男がお前を抱きかかえるようにして守ったから、大事には至ってねえけどよ」

「・・・え？ 庇った？」

気のせいか、聞き捨てなら無い言葉が聞こえた。

「おう。おかげで男のほうの怪我が酷くて酷くて。常人より体を鍛えてるらしく、命に別状は無いが、そうじゃなかったら即死だろうぜ」

「そ、そんな……」

また私は彼の足を引っ張ったって言うの……？ 助けようと思ったのに助けられた……また彼に？

（……なんてバカな女なんだろう……私って）

今回の件で私のプライドはズタボロだ。このままリストカットする勢い……冗談だけど。

もうスザクにあわせる顔がない……。でも真っ先に会って元気がどうか確かめたい。

こんな気持ち————生まれて初めて経験する。

（もしかして私……。彼の事がS———）

なわけない……。無いったら無いのよっ！！

そんな私の表情を読み取って（？）か、ノネットが私の肩を優しく叩く。

「そんな落ち込むなって。金は掛かったが男はもう完治寸前。第二位も機体のおかげか怪我は少なかったぜ……。怪我の規模は知らんが」

「・・・・・・・・そっか」

さりげなく不吉な言葉も聞こえたが、あのルーシュがくたばる筈はない。

「んじゃ、お前も起きた事だし、着替えとけよ」

「え?」

ノネットはそう言いながら、一つの服を私の前に置く。ベットで上半身だけ起きてる私は、嫌々ながらそれを手に取る。

「これって・・・・・・・・やっぱ正装?」

「おうよ。これから”アレ”が始まるんだ。当然お前も出席してもらうぜ、第三位」

「・・・・・・・・了解。病人に優しくない組織ね・・・」

頭を抱えながらも、私は渡された服を着る準備を始めた。

「・・・・・・・・その前に顔を洗わせてもらえない?」

「ええゝゝっ! その落書き結構頑張ったんだぜえゝ!」

「知るかつ!!」

というわけで、泣くノネットを尻目に私はベットを出た。

[illegible]

「……なるほど、話は分かった。私たちは『偶然』にも、お前達に助けられたと言う事だな」

「ええ、そうよ。米軍の人も、貴方の名前を言ったら、青ざめた表情で引き受けてくれたわ」

「良くも悪くも、私は米軍内で有名だからな」

一通り説明してもらった私は、とりあえず水を飲んでのどを潤す。

「第二位。今回はどうしようもない失態よ。わかってる？」

「・・・わかってるさ、お前に言われずともな。ナイトオブワン円卓の騎士第一位、エクス・B・ヴァルトシュタイン」

そういうと紫髪の女性――エクスは優雅に微笑んで紅茶を飲む。

ちなみにエクスは私より五歳年上だ。まあだからと言って、敬語を使おうとは思ってない。アチラもそんな事は気にしてないしな。

「わかってるなら結構。でも今回は・・・まあ厳しい罰は与えないわ。イレギュラーが多すぎたし。でも一応あの時の説明を、これから行う”アレ”でしてもらうけど」

と言って、私の前に一着の服を置くエクス。

「・・・正装。しかも私のか」

「わざわざ取り寄せたの。感謝してほしいわ」

「・・・もう一人はどうなった？」

「もう一人・・・ああ、イレギュラー大本命さんね。あの人もちゃんと出てもらうわ。当たり前じゃない、ちなみにもう一人呼んであるけど」

「・・・？ 誰だそれは」

「うふふ。内緒よ内緒。もうすぐわかるわ。それじゃあ私は先に言ってるわよ」

と言ってエクスは、飲み干したティーカップを持ちながら、部屋を出て行った。

「・・・・・・・・大丈夫だろうか。スザクは・・・・」

取り残された私は、今回の件の重要なキーマンであるスザクを思い浮かべる。

「できるかどうかはわからないが・・・・・・・・できるだけ庇わないと」

なにせこれから”アレ”が開幕するのだから――――

—

世界最強の騎士が一堂に集まる議会、

ナイトオブラウンス・テーブル
円卓の騎士議会在。

[illegible]

みなさんこんにちは。枢木スザクです。

突然ですが僕は今、現実逃避をしています。

・・・うん、”突然何言っちゃってるの？”というツツコミはもつともです。僕も自覚はあります。

でもなぜ現実逃避をしてるのかと言うと――――

「・・・・・・・・僕は天然記念物か何かですか」

「否定はしないよ。実質、天然記念物イレギュラーみたいな物だからね。なあみんな」

「「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」」

――――翠髪のショートカットの女性を筆頭に、使用人メイドらしき人達が、ISスーツ（ダメージバージョン）を来た僕を監視しているからだ。

・・・・・・・・まったくわけがわからない。

何が楽しくてほぼ上半身裸の状態で、大勢の女性に見つめられなければならないんだ。しかも何人か顔が赤い人もいる。

（赤くしたいのはコッチだよ・・・・・・・・）

とりあえず、平常心を取り戻すため、今までの経緯を思い出してみよう。

まず僕はI S学園の行事で臨海学校に来た。（そこから思い出すのか？）

諸事情でほとんど寝て過ごした一日目はさておき。（改めて思い出すとホント悲しい・・・）

二日目は突然の篠ノ之東の乱入もさておき、ルルーシュとヴァングが、これまた突然起きた極秘のI S暴走事件を解決。

しかし僕の世界の人間、ルキアーノがこれまた突然乱入、それにヴァングが応戦、その隙にルルーシュが僕を呼びに来て、ルルーシュと共にヴァングを助けに旅館を飛び出した。

で、ルキアーノと話をした後、腹を貫かれて海に落ち、僕のワンオフアビリティが発動して、フレイアが解禁されたので、不死鳥の如く舞い戻り、ルキアーノに向けてフレイアを放った。

で、諸事情で《フロートユニット》を捨てたため、フレイアの爆発に巻き込まれた。ちなみにルルーシュとヴァングも。ピンク色の光に飲まれたところで意識は断たれている。

そんなことの後目覚めてみれば、天蓋つきの豪華なベットの柱の一つに手錠で？がれた状態で、僕は寝かされていた。

その傍には翠髪を少し編んでいる美人が、ニヤニヤした顔で目覚めた僕を見ていた。

目覚めてしばらく、その女性と現状確認の会話をした後、興味本位の質問に答えて、今に至る。

「いやあ。しかし、私の名前を聞くだけであんな驚くとは思わなか

った」

「そ、それは・・・・・・・・アハハハ・・・・・・・・」

苦笑いで誤魔化す。しかし僕が驚くのも無理は無いと思う。もちろん『事情』を知ってれば。

————ドロテア・E・エニアグラム。

それが、この緑髪の女性の名前。ちなみにEは『エルンスト』の略なのだ。

（完全に僕らの世界のナイトオブフォー、ナイトオブナインの名前から取っただろ！）

しかも彼女には妹がいて、その妹の名前が『ノネット・E・エニアグラム』というらしい。

はい確定。この人は平行世界のエルンスト卿。そして妹が平行世界のエニアグラム卿だ。

「とりあえず君の身柄は、私たちが預かっている。下手にIS学園とかから干渉される心配は無いよ」

「・・・・・・・・そう、ですか」

「ああ、敬語はいいよ。堅苦しいのは苦手だね」

「しかし、年上でしょう。目上の方にはなるべく敬語を使うように心掛けていますので」

「そうやって相手との壁を作り、必要以上に自分の事を探られないようにしている、の間違いだろ？」

「……………いえ、本心からですが……………」

まいった。完全にこちらの考えが読まれていた。やはり一筋縄では行かないか。

「それは羨ましい教育を受けたね。ただ君にはこれから、ある議会に出席してもらわなければならない」

「……………議会？」

「そう。名前は開幕まで伏せるけど、そこで君は……………確かに十人ぐらいだったかな？それぐらいの人数の監視下だね」

「……………何故でしょうか。なにか僕に問題があったのでしょうか」

「心当たりが無い訳じゃないだろう？」

「……………」

正直、心当たりはありまくり。寧ろ心当たりしか見当たらない。

「まあ、そんな格好ではカッコつかないだろ……………ぷぷつ、格好だけにカッコつかない……………これはまたいいギャグを見つけた・

・・・！」

「「「「「・・・・・・」」」」」

・・・無言。この場にいる人は皆無言だった。

「さて、アレをよろしく」

「了解しました」

ドロテアさんは、傍にいるメイドに命令を飛ばし、メイドが持ってきたものを受け取る。

「これは？」

「正装さ。これから出る議会は、面倒なことに礼節を重んじるのでね。騎士道とでもいうのかな？ まあとりあえず、それに着替えてほしい」

「はあ・・・っ!？」

パツと貰った服を見てみるとそれは、元の世界で着ていた服、ナイトオブ라운ズの正装であった。

「ええっ!？」

「そんなに気に入らないかな？ 私もその女性用を着ているのだからね」

クルンとその場で一回転するドロテアさん。

そういえばそうだ。何で気付かなかったのだろう。あまりに似合いすぎて、逆に気付かなかったのだろうか。灯台下暗しとはこのことか。

「い、いえ。そういうわけでは……………」

「そうかい？　ならよかった。じゃあ着替えてくれ」

「……………この場で、ですか？」

周りを見渡せば女性メイドばかり。そんな場所で着替える強さは僕にはない。

「ああ、スーツの上から来てくれてもいいよ。でも脱ぎたいなら止めないよ。目の保養だしね♪」

「……………ちゃんと上から着ます」

「そう？　残念だ」

まったく残念に思っていないこの人。僕が脱ぎ始めたらどうしたんだろう……………脱がないけどね！

「それじゃあ……………」

僕はまだダメージの残る体だが、ベットを降りようとして――――

「……………手錠外してもらえませんか？」

「ハハハッ。それは玩具だから少し力を入れれば壊れるよ」

「・・・・・・・・・・やられた」

でもまさか、ここで玩具の手錠が出るとは思わなかったし。しかし言われた通り力を入れれば、簡単に拘束が外れた。

「それでは改めて・・・」

服を広げて、ズボンの方から履く準備をする。

「あ、手伝おうか？」

「いえ、大丈夫です」

「でもそれは意外と面倒な着方————・・・・・・・・」

パパッとラウンズのズボンを履き、ブレザーのような上着も手馴れた手付きで着る。

それを見ているドロテアさんは、言葉を途中で飲み込み、怖いぐらいの微笑みを浮かべた。

「へえ・・・随分と手馴れてるね。この服の着方、どこかで習ったのかい？」

「服の着方ぐらい当然ですよ。この歳で一人で着替えられないのは、恥ずかしいですし」

「アハハハッ！ 確かにその通りだ！」

といっではぐらかしておいて、元の世界と同じ正装を着終えた。
その場で着終えた僕は、背中やらがおかしくないか確認する。うん、
おかしくないな。

（しかしこれを着ると、自分が『ナイトオブブラウズ』に戻ったみたいだ・・・）

まあそんな事はないのだが。

「はあ・・・中々・・・どこか似合いすぎる。惚れちゃいそうだよ」

「「「「・・・（コクコク）」」」」

パンパンと手を叩くドロテアさん。周りのメイドさん無言で頷いている。なんか照れるな。

「お世辞でも嬉しいですね」

「・・・本心からなんだがね・・・。君はどうやら異性からの好意に疎い方ようだ」

「？ 何の話ですか？」

本心でこういうと、ドロテアさんは驚いた表情をした後、苦笑いを浮かべた。

「・・・どうやら、天性の超鈍感スキルを保持しているようだね。将来有望な女誑しになりそうだ・・・いや、もう遅いかもし

れないな？」

「????」

一体何の事を言ってるのだろう。前に朴念仁わからずやと呼ばれたことはあるが……。

「まあ自覚が無いならいい。準備が出来たなら行くよ」

そう言ってドロテアさんは、紫色のマントを羽織ながらこの部屋を出る。

「枢木様」

「はい？　なんですかメイドさん」

「これを。エニアグラム様と色違いのマントでございます」

そういわれて受け取ったのは、元の世界で着ていた、ナイトオブセブンの青色のマント。

「ありがとう」

何かの意図を感じるが、今は従ってやる。

受け取ったマントを翻して羽織る。そのままメイドさんたちが道を開ける。

「さあ、鬼が出るか蛇が出るか……どちらでも倒すけどな」

新たな決意と、これから起こること。

様々なことが交差する中、僕は部屋の扉を――――開
いた。

BELIEVE and TRUST 一難去ってまた一難 (後書き)

ふっふっふ、新キャラ登場しすぎだぜ！

しかし重要なキャラはあと二人から三人ぐらいつす。その他の人も重要なのですが、全員は覚えなくていいです。気が向いたら覚えてください。

後1、2話ぐらいで、三巻も終わり。そこで一度一区切り付けたいですな。

しかしまだ更新速度は上がりません。もう少し待ってくださいお願いします！！

誤字脱字、感想もお願いします。

Knight of Round（世界最強の騎士達と異世界の騎士）（前書き）

お、遅れた・・・・・・・・orz。

せめてもの言い訳は、活動報告のほうへ。

ですが、これからはこういった事が無いようにしたいと思います。

これからもよろしく願います。

Knight of Round（世界最強の騎士達と異世界の騎士）

意を持って扉を開いた後、広がるのは中世の西洋城の廊下みたいな所だった。

「・・・・・・・・あの」

「ん？なんだい？」

「いつまで続くんですか？この廊下」

「さあ。距離を測ったことは無いね」

そして扉を開いた後、さっさと進むドロテアさんについていく僕だが、この廊下をいくら歩いて進んでも同じ景色が続くだけで、さっきから目的地につく予感がしない。

「心配しなくても、いずれはつくよ。気長に歩いてくれ。短気は損気ってよく言うだろ？」

「・・・・・・・・わかりました」

しょうがない。どの道今の僕に選択肢は無い・・・か。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それから無言で歩いて行く僕とドロテアさん。

「・・・ふむう。やはりこの廊下には飽き飽きするものだ」

しばらく歩くと唐突に、ため息をしながらそう呟くドロテアさん。

「何でこんなに長いんですか？」

「主の・・・いやお嬢様の趣味だよ。お嬢様は物語・・・御釈迦話とか、神話とかがとても好きでね。この城も子供の頃”お姫様になりたい”っていうお嬢様の願いを、主が快く叶えたせいでこうなってしまった」

主は結構な親馬鹿だったからな・・・と、思い出しながら喋るドロテアさん。

「・・・随分変わった主なんですね」

「ああ。二年前に亡くなられてしまったがね」

サラリと言うドロテアさんに、僕は自分の失言に気付いたので謝る。

「あっ・・・す、すいません」

「君が気にしないでいいさ。だがこれから向う場所では、そういう事を口に出さないでくれよ？ お嬢様が気にするから」

そんな言葉と共に、僕達は一つの行き止まりに差し掛かった。

その行き止まりの壁には、白き円卓を囲む十三人の人物が描かれた

絵画が飾られていた。

「あの・・・行き止まりですよ」

「なわけ無いだろう・・・。君は騎士王物語を知っているか？」

「・・・・・・・・まあ、少しぐらいなら」

知らない訳がない。僕の機体の名もその物語にある、円卓の騎士の伝説から来ているのだから。

「そうか。私はアーサー王物語が好きでね。その騎士達の円卓は、円卓に座ることが許された騎士の一人が死んだ場合のみ、新たな騎士が円卓の成員として追加されるんだ。そして追加される騎士は、その前の死んだ騎士よりも強くなければならないとされるらしい」

解説をしながら、飾られた円卓の騎士の絵画に触れる。

「・・・・・・・・もし追加される騎士が死んだ騎士よりも弱い場合には、魔術師マーリンが円卓にかけた魔法により、その追加される騎士は弾かれてしまうという。面白いルールとは思わないか？」

「・・・・・・・・何が言いたいんですか？」

何を言いたいかわからない僕が尋ねると、ドロテアさんは不敵に微笑むだけだ。

「まあ要するに、選ばれた騎士であれば、壁は答えてくれるというわけだ」

そう言つて、ドロテアさんはその絵画を片手で押す。

ギィィィィィ・・・・。

すると絵画がまるで扉だったかのように左右に分かれ、暗がりの隠し通路が露わとなる。

その中には小さな螺旋階段があり、上を見てみれば何故か光り輝く扉が見える。

「————さあ中へ。議会は主役がいなければ成り立たないだろう」というドロテアさんが、僕を手で誘導し螺旋階段の、そのさらに上へ案内させる。

そして、例の光り輝く白き扉の前へと僕は来た。

「開けなよ。君も選ばれた騎士なら、遠慮なく開けれるはずだよ」

「・・・・・・・」

・・・遠慮はいらないらしい。コチラと今色々と驚いているというのに・・・さらにこの怪しい扉を開けるのか。

（貴方が開けてくれればいいのに・・・・・・しょうがないな・・・・・・）

意を決して、僕はその光り輝く白き扉を押す。

・・・・・・・・案外力を入れなくても扉は開いた。

ちよつと呆然としている僕の背中を、ドロテアさんが押しながら部屋へと入れる。

「――――」

「ちよつとした絶景だろう？これは」

部屋の奥へ進んだ僕に、意地悪そうな子供の笑みを浮かべるドロテアさん。

（・・・・・・・・確かに、凄いいけどな）

部屋の奥には、先ほどの絵画に描かれていたような・・・・というか、ほぼ同じ構造のフロアが広がっていた。

視線を上に向けると天を貫くほど高い天井。それは本当にお城のよきな装飾が付けられている。

そしてカラフルな光が差し込むのは、教会にあしらわれるような、巨大な十字架のステンドグラス。さらにその下にはシャンデリアまでついている。

視線を普通に戻せば、天井のように派手な装飾は無いが、紅い暗幕によって壁が覆われ、そのフロアの中には白い円卓が備え付けられている。

ここまではあの絵画と同じ。そして違うのは座.....っている人物ぐらいだろう。

おそらくお菓子のポ○キーを口にくわえ、つまらなさそうに足を円卓に堂々と乗せた、今の僕と同じような格好をした橙髪のボブカットの女性。懷から投げナイフがチラつかせていて、おそらく年上。

その隣の席に、眼を瞑って手をひざに置いて、椅子に寄りかからず背筋をピンツと伸ばして微動だにしない、これまた僕と同じような格好で、長い・・・銀髪じゃないな・・・白髪をポニーテールにしている女性が座っている。おそらく同じ年ぐらいかと思う。

その隣には、音量を大きくしてピコピコとPSPを熱心にやっているボーイッシュな緑髪の女性。何となくだがドロテアさんに似ている。確か妹がいるって言ってたから、おそらく彼女だろう。

その隣に、円卓に頬杖をついて入ってきた僕を無表情で見ながら、長いピンク髪をツインテールにしている、言わなくてもいいだろうが僕と同じ格好をしている女性。その無表情は何となくだが僕は、コチラを値踏みしているような視線を感じる。

その隣に、この場で一番豪華な席に座る、豊満な胸を持ち上げるように腕を組み・・・なんとあの円卓の上に”西洋剣”を突き立てている、長い紫髪の眼帯をした女性が見て微笑を浮かべる。絶対に年上で、何となく彼女がこの場のリーダーのような気がする。

その隣の席は空席で、空席の隣には・・・見慣れた顔――ってかあれって・・・。

(・・・あれ?・・・え?・・・ル・・・ルーシュ?)

どうやらクラスメイトのルーシュが、何故か僕と同じ格好をしていて、入ってきた僕をチラリと一瞥した後、そのまま視線を上へと

逸らした。

さらにその隣には、これまた見慣れた金髪の女性・・・格好は僕と同じだけど・・・うん、ヴァングだね。

そのヴァングも僕と同じような格好をしていて、入ってくる僕と視線が合うと、困ったように苦笑しながら、とりあえず手を振ってきた。

(・・・僕はどう反応を返したらいいんだろう・・・?)

とりあえず僕も手を振っておいた。

「つれてきたよ、第一位」

「ご苦労様、第四位。枢木スザク君、貴方も座ってもらえないかしら」

その他にも何人か人数はいたが、後ろにいたドロテアさんが紫髪の人と喋りだし、僕にも話しかけてきたので、とりあえず考え事は中断。

ドロテアさんは、紫髪の女性とルルーシュの隣にある、空いていた席へ座る。

「僕はどこへ座ればいいのでしょうか？」

「中心に席があるでしょう？」

確かに、この円卓の中心はドーナツのように真ん中が刳り貫かれ、

そこに真っ白い豪華な装飾のある椅子が一つ置かれている。

「・・・・・・・・」

僕は円卓のかけた部分、ちょうど視力検査に用いるアレのあいている場所から、中心の椅子へと座る。

「・・・時間が来たから、そろそろ始めましょうか」

ちょうど向かい合う形となった紫髪の女性が立つと、円卓に座る女性たちも一斉に立ち上がる。

そして立ち上がった全員が・・・どこから取り出したかは知らないが、西洋剣を抜き放った。

「・・・・・・・・・・へ？」

「あら、御免なさい。伝え忘れたわね。心配しなくても貴方に斬りかかりたくないから」

紫髪の女性も、円卓に突き立てた西洋剣を抜き、全員が僕に剣先を向ける。

「うわぁ!？」

「フッフ。反応の面白い子ね」

といって優雅に笑う女性。とりあえず僕は言いたいことがあるので叫ぶ。

「不意打ち気味ですよこれは！斬りかからないと言っておきながら！」

「斬りかかってないでしょ？剣を向けただけで」

「向けられた方は堪ったもんじゃありませんよ！！！」

斬りかからないからと言って、剣先を人に向けてはいけませんよ。しかも集団で。

「ごめんなさいね。議会を始めるには、こういう事をしなきゃいけないの。悪いけど静かにね」

「非常に納得できませんが………わかりました」

というわけで口を閉ざす。すると紫髪の女性が一つ息を吐くと、剣を顔の前で掲げる。

「それでは円卓に選ばれた騎士達よ。忠誠を誓うなら剣を突き立てなさい」

その一声で、周りの————騎士と呼ばれた人達が円卓に剣を突き刺す。

ちょうど————僕の周りを、剣で模した十字架で囲むように。

「突き立てし剣を、議会への忠誠と同意と判断します。よって——この議会を成立と見なします」

そして紫髪の女性も、剣先を円卓へ向けながら呟く。

「これよりナイトオブワン円卓の騎士第一位の名において——ナイトオブライウンズ・テーブル円卓の騎士議会を
開幕します」

ガギイン！

「さてと。とりあえず貴方は今、自分がどんな状況下か理解してるかしら？」

「・・・いえ。正直、何故助けられたかもわかりません」

これは本心からだ。

おそらくルルーシュ達と顔見知りだったから、そのついでに助けたんだろうけど。

「あら、可笑しな事を聞くのね。人が人を助けるのに理由なんて要るの？」

「まさか、それを本気で言ってる訳ではありませんよね？」

「・・・・・・・・二割本気よ」

二割もあつたのか。僕は一割未満だと思っていた。まあ残りの八割の理由で僕を助けたのか。

「では残りの八割は？」

「・・・・・・・・とりあえずコレ」

エクスさんとやらが懐からあるモノを取り出す。

「っ！」

「貴方の剣。^{ちから}ちょこつと解析もしたけど、壊れてたのを直しておい

たから引分イーブンでね」

僕の剣——待機状態の『ランスロット』を手で遊ぶエクスさん。

「……………人の所有物を荒らしたところで、何も面白いことは無かったでしょうね」

「そうでもないわよ。中々面白いシステムがあったから」

「……………そうですか」

解析されたというならば、もう下手に喋るべきではないな。少しの言葉で勘ぐられてしまう。

「それじゃあ、ハイどうぞ」

エクスさんがそう言って、待機状態の『ランスロット』を放り投げる。

「ってちよっと!?!」

慌てて取ろうとするが、『ランスロット』は弧を描くように僕の胸にジャストミートした。

「ドンピシャね。さすが私」

優雅に微笑んで喜ぶエクスさんに、僕は憤慨して怒鳴り散らす。

「何で投げるんですか!」

「持ち主に返しただけじゃない」

「僕は何で投げたのかを聞いてるんです！」

「細かいことを一々気にする男は、女性に嫌われるわよ」

「僕に非があるんですか！？」

何だこの人！当たり前な感じで責任転嫁してきた！理不尽すぎる！

「そんなことより、本題に入りたいのだけれど」

「っ・・・・・・・・・・・・・・・・わかりましたよ」

渋々頷くと、先ほどまで浮かべていた笑みは何処かへ飛び立ち、殺気を放つ冷笑が降り立った。

「――貴方、一体何者？」

「……………随分とストレートな質問だ。ストレートすぎて何答えていいかわからないや。」

「何者と言われても、僕は枢木スザクとしか言えませんね」

「じゃあ質問を変えるわ。貴方、その機体を一体どこで手に入れたの？」

「守秘します。僕一人の問題ではないので」

嘘は言っていない。カレンにも関係してくるから。

「あら、そんな事言っているのかしら」

「……………どういう意味でしょうか」

余裕の笑みを浮かべるエクスさんに尋ねると、彼女はいたって普通に宣言した。

「貴方は今、テロリストとして私たちから疑われてるのよ？」

「……………は？」

あ、え？テロリストってあのテロリスト？なんで僕が？

「…………自覚が無いのは幸せなのか…………哀れなのか。第五位、私が面倒なので説明してあげて」

「了解しました」

エクスさんがため息をつきながら言うと、先ほど見た白髪のポニーテールの女性が立ち上がる。

「枢木スザク殿。私はアイラ・V・クラウン。以後お見知りおきを」

「は、はあ・・・ご丁寧にどうも」

立ち上がる女性、アイラさんは一度頭を下げた後、書類を取り出して朗読する。

「枢木スザク殿。貴方はIS学園の行事である二泊三日の臨海学校へ参加しました。その二日目である七月六日午後三時頃、ハワイ沖で起動実験を行っていた、アメリカの軍事用第三世代型IS最新機シルバリオ・ゴスベル『銀の福音』の暴走事故が発生。その場にいた第二位と第三位・・・失礼、ヴァング・G・ベイル及びルルーシュ・ランペルージが暴走した『福音』を迅速に鎮圧」

ペラペラと一度も囁まずに朗読するライアさんは、一度咳払いをして続ける。

「しかしその後、正体不明のISを扱う男が突如として乱入。ベイル卿がその男と対峙し、ランペルージ卿は一度その場を離脱。後に貴方を連れて再び戦場に帰還。そして貴方はベイル卿と変わり乱入者と交戦。数十分戦闘を行った後、男に腹を貫かれ海に墜落。負傷したベイル卿が救助のため一度その場を移動。そして残されたランペルージ卿が男と交戦。そして貴方は海中から浮上し、ランペルージ卿と男の交戦に乱入。数分の戦闘後、超高質量核爆弾と思われる武装を使用。その場にいた全員がその爆発に被爆した。その際第九

位・・・エニアグラム卿の要請で米軍に救助され、最新医療を受けた後、この『ラウンズ・キャッスル円卓の古城』へ移送、現在に至ります」

「相変わらずの朗読ありがとう。座って」

「了解しました」

僕の今までの経緯をザラツと言った後、席に着くアイラさん。そしてエクスさんがこちらを向く。

「さて、ここまでで何か言いたいことはあるかしら？間違ってるなら訂正もするわ」

「・・・・・・・・何故ここまで知ってるんですか？」

「それはもちろん、その二人に聞いたからよ。ねえ？」

エクスさんは視線を僕の右隣、ちょうどルルーシュとヴァングに視線を向ける。

「っ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・そうだな」

「え！？ ええっと・・・・・・・・その通りだけd——です」

ルルーシュとヴァングは、明らかに僕に視線は合わせない。

何故彼女達がこの場にいるのかは、正直わからない。そして今は聞く状況じゃない。

（その代わり・・・・・・・・後でたっぷり聞くから、そのつもりで）

と心の中で呟いてしてみた。

「納得した？」

「ええ。そして先ほどの経緯については、特に訂正の必要は無いです」

「なら良かったわ。・・・で、ここから本題」

一度目を細めたエクスさんは、頬杖をつきながら横目で僕を睨む。

「貴方、あの男と知り合いね？」

「・・・・・・・・・・」

「黙秘は無駄よ。すでに裏付けは済んでるから。後は本人の証言だけなんだけど」

「・・・・・・・・チツ」

まあアレだけルルーシュ達の前でペラペラ喋ったし、あの二人なら勘付いても仕方ないか。

ちなみに、舌打ちはわずかな反抗。

「・・・・・・・・ええ、そうですよ。確かに僕はあの男を知っている」

「なら——私が言いたい事はわかるわよね？」

「・・・・・・・・ええ」

僕とテロリストは知り合いⅡ僕はテロリストと仲間である可能性が高い・・・・ってワケか。

確かに暴れた正体不明のテロリストと、あそこまで親しいなら疑われるのもわかる。

（でも、僕はそのテロリストと戦ったからここにいるのだけれど・・
・）

でもどうせそんな事言ったところで、ここの人達は納得しないだろう。

「・・・・率直に言いますと、僕と彼は仲間ではありません。僕は一度たりとも、彼を仲間と思った事はありません」

「でも貴方は彼と同じような機体を持ってたでしょう？」

「それはそこに座っている二人にも言えますよね？ 全身装甲という意味では」

ルルーシュとヴァングに視線を向けながら、そう言うておく。

「中身的には、まったくそうとはいえないのだけれど」

「貴方は、テロリストの機体の中身を見たんですか？ もし見て僕の機体と酷似していたなら、コチラもそれを認めましょう」

エクスさんの疑うような視線と、僕の敵意のある視線がぶつかる。

「・・・・・・・・その話、信じる証拠は？」

「ご自由にどうぞ。もし信用できないというなら、今ここで僕を捕まえればいい」

ここで弱気になるな。でなければ僕はテロリストと言う事になってしまう。

マスターオブセレモニー。

一度空気を掴めば、後はコチラのものだ。

「ただし、その場合は僕も抵抗させてもらいますよ。勝てはしないですが、五体満足でいられるとは思わないほうがいい」

「・・・・・・・・・・」

手にある『ランスロット』の始動キーをチラつかせながら、そう告げておく。

「・・・・ふう。なら一応、そういうことにしといてあげる」

「なら良かったです」

ため息をつくエクスさんは、肩にかかった長髪を背中に流す。

「でも仲間じゃないなら、あの男の事をいくつか教えて貰えないか

しら」

「・・・教えられる範囲は限られますが」

「構わないわ。こちらはあの正体不明アンノウンの事を何も知らないから」

つまり少しでも情報をくれるなら、それだけでいいってことか。なら話してもいいかな。

「まずあの男の名前は、ルキアーノ・ブラットリー。彼を一言で表すなら”殺人狂”です。人を殺すことに快楽を覚えてる狂った男・・・ですが厄介なことに彼の腕は超一流。それはその二人がよくわかってると思います」

頭に包帯を巻いてるルルーシュと、頬や手に湿布を貼ってるヴァングを見る。

「・・・まあな」

「悔しいけど、その通り・・・かな」

忌々しいように吐き捨てるルルーシュ。ヴァングも同じような感じだ。

「なるほど・・・機体の性能も考えると、私たちも心して掛からないといけないわね・・・」

「第一位」

顎に手を当てて考えるエクスさんに、アイラさんが手を上げる。

「何？」

「やはり、彼女が絡んでるのではないのでしょうか。ならあの強さも説明がつきます」

『彼女』？ なにか不吉なワードが出てきた。一体誰だろう。

「そうかもね。確かに可能性は高い・・・でも確定情報ではないから、視野は広くしてね」

「わかりました」

「???」

一体なんだろうか。僕と関係・・・あるんだろうか。あるんだろうなあ。

「さてと。じゃああのイレギュラーについて、他に何か言えることはある？」

「後は・・・特に無いですね。ちなみに僕との関係性は”決して分かり合えない同士”ですかね」

「随分漠然としてるわね」

「こういう場に慣れてませんから、ちょっと緊張がありました。でも間違ったことは言ってません」

補足をする、前半は虚実で後半は真実。疑いをかけられるのは、

元の世界で何度か経験したから嫌々ながら慣れてる。

「明らかに嘘っぽいけど・・・まあいいかしら。それじゃあ二つ目の質問に入っている？」

「ええ、どうぞ」

しかし二つ目？ でも機体は調べたといってたし、ルキアーノの件はこれでいいらしい。ならもう僕に聞くことは・・・あるかもしれないが、意味の無いことばかりでは。

「これが貴方を助けた理由の、約七割に値するわ。でも質問と言うよりお誘いかしら・・・」

「？」

『？』マークを浮かべる僕に、エクスさんはまたしても、いたって普通に告げてきた。

「貴方、この円卓の騎士団に入る気はない？」
ナイトオブラウンス

Knight of Round（世界最強の騎士達と異世界の騎士）（後書き）

伏線が色々と明かされましたねえ。

ちなみにアイラはあるコードギアスキャラからとりました。
ヒント…『ロストカラーズ』

わかるひといるかな？

DOUBT And DUEL 疑念は戦いへ、決闘は戸惑いへ 〵 (前書き)

学校が忙しいぜ・・・。

そりゃ期末テスト中だから当たり前！はっはっはっ！

というわけで、すこし更新が遅れるかもしれませんが・・・七夕だね今日。

※いつまで三巻に留まる気だろうか・・・いい加減原作とかかわりたい・・・。

DOUBT And DUEL 疑念は戦いへ、決闘は戸惑いへ

「な．．．ナイトオブブラウンス円卓の騎士団!？」

「そうそう。洒落た名前でしょ!? 騎士を名乗るなら、一度は憧れるものよね〜!」

「え．．．ええそうですね」

僕が驚いたのは、アッチの世界で同じ名前の組織に所属してたからなのだが．．．。

(アチラは聞いてないな．．．)

ブンブン西洋剣を振り回して、テンションが上がりになっているエクスさん。

「昔の人もカッコイイ名前をつけるよね! 一度でいいから騎士王に会ってみたいなあ〜!」

「でもアレは空想の．．．」

「それでもよっ! もしかしたら現実にはいたかもしれないじゃない! 女の夢は一々否定しないの!」

「は、はあ．．．」

「ああ〜騎士王様! ランスロット様! ガウエイン様! トリスタン様

！円卓の騎士メンバーには全員会いたいわ！あとあと・・・！」

「「「「「・・・・・・」」」」」

・・・エクスさんが、子供のように表情を緩ませて騒いでいる。
先ほどの余裕な大人の女性というキャラを、根本から崩してきた。
これはビックリ。

だが周りの人の表情は『また始まった』みたいな、呆れたような感じが取れる。おそらく毎度毎度の事なのだろう。大丈夫なのだろうか、ここの人達は。

「あ・・・あの、第一位？」

アイラさんが遠慮がちに話しかける。しかしエクスさんはドップリ妄想の世界へ沈む。

「モルドレッド様もいいけれど、やっぱり一番はアーサー王よねえ」
「！中世ヨーロッパへタイムスリップでもしたいなあ」

「第一位・・・第一位！枢木殿が戸惑っていますよ！」

怒鳴り声を上げたライアさんのおかげで、エクスさんは『ハッ！？』
と言う感じで目覚めた。

「あ・・・んんっ！ごめんなさいね、ちょっと動揺したわ」

「・・・・・・そうですか」

「・・・ごめんなさい。謝るからその冷めたような目は止めてよ・・・」

・
」

「冷めた目なんてしてませんよ。生暖かい目です」

「それも止めてもらえないかしらっ！」

顔を赤くするエクスさんというのは、可愛い。大人の女性が困る表情は見て楽しい。

（あれ？なんか僕ってSっぽい？）

大人の女性と関わることが多かったからだろうか。もちろん元の世界の話だが。

「それはそうとっ！ 入るの？入らないの？」

「いやいや、ちょっと待ってくださいよ！いくらなんでも早急すぎるでしょう！せめて組織の概要ぐらいは教えてくださいよ！」

この人、いくらなんでも動揺しすぎじゃないか！？

「はいはいそうですねそうですね。じゃあ第五位、引き続き説明をよろしくね」

「第一位………了解しました」

投げやりな命令にも従うアイラさん。ちょっとかわいそうだ。

「私たち^{ナイトオブラウンズ}円卓の騎士団とは、表向きはNGO団体として各国の紛争地域へ派遣されます」

「え、ここと民間機関なんですか?!」

ISを保有した民間機関なんて、普通ありえないんじゃないのか!?

「ちょっと違います。正確には『非政府組織』です」

「……………どう違うんですか?」

「この円卓ナイトオブラウンズの騎士団のメンバーは、各国から選出されたIS操縦者によって構成されます。ちなみに私はイギリスの国家代表の一人です」

「私はロシアの国家代表ね。あ、もし貴方が生徒会長と会った時、私がよろしく言ってたと伝えといて」

アイラさんとエクスさんの口から、またサラリと衝撃な事実を告げられた。

（つまりこの場にいる人は皆、世界を動かすことが出来る人達ってワケか）

なんか僕は場違いな気がしてきた。

「まあそれはおいといて。でもそれなら、政府に所属しているという事にならないんですか?」

「確かにそうですが、それは国の政府に所属していると言う事であって、円卓ナイトオブラウンズの騎士団はそうではないのです」

「つまり・・・？」

ナイトオブラウンス

「円卓の騎士団の活動理念は、”世界を一つに集め、調和を乱さない”。つまり各国の代表者を集めることで、国同士の友好を保ち、同盟を証明しているのです」

「あっ・・・そういうことか」

なるほど。

確かに一つの場所に複数の国の代表者がいれば、相手を信頼しているという決定的な証明となる。それなら無駄な疑い合いも無くなり、協力を保つことも容易だ。中々考えられてる。

「枢木殿は理解力が高くて助かります」

「いえ、普通ですよ」

「ご謙遜を。そこでポッ〇ーを食べてる第十位は、何度リピートしても無反応でしたから」

「はーいちょっと待とうか第五位。何で私はいきなり喧嘩を売られた？」

辛辣なアイラさんの言葉に、ポッキ〇を食べていたボブカットの女性が異議を唱えた。

「ハッ。会議中に菓子を食べてるお子様は少し黙れ」

「お前みたいな、万年根暗女にそんな事言われるたあ驚きだぜH A

H A H A !」

「お子様よりマシだ、現役高校二年生」

「根暗よりマシだから、彼氏いない歴〓年齢」

「お前にもいないだろうっ！」

「H A H A H A ! 実のは実は、二週間前にできたりしちゃいました
ゝ！」

『何っ! ?』

補足しますと今の言葉は、僕以外の全員じよせいから同時に放たれた言葉です。

「根暗に彼氏なんて一生無理そうで可哀想に。心から軽蔑の念を送
ってあげるよH A H A H A !」

「そんな同情はいらんっ！」

『・・・(チッ・・・第十位のクセに・・・!)』

「・・・・・・・・」

周りは無言。だがどこからか舌打ちが聞こえてきたりした。心の中
を想像したくないです。

というより、これもいつもと同じと言う事なのだろうか。

（アイラさんは、僕の中で結構真面目なイメージだったんだけどな・・・）

これまでの会議を見てわかったが、ここにいる人はとても個性的な性格をしているらしい。

通常精神の人は、この場ではおそらく少ないだろうな。

「・・・・・・・・第五位、説明の途中じゃない？　そして第十位も、いい加減お菓子をしまいなさい」

今度はエクスさんが、橙色の女性と言い争ってるアイラさん達を止めた。

「あっ・・・・・・・・も、申し訳ございません！」

「はーい。申し訳ありません」

「謝罪はいいから。ほら、説明の続きを。第十位は席に着きなさい・・・後で恋話でもしましょうか」

「は、はい・・・・・・・・」

「うげえ・・・・・・・・何てとばかり・・・・・・・・」

すっかり意気消沈のアイラさんは、席に着く興ざめしたと思われる橙髪の女性を一睨みし、僕の方へ視線を向ける。

「申し訳ありません・・・・・・・・。つい感情的になってしまって・・・・・・・・私もまだまだです・・・・・・・・」

「あ……別に気にしてないので、説明の続きを」

「わかりました」

そういうとアイラさんは一度目を閉じて、再び目を開けるときは先ほどの動揺は無かった。

「説明を続けます。円卓の騎士団ナイトオブラウンズの主な活動は、先ほど言った通り紛争地域へ赴くことです」

「赴いて、どうするんですか？」

「もちろん、ISを使用して紛争を武力で鎮圧することです」

「はっ!？」

なんでこの人達は、いたって普通に重大なことを告げるのかな。

「それっていいんですか?!」

「何がダメなのですか？ ISは武力の塊……兵器です。兵器の存在意義など闘う以外ないでしょう？ それにISを使えば死傷者をほぼ出さず紛争を鎮圧できる。下手な戦争より効率的なはずです」

「……兵器だからと開き直り、効率を優先して人々の意思を無視するんですか」

「それが私達せかいのやり方です。人々の意思など、後からいくらでも付いてくる」

「・・・そうですか」

武力で人々を丸め込む・・・納得は出来ないが、今抗議したところで何の意味も無いか。

「貴方達のやり方は分かりました。説明を続けてください」

「はい。次はラウンズの構成についてですが、私達は全員で十二人います」

「・・・？ 何人か足りないですよ」

周りを見渡すと、所々に空席の椅子が置かれている。

「失礼、言い方が悪かったですね。私たちは最大定員数が十二人なのです。欠員がいるのは、まだ私達を信用できる国が少ないので」

わざわざ代表をここに送って、自分たちの戦力を分散させないためか。

「随分と信用が無いみたいですね」

「色々要因縁がありますし、ここの円卓ナイトオブラウンズの騎士団のメンバーはZ――

――」

「――全員が国家に所属しているため、必然的にどこか一つの国が所有するというのが出来ない・・・だから完全に信用することが無理だからですか？」

例えるなら、この円卓の騎士団は、銀行みたいなものだろう。

ナイトオブブラウズ

でも自分たちの大事なものを預けるには、信用も安全性も心許ない。もし預けて盗まれたりしたら取り返しがつかない。

さらに安全を保障できる政府の後ろ盾も無い。裏切ろうと思えば容易に裏切る事が出来る。

（非政府組織は動きやすいが、その分協力という面では後手に回るしかないということか）

と推測したので僕が口に出すと、アイラさんは一瞬驚いた顔をして、すぐに表情を改めた。

「・・・その通りです。つまり立場的にはIS学園と同じようなもの・・・とでも思ってください」

どの国家にも属さないが、ISを保有できるほどの理由がある『非政府組織』か。納得だ。

（でも聞いていると、元の世界のナイトオブブラウズに似ているな）

基本的な軍の統括下に属さず、唯一皇帝だけが命令することの出来る騎士。

これは偶然と思いたいが、おそらくそうではないんだろう。

「もちろん各国政府の支援は受けてますが、基本的には中立の立場となっています」

「・・・円卓の騎士団についてはわかりました。ですが、何故僕が？」

ナイトオブブラウズ

確かに組織についてはわかった。しかし僕が勧誘される理由が見当たらない。

「それは・・・第一位から説明したほうが・・・」

「そうね」

アイラさんが座り、今度はエクスさんが話し始める。

「話をちよつと戻すけど、私たちはなるべく世界をこのままの状態を保ちたいの。でもそんな所に・・・ルキアーノだけ？・・・そんな人達が来たら、倒さなくてはならない」

エクスさんは立ち上がり、円卓の周りを歩きながら話す。

「けれど、コチラのメンバーの中でも特に強い二人が倒された。それにアチラの情報というか、知っていることは極々僅か・・・」

「そうですね」

「ところがっ！」

ビシィ！つと、勢いよく僕を指差すエクスさん。

「そのイレギュラーを倒し、尚且つイレギュラーの情報を持っている、世界で二人目の男性IS操縦者が私たちの前に現れた。ならば『世界を守る騎士』として、貴方に仲間になって欲しいのよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言ってくることはわかる。確かに今までの話を聞くと、僕を仲間にするメリットはあるだろう。

しかし。

「僕が貴方達の仲間になって、僕の方にメリットはあるんですか？」

アチラのメリットはわかるものの、僕のメリットが見当たらない。

「いいじゃない別に。そんなにメリットを求めたいの？」

「何故僕が無償で、貴方達と協力しなければならいんです？」

とある単語を強調して、エクスさんに告げる。おそらくエクスさんは読み取るはずだ。

「・・・なるほど。つまりメリットがあれば仲間になって貰えるってわけね？」

「さあ、どうでしょう。そちら次第ですね」

（勝負だエクスさん。貴方がどれだけ譲歩できるか、見定めてやる）

貴方に僕が協力する意味があるのか。僕の敵となるか味方となるか。全て見定めなければ。

「まずは、貴方の条件を聞きたいのだけれど」

「僕の経歴、そして『ランスロット』の解析をしない。後僕から『

ランスロット』を取り上げない。そして今後僕とテロリストとの関係も尋ねないで下さい。後今回の事件について、僕は拘束してもいいので、ルルーシュ・ランペルージとヴァング・G・ベイルと、紅月カレンの三人に対する責任追及を無しにしてもらいたい」

一応僕の最低限の譲歩した条件。自分で言っただけやりすぎな気がするが。

でも本当はカレンの経歴や機体についてなど、まだ他にも言いたいことはあったが、さすがに言いすぎだろう。今から心証を悪くしてしまうがない。

(・・・エクスさんはどう出るか・・・)

僕の考えを知ってか知らずか、顎に手を当てながら目を閉じ、考え込んでいるエクスさん。

「・・・・・・・・貴方の経歴と、機体についての条件は飲むことが出来るわ。けれどテロリストとの関係性は、今後言及する可能性ははるかに高いわよ。第一、貴方を仲間にしたいの、テロリストと面識があるからという理由もあるし」

「なら僕は貴方の仲間になる気はありません。言いがかりでテロリストにされたら困りますから」

「けれど、貴方は一応テロリストとして拘束された立場なのだけだ」

「だから僕は拘束してくれて構いません。その代わり彼女達は無関係、命令違反は僕だけです」

「でも貴方は――」「あー面倒くせえよ第一位!!」・・・・・・
第八位、私語は慎みなさい」

エクスさんの言葉を遮り、先ほどゲームをしていたドロテアさんの妹が勢いよく立ち上がった。

「第一位、バトろうぜ!」

「・・・・・・とりあえず、貴方は私と戦いたいのか？ それとも主語を省いた?」

エクスさんはただただ、素朴な疑問を口にした。それに対しドロテアさんの妹は、地団駄を踏んで否定の意味を表した。

「ちげえよ! 誰がそんな自殺紛いなことするか!」「自殺紛いとは失礼ね」アタシはそこでスカした天パと闘いたいんだよ!」

途中挟まれたエクスさんの言葉を完全に無視し、ビシッ!と円卓の中心に座る僕を指差すドロテアさんの妹さん・・・・ってあれ? スカした天パって?

「あの・・・・僕の事ですか?」

「他に誰がいんだよ。お前だよお前。さっきから聞いてれば、ネチネチとワケのわからない事を話しやがって・・・・!」

とんでもない理不尽な気迫をぶつけられた。

(この子、本当にドロテアさんの妹か?)

と思ったので姉のドロテアさんに視線を向けると、アチラはため息をつきながら手を上げてた。

「こらテメエ！何無視してやがる！アタシはお前に話してるんだよ！」

「いやPSPやってた君に言われても・・・」

「そ、それはそうだけでもっ！だからこそそういう奴にもわかりやすい説明を要求する！」

合理性のカケラもないのだが、何故か僕は押されている。

（はぁ・・・なんでこんな事に・・・ってあれ？今の言葉っ
てもしや・・・）

「・・・もしかして、今までの話が難しすぎてわからなかった・・・
・・・とか？」

僕と同じことを思ったエクスさんが小声で指摘すると、ダラダラと汗を流し始める彼女。

「そ、ソナナコトネーヨ？」

「声が裏返ってるよ」

と指摘すると、いきなり”ウガーッ！！”と手を振り上げて叫ぶ彼女。

「うるさいこのクールぶった天パ！」

「いやいや僕は君と初対面だから、そこまで罵倒される覚えは無いけど……」

「黙れ喋るな天パ！ おい第一位！頼むから闘わせてくれ！コイツは外見がムカツク！」

ハッキリ言ってボロクソだ。なんだろうか、僕が何かしたのだろうか。

「いい加減にしろ第八位！ 単細胞が一々口を挟むな！」

その時、我慢できなかったのかアイラさんが立ち上がる。

「ああん？ アタシより弱いクセして出しゃばるんじゃない！」

「それはまだ私が専用機を持っていなかった頃の話だ。量産機で戦った私に勝った所で、なんの意味も無いだろ！」

「はっ！ それでもテメエはアタシに勝ったことないから！」

「何を……！ いいだろう！ならば今日お前に勝ってやる！」

勢い良く立ち上がり、腰に挿した西洋剣を立ち上がってる彼女に向けるアイラさん。

「いいぜ別に。どうせ勝つのはアタシだけだな！」

「戯言を！貴様に地面の味を教えてやる！」

ガギン！

「「っ！！」」

「命令、いい加減にしなさい。貴女達の私情をこの場に持ちこむな。遊びをやるなら今すぐこの場から立ち去れ」

何時の間にか西洋剣を円卓に突き刺し、圧倒的な威圧を放ちながら告げるエクスさん。

その威圧に押され、アイラさんもドロテアさんの妹も静かに座る。

「ふう……………ごめんなさいね。ここの人達の中はあまり良くないから」

西洋剣を円卓から引き抜き、鞘に収めながら喋るエクスさん。僕は普通に応対する。

「いえ、別に構いません」

「……………そこまで普通に応対されると、なんか私の威厳がなくなるわね……………」

先ほどの殺気に僕がまるで堪えてないのがショックらしい。

「いえ、凄く驚きましたよ?」

「その言葉は嫌味かしら？」

「いえ、本心から驚きましたよ？」

「……もういいわ」

落ち込みながらも、改めてエクスさんは席に座りながら僕と向き合う。

「でも第八位の意見も一理あるわね」

「だろっ!？」

「第一位！ よろしいのですか!？」

先ほど騒いでいた二人が、またまた勢い良く立ち上がる。

「第八位の場合、動機が不適切だけだね。でも決闘で決めるというのは、何かと手っ取り早いし」

そしてエクスさんは考えるポーズをして……数秒。

「……うん、そうね。特に問題はないわね、寧ろメリットの方が多いわ」

「しかし第一位。城のアリーナは先週改装したばかりで、まだ微調整が済んでませんが」

「だからこそいいんじゃない。試験運転もかねましょうか」

「あの・・・・・・・・何の話をしているんですか？」

「たまらず僕が口を挟むと、エクスさんは”ごめんなさいね”と言いつつながら解説を始めた。

「まあ端的に話すと、ちょっと闘って貰えないかしら」

「・・・・・・・・え？」

エクスさんはドロテアさんの妹と僕を同時に指差す。

「今から貴方には、第八位と闘ってもらうわ。それで貴方が勝てば、私たちは貴方の要求を全て受け入れましょう。その代わり第八位が勝ったら、コチラの要求を呑んでもらうわよ」

「・・・・・・・・どうやら、アチラは随分な賭けに出たらしい。

「いいんですか？」

「ええ。貴方の力をこの目で見たいし、貴方も私たちの实力を見たいでしょ？」

「・・・・・・・・。わかりました」

色々言いたいことはあったが、一応僕はこの条件を認めた。

「よっしゃあああああああっ!!」

「うおっ」

認めた瞬間、いきなり叫び声を上げる第八位と呼ばれるドロテアさんの妹。

「よしすぐ行こう！今行こう！刹那に行こう！」

「気が早いわよ第八位。アリーナの微調整と貴方の機体の微調整も行うから」

「ええ〜〜！マジかよ〜〜！」

「マジよマジ。それじゃあ会議は終わるけど、今から少し時間があるから・・・第五位」

「はい」

呼ばれたアイラさんが、背筋を伸ばした規則正しい姿で立ちあがる。

「私が呼ぶまで彼に城を案内して」

「了解しました」

そしてアイラさんが席に着くと同時に、ドロテアさんの妹が立ち上がった。

「枢木スザク！アタシの名はノネット・E・エニアグラム！ 首洗って待ってろよ！！」

「あ・・・うん」

「おら第一位！さっさとアリーナを準備しとけよ！アタシは機体の

微調整に行って来る！」

そう言うと、ノネットさんは席から飛び上がり、出口に向かって駆け出した。

「あっ・・・待ちなさい第八位！まだ会議は終わってn—————」

ガチャン！

無機質にドアが閉まる音が、この場に響いた。

エクスさんは数秒手を伸ばした状態で硬直し、動き始めたときはため息をついていた。

「はあ・・・彼女は有能なんだけど、血の気が多いのが珠に傷よねえ・・・」

「第一位、本当に彼女でよろしかったのでしょうか」

「第五位、あなたの機体はまだ出来てないでしょ」

「い、いえ。別に私が闘いたかった訳では・・・」

「とにかく、いいのいいの。それじゃあ枢木スザク君、私たちは準備があるから。第十位、第四位、第六位、貴方達も手伝って貰いましょうか」

「了々解々」

「面倒だが、了解したよ」

「・・・・・・・・了解」

橙色の髪をした女性、ドロテアさん、ピンク色の髪をした少女が立ち上がる。

「よろしい・・・・・・・・。さあて、この会議中自分から喋らなかったその二人」

「「（ギクッ）」」

エクスさんがユラリと、会議中ずっと腕を組んでいたルルーシュと、ポケーと天井を見ていたヴァングに話しかける。

（気のせいかな、”ギクッ”って音が聞こえた気がしたが・・・）

「そ、そういえばそうだった、な」

「えっと、き、気がつかなかったね」

あからさまに動揺している二人。エクスさんは何かを悟ったようだ。

「命令、貴方達二人も第五位と共に、客人^{スザク}を案内しなさい」

「「えっ・・・・・・・・」」

二人して短い声を上げると、エクスさんは背中を向けながら扉へ歩く。

「貴方達は仕事が無いから仕事を与えたのよ。・・・積もる話もあるでしょうし・・・ね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人は何か思うことがあるのか黙り込んだ。正直僕も彼女達に聞きたいことがある。

（僕はエクスさんに、感謝するべきだろうか）

そして先ほどのドロテアさんたちが扉から出て行き、最後にエクスさんが扉に手をかける。

「————これで、今回のナイトオブラウンズ・テーブル円卓の騎士議会を閉幕します」

ガタン！

優しく————だが確かに、この部屋に響く金属質の扉が閉まる音を、僕らは聞いていた。

DOUBT And DUEL 疑念は戦いへ、決闘は戸惑いへ 〴〵（後書き）

誤字脱字、感想ください。

Keep one's Promiseたった一つの約束 (前書き)

シリアス・・・かなあ・・・。

こういう変に真面目なところは、やっぱり少し書きにくかったりします。

Keep one's Promise（たった一つの約束）

「コチラが客間です。ここで休憩を取ってください」

「え、ええ」

「客間を出て右に行くと、二つ扉がある場所がありまして、そこがトイレとなっています」

「は、はい」

議会が終わり、僕はアイラさんの案内の元、城の中を案内されている。

今は、畳み何畳で数えるのがバカらしくなる広さ、豪華な家具、アンティークを感じさせる西洋物置、はてにはシャンデリアまでぶら下がってる客間の入口で、アイラさんの言葉を聴いていた。

あ、ちなみにルルーシュとヴァングは、二人して僕と距離を取っている。

「それでは私は食事を”作って”来ますので、しばらくここでお待ち下さい」

「あ、はい………ってアイラさんが作るんですか!？」

「え? はい。私はここのメイド長ですから」

たまらず尋ねると、こんな言葉が返ってきた。ここのメイドつて見た限り、100人はいると思うが・・・。

「ですから、私に敬語は必要ありませんよ。使用人ですから」

「ま、まあ後々外していきます。・・・・・・ちなみに歳は、僕とあまり変わりませんよね？」

「そうですね。今年で私は16ですから、後ろのほうで立ち止まってる二人と同じ年です」

と明らかに含みのある言葉。

彼女の視線は、部屋の入口よりさらに後方にいるルルーシュとヴァングに向けられている。

「そ、そうだったな、久しぶりに会ったからか、忘れてたよ」

「わ、私はちゃんと覚えてたよ？誕生日パーティに出席した、し・・・」

と動揺してるのが丸判りな二人の言葉に、アイラさんがポニーテールの髪を揺らす。

「なぜお前達はそんな場所にいる。さっさと中に入れ。そこにいられると私達^{メイド}の仕事の邪魔だし、個人的に目障りだ」

先ほどと全く違う・・・というか、僕の時とは全く違う口調のアイラさんに少し戸惑う。

「・・・それはわかってるけど・・・なんで怒るのよ」

「そ、そうだ。ヴァングの言う通りだ。とりあえず落ち着こう」

二人が宥めようとするが、アイラさんはポニーテールを動かすただけだ。

「私は怒っていない。だから早く部屋に入れ。何度も言うが目障りだ」

「怒ってるじゃない！貴方が命令口調になるときは、大体がイライラしているときd――」

「いい加減部屋に入れ！」

「「あっ!!」」

プツンとキレたらしいアイラさんに手を引かれ、二人とも強制的に客間に放り込まれた。

「こらっ！何すんのよアイラ！」

「枢木殿、それでは・・・騒がしい奴もいますが、どうぞ休んでください」

「無視するな！」

「失礼します」

ヴァングの抗議の声も華麗にスルーし、客間の扉から出て行ったア

イラさん。扉の閉まる音がこれほど響くこともあまり無い。

（気を使ってくれたんだと思うけど・・・ね）

部屋にいるのは、放り込まれてからすぐソファで横になるルルーシュ、無視されたことを気にしてるのか、唸りながら床に胡坐で座るヴァング、そして入口近くで佇んでる僕。

「・・・・・・・・えっと・・・」

待ちに待った、三人だけの空間となったのに、中々会話を切り出せない僕。

（チャンスなのはわかるけど、何を話していいか分からない・・・）

「はぁ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

ため息をつくヴァングも、ソファで寝てるルルーシュも、会話は切り出さない。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」

結局、三人とも黙ってしまった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

この煌びやかな部屋に舞い降りた妙な沈黙。アンティークな時計の音が時を刻む。

チクタクと聞こえる音が、今この場を支配していた。

「・・・・・・・・・・傷」

少し時間が経ったら、突然ヴァングの口からそんな単語が聞こえた。

「え？」

「・・・・・・・・傷、大丈夫なの？」

胡坐で座っていたヴァングが顔を上げ、壁に寄りかかる僕へそう言ってきた。

「あ、ああ大丈夫だよ。ISの絶対防御に守られたから」

アハハと苦笑いを浮かべてみるが、ヴァングは呆れたように言い放った。

「・・・・・・・・・・嘘ね。ここまで来るとき、ずっと右足の動きが不自然だった」

「うつ・・・・・・・・・・さすがヴァング」

自分の右足を動かしながら見下ろす。

・・・まだフレイアのダメージが残ってるのか、右足を動かすと鋭い痛みが走る。

「それでも、気にならないように努めたんだけどね」

「私は後ろにいたから・・・どうしても目立っただけよ」

そういえばそうか。

「・・・でも、君達の方は大丈夫なの？」

「私は《絶対守護領域》を張ったから問題ない」

今日初めてルルーシュと会話した一言目がコレか。頭に包帯を巻いた君が言えるセリフじゃないよ。

「私は・・・貴方に庇われたらしいから、大丈夫よ」

どこか・・・というか、物凄く不機嫌そうにヴァングはそう言った。

「そっか。そういえばそうだったね。ちゃんと守れてよかった」

爆発のとき、僕の方へ突っ込んでくるヴァングを抱きかかえて、何とか庇おうとしたんだった。

（本当に、ちゃんと守れてよかった）

こう本心から思ったのでそう言ったら、ユラリユラリとヴァングが立ち上がる。

「・・・・・・・・何が『守れてよかった』よ・・・・・・・・！」

「え、え？」

「そんなことっ・・・・・・・・望んでなんか・・・・・・・・っ！」

なぜ怒ってるのかもわからず呆然とする僕に、ヴァングは襟首に掴みかかる。

「ぐっ！」

そのまま押し倒され、僕の胸にヴァングが馬乗りする。不謹慎だが・・・・・・・・凄く軽かった。

「私がいつ！貴方に助けてほしいなんて頼んだのよっ！！」

「・・・・・・・・僕が勝手に助けただけだよ。許可を取るべきだったかな・・・・・・・・？」

「何だよ！あの時だってそう！私たちを庇って男の槍に刺されて・・・・・・・・っ！」

・・・・・・・・なるほど。怒ってる理由についてはわかった。

要は『自分たちを庇ったせいで、僕が大怪我をしたこと』に対して、怒ってるらしい。

僕から言わせて貰えば、戦場で負った傷なんてどんな経緯であれ、結局は全て自己責任だ。

だが、今のヴァングの表情を見て、そうストレートに言えない。

（本当にどうしよう。なんかヴァングが泣きそうなんだけど）

こういうときルルーシュ（元の世界）が羨ましい。彼なら咄嗟にいい言い訳を作りそうだ。

「……僕が勝手にそうしただけ。別に君たちを助けようとしたわけじゃあ……」

「嘘よっ！」

スッパリと見破られてしまった。やっぱり嘘は苦手なんだな僕は。

「だって貴方、あの男に剣だけで闘ってたじゃない！あの戦闘で牽制程度にしか銃を使ってないじゃない！」

「良く覚えてるね。僕自身わからなかった」

「誤魔化さないでよっ！」

ポカポカと僕の胸を叩くヴァング。もう今にも泣き出しそうだ……何て言えいいのか。いい案があれば今すぐ僕にください。

「バカ！ 私たちだって、自分の傷ぐらい自分で何とかするわよ！それこそ私にだって出来るわよ！舐めないでよ！」

「そ、そうだn——」「うるさい！喋るな！」・・・すいません」
いやだって、泣きそうな美少女に言われたら、男は黙るしかありませんよ。

「なのに！なのにっ！　なのに何で貴方が傷を負ってるのよお・・・
・・・っ！！」

ポタポタと頬に落ちる水滴。それが何を意味するかは一々口に出すまでも無い。

「・・・ゴメンヴァング。・・・僕にはこれしか言えない」

謝罪の言葉しか今の僕には思いつかない。反論も俯いているヴァングを見ると、言えなくなる。

「・・・本当は、わかってるわよっ・・・。私たちが弱かったから、貴方が庇うしかなかったことぐらい・・・。私たちを思って、わざわざ不利な状況で闘ったことも・・・」

「・・・」

虚ろな声でポツリポツリと呟くヴァング。

僕は黙って聞いている。いや、聞くしかない。

「・・・でもっ・・・でも・・・っ！　それでも私はっ・・・自分のせいで、貴方に傷ついてほしくなかったのに・・・っ！」

そう声を上げるヴァング。友達である僕を思っているから、僕のために怒ってくれている。

（ここまで僕の事を思ってくれてる人は、元の世界でも中々いなかったな）

——でもそれはみんな、決して僕の身を案じてくれなかった訳ではない。

「・・・・・・・・心配してくれるのはありがとう。・・・・・・・・でもヴァング」

どうやら僕も、彼女に言いたいことができたようだ。

「・・・・・・・・」

顔を俯かせていたヴァングが、初めて僕の顔を直視した。

彼女の深い緑の目を伝う透明な雫。少し赤く腫れたその瞳は悲痛の色に染まっている。頬や額に張られている湿布を見て責任を感じてしまう。

その顔を見て、”僕は君を守りきれなかった”と自覚してしまう。

（・・・・・・・・現に今君は、泣いているから・・・）

でもこんな僕にだって、譲れないものの一つや二つはある。

「こういうのは傲慢かもしれないけど、助けた人から『助けて欲しくなかった』って言われるの、結構辛いことなんだよ。ましてや、大切な人なら尚更ね」

「っ……でも」

異議を唱えようとするヴァングの手を握り、その反論を封じる。

「だって、その人は僕を信じてないみたいだろ？」

「そんなことっ————！」

「仲間なら手を取り合うのは当然だろ？ でもその人は手を取り合いたくないという」

「っ………」

俯くヴァングを胴から退かして、僕は体を起こして座る。

「助けられた人が、助けた人を心配するのはわかるよ。でも、助けた人にも助けた人なりの意地はあるんだ。助けられた君たちに心配される筋合いは無い」

そう。こればかりは譲れない。僕だってただ単に助けた訳じゃない。

『君を助けない』と思ったから、助けたんだ。僕は君を『仲間』だ
と思ってるから。

それを否定されたくは無い・・・ましてや、助けた人にして欲しく
ない。

だってそれは、彼女が僕の事を信じていないみたいじゃないか。

「助けた人が望んでいるのは、怒ることでも悲しむことでもない。
そんな事をして欲しいために、僕は君たちを助けた覚えも無いよ」

——結局はただの自己満足。

けれどそれで君が笑ってくれるなら、それで救われる人がいるなら、
自己満足でもいい。辛い表情をしてるよりはずっといい。

笑ってるからこそ、救うことが出来たと実感できるから。

「・・・・・・・・」

無言で俯くヴァングに、僕は口調を和らげて言葉を紡ぐ。

「・・・偉そうなことを言ってるけどね。でも現に僕は死んでない
し、君も死んでいない。だから君が悲しむ必要なんて何もないんだ」

「————っ!!」

パンツ!!

耐え切れなかったのか、ヴァングが僕の頬を思いっきり引っ叩いた。

「貴方が言ってるの全て結果論じゃない! それで死んでいたらどうするのよ! 『自分を助けたせいで死んだ』なんて結果、誰も悲しまないはず無いじゃないっ!!」

「・・・結果論・・・か」

確かに今ここにいるから、僕はこうして彼女と喋ってられる。
でももしかしたら、彼女を助けたせいでここに入れる事は無かったかもしれない。

けれど————

「じゃあヴァング。君はあの時僕に助けられない方がよかったのか?」

「当たり前じゃない! 貴方が傷つくぐらいなら————」

「————ぐらいなら『自分が死んだ方がマシ』とでも言う気じゃないよね」

「つ……………」

自分の言いたいことを先に言われたのか、口を閉ざすヴァング。

「僕がさっき言ったのは確かに結果論かもしれない。でも『間違った過程で得た結果に意味は無い』」

「ッ!! あ、貴方・・・その言葉・・・」

ヴァングが妙に驚いてる気がするが、今はそんな事を気にしてる場合でもない。

「もしヴァングが死んでいたら、僕は冗談でも笑えないよ。君を助けなかったという過程なんて、想像したくも無い」

「す、スザク・・・」

顔を赤くするヴァングを怪訝に思いながらも、僕は話を続ける。

「君は信じてくれてなかったのか？ 僕は約束もしたはずだけどね。『必ず帰る』って」

「っ!!」

ヴァングが心当たりあるような表情を浮かべる。

「・・・元の世界の皆もそうだ。皆が僕を信じてくれてたから、僕も皆を信じて闘えた。そして生き残ってこれた。」

「――皆、僕が死ぬことなんて考えていない。生きて帰ってくる」と、確信しているから。

「―――効率も損得も、そんな物が無くても信じ合えるのが、僕は『仲間』だと思う」

「っ……………」

ヴァングがその顔を俯むかせてしまう。

「結局のところ、みんな助かったからそれでいいさ。ヴァングは、この中の誰かが欠けていた方が嬉しかったのか？」

「そ、そんなわけないじゃない!!」

戸惑いながら、ガバツと顔を上げて否定してくる彼女。

「なら君は一体何を怒ってるんだ？ みんな助かって、こうして喋り合えるのにさ」

「な、何って……スザクが私を……助……け……」

徐々に萎んで行くヴァングの声。それにおかしくなって、つつい笑ってしまう。

「アハハハ、声が萎んでるよ」

「何よ！笑わなくてもいいじゃない！ あーもう訳わかんないっ！」

ヴァングは頭を掻き毟って立ち上がり、ボスンッ！と大きなソファに豪快に座った。

「さて、と。ヴァングは一つ僕に借りが出来ました」

座ったのを確認し、僕もその場で立ち上がる。

「な、何よいきなり」

「というわけで、ヴァングは今から僕にお礼を言いましょう」

「はあっ?! ちょ、ちょっと待って! どういうことよっ!」

ガバツと座ったところで、勢い良く立ち上がるヴァング。

「何ってヒドイなあ・・・アレだけ体張って助けたのに、お礼の一つくらい言ってくれても・・・」

「で、でもそれは貴方が勝手にやった事でしょ!」

「助けられたことに変わりないよね?」

「そ、それは・・・そうだけど・・・」

どうしても言う気の無いヴァングを見かねた僕は、立ち上がってヴァングの傍へ行く。

「それじゃはい、3、2、1、どうぞっ!」

「ええっ!」

「ホラはやく！」

「あーもう、ホント貴方は色んな意味で訳わかんないわよっ!!」

急かす僕の熱意に折れたのか、ヴァングは顔を赤くして、嫌々ながらその言葉を言ってくれた。

「スザク! 助けてくれてありがとうっ!!」 これでいいでしょう!？」

・・・ビクリするほど投げやりなお礼だった。

「投げやりだったね」

「貴方が無茶振りするからでしょうがっ！」

ガヤガヤとうるさいヴァングだが、その瞳には先ほどの悲痛な色はカケラも浮かんでいない。

————けれどヴァング。少なくとも僕は、この結果を得られたことに満足しているよ。

「ハハハッ・・・』どういたしまして・・・ヴァング」

——助けた人が助けられた人に望むのは、怒る事でも悲しむ事でもない。

——ただ一言、そんな言葉が聴ければよかっただけ。

——喜んで、笑って、そんな幸せな表情を、僕が守り抜いた表情を、君が見せてくれれば・・・。

”・・・こんな時間を過ごせてるのに、それ以上を望むなんて・・・それこそ傲慢だろ？”

K e e p o n e ' s P r o m i s e〈たった一つの約束〉(後書き)

バトルはもう少し先になるかな・・・。戦闘描写を考えとかないと・
・・。

誤字脱字、感想下さい。

HAVE a rest BREAK（戦う前にやることは）（前書き）

遅れました・・・。スイマセンとしかいえません。

しかし、勉強合宿が一週間あったので、どうしても更新が一週間遅れてしまうのです・・・。夏休みなのに忙しい・・・。そしてバトルはまだだぜ・・・。

HAVE a rest BREAK 戦う前にやることは

「・・・つまり、君たちは二人とも母国から選ばれた代表者ってこと?」

「そう言う事だ。本来、国にとって本当に重要な人を送り込む訳には行かない」

「だから、代表候補生で実力のある私たちのような人が、ナイトオブラウンズ円卓の騎士団に所属することになるの」

「へえ・・・・・・」

ある程度の騒ぎはあったが、ルルーシュとヴァングのここにいる理由を話してもらった。

二人の話を聞くと、どうやらヴァングとルルーシュは、それぞれ国の政府に実力が認められている『代表候補生』なので、ちょうどいい人材としてここへ送り込まれたらしい。

(おそらくそれ以外にも理由はあるだろうけど・・・)

僕も彼女達の実力は認めるが、ヴァング(平行世界のジノ)と、ルルーシュ(平行世界のルルーシュ)、それに元の世界のラウンズメ
ナイトオブラウンズンバー(平行世界バージョン)が一同に、この円卓の騎士団に偶然揃うというのは考えにくい。

何か裏があるだろうが、多分二人は喋らないだろう。今は放ってお

こうかな。

「でも、エクスさんとアイラさんは国家代表って名乗ってたけど」

「ああ、第一位と第五位……エクスとアイラは別。この円卓の騎士団は、ロシアとイギリスを中心に作ったから、本当に重要な国家代表を派遣してる」
ナイトオブブラ
ウンス

「まあ、作った張本人達が代表候補生を送ってたら、”自分たちを信用してない”って言ってるようなものだからな」

「なるほど。作ったなら、それ相応の責任を伴うってことか」

ちよつとした話をして、僕らは豪華なソファに個人個人で座っている。

「そういえば、その『第一位』とか『第五位』とかは、コードネームか何か？」

「まあそんなものだ。正確には『円卓の騎士第一位』と呼ぶが」
ナイトオブワン

「役職みたいなものよ。係長とか専務とか」

ルルーシュは足を組んで頬杖をつきながら、ヴァングはクッションを抱えながら喋る。

「へえ。ちなみにその『円卓の騎士第一位』が社長で、どんどん数が上がっていくほど、地位は低くなるのかな？」
ナイトオブワン

「いや全員同じ地位だ。まあ多少第一位が特別だが」

「もしこの円卓の騎士団ナイトオブラウンズの中で優劣があったら、それはその国が甘く見られているようなものだからね」

確かに、国同士の集まりなのだから、一概に優劣は決められないか。

「そっか。ところでさ、この円卓の騎士団ナイトオブラウンズに入ったら、どんなことが出来る？」

（これは聞いておいて損は無いだろう）

僕が聞くと、ルルーシュとヴァングは二人して考えるポーズをした……って。

「思いつかないの!？」

「あ、いや、思いつくは思いつくが……」

「代表候補生でも出来ることだしね……。ラウンズだからこそ出来ること……かあ……」

そう言って二人とも言葉を濁してしまう。

「二人とも……。まあの道、僕は勝っても負けても入る気でいるからいいけど」

「え? そうなの?」

ヴァングが意外そうに聞いてくる。僕は苦笑しながら話す。

「というより、エクスさんの条件を飲んだ時点で、すでに入ることが決まってるけどね」

「・・・なんだ。やはり気付いて決闘を受けたのか」

ルルーシュは呆れたように呟く。

——『今から貴方には、第八位と闘ってもらおうわ。それで貴方が勝てば、私たちは貴方の要求を全て受け入れましょう。その代わり第八位が勝ったら、コチラの要求を呑んでもらうわよ』——

つまり、僕が勝ったら、僕の要求がアチラに全て呑まれた状態で、ラウンズへ加入。要求が呑まれたなら、断る理由がないから。

そして、僕が負けたら、アチラの要求を僕が呑まなければならないので、ラウンズへ強制加入。

どの道、僕は円卓の騎士団ナイトオブラウンズに入らなければならなかった。

「気付いてたなら何故受けたんだ？」

「別にデメリットを感じなかったからかな。勝てば色々一度に払拭できるし」

「確かに・・・その通りだな」

ルルーシュの言葉で、僕らの間に一度沈黙が起こる。そして僕がポツリと呟く。

「……………一夏やカレンは、どうしてるんだろう……………」

「……………さあ。織斑は知らないけど、カレンは少しマズイ立場にな
ってるかもね」

僕らが旅館を抜け出たとき、一人旅館を守るために残ってもらった
カレン。

命令違反を起こした僕を黙って見逃したから、当然カレンも命令違
反と言う事になっている。

下手したら、犯罪者として拘束されているかもしれない。

「私がエクスに掛け合っておいたから、ヒドイ扱いにはなっていない
はずだ。……………だが所詮は部外者。カレンを完璧に擁護するのは無
理だろう」

現実主義者なルルーシュの辛辣な言葉。実際その通りだとは思うが。

「I S学園に戻ったら……………色々面倒なことになってるか
もな……………」

「戻らないという手は無いぞ、スザク」

「わかってる」

ソファに寝転がり、天井に吊るされてるシャンデリアを見上げる。

「……………二人はさ、いつからここにいるんだ？」

「は？」

「へ？」

ポツリと呟いた僕の言葉に、二人は意味のわからない変な返事をくれた。

「二人は、いつからこの円卓ナイトオブラウンズの騎士団にいたのかなーって、思っ
さ」

と興味本位で聞いてみたら、少し考える素振りをしながら、

「いつからかと言われれば、中学一年生ぐらいかな」

「私もそれぐらい」

と即答する二人に、少し驚きながらも僕は反応を返す。

「随分早いんだね」

「この業界なら普通よ。まあ時期が早いのは認めるけどね」

「ISを扱うのは十代後半から二十代の女性が大半だ。だから女子校では義務教育中と言えど、ISの事をカリキュラムに取り入れている。金をかけてる学校なら、IS学園からの推薦をもらえるしな」

当然のように言っただけの二人。

「君たちは、何も疑問に思わなかったのか？」

「別に。両親の関係で子供の頃からそういう教育方針だったから。それに、もうこの道に進むことは決まっていたし、この道に私は満足してる」

「私の場合、ここに入ったのは政府からの命令だ。拒否権など最初から無い」

「どうやら、自分で動かすことを強制されてるみたいだ。でも二人とも納得してるらしい。」

「やめようとかは思わなかったの？」

「・・・まあ一度そう思った事もあったけど、色々と因縁が出来てやめられなくなった・・・みたいなの？」

ヴァングは初めは少し黙ったが、苦笑しながらそう言う。

「ここにいれば、色々な事が便利になる。私の理由はそれだけだ」

さすが、現実主義者の言う事は違うな。

コンコンコン

「枢木殿、お食事をお持ちしました」

ドアがノックされて、扉の向こうからアイラさんの声が聞こえた。

「あ、はい」

ルルーシュもヴァングも動く気が無かったので、僕が扉を開ける。

「あつ・・・え?・・・あ、あの・・・」

「・・・? どうしましたか、枢木殿」

柄にもなく戸惑う僕に対し、目の前の・・・『メイド服を着た美少女』が首を傾げる。

ちなみに格好の詳しい描写をすると、黒い下地の服に青と白のフリルのエプロンを着て、白を基調に使いながら所々青のラインが入ったセミロングスカートを穿いている。

白い髪はポニーテールにして、白のフリルカチューシャ+黒い薔薇の髪留めで固定されている。ちなみに右胸には複雑な模様のバッチ(?)がある。

このとき気付いたが、目の前の人は意外と背が高く、クールな容姿でもあるので、今の控えめなメイド服は、彼女の魅力を大いに引き出している。

正直・・・見惚れました。

「あつと・・・アイラさん・・・ですか?」

「? はい。私が私以外の誰に見えると?」

いたって純粹に首を傾げるアイラさん(?)に、僕は苦笑を浮かべてしまう。

（まあ・・・それはそうなのですが・・・）

しかし考えてみてほしい。

もし知り合いの真面目な女性、普段は仕事場でのスーツ姿しか見ないのに、ある日突然華やかなメイド服に身を包み、大きな荷車を押している場面に遭遇しよう。

みなさんは、咄嗟に知り合いの女性と断定できるでしょうか？

ちなみに言い過ぎではありません。僕にとってはそれぐらい、アイラさんの格好には驚きました。

「き、着替えたんですか？」

「当然です。あの格好で料理が出来るわけありませんから」

「そ、そうですね・・・・・・」

「？・・・それはそうと、部屋に入ってよろしいでしょうか？」

「あっ・・・・・・ど、どうぞ」

若干戸惑いながらも、断る理由は無いのでアイラさんを客間に招き入れる。

「おおー！ 来た来た来たよ『ラウンズ・ヴァルキリ円卓の戦乙女』の手料理！」

「彼女達の料理は一級品だからな。IS学園の学食にも引けを取らない」

ソファで寝転がってた二人が、アイラさんの姿を見て跳ね起きた。

しかし一つ聞きなれない単語を発見。

「ラウンズ・ヴァルキリー『円卓の戦乙女』って？」

ちょうど客間の奥にある純白のロングテーブルに、荷車に乗せていたトレイを移したところで、アイラさんがコチラに振り返って解説。

「ラウンズ・ヴァルキリー『円卓の戦乙女』というのは、端的に申しますと、この城の使用人のことを指します」

「ちなみに、ここの使用人は全員女性ね」

すかさずヴァングの補足。

「でも、ならなんで戦乙女という名前が？」

「ここの使用人は総勢143人いるのですが、全員が各国軍の関係者なのです」

「えっ!？」

凄いことを言われた。

ここには様々な国家に所属している人間が、使用人をしているってこと!？

「な、何でそんな事態に？」

「・・・監視ですかね」

少し黙ってから、無表情でアイラさんは呟いた。

「もし専用機を持った代表者が、何者かに襲われた場合を想定して・
・ここの使用人になることを条件に許可しています」

「・・・なるほど」

（要は万が一の保険ということか。ISを一つでも奪われたら大変だから）

ましてやここは様々な国の人間が集まる場所。そして全員が協力を望んでるとは限らない。

つまり、ナイトオブラウンス円卓の騎士を支え、いざと言うときに闘うことの出来る使イ用人。故に『ラウンス・ヴァルキリー円卓の戦乙女』ということか。

「おーい二人ともー。小難しい話なんていいから、早く食べちゃおうよー」

「冷めるといけない。出来立てを堪能したいしな」

僕とアイラさんが話している間、すでにヴァングとルルーシュは席についていた。

「はいはい」

「・・・・・・・・そういう行動は早いんだよな・・・・お前達は・・・・」

隣にいたアイラさんの呟きを聞きながら、僕も席に座る。

「それでは」

掛け声と共に、トレーに乗っている金属質のフタをあける。

「おおっ・・・・・・・・・・」

「うわー、美味そうねー！」

「・・・・・・・・量、多くないか？」

多種多様。アイラさんの料理を見た感想は人それぞれだった。

まず料理はおいしそうだ。開けた瞬間おいしそうな匂いが漂ってきた。

僕の前に置かれてるのは、おいしそうなカレー。

夏野菜（主に茄子やトマト）とスタンダードにジャガイモとや人参や豚肉が入っていて、皿の中はご飯とルーで二分割されていた。

ヴァングの前に置いてあるのは、スパゲッティ。

とぐろを巻いた龍のように皿に収まる麺に、夏野菜（ここでも茄子）の入ったトマトソースがかかっていて、細かいチーズが振りかけられてる。おいしそうだ。

ルルーシュの前に置かれてるのは、なんと驚きだが、ざる蕎麦。

その名の通り、ざるの上に蕎麦が・・・・まあ普通の量が盛られていて、日本の湯のみのような器に蕎麦の汁があり、トレーの上にはネ

ギなどの薬味が置かれている。

「いつも野菜ジュース一本のお前では、多いと感じるでしょうが」

断言するアイラさん。僕らも前々から知ってたが、低血圧の彼女は朝食をほぼ全く摂らない。

「・・・知っててやったのか」

「朝は一日の始まり。朝は少量、夜は多量というのはバランスが悪いですよ」

いつのまにか敬語になってるアイラさん。今は通常モード、もしくは使用人モードというわけか。

（イライラしてるときは命令口調・・・覚えておこう）

心の中で密かに誓いを立てた僕だった。

「生憎だが私は、朝食、昼食、夕食、全て少量だ・・・フッ」

何故かニヒルな微笑を浮かべながら、まったく威張ることのできないことを宣言するルルーシュ。

「何故格好つけたのかは知りませんが、それを全て食べなければこの部屋から出しません」

「なっ!？」 お、横暴だろうそれは! なんの嫌がらせだ! !」

ガタンッ! と思いつき立ち上がって抗議するルルーシュ。

「新手のイジメです」

サラリと言うアイラさんに、ルルーシュはさらに憤慨して返す。

「何だそれは！ 自覚してるだけ余計に質が悪いぞ！」

「まあ流石に冗談です。けれど、そんな食生活ではいつか倒れますよ？」

というアイラさんの言葉に、ルルーシュは少し黙って呟く。

「・・・安心しろ。私の体は”普通じゃない”からな。この程度の食生活で倒れるわけ無い」

———そう言ったルルーシュの顔は、いつも通りのものだった。

「・・・それは・・・」

何か思い当たるのか、少し表情を歪ませるアイラさんに、ルルーシュは笑って告げる。

「とにかく量が多い。無理して食べるのも体には悪いだろう？」

「・・・仕方ありませんね。少しぐらいなら残しても構いませんよ」

呆れた表情でアイラさんは了承した。

「うまいー！まいうー！いうまー！　夏野菜が美味しい！トマトに合うよー！」

などと言う叫び声が聞こえてきた。

見てみると、ヴァングがテンション高めにスパゲッティを頬張っていた。

「第三位。口にソースがついてますよ」

さりげないアイラさんの指摘。

「おおっ？　ありがとう」

と一度ナプキンで拭いて、スパゲッティを頬張りまたソースをつける。

「・・・服にはつけないようにしてください」

「オッケーオッケー」

諦めたように呟くアイラさんに気付かず、気楽な感じで返すヴァング。

「枢木殿もどうぞお食べ下さい」

「あ、はい。いただきます」

促されるまま、スプーンを手にとってカレーを一口食べる。

「・・・・・・・・」

「あ、あの・・・・・・・・お口に合いませんでしたか？」

「あ、全然そんな事はないです。ただ初めて食べる味のカレーだったので、戸惑って」

不安そうになっているアイラさんの誤解を解いておく。

もう一口パクリと食べる。

いつも食べるようなカレーとは違い、夏野菜の食感や味が新鮮だったから戸惑った。

辛さは控えめで何の抵抗もなく食べることも出来た。肉とかをあえて使わず、野菜中心に作ってくれたのは、朝食ということで配慮をしてくれたのだろう。

でもそれはそれで、とても美味しいとは思った。

「料理、上手なんですね」

「でなければ、使用人長は務まりませんよ。^{メイド}それ以前に、女性として」

使用人、そして女性としてのプライド。素直に尊敬したいと思った。

そして無駄話をしながら食べている最中、

「そういえばさ。スザクVS第八位の件はどうなったの？」

ヴァングはスパゲッティを食べながら聞く。補助席に座るアイラさんが返す。

「さあ。私のほうに連絡は来ていませんが」

「アリーナの準備ってそんなかかるもんだっけ」

怪訝な表情をしながら、また一口スパゲッティを頬張る。

「おそらく、第八位の機体の調整のほうじゃないでしょうか」

「なんで？」

「第一位が枢木殿の機体のデータを少し見て”コレは使える”とか何とか言っていました」

「…………つまり、スザクの『ランスロット』のデータを基に、機体を再調整してるってわけね」

はあ…………とため息をつくヴァングとアイラさん。

とりあえず。

「無断でデータ取られたんですか!？」

と僕が指摘してみると、アイラさんは微妙に言いにくそうにしながらも、言った。

「ま、まあ機体の修理をするためには、少なからずデータを取らなければなりません」

「『直した過程で出た副産物をどうしようとコチラの勝手』とでも言うんじゃない？ 第一位だし」

「確かに。アイツと口論で勝つのは容易じゃない」

などと、すでに諦められたかのようなコメントを頂いた。

「・・・もういいや。僕は僕のベストを尽くそう」

直してもらったことには感謝してるが、微妙に納得できない自分がいる。

なので諦めた。

「アイラと付き合うには、諦めることが重要になってくるからね」

「そこは私も同意します」

「ああ・・・。アイツと口論して何度泣きを見たことか・・・ああゆうのは、個人的に苦手なタイプだ」

しみじみと同意する三人。というかルルーシュ、何故右斜め上を見て黄昏るんだ？

「あら、酷いこというのね。お姉さん泣いちゃうわよ？」

「「「「っ!?!」」」」

突然、背後から聞こえてきた声に僕らは驚いてしまう。

「ゴホゴホッ!」

「ゲホッ!ゴホッ!」

「ゴホッ!　ンンッ!!!」

そして食べ物を喉に詰まらせしまった。ちなみに上から僕、ヴァング、ルルーシュ。

「あらら、大丈夫かしら?　でも行儀が悪いわよ」

その原因となった紫髪の女性は、そ知らぬ態度で話しかける。

「ゴホッ!・・・お、お前のせいだr——ゴホゴホゴホッ!」

ルルーシュが怒鳴ろうとして咽てしまっている。ああ・・・顔が酸欠状態になってるよ。

「そ、それで。エクスさんは何のようだったんですか?」

というトラウNZの正装姿のエクスさんは、腰に手を当てる、モデルのような立ち方をする。

「コチラの戦いの準備が整ったから、伝えに来たわ」

「第一位。それでしたら私に連絡を頂ければ」

「いいのいいの。自分で伝えたかったから。ついでに第五位も、貴方の機体の事についてちよつと話があるから、ついて来て」

「わかりました。では私はこれで」

そんな感じで、エクスさんはアイラさんをつれてこの場から去っていった。

この場に残されたのは、咽ているルルーシュと、その背中を擦るヴァング、そして閉じられた扉を見ている僕となった。

「・・・・・・・・嵐のような人だった」

「そうね。気配を消して背後に立つとか、完全に確信犯でしようしヴァングも呆れたように同意してくる。

「くそっ・・・・・・・・今度あったらタダじゃ済まさん・・・・・・・・エクスめ」

咳から回復したルルーシュは怨念の籠る声で呟く。・・・・・・・・とつても怖いです。

「とにかく、さっさと食べて僕らも行かないと」

「そうね」

「あまり気は乗らないが・・・・・・・・仕方ないか」

「・・・立ち振る舞いから見ても、相当な実戦経験を持つ方とお見受けします」

「その理由は？」

とエクスが聞くと、アイラはピンと背筋を張った立ち方で答える。

「あの高質量爆弾の直撃を受けた傷は、一応気にはならない程度に完治してますが、それでも打撲程度の後遺症は残っています。ですが、それを全く気にさせないほど自然に振舞ってました」

「私たちに、悟られないためかしらね」

「おそらくそうかと。それぐらいの虚勢は必要と判断したのでしょう。結果、私が気づいたのも案内をしてる最中でした。申し訳ありません」

頭を下げるアイラに、エクスは苦笑を浮かべる。

「なんか・・・貴方に安易に頭を下げられるのは、酷く違和感を感じるわね」

「今の私は使用人ですから」

頭を上げてサラリと言うアイラに、エクスは”ハイハイ”と呆れたように話を逸らした。

「それ以外に何か気付いた？」

「そうですね・・・。今までの言動等を見ても、動じた様子はあま

り見受けられませんでした」

「要するに、肝が据わってるみたいな？」

「そうですね。いきなりこのような状況になったというのに、動じるどころか反撃してくる。ただの高校一年生が出来る芸当ではありません」

「それもそうね。咄嗟にあの条件をつけたとはいえ、多分アチラも意図は気付いてるだろうし」

「十中八九、気付いているでしょう。そうでなくても、第二位か第三位が告げ口をしますと思います」

「別にデメリットがあるわけじゃないし、それでもいいけどね」

「枢木スザクの印象をハッキリ申しますと・・・・・・・・謎、ですかね」

顎に手を当てながら言うアイラ。

「あーわかるわー」

棒読みの反応を返すエクス。アイラは小さく呆れた。

「第一位・・・」

「まあまあ。とにかく彼は私たちの仲間にするわ。でも、念には念を入れるということで、あなたの機体にも『ランスロット』のデータを使うわ。詳しくはプリン伯爵に聞いて」

「おお・・・・・・・・。まさかこんな所にあつたんだ」

「私も始めて見たときは驚いたわー」

「ああ、まさか地下にアリーナを作るなんてな」

僕は、ヴァングとルルーシュの案内でこの城のアリーナまで来ていた。

（しかし客間の本棚が動いて、そこから螺旋階段が現れるとは思わなかったな）

必要最低限の照明しかなかった螺旋階段を下りきった後、扉の前でヴァングが何か言ったら開いて、このアリーナの中へと入っていた。

ちなみに今、僕がいる場所は、アリーナの中の観客席。

野球場のようなドーム型だが、違うところは、天井に青い快晴の空をイメージした、液晶画面が映し出されているところか。ここが地下と言う事を忘れそうになってしまう。

とりあえず、学園のアリーナと同じような構造のものだと思ってもらえればいい。

『来たわね』

「」「うわっ」「」

突然周りのスピーカーから、エクスさんの声が聞こえてきた。

「エクスさん。僕はどうすればいいんですか？」

『バトルステージまで来てもらえないかしら』

「判りました」

僕は背後にいる二人に視線を向ける。

「私たちはここで見てるわ」

「・・・一応、健闘を祈る」

「ルルーシュってツンデレー」

「・・・・・・・・。言葉の意味は判らないが、果てしなくバカにされた気がする」

ちなみに僕にも意味は分からなかった。

「ハハハ・・・ま、僕と『ランスロット』の力を見せてくるよ」

未だにラウンズの正装を着ている僕は、青いマントを翻しながらアリーナの階段を下りる。

「逃げずに来たみてえだな」

階段を下りてバトルステージに足を踏み入れると、ラウンズの正装姿のノネットさんのパープルカラーのマントが翻る。

そして開口一番にこう言った。

「逃げた方がよかったですか？」

「バカ言え。お前はアタシの新機体の実験台、第一号だ。記念にボコボコにしてやるから、ありがたく思えや」

「・・・・・・・・」

（なんでこの人、僕に対して敵意を向けてるんだろう）

正直まったく心当たりが無い。僕が何をしたと言うのだろうか。

『二人とも位置についたようね。じゃあルールの説明をさせてもらいましょうか』

アリーナ全体にエクスさんのアナウンスが木霊する。地下だからかな。

『ルールと言っても小難しいのはその脳筋「おい」・・・もとい第八位がわからないので、シンプルなルールにしたわ』

「無視すんじゃないよ！ 誰が脳筋だ第一位！」

『静かに。というわけでモンド・グロッソの公式ルールを、私達流に少し調整したわ』

というと、天井の方に立体映像が映し出される。

『まず一つ。当たり前だけどシールドエネルギーが先に尽きた方の負け』

言い終わると、立体映像にも同じ文章が映し出される。

『二つ。絶対防御を脅かす攻撃は基本OKよ。まあ限度はこちらで判断するわ』

・・・まあいいか。痛みを伴わない戦いなど意味は無いから・・・。
でも大丈夫かな・・・？

『三つ。降参は無し。どちらが戦闘不能になるまで戦う』

シールドエネルギー勝負と言う事か。降参する気は無いから関係ないな。

『それじゃこんな感じで。なにか質問はあるかしら？』

「特になし」

「アタシも特にねえな」

僕はポケットから『ランスロット』の起動キーを取り出す。

ノネットさんは、ラウンズの正装の裾を捲くると、紫と白のガントレットが剥き出す。

「『パーソナライズ』」

僕とノネットさんが同じ言葉を呟くと、共に”パツと光って変身”する。

「……………これを纏うのは、久しぶりな気がするな」

僕は純白の機体にして、奇しくも円卓の騎士最強の名を持つ『ランスロット』を纏う。

「…………ふうん。現物を見ると、意外と強そうだな」

一方のノネットさんの機体——それも、よく見たことがある機体を纏っていた。

（……………何が出てきても驚かないように、心構えをしておいてよかった）

ノネットさんの機体はパープルカラーを基調とした全身装甲だ。そして両肩が異様に迫り出していて、背中の方には二本の槍が収納^{マウント}されていて、もう一つ背中にあるものがあった。

「《フロートユニット》……………」

僕の機体と同じ推進器、フロートユニットが背中についていた。それに全体的に僕の『ランスロット』とフォームが似ている。さらにランドスピナーもついている。

「名前は『ランスロット・ヴィンセント』……………不本意だが、お前のデータを基にこの機体が完成したからな。名前を入れさせて貰っ

た」

ヴィンセント——元の世界でも、ランスロットを元に開発された第七世代KMF。その性能はオリジナルにも匹敵するスペックを誇る。この世界でもこの形は変わらないと思う。

「僕の機体と似ているね」

「言っただろうが。お前の機体を基にしてるって。うちの研究主任がお前の機体にゾッコンでな。何とか再現しようとして出来た機体、その第二号がコレだ」

「第二号？」

「ああ。第一号は第五位の機体だからな」

（ということは、アイラさんの機体もヴィンセント系列ってことかな）

『両者、準備はいいかしら』

ちよつとした会話をしているとき、エクスさんのアナウンスが飛んでくる。

「ええ」

「OKだぜ」

『そう。じゃあ両者、指定位置まで移動して』

アリーナの中心に紅い光のサークルが現れるので、僕とノネットさんはそれに入る形で向き合う。

『枢木スザク君。判ってると思うけど、フレイアって爆弾は使わないでもらえる?』

「もちろん」

こんな密閉された空間でフレイアを撃ったら、一体どうなるかなんて想像したくもない。

「・・・・・・・・」

僕は無言のまま右手でMVSを引き抜き、左手にヴァリスを呼び出し、色んな状況に即時対応できる一刀一銃の構え。様子見にはちょっといいだろう。

「やっと始められるぜ」

アチラは、背中にマウントされた二本の槍の柄を連結させると、その刃が紅く発光する。

(元の世界と同じ、ランスタイプのMVSか・・・)

「変わった武器だね」

「うっせえ。アタシは薙刀が好きなんだよ」

と不貞腐れたような声を出しながら、そのランスを巧みに回転させて構える。

(いや、それはランスだと思っただけど……)

という言葉は、何となく言っちゃダメだと思ったので、飲み込んだ。

『では、試合を開始3秒前——』

3、2、1——

『——スタート』

——ガギイン!!

エクスさんのアナウンスを最後まで聞かず、僕とノネットさんの刃が火花と共にぶつかった。

H A V E a r e s t B R E A K（戦う前にやることは）（後書き）

誤字脱字、感想お願いします。

Lancelot vs Vincent（オリジナル対フェイカー）（前書き）

夏休みの忙しさって常軌を逸してるね。驚いたよ。それに戦闘描写もうまく書けなくて困ったりも。

というわけで遅れてしまいました。スイマセン。

Lancelot vs Vincent〈オリジナル対フェイカー〉

『……………スタート』

ガギン！

凜としたエクスさんの言葉を最後まで聞かず、偶然ながら僕ら二人は同時に飛び出した。

「気が合うね」

「物凄く不本意だな」

僕らの武器が火花を散らしながらも、ほぼ互角の力で鏖迫り合う。この衝突で互いに動きが止まる。

「おらよっ！」

ノネットさんの槍、MVSランスタイプを後ろから押しだす形で横薙ぎを放つ。

「ちっ！」

僕はバックステップで距離を取り、片手のヴァリスをノネットさんへ構えた——瞬間。

「甘えよ！」

「ッ！」

ヴィンセントが僕の目前に現れ、ヴァリスを上空へ弾き飛ばした。

（瞬時加速か！先読みされたか！？）

思考でそう答えを出しながら、咄嗟に腰のハーケンを発射する。

「ハッ！」

鼻で笑う（顔はわからないが）ノネットさんは、器用にランスを回転させ盾代わりにして弾く。

その隙に僕は空いてる手の《ブレイズルミナス》を張りながら、突撃を仕掛ける。

アチラのMVSと僕のブレイズルミナスが衝突した瞬間、MVSを振りかぶりって――斬る！

「そのぐらいなあ！」

しかしノネットさんは後ろから槍を押し出して、僕のMVSを受け止める。

「MVSまで再現してあるんですね」

「ああ、まあヴァングの作ったプログラムを元に、お前のものと大差なく機能を発揮する、高周波斬撃兵装だ」

本物、僕のMVSと大差ない機能性、それは紅く発光するランスの刃が証明している。

「槍術対剣術。どっちが強いかな勝負といこうじゃねえか」

「・・・構わないですよ。後悔しないのなら」

「ハッ———言うじゃねえか！」

その言葉と同時に、アチラは腰からハーケンを射出しながら、バツクステップを取る。

「———うらっ！」

掛け声一番、瞬時加速をしながら、槍の連続突きが放たれた。

「くっ！」

ヴィンセントの怒涛の連撃を、僕は片手の《ブレイズルミナス》で防ぎながら、MVSで捌いていく。

「攻撃できねえのかあ?!」

流暢に喋るノネットさんだが、その攻撃は激しさを増す一方だ。

「隙を与えないのは、貴方だろうに！」

とりあえず言っておきたかった。ならお望み通りに仕掛ける！

言葉と同時に足の《ブレイズルミナス》を展開、相手の横薙ぎを体を屈めてかわし、その場でカポエラキックを繰り出す。

ノネットさんは一度MVSで受け止めて、その場で真上に跳躍。一瞬で冷静に対処する。さすがだ。

「そう——だったか!？」

カポエラキックの唯一の死角、上空から槍を突き刺そうと降ってくる。

「そのっ!はずだけどね!」

僕は新体操のように、バク転、バク宙を繰り返しながら、その場を移動する。

ノネットさんの槍は、轟音をたてながら地面に突き刺さる。しかし空を切るだけだった。

「器用な奴だ」

「・・・そういう機体なんです」

『ランスロット』のシステムに苦笑しながら、先ほど弾かれた《ヴァリス》を腰に戻して、空いてる手にもう一本のMVSを持つ。

———槍術対二刀流か。因縁の対決かもしれないな。

「仕切rinaおしといくか!」

「ハッ!」

ハーケンで牽制しながら接近してくるノネットさんに、僕は足の《ブレイズルミナス》を展開して防ぎ、その反動で飛び上がる。

「これでっ！」

そのまま勢い良く、十八番おはこの回転足刀蹴りを繰り出す。

「舐めんなよ！」

一方ノネットさんの駆る『ヴィンセント』は、右肘を構えて空中の僕へ瞬時加速を行う。

僕の蹴りとノネットの肘撃ち。通常なら僕の方が余裕で叩き潰すだろう。

しかし当たる瞬間、『ヴィンセント』の右肘が発光し――――

――バギイイイン！

「グッ！」

「チィ！」

僕の足刀蹴りとノネットさんの肘撃ちがぶつかり、互いの張った《ブレイズルミナス》が砕けた。

足に走る激痛に耐えながら空中で体勢を整えて、互いに地面に降り立つ。

「あーくソッ。この武器なら破れると思ったんだけどな」

バチバチと音を立てる右肘の武器を見ながら、落胆したような悪態をつくノネットさん。

「結構危なかったですけどね」

さっきの攻撃はヴィンセントの固有武装、肘から出される《コアルミナスコーン》だろう。

今の『ランスロット』の足刀蹴りとほぼ互角の威力ということは、少なくとも『ヴィンセント』の完成度はオリジナルに近い。・・・この世界の『ヴィンセント』もある意味オリジナルだが。

（しかしまさか、《ブレイズルミナス》まで再現しているとは・・・）

これは正直驚いた。まあ似ているだけと言う可能性もあるし、絶対守護領域を作れるのだから、不可能と言うわけでもないか。

「威力はあるが、試作品だからモロいんだよな」

「・・・それは言い訳ですか？」

と言ってみると、あからさまにノネットさんの雰囲気が変わった。

「ハッ————調子に乗んなよ」

「ッ！」

一瞬で距離を詰められ、突き、横薙ぎ、振り上げ、振り下ろしと、様々な攻撃を放つ。

「オラオラッ！どうしたどうした！？」

「このっ！」

僕も両手のMVSと《ブレイズルミナス》で捌いてはいるが、攻勢に転じられない。至近距離という間合いだから、二刀流の方が有利なはずなのに、僕の方が押されている。

「くそっ！」

双剣の流れるような連撃で主導権を握ろうとするが、アチラの達人的な槍捌きで難なく防がれる。

「ふうん—————そういうことか」

「ッ！」

大きく横薙ぎにランスを振られ、僕はMVSで受け止めたとき、ノネットさんがバックステップで一度間合いを離す。

「あんたの剣術、なんかの流派を我流で改造しただろ」

ランスを肩で担ぎながらそう言ってくるノネットさん。

「・・・・・・・・ご名答、とても言っておくよ」

ノネットさんの言うとおり、僕の剣術は藤堂さんに習った基礎剣道を、度重なる実戦経験によってスタイルを自己流にアレンジした、いわば『殺し合いに特化した剣道』だ。

「もしよければ、何で分かったか聞いていいかな」

というと『ヴィンセント』は肩に槍を乗せて、真っ直ぐコチラを見据える。肩に槍を乗せるのは、ノネットさんのクセなのだろうか。

「簡単だよ。あんたの剣術は決まった攻撃があまり無かった。つまり元々型がないってところだろ。でも基礎はしっかりしてるから、我流というには納得がいかない。つまり基礎の剣道を自分流・・・いや、実戦流にアレンジした、そんな感じがすんだよな」

「・・・・・・・・」

「?・・・外れか？」

「いや・・・・・・・・お見事。まったくもってその通りだよ」

どうやら世界最強を豪語する騎士は、一筋縄ではいかないらしい。

手を抜いて勝てるほど簡単ではないか。

（正直・・・甘く見てたかな）

勝てると思っていた。・・・いや、簡単に勝てると思っていたの間違いだろう。

「すみません」

——慢心か。僕がするのはおこがましい事。これじゃまだまだ半人前だな。

「あ？ 何謝ってんだ？」

突然の僕の謝罪にアチラは怪訝な声を出しながら返す。

「貴方のような騎士に無礼を働いた。ここから僕は……本気で行かせて貰います」

全身装甲の中で眼を瞑り、神経を研ぎ澄まし……ギアスの呪縛を発動させる。

……？

（……何か、体に違和感がある）

普段ギアスの呪縛を使うときと、何となく違和感を感じる。普段より闘える気がする。

（まあいいか。普段より好戦的な感じがするだけだ）

気にすることでもなかったので、そのまま目の前の倒すべき敵を見据える。

「————ここからが、本当の勝負となるだろう。」

「もう、先ほどのようにはいかない」

「・・・どうやら口だけじゃないようだな。ならアタシも久々に・
・本気って奴を出してみるか」

僕から放たれる威圧感を感じ取ってか、ノネットさんは改めて槍で突きの構えをとる。

コチラはMVSを両方とも順手で持ち、目の前で刃を交差させるようにして持つ。

そして————瞬時加速！

「はああああああああっ！」

「見せてみるよ！ テメエの本気って奴をなあああああっ！！」

上段に振りかぶった僕の剣と、横に大きく振ったランスが、衝突して激しい金属音を響かせた。

[illegible]

「は。やっぱ映像と実物は違うわね」

「……そうですね」

エクスとアイラ、そしてラウンズたちは、アリーナの上の方にある観戦室から直接見ている。

「私よりも強いかもね」

機械質の椅子に座りながら、眼下で闘う二人を見て感想を漏らす。

「・・・心にも思っていないことを。貴方の剣が出てきたら、断てぬ物など無いでしょうに」

傍で立つメイド服の第五位は、呆れたように吐き捨てる。エクスは欠伸をしながら反論。

「だからどうだっていうの？ それは私が勝つ理由にはならないわ」

「まあそうですが」

サラリと返事を返して、アイラは眼下のアリーナで戦う二人を見下ろす。

「・・・記録」

その隣では、携帯を構えて、おそろく動画ムービーを取っている小柄な第六位の姿。

「おいおい第六位。そんな事しなくてもちゃんと映像は記録してるよ」

その後ろから第六位の肩に手を置く、女性としては背の高い第四位ドロテア。

「・・・自分の物の方が信用できる」

パシッと肩の手を払い、眼下で戦う二人に携帯のカメラを向ける。
ドロテアは”やれやれ”と言った感じで手を振りながら、エクスエクスの傍まで移動する。

「どうだい？ 貴方から見れば」

「直接的な身体技能及び機体性能フィジカルマシンポテンシャルの差は無いわね。パッと見だけど

エクスはドロテアとは目を合わせず、二人の激闘を見ながら言う。

「貴方がそういうなら、そうなんだろう。貴方の直観は恐ろしいほど当たる」

ドロテアもエクスを直視はせずに、戦いを見ながら呟く。

「それは褒め言葉として受け取っておくわ」

「実際褒めてるよ」

「……何故か貴方に褒められると、皮肉な感じに聞こえるのよね」

釈然としないエクスの呟きに、ドロテアは”心外だ”とも言いたげに手を振る。

「まあいいけど。それよりも今はアッチよ」

「それもそうか」

MVS同士の激しい金属音を響かせてぶつかり合う、スザクの駆る白き騎士『ランスロット』と、円卓の騎士であるノネットが操る機体『ヴィンセント』。

両者一步も譲らない接戦……と言えなくも無い。普通の人が見ているなら。

「押されてるわね」

「そのようだね。やはりパクリではオリジナルには勝てないということかな」

ここにいる最強の騎士達は、徐々に押されつつあるヴィンセント――ノネットの不利を見抜いていた。

「最初押してたのは、枢木君が力を抑えていたせいね」

「元々試作段階＋未完成＋試験運転の機体だろう？　それでここまでするに妹に私は賞賛を送るよ」

「確かに。一応『彼の本気を引き出して』って頼んだけど、それ以上の戦果ね」

そう。これはもう決闘ではない。スザクの実力を測るためのものだ。

決闘の条件を飲まれた瞬間から、スザクのラウンス入りは決定しているのだから、勝敗などはすでに二の次、スザクの実力をどこまで見ることが出来るか、それがこの決闘の目的だ。

「あながち偽者でもないようだね」
フエイカー

「本物と言われると、それはそれで違和感がある機体だけど」
オリジナル

それだけ言い合って二人は口を閉じ、二人の戦いを再び冷静に分析していった。

「グウッ！」

ノネットさんは咄嗟にランスを盾にするが、《ブレイズルミナス》を張った僕の蹴りは、絶対防御すらも突き破る威力を持つ。ランスの盾など付け焼刃もいいところだ。

当然衝撃は本体へ伝わり、ノネットさんは呻き声を上げる。それでもランスを手放さないのは凄い。

「――舐めてんじゃねぞ！」

「ッ！」

ランスによる横薙ぎが放たれたので、僕はハーケンを掴んだ手を離して後ろにバックステップ。

「チィ・・・やってくれるじゃねえか」

蹴りの衝撃で歪んだ腕の装甲を押さえながら、吐き捨てるノネットさん。

「生憎ですが、負けるわけにはいかないから」

「・・・まるで自分が負けないみたい言い方だな」

「当然、勝つつもりです」

「・・・言ってくれるじゃねえか」

僕の言葉が癪に障ったのか、ブンブンと片手でランスを高速回転させる。その姿は少し怖い。

コチラは先ほど捨てたMVSを再び順手で構え、密かに腰にヴァリスを呼び出しておく。

「仕切り直しだな」

「ええ・・・そうです―――ねっ！」

先手必勝。言葉の途中で瞬時加速に入り、MVSを振りかぶりながらノネットさんへ突撃する。

「ハッ―――だろうと思ったぜ！」

しかしノネットさんは上空へ瞬時加速して、僕の斬撃は空を切るこ
とになった。

「逃がさないっ！」

僕も背中フロートユニットを展開し、上空へと飛び上がる。

「別に逃げやしねえよ！」

その言葉が正しいと理解したのは、ランスを腰に突撃の構えを取った、ヴィンセントを見たときだ。

「ハアッ！」

掛け声と共にMVSで斬りかかる―――が、ランスの突きと衝突して、互いに吹っ飛ぶだけだった。

「チィ・・・」

「・・・・・・・・」

舌打ちするノネットさんを無言で見ながら、今後の大戦について考えてみる。

（ヤバイな・・・シールドエネルギーが半分以上も尽きた）

それはつまり、ブレイズルミナスが多用できないほどHPも余裕がないと言う事。

（そして空中戦闘が長引けば、他武装のエネルギーも多く使ってしまう）

フロートユニットのせいで、飛ぶだけでも多量のエネルギーを使う。それが尽きた瞬間、僕の負けと思っていだろうか。

（だがノネットさんの片腕は潰した。それに見た限りヴィンセントの射撃武装はハーケンだけだ）

ヴァリスのバーストモード——確実に狙うならハドロンプラスタ―で、一気にこの戦いの終止符を打ちたい。これを使う隙が出来れば、ノネットさんを倒すことは出来る。

（——問題は、これらをどうやって使うかだ）

当たり前だが、たとえば片腕といえどノネットが、ヴァリス——ましてやハドロンプラスタ―を使う隙を見せるとは思えない。

(どうしよう……)

八方塞りというわけではないが、これからの戦いをどうするか悩みどころだ。

[illegible]

「ルルーシユ」

「
・
・
・
なんだ」

時は変わり観客席で見ているルーシとヴァング。

背もたれに全体重を預けるヴァングが、足と腕を組んで眼を瞑るルーシユへ流し目を向ける。

「私らさ、これからどう彼に接すればいいんだろ」

自らの立場、それが明かされた今、ヴァングはスザクと接することを少し躊躇っている。

「・・・さあな。今まで通り・・・でいいんじゃないか」

眼を瞑ったままそういうルルーシュに、ヴァングは少し驚いた表情で尋ねる。

「ルルーシュはそのつもり？」

「ああ。仲間だからな、アイツは」

ルルーシュは顔を上げて、空で戦う白き騎士へ視線を向ける。

その顔は清々しく、微笑ましく、初々しく、普段から大人びた彼女の表情ではなかった。

「・・・そっか」

それをヴァングは、何かに納得をしたのか、それとも疑念に思ったのか、少しトーンの低い声と元気の無い笑顔を浮かべた。

「・・・なんか、ルルーシュ変わったよね」

「?　そうか？」

少し驚いた表情でルルーシュはヴァングを見る。ヴァングの顔には

真剣な表情が浮かぶ。

「4年前の貴方と今の貴方を比べるならね」

「・・・自覚は無いな」

ルルーシュは戸惑ったような苦笑を浮かべる。それにヴァングの表情が少し綻ぶ。

「4年前の貴方なら、人の事を仲間なんて言わないでしょ」

「そんなに酷かったか？」

「ええ。初対面で人の事を『使い捨ての駒が』なんて言わないわよ？」

貴方以外には、と付け足しながらヴァングは微笑む。ルルーシュは眼を瞑って、

「覚えて無いな」

とあからさまに逃げた。

「そーですかー。頭のいい貴方が覚えてせんかー」

「どうでもいいことは削除されるようにできてるんだ」

「なにそれヒドイ?!」

笑顔で言うヴァングとルルーシュ。しかし再びヴァングの表情が真

面目になる。

「————私さ、気付いたんだ。自分の気持ちに」

その声は、普段の明るい声ではなく、トーンの低いアルトボイスだった。

「？ さっきから表情がコロコロ変わるな。得意の百面相か？」

「ふふっ、そうかもね。でもコレは本気・・・かな」

「???」

何を言っているのかわからないルルーシュは、純粹に首をかしげている。

「そんなことよりホラ、そろそろスザクが仕掛けるよ」

「お前から振ってきたんだろ・・・」

「わからないならいいの！ ほらさっさとこの勝負を見届けよう！」

「あ、ああ。そうだな」

少し戸惑うルルーシュを急かして、ヴァングも空で戦う白き騎士へ視線を向ける。

結局小細工は大した意味は無いだろうと、正攻法で正面から行くと考えが纏まった。

そう決心した瞬間、何となく背筋に悪寒が走り、背後へモニターを向けるとルルーシュとヴァングがコチラを見上げている。その二人からは『負けたら承知しない』という眼力(?)が来る。

(なるほど。これはエネルギー切れとかで、無様に負けるわけにはいかないな)

早期決着に狙いを定め、改めて両手のMVSを握り締め、目の前にいる騎士――ヴァインセントを見据える。

「考え事は終わったか？」

「・・・・・・・・」

ま・・・バレバレか。それなら次の激突で、この戦いに終止符を撃つてみせる。

「すみませんが、そろそろ終わらせて貰います」

MVSの切っ先をアチラに向け、満を持して勝利宣言。

「言ってくれるじゃねえか」

「前言撤回はしませんよ」

「なら後悔しても知らねえぞ」

アチラはランスを頭の上で回転させながらコチラを見据える。

「————オラッ！」

「ッ！！」

掛け声と共に瞬時加速＋ランスを振り下ろしに掛かる。僕はMVSをクロスさせて受け止める。

「甘めえよ！」

しかし下の刃を振り上げることで、僕のクロスさせたMVSを二つとも上空へ飛ばし、腹へ蹴りを入れる。

「グッ————だがつ！」

吹っ飛びながらもハーケンを射出、蹴ったモーションのヴィンセントの足に巻きつける。

「小賢しいなっ！」

「ハァ！」

ワイヤーを切られる前に僕が引っ張り、ヴィンセントをコチラへ引き寄せる。

そして空いた手でヴァリスを持ち、バーストモードで引き寄せるヴィンセントへ向ける。

「これでっ！！」

「チィ!!」

そして引き金を引く。轟音と共にヴァリスから緑色の閃光が放たれる。

それはヴィンセントへ着弾した——————ように見えたが、ノネットさんは体を上下逆にして、ヴァリスの銃弾は足の間を通り抜けた。

「っ!」

「惜しかったな!」

その隙に足に巻きついたハーケンで逆に僕を引き寄せ、ノネットさんのハーケンが二つとも僕の胸部と腹に刺さる。

「これで終わりだよっ!」

そしてノネットさんのランスによる突きが、丸腰の僕の腹へ放たれる——————

——————
かかった——————

「勝負を急ぎましたね」

僕の手にあるヴァリスは、先ほどの銃弾が外れるのを見越して、予め展開してあった《コンクエスターユニット》に急いで連結、ハドロンブラスターとなっていた。

「なっ!？」

「これで————ッ!」

それは上に掲げた状態——天井に銃口を向けた状態のハドロンブラスターを、接近するヴィンセントの頭部に打ち下ろす。

「ガッ!」

ハドロンブラスターは大型砲身だ。それが勢い良く頭部に強打されたので、ノネットさんの駆るヴィンセントの動きが一度止まる。

さらに動きの止まったヴィンセントの腹を、ハドロンブラスターの砲身で横薙ぎに吹っ飛ばす。

「グアッ！」

そして吹っ飛んでいくヴィンセントへ、残ったハーケンを全て射出、それはヴィンセントの両手足を拘束し、それをコチラへと引っ張る。

「—————終わりだっ！」

僕は逃げ場を失ったヴィンセントへハドロンブラスターを向け、その引き金を引いた。

「クソッ—————」

ノネットさんは咄嗟にランスを前に掲げるが—————

—————ドガアアアアアン—————ッ！！

僕のハドロンブラスターはランスの柄を貫き、爆発音と共に本体の胸部へ着弾した。

その衝撃でハーケンの拘束が取れ、ヴィンセントは胸部の装甲が抉られたまま、アリーナの地面へと墜落していった。

「ハア・・・ハア・・・勝った・・・のか？」

地面で大の字で動かないヴィンセントの装甲が、淡い光の粒子となるのを見届け、僕はハドロンプラスターを解除する。

先ほどの攻防戦が終わった途端、身体中から汗が吹き出る。自分の体温の暑さに今更ながら気付いた。まあ闘ってる最中だから気付けないから、今更になるのだけれど。

『決着がついたわね』

空から——というか、アリーナ全体のスピーカーから、エクスさんのアナウンスが聞こえる。

『ノネットは気絶及びシールドエネルギーゼロ。そんなわけで今回の決闘、勝者は枢木スザク君！ おめでとう！ パチパチ！』

上機嫌なエクスさんだけが拍手する音が聞こえる。他の皆さんが”白けた”みたいな空気を出してるのは気のせいだろうか。

それにしても、なんか・・・寂しい。

『じゃあ枢木君。そこで寝てる第八位を担いでちょうだい』

「あ、はい」

僕も地面に降り立って、ランスロットを解除。元のラウンズの正装に戻る。そして地面で倒れているノネットさんまで近づいて・・・。

「・・・どうしようか」

困った。ノネットさんのISスーツが、先ほどの戦闘で損傷したの

か、結構際どい場所が破れてる。どこの場所かはご想像にお任せ。

「なるべく見ないように・・・っと」

できるだけ目線を地面に向けながら、ノネットさんを背中に何とか乗せる。スタイルがいいからなのか、背負っているのにあまり重く感じない。

肩に乗せたノネットさんの寝顔は、先ほどの怒った顔や不敵に笑う表情ではなく、歳相応の愛らしい寝顔だった。

肉体年齢的には彼女の方が上だけど、精神年齢的にはコチラが上だから、そう感じてしまうのかな。

『下に第四位^{あね}がいるから、渡した後^{あね}にコッチ来てね』

そんなエクスさんのアナウンスに導かれ、僕はアリーナの出口らしい扉の方まで、ノネットさんを担ぎながら歩く。

こうして、初めての円卓^{ナイトオブラウンズ}の騎士との決闘は、僕の勝利で幕を閉じた。

Lancelot vs Vincent（オリジナル対フェイカー）（後書き）

遅れた割には完成度は高くない・・・。

絶対に第四章は完結します！してみせます！だから見捨てないでください！お願いします！

誤字脱字感想ください。

S I T a t A r o u n d a R o u n d T a b l e 〱円卓への加入〱

遅れてすいません。今回は短いすマジで！

SIT at Around a Round Table（円卓への加入）

――動き出したみたいだな――

――そうか。ついにか――

――私の傷も癒えてきた。後は機体の修理を待つだけだが、それほど私は気が長くない――

――そう急ぐな。今行った所で、振り返ちに遭うだけだ――

――機を待てと？――

――その通りだ。何せ相手はこの世界最強の騎士達だから――

――だが二人を相手にしたが、アイツほどの手応えは無かった――

――次は判らない。私はリスクを負わない主義だ――

――なら仕方ない。同盟の条件の一つだから――

——結構。やることはまだ山積みだ。今はまだ下積み段階、事を荒立てるな——

——なら、福音の件は一体どういう見だ？ 事を荒立てたくないのなら、何故介入した——

——フツ・・・ただの挨拶代わりさ。紅の戦士と白き騎士、そして世界の強者と弱者へのな——

——リスクを負わない主義じゃなかったのか？——

——スリルと言って貰おうか。ともかく、お前は船で機体の修理を待て——

——チャンスはもらえるんだろうな？——

——もちろん。お前の実力は信頼している——

——なら今は従おうか・・・私と再び対峙するまで、無様に足掻くがいい。裏切りの騎士よ——

（（・・・白々しい））

ここにいるエクスさん以外、全ての人がそう思ったはずだ。

僕は今、エクスさん、ドロテアさん、アイラさん、まだ名前の知らない第六位さん、それにルルーシュとヴァングが揃った、アリーナの観戦室に集まっていた。

「やっぱり実力は申し分ないわね。第八位を倒すなんて」

「ありがとうございます」

正直、最初のほうは力を抑えていたので、褒められるのにはちよつと違和感があるが。

「それで、ノネットさんは大丈夫なんですか？」

「大丈夫よ。あの程度で死ぬほど人間弱くは無いわ」

意外とワイルドな正確なのかな、エクスさんは。最初は大人な女性ってイメージだったのに・・・。

「・・・枢木君？何か失礼な事考えていない？」

「そ、そんなこと事ありません」

ギロツ！と言う感じでこちらを見たエクスさん。・・・何故バレたのだろう。

「仕方ないよ第一位。貴方の第一印象と性格のギャップを見れば、どうしても残念に思えるから」

ドロテアさんが、僕の心の中の状況を言い当てた。その声色は、実際に自分も思ったから、という気持ちが伝わってくる。

「何よ。貴方達がどんなイメージを抱こうが、私には関係ないじゃない！」

「それはわかるんだけどね．．．．．なんか．．．残念だよ」

「「「確かに．．．」」」

トーンの低いアルトボイスが妙に響く。周りの人も頭を縦に振って賛同した。僕も同意見です。

ただ、その空気に賛同できない人が一人。

「何だよ！変な幻想を抱いてるのはそっちでしょ！？」

『．．．．．』

「何よその沈黙はっ！　な、納得いかないわ！」

完全にアウェーなエクスさん。ヤバイ、ちょっと涙目になってる。でもその行為も、なんか見た目とそぐわない気がする．．．よって空気が変わらない。それにまたエクスさんが不満げにし．．．と無限ループに入った。

「もう嫌っ！泣いてやるー！」

「駄々をこねるな第一位。仮にも組織のトップに立ってるのだから、そんな姿は示しがつかないよ」

散々アウエーな気分を味わったエクスさんは、顔を紅くして本気で泣き出しそうなところを、ドロテアさんに止められた。

こうしてみると、妹と姉のようだ。実際ドロテアさんは姉の立場にいるのだが。

「だってだってだってえっ！ 皆が私をアウエーにするから！」

「五月の蠅か貴女は……。すまないアイラ、悪いけど君の方から話を進めてくれ」

「ヒドイヒドイ！ 私だって女の子なのに！」

「二十歳の女性が何を騒ぐか。邪魔になるから部屋を出ようか」

「邪魔って何よ！ あ、ちょ、ちょっと！ 襟を引っ張らないでえ〜〜！」

といって、ドロテアさんはエクスさんを連れて、観戦室を出て行った。

「・・・忙しい人たちですね」

「そうですね。それもあの人の魅力かもしれません」

アイラさんの言葉に少し同意する。見た目通りの完璧な女性じゃないからこそ、仲間がそれを補う関係がある。支え合うことこそ、組

織の姿であり、縦社会の理想の姿だから。

「それでは枢木様、コレを」

アイラさんが僕に差し出したのは、複雑な十字架に四つの羽が生えたバッジ。

「ッ！」

——それを見たとき、少なからず驚いた。

（・・・ユフィから託されたあのバッジに、似ているな）

愛すると誓った姫から託された、誇りと志。彼女が僕にとっての姫だったという証。

そう。もう過去なんだ。ましてここは異世界。もう過去を振り返るつもりは無い。

あの世界の枢木スザクは死んだ。親友を殺した咎を背負うと決めた。ユフィだけを特別扱いには出来ない。そう、決めただから。

今の僕はただの高校一年生だ。あの世界の事は全て、あの世界に置いてきた。

ユフィ、僕は君の事を決して忘れない。愛したこともだ。それは誓ってもいい。

だけでもう、君を愛することはできない。こう言ったら酷いかもしれないけど、僕は死んだ人を一番に愛せるほど、出来た人間でも優

しい人間でもないんだ。

（どうか・・・あの世で心安らかに。ユフィ・・・）

だから祈るよ。君がああの世で幸せであることを。

でもいつかこの世界で、君のように愛せる人が、僕に出来てしまうのだろうか――――

「・・・枢木殿？」

「え？！ な、何ですかアイラさん」

「いえ、これを受け取ってほしいのですが・・・」

アイラさんがバッジを差し出す。そうだった、ついつい思いに耽ってしまった。

「じゃ、じゃあ、もらいますね」

アイラさんの手にあるバッジを受け取る。これがナイトオブラウンズ円卓の騎士団としての、証なのだろうか。

「それがあれば、いつでもこのラウンズ・キャッスル円卓の古城への入場が許可され、そこから条件付ですが、全世界へフリーパスでいけます」

「本当ですか!？」

なんと言う便利バッジ。これは大事にしなければ。

「その代わり、長期短期を問わずISを使用する任務に就くことになりますので。そのおつもりで」

「了解しました」

まあ話が出来すぎだね。

「後は基本的に代表候補生と変わりません。日本政府へ要請は出しましたから、そちらは気にしなくて結構ですよ」

「ありがとうございます」

「それで・・・枢木殿に決めて欲しいものがあるのですが」

決めてほしいもの？何だろうか。

「己の位です」

「っ・・・あの第一位とか第三位とかって奴ですか？」

「はい。どこでも特に変わりはありませんが、一応本人が決める規則です」

円卓の騎士の番号。なら僕が選ぶ数字はアレぐらいしかないだろう。

「・・・何でもいいんですか？」

「十二以下で数字が被らなければ。それと第零位みたいなのは無し

ですよ」

なら、もう決まった。悩むほどのものじゃない。

「・・・決めました」

「早いですね。それで位は？」

聞き耳を立てる、第四位、第三位、第二位、第六位を見据え、この場で宣言した。

「――第七位。
円卓の騎士第七位でお願いします」
ナイトオブセブン

S I T a t A r o u n d a R o u n d T a b l e↳円卓への加入↳

すいません短くて。こんな短い話は久しぶりに感じる。

それにしても、ここまで遅れて申し訳ありませんでした。

誤字脱字感想があればお願いします。

F e m a l e P s y c h o l o g y } 彼女の心 (前書き)

遅れてしまいました。すいません。見たいアニメがあったり、中間テストがあったりと、困りますよね・・・はあ。

そんなわけで、普段に比べると超短いです。最後にルルーシュ目線です。

Female Psychology 彼女の心

——一体何がどうなっているのやら。

「色々な事が同時に起きすぎた・・・」

私、ルルーシュ・ランペルージは一人、ラウンズ・キャッスル円卓の古城の一室・・・というより、ラウンズメンバー専用フロアの、さらに私専用の部屋のベランダから、太平洋を見下ろしている。

あの決闘後の会話が片付いた時、一通り済んだらしい第一位と第四位が解散にして、スザクはヴァングとアイラでこの城を案内してもらっている。

怪我人のヴァングが妙にハイテンションだったのは、知らん。アイツは時々おかしいんだ。

ちなみに私は気分が乗らなかったから断った。そして何故こんな場所で黄昏ているかというと、理由は極めて簡単。

「とにかく疲れた・・・」

フレイアとかいう爆弾の爆発に巻き込まれ、そこから目覚めたと思ったら、面倒な議会が開催するし、終わった後の朝食の前でヴァングが泣くし、その後のスザクがノネットとの決闘に勝つし、それであいつが円卓の騎士に加入するし。

「はぁ・・・頭が痛くなってきた・・・」

ため息をつきながら頭を擦ったとき、包帯が巻かれていたことを思い出した。

「・・・ルキアーノ・ブラッドリーか」

海の上で戦ったあの男。顔は全身装甲でわからないから、イメージはあの機体の方が印象に残ってしまっている。

ヴァングと私が敗北し、スザクが命を賭けて何とか相打ちまで追い込んだ敵。

——今までで一番、自分の力の無力さを自覚した場面かもしれない。

「他人より強いつもりだったんだけど・・・機体の性能に頼りすぎたらしい」

少し回想を試みよう。私が何故蜃気楼を手に入れたのかを。

私は元々運動があまり得意ではない。

だからスザクやヴァングのように、剣や槍などの武器を使ったとしても、近接格闘自体ができないのだから、遠距離からの砲撃や機体の防御力に依存する。

私も、昔は体を鍛えていた時期はあった。だが汗水垂らして少量の体力向上をするより、機体性能を上げて砲撃による一撃必殺の方が、自分にあっていることに気づいた。

「格闘戦では、セシリアや織斑の足元にも及ばないだろうな・・・
私は」

それでも何とか闘うために、何日も専用機の整備やシステム開発、
政府から与えられた専用機を自ら改造するほどまでした。頭脳しか
ない私が力を得るために。

こうして完成させたのが、黒と金の装甲を持つ機体、『フータ・メルガータ蜃気楼』。

高出力相転移砲という絶対無二の砲撃と、絶対守護領域という無敵
の盾。まさに最強と自負した。

「完成した瞬間は・・・だろう。ナポレオンの如く一日3時間
しか寝てなかったから、よく覚えて無いな」

でも嬉しかったことは覚えている。自分の子供が出来たみたいに喜
んだ。

私がここに居る理由。ここに居るといふ理由が、出来た気がしたか
ら。

それから私は蜃気楼の操縦と戦術を磨いた。

元々、ISというのは多彩な武装がされているのが通常だ。しかし
蜃気楼の武装は、相転移砲と二つのスラッシュハーケン、そして腕
にあるハドロンショットだけだ。

だから私は考えた。

基本的には回避と防御に徹する。そして隙が出来たところで砲撃で

落とす。それだけだ。

でも相手が強ければ強いほど、そんな単純な戦術で落とせるわけがない。

悩んだ。私の力はここまでなのかと。

悩んで悩んで悩んだ結果、私はワンオフ・アビリティーに目をつけた。

思えば、私が初めて負けた相手——第一位の機体はすでにワンオフ・アビリティーが覚醒していた。

そして今までで蜃気楼が負けた、第三位、第四位、第五位もワンオフ・アビリティーがあった。

しかしワンオフ・アビリティーはそう簡単に覚醒するものじゃない。

だから私はISのコアにあるブラックボックスに、たった一つの簡単なデータを割り込みさせた。

——『己の感情が望んだと判断したとき、一時的に二次移行をする』というプログラムだ。

それで私の機体は、変形も出来るしワンオフ・アビリティーも使用することが出来る。

苦労した。たったこれだけのプログラムを入れるために、青春時代の半分以上を費やし、いくつもの電子機器が吹っ飛んだ。

——でも成し遂げた。それが誇らしかった。

あの世界を揺るがす天災にほんの少しでも抗った、世界で初めてのISを持ったのだと。

事実、それから第三位、第四位、第五位には勝利している。・・・第一位にはまだ勝ててないが。

それでも、私の蜃気楼は強いのだと。こんな私でも世界に通用するのだと。

「それで有頂天になって得た結果がこれか。バカらしいな」

何が最強だ。仲間をただ見ることしか出来ず、ワンオフ・アビリティも使いこなせず、相手のペースに終始踊らされ、最終的に何も出来なかった。

「――あんな思いは二度とゴメンだ」

無力な自分にはウンザリだ。もっと強くなる。今よりもっと強く高みへ。

――せめて・・・アイツの足手纏いだけにはなりたくない。

――？

「・・・何故私が、あいつのために強くならなければならない」

自分で思っで自分で変だと気付いた。

でもそれでいいと思ってる自分がいる。なんだろう。頭を打ったからか、変な感覚が体の中にある。

「・・・・・・・・・気持ち悪い・・・・・・・・か？」

普段の私なら気持ち悪いと即決していたが、この感情は捨てる気にはならない。

「・・・・・・・・まあいいや。もう寝てしまおう」

ベランダから自分の部屋に戻って、少し小さい天蓋の付いたベッドに寝転がる。

――顔が妙に火照っていたのは、熱でもあったからだろうか？

開けっ放しの窓からは、晴れ渡る太陽の光が、風と共に勢いよく入ってくる。程よい雑音と涼しさだったので閉める気にはならず、低反発ベットの布団に包まりながら瞳を閉じる。

――いずれ判るんじゃないか？お前はそう言う事には鈍いがな。

「・・・・・・？」

変な幻聴が聞こえた気がしたが、おぼろげな私の意識は闇の中へと沈んでいった。

I said good-bye to her 一時の別れと学園へ帰還

もう・・・キツイ。こんなはずじゃなかったのに・・・更新を早め
にしようとプロットを変更したら、グダグダな感じになってしまっ
た・・・。

もうダメだ・・・鬱だああああ・・・。

しかし、時間をかけすぎて読者さんは話がよくわからなくなってる
かもなので、少し前から見直してみたほうがいいかもしれません。

I said good-bye to her 一時の別れと学園へ帰還

「……………どうしてこうなった」

額に嫌な汗が垂れる。迎え撃つは二人の美少女。

「どーしたのスザク。まさか……怖気づいたの？」

右斜めで座っているヴァングが不敵な笑みを浮かべて、ホラー映画みたいに顔に影が入る。怖いです。

「……………さっさと終わらせて貰えませんか」

左斜め前で座っているアイラが、露骨に不機嫌な表情をしながらコチラを睨む。怖いです。

「……………だって、絶対僕の負けだよ」

手札にあるのはスペードの3とクロバーの4。対する二人の手札も共に2枚。

「そんなのわからないでしょ？ さっさと出しなさい」

「七渡しでスペ3をくれたのは誰だっけ？」

「さあ？」

ヴァングは目をあからさまに逸らして、手のトランプを団扇にして

仰ぐ。

「くそっ・・・だから大富豪なんてやりたくなかったんだ」

手札に残った二枚のカードを苦々しく見つめる。これで何回目だろう、この言葉を呟いたのは。

そう、僕とアイラはヴァングの部屋で大富豪をしている。

何故かと言うと、少し長くなります。

まずノネットさんとの決闘の後に、妙にテンションの高いヴァングに『城を案内しようか？』って誘われたから、今後のためになるかと思って誘いに乗った。

そしたら無表情のメイドーもといアイラが『枢木殿』と話しかけてきたとき、ヴァングがアイラも強制的に加えたりしてね。この巨大な城を案内されたよ。

あ、ちなみに、アイラと呼び捨ててるのは本人の許可が出たから。同年だから敬語は必要ないって言われたから。断る理由も無いしね。

で、話を戻す。

この城はもしかしたら軍事基地みたいに、銃器や戦闘機が鎮座しているのかなと思ったが、中世のお城にありそうなオブジェや装飾で、当時の生活を振り返る博物館のようだ。

誰かに言われないと、ここがIS操縦者のトップクラスが集う場所

とは到底思えないだろう。

でも案内された場所はヴァング曰く『皆使っていい場所』らしく、ラウンズ専用のフロアが上の階層にあるという。

8人ぐらい乗れるエレベーターの、明らかに多すぎる階を示すボタンの下にある、紅い警告色のボタンを押すと、エレベーターが動き出す。

アイラ曰く『このボタンはラウンズの指紋を読み取って反応するのです』ということだと。

だからラウンズ以外が押しても意味は無いということだろう。

などと思いながらエレベーターで上へ登っていき、目的の階へついて降りると、高級マンションのように装飾の少ない廊下に、ドアが等間隔でたくさん並んでいる場所だった。後付工事でここは付けたから、城のように派手な装飾はしていないだそうだ。

そのうちの一つにヴァングの部屋があり、ヴァングが目の前に経った瞬間扉が自動で開く。

部屋の中は1LDKで、一人暮らしをするなら何の問題も無い。どうやらテラス付らしく、窓の外から見える海の景色は中々素晴らしい。こんな場所に無償で住めるというのは喜ばしいことだな。

で、ヴァングが『ここが私の部屋。特に何も無いけどね』と苦笑いをしながら言う。

確かにベッドはキッチンと整っているし、ヴァングの私物らしき置物もあまり見かけない。

”本当にここで生活してるのか？”と思わせるような綺麗さだった。

『貴女は余りコチラにはお泊りになりませんかね。議会に出る際

は皆さんお泊りになるのですが』

『学生なんだから日帰りなのよ。当たり前でしょ？』

『それもそうですね』

『つまり僕にも部屋は与えられるけど、高校生の身だから使うことは少なくなるか』

『そうなるんじゃないかしら』

などと今後の事について少し話していると、

『それはそうと。まだ帰るまで時間があるから、何かゲームでもない？』

こうヴァングがランプを出しながら言い出したので、テーブルを囲って大富豪をやっている。

で今に至る。

「スザク弱すぎー」

「運が無いのでしょうか。先ほどから絵札があまり来ていないようで

すし」

ヴァングの容赦ない言葉と、アイラの同情の言葉に僕の頭が垂れる。

「もう止めようよ。大富豪なんて」

「貧民さんお黙りなさい。富豪に意見するなんて100年早いだよ、オーッホッホッホッ！」

悪女だ。ヴァングが悪女に見える。

「本当ですね。神に愛されたあの人とは大違いです」

アイラは呆れを通り越して感心した声を出す。・・・しかし神に愛された人とは？

「神に愛された人って？」

そういうとアイラは随分驚いた顔をして、ヴァングは一度ため息をつく。え？何で？

「はあ・・・エクスのことよ。便宜上私たちの上に立つ円卓の騎士
第一位。ロシア最強のISタイトルホルダーにして、永遠の国家代
表」

「へえ・・・って永遠の国家代表？」

どういう意味なのだろうか。国家代表と言うのは理解しているが。

「とにかく強い^{……}のよ。織斑千冬とは公式試合で引き分けた事もある

人だし」

「えっ！？あの織斑先生と引き分け！？」

確かにタダ者では無いと思ってたし、円卓の騎士第一位を名乗るのだから相当な実力とは思ってたが。

「まさかそこまでの実力者だったとは・・・アレは道化を演じてるということか」

「・・・寧ろ、知らない貴方に私は驚いてますが」

ジト目でこちらを見るアイラ。彼女は感情の起伏がよくわからないが、それでも何となく感じる。

「え？なんで？」

疑問だったので気楽に聞いてみると、抑揚の無いスラスラした声でアイラが答える。

「公式試合では織斑千冬に敗北する以外は負け無し。国家代表殿堂入りとして、IS競技参加資格と自由国籍を返上した初めての人間として、少しでもISに関わる人間の中では生きる伝説ですから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。あ、なるほど。だから永久の国家代表と」

「最初の沈黙は何？」

ヴァングの指摘は無視。間違っても”異世界から来たから知らない

”とは言えない。

「そ、それで、何でエクスさんが神に愛された人なの？」

ちよつと焦りながら聞くと、ヴァングは”話逸らした・・・”と小声で呟いたが、一応答えてくれた。

「・・・エクスは本当に強いけど、何も相手を全て圧倒してきた訳じゃないの。彼女の本当に怖いところは、どんなピンチでも必ず逆転すること。それで付いた現役時代の通り名が————」

————
スタンド・バイ・ミー
神に愛された女神。

「日本では『運も実力の内だ』って諺があるけど、まさにエクスのためにあるような言葉よね」

「同感です。どんなに追い詰めても絶対に諦めない不屈の心と、神に愛された運を併せ持った、最強のハイブリッドラウンズですから」
二人は軽い愚痴のように言うが、多大な尊敬の念があることも伝わってくる。

「へえ・・・。絶対に諦めない不屈の心か」

羨ましいな。僕はどうしても元の世界の事を引きずって、ロクに考えないで諦めてしまうから。

「一度、あの人と勝負してみたいかな」

「「えっ!？」」

無意識に呟いた言葉に、ヴァングとアイラが同時に驚いたように高い声を上げる。何故？

「やめてスザク。あの人と戦うのだけはやめて。あの人に加減というものは存在しないから」

「第一位と闘うなら命を捨てる覚悟をしなければいけません。たとえ模擬戦であっても」

「……………すいません。前言を撤回します。」

それからしばらくトランプをやっていたら（負け続き）、隣のアイ
ラが不意に結構高そうな腕時計を見て口を開く。

「そろそろ、ヘリが来る時間になります。トランプは切り上げた方
がよろしいかと」

「ヘリ？」

一体何の話だろう。まさかみんなで旅行にでも出かけるのか？

「何”僕には関係無い”みたいな顔してんのよ。貴方も帰るんだか
らね」

バシッ！とヴァングに頭を叩かれる。目線で軽い抗議をしながら尋
ねる。

「帰るって、どこに？」

「IS学園」

「………」

さも当然のように語るヴァング。寧ろ”貴方何を言ってる？”みた
いな表情だ。

だがしかし。

（……ええ……。聞いてないよそんなこと）

聞いてないものは聞いていない。だからその表情には納得できないよ。

「ヴァング、言ってなかったのですか？」

「貴女こそ、言ってなかったの？」

どうやら互いに言っていたと思っていたらしい。だが、僕は一言もそんなことを言われていない。

「んじゃまあ、大富豪はもう切り上げて、ヘリポートまで行きましょ」

「え？もう？」

そう聞き返すと、アチラは妙に真剣な顔で迫ってくる。

「早くしないと、小説の更新がヤバイのよ。予定より二周りも遅くなっちゃったから」

・・・・・・・・。。。

「はあ」

よくわからなかったが、何となく従ったほうがいいと思った僕です。

「行きましょか！」

「行きましょ。もうヘリの準備も出来てると思いますので」

ドロテアさんとエクスさんがすでにいた。どうやら二人で話していたらしい。

あ、アイラ以外の服装はIS学園の制服に着替えたよ。真新しい制服を渡されたから。ラウンズの制服は手に持ったバッグの中に入っている。

持ったバッグを振り回すヴァングと、相変わらずメイド服のアイラが手を振りながら二人に駆け寄る。

「ちーっす。早く着すぎた？」

「構わないよ。どうせ後2、3分でヘリが来るからね」

「第二位の姿が見えないようですが」

「今連絡を入れといたから、もうすぐ来るわよ」

その時、屋上のドアが静かに開き、中からIS学園の制服に着替えたルルーシュが現れた。

「悪い。準備に手間取った」

「いいっていいって！」

ヴァングがハイテンションでルルーシュに肩を組もうとして――ひらりとかわされる。

「鬱陶しい」

「相変わらずルルーシュは照れ屋さんなんだから」

「黙れ」

バツサリとヴァングの返事を切るルルーシュ。ヴァングは”ありや
りや、フラれちゃったぜ”などと言いながら肩を竦める。

「みなさん、ヘリが見えてきました」

「おお？ ホント、来たわね」

快晴の空に黒いインクを垂らしたかのように、ヘリが視認できる場
所まで近づいてきた。

「・・・それじゃあ、しばしのお別れね」

エクスさんが振り向いて、僕とルルーシュとヴァングに話しかける。

「そうなりますかね。この節はお世話になりました」

と至極全うな感謝を述べると、エクスさんはしかめっ面になる。

「真面目ね。そこは『エクスさんに会えなくて寂しいです』つ
て言った方が可愛げがあるわよ」

「」「ぶっ！」「」

僕の声色を真似したエクスさんの演技に、ここにいる僕とエクス以
外が笑う。

「アハハハッ！何それ?! 似合わなっ！」

「き、気色悪いな・・・アハハッ」

「・・・さすが第一位。こんな時に笑いを取りに来るとは・・・」

「おい、アイラ。笑いを堪えすぎて顔真っ赤だぞ？」

「・・・もういいや。」

「ヴァングとルルーシュ。と言うかルルーシュ、貴女はもう少しコッチに顔出しなさいよ」

僕のくだりは終わったのか、コッチから視線を逸らしてルルーシュとヴァングに向くエクスさん。

「悪かった。今後はなるべく顔出ささ・・・・・・面倒だが」

「本音出たわね」

「さあて。一体何の話かな」

ルルーシュはエクスさんの指摘に、右斜め上を向きながら答える。
確信犯だ。

そんなルルーシュにため息をつきながら、エクスさんは隣にいるヴァングに向き直る。

「ヴァングは・・・特にコメント無し」

「ちよっ!? 色々反応を用意してたのにそれは無いわよ!」

ズルツとボケようとして不発したヴァング。何かこの反応も用意された感が出る。

「臨機応変も騎士の務めよ」

「ここで発揮するものではないがね」

「さあて! ヘリが到着したわよ!!」

ドライなドロテアさんのツツコミは完全に無視して、全員降り立ったヘリに近づく。

「おっ先!」

「痛っ! おいヴァング! いきなり押すな!」

「ゴメンゴメンゴ!」

軽いステップでヘリに一番乗りするヴァング。ルルーシュを押しつけた形なので、抗議の声を上げる。

（やれやれ……。やっぱヴァングの性格はよくわからないや）

いつもハイテンションだと思ったら、野獣がエサを捕らえたような笑みを見せる。思えば、今日は彼女の色々な表情を見たと思う。今朝は普段とは真逆で無口無表情だったけど、いざ話してみると心配したり泣いたり怒ったり・・・捉えどころの無い浮雲みたいにコロコロ変わる。

彼女——『ヴァング・G・ベイル』という人間の本质は何所にあるのか。

それとも、それらを含めて『ヴァング・G・ベイル』という人間が在るのだろうか。

（だとすると僕の本質は……『偽りの英雄』か『人殺しの偽善者』って所かな）

今更だが、本当に彼女達の仲間になってよかったのだろうか。

もちろん彼女達を完全に信用してはいない。ルルーシュやヴァングはともかく、エクスさんや他のラウンズを容易に信用するわけにはいかない。僕はこの世界では結構複雑な立場だから。

だがそれもあるけど、僕はあまり人とは関わったらいけない気がする。

ルキアーノ・ブラッドリー。

彼がこの世界にいる理由はまだわからないけど、彼が僕とカレンを狙っていたことは判っている。ルルーシュとヴァングはそれに巻き込まれただけだ。けれどそのせいでヴァングは死ぬ寸前、ルルーシュも連れ去られる事態になりそうだった。

さらに彼らは一人ではない。仲間がいてこの世界で戦争を起こそうとしている。

……もし天秤が少しでも傾いていれば、結果は変わっていたのかもしれない。最悪の結果に。

そしてこの事件の原因は僕だ。僕がいなければこんな事態にはならなかった。

これは僕とカレンだけで解決すべきではないだろうか。取り返しの付かない結果になる前に。

（……………このことは保留にしておこう。カレンと話し合うべきだ）

「枢木君」

「え、あ、はい？」

考え事をしていたら、傍に来たエクスさんに話しかけられた。

「そろそろ学園は夏休みに入るから、ちょっと仕事を頼むかもしれない。そのことは頭に入れといてね」

「わかりました」

「じゃあ、また会える日を楽しみに待ってるわ」

そう言って右手を差し出される。すでにへりに乗り込む体勢だったが、僕は一度キチンと向き合った。

「はい。こちらこそ」

そして彼女の右手を僕も右手で握り合った。コチラの騎士の第一位は僕の世界と大違いだな。

あの人は自分と他人に厳しい正真正銘の武人だったけど、こちらは決して叱らず諭す母親のような感じた。

「スザクー。早く乗りなよー」

窓を開けたところからヴァングに呼ばれる。右手を離して僕もへりに乗り込む。

「それでは」

「元気でね」

「久々に会えて楽しかったよ」

僕、ヴァング、ルルーシュと窓から別れの言葉を告げる。外の三人も返してくれた。

「ええ。頑張ってね」

「女誑しにはなるなよ」

「お体に気をつけてください」

そうこうしている内にヘリがヘリポートを離れ、手を振る三人がどんどん小さくなっていく。

そして大きな海洋へと出て行く。振り返ってみて、あの僕らがいた城を改めて全体像を見た。

「デカイ・・・！」

「あそこに私たちはいたのよ。これから時々来る事になるから」

「巨大であることは否定しないがな」

なんてことを思いながら、僕は^{ラウンズ・キャッスル}円卓の古城を後にした。

I said good-bye to her 一時の別れと学園へ帰還

無理矢理終わらせてしまった……。言い訳じゃないけど、更新時間がヤバイですよね。・・・スイマセン・・・orz

誤字脱字感想があれば下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2014q/>

IS 《コードギアス》

2012年1月4日04時11分発行